

大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書

2005

Pompeius.

38

de se retirer en Egypte, esperant y estre bien receu: toutes fois le contraire aduint par la meschance de certains conseillers du Roy Ptolemaus, tellement que par leur auid il fut tue à coups d'espee dedans vne barque en presence de sa femme & de quelques siens amis qui se sauuerent de vitesse, le corps ayant esté inhumé par son affranchy Philippus, dont Cesar ayant eu nouvelles, & la teste de Pompeius luy estant presentee plora: & quant à Ptolemaus & à ses meschans conseillers, ils perirent tous malheureusement.

Pompeius.



Par un triple triomphe, Afrique, Europe, Asie,
Auont sa grandeur & sur terre & sur mer.
Mais pour n auoir bien sen toy ny les tiens armer
Vous perissez, & Rome est par Cesar saisie.



Le peuple Romain semble auoir eu toute pareille affectiō enuers Pompeius dès son commencement, que Prometheus en vne Tragedie d'Æschylus monstre auoir enuers Hercules, apres auoir esté deliuré par luy, quand il dit,
Du fils autant m'est la personne chere,
Comme i'ay eu à contrecœur le pere.

Car iamais les Romains ne firent demonstration de haine plus aigre, ny plus aspre, à l'encontre d'autre capitaine, qu'ils firent à l'encontre de Strabō pere de Pōpeius: vray est que tant qu'il vescu ils redouterēt sa puissance en armes, pourautāt q'c'estoit vn tresgrād hōme de guerre, mais quād il fut mort, ayant esté frapé d'vn coup de tonnerre, ils arracherent le corps de dessus le lit, ainsi comme on le portoit en terre, & luy firent infinis outrages & vilenies: & au contraire, iamais Romain n'eut l'amour du peuple si vehemente, ne qui commençast de si bone heure,

1. Les vertus rends aimables & honorables les en fans desquels on auoit hay les peres à cause de leurs vices.

Pompeius.

L'avarice est vn vice si dieux & insupportable.

Vertus excellentes en Pompeius, & vrais ornemens de tous hommes qui de sirent faire choses grandes pour leur patrie.

Vn cœur genereux prend plaisir à porter le nom d'vn homme illustre. Folles femmes sont sans vergongne.

Desordres entre les peuples qui deuz par leur concupiscence: la continence de Pompeius faisant le proces à plusieurs qui deuoient se monstret trop plus sages, ayans plus de lumiere pour se conduire s'ils vouloient souffrir d'en estre esclairez.

qui plus florist en sa prosperité, ne qui plus constamment perseuerast en son aduerité, comme l'eut Pompeius. Il n'y auoit qu'vne seule cause qui fist ainsi hayr son pere, c'estoit vne avarice extreme & vne cōuotise insatiable d'auoir: mais plusieurs, au contraire, faisoient aimer le fils, temperace en sa vie, adrese aux armes, eloquence en son parler, foy en sa parole, bonne grace en son entregens, & amiable recueil à qui auoit affaire à luy, de sorte qu'il n'y auoit homme ne qui demandast plus enuis que luy, ne qui fist plus volontiers plaisir quand on l'en requeroit: car il donnoit sans arrogance, & prenoit avecques dignité. Dauantage en ses premiers ans son visage luy aidoit beaucoup à la premiere rencontre à gaagner la bonne grace de chacun, parlāt, en maniere de dire, auant sa voix: car il y auoit ne scay quoy de douceur agreable comioint avec vne grauité humaine, & dès la fleur de sa ieunesse, se monstra incontinent en ses mœurs & en ses façons de faire, vne venerable hautesse de maiesté royale. Il auoit aussi les cheveux vn peu relcuez, le regard & mouuement des yeux doux, qui causoiet celle ressemblance qu'on disoit qu'il auoit, plus qu'elle n'apparoist, avec les images du Roy Alexandre le Grand: mais pource que plusieurs luy en donnoient le nom; luy-mesme ne le refusoit pas: de sorte qu'il y en auoit qui en iouant l'appelloient assez notoirement Alexandre: au moyen dequoy Philippus, homme Consulaire, ne feignit point de dire publiquement en vne sien ne harangue, qu'il faisoit en sa faueur, que ce n'estoit pas de merueille, si luy estant Philippus aimoit Alexandre. On dit aussi que la courisane Flora, estant deueue vieille, prenoit grand plaisir à conter ordinairement de la frequentation qu'elle auoit eue en ses ieunes ans avecques Pompeius, disant qu'il estoit impossible quand elle couchoit avec luy, qu'elle s'en departist sans le mordre. Elle contoit aussi, que l'vn de ses familiers qui se nommoit Geminius, deuint vne fois amoureux d'elle, qu'il luy rompoit la teste à force de la prier & solliciter continuellement: elle luy respondit qu'elle n'en feroit iamais rien, pour l'affection qu'elle portoit à Pompeius. Parquoy Geminius en parla luy-mesme à Pompeius: lequel voulant luy gratifier en cela, luy permit: mais oncques puis ne luy toucha ny ne parla à elle, combien qu'il semblaist qu'il en fust encore amoureux: & elle ne le porta pas en femme de son mestier, ains en fut longuement malade de douleur & de regret: & neantmoins on dit que ceste Flora est oit lors si renommee pour sa grace & sa beauté, que Cecilius Metellus faisant orner & embellir le temple de Castor & de Pollux, de beaux tableaux, & de belles peintures, y fit mettre entre autres le portrait d'elle au naturel.

大阪大学大学院文学研究科

評価・広報室

大阪大学大学院文学研究科

外部評価報告書

2005

大阪大学大学院文学研究科

評価・広報室

【表紙 アミヨ訳『プルターク英雄伝』（1587年版）「ポンペイウス」より】

外部評価報告書 2005

目次

はじめに	1
------	---

序 経緯と概要

文学研究科評価活動の経緯	5
外部評価 2005 の概要	6

第1部 外部評価書

藤井 譲治 (京都大学大学院文学研究科長)	11
中村 元保 (梅花女子大学・梅花女子大学短期大学部学長)	14
毛利 三彌 (成城大学文芸学部教授)	17

第2部 課題と展望

概観	23
研究評価部門	24
教育評価部門	25
広報部門	27
ネットワーク部門	28

第3部 外部評価資料

第1章 文学研究科・文学部の基礎的データ

1-1 学生数について	33
1-2 外部資金の導入	35
1-3 21世紀 COE について	37

第2章 教員・院生研究活動データ(2004年度)

2-1 哲学哲学史	41
2-2 現代思想文化学	46
2-3 臨床哲学	50
2-4 中国哲学	57
2-5 インド学・仏教学	60
2-6 日本学	64
2-7 日本史学	72
2-8 東洋史学	81
2-9 西洋史学	89
2-10 考古学	97

2-11	人文地理学	102
2-12	日本文学	108
2-13	比較文学	116
2-14	中国文学	119
2-15	国語学	122
2-16	英米文学	128
2-17	ドイツ文学	136
2-18	フランス文学	141
2-19	英語学	145
2-20	日本語学	150
2-21	美学・文芸学	161
2-22	音楽学・演劇学	170
2-23	美術史学	182
2-24	文化基礎学（広域文化形態論講座）	189
2-25	地域社会論（広域文化形態論講座）	190
2-26	言語文芸学（広域文化表現論講座）	192
2-27	留学生専門教育	193

第3章 評価用添付資料

3-1	研究の状況	197
3-1-1	講演会等実施状況	199
3-1-2	国際共同研究実施状況	210
3-1-3	産学連携組織一覧	211
3-1-4	企業との連携状況（包括提携、合同企画などの共同研究以外の連携）	212
3-1-5	公開講座等実施状況	213
3-1-6	企業等外部に対する技術研修実施状況	214
3-1-7	企業を対象とした懇談会・交流会の開催状況	215
3-1-8	国、自治体からの委託調査の受入状況	216
3-1-9	小中高への教員派遣状況	218
3-1-10	学内施設等開放状況	219
3-1-11	学生の学会発表件数	220
3-1-12	学生が著者となった学術雑誌掲載論文数	221
3-1-13	学生の海外派遣の状況（非常勤職員として雇用されているものも含む）	222
3-1-14	学生の研究助成金獲得状況（学生が代表者となっているもの）	223
3-1-15	博士論文公開審査（公聴会）の実施状況	224
3-1-16	学生の出張状況（国内）（非常勤職員として雇用されているものも含む）	225
3-1-17	学生の受賞状況	226
3-2	教育・研究の実施体制とその方法	227
3-2-1	アドミッションポリシー	229
3-2-2	受入方針公表状況	230
3-2-3	部局における入試等の説明会開催状況	231
3-2-4	文学研究科共同研究	232
3-2-5	21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」について	236
3-2-6	国内における部局間教育交流協定一覧	238
3-2-7	インターンシップ実施状況	240
3-2-8	研究科の開講科目数及び授業の種類	241
3-2-9	学部の専門科目開講科目数及び授業の種類	242

3-2-10	入試改善状況	248
3-2-11	ファカルティ・デベロップメントの取り組み	249
3-2-12	教員による担当授業評価状況	250
3-2-13	教育活動評価組織・改善組織の設置状況	251
3-2-14	教育に対する自己評価の実施状況	252
3-2-15	研究に対する自己評価実施状況	253
3-2-16	研究に対する外部評価実施状況	254
3-2-17	研究の質の改善のための検討状況	255
3-2-18	社会貢献を見直す体制の整備状況	256
3-3	教育の達成状況	257
3-3-1	文学部 成績分布	258
3-3-2	卒業論文成績状況	258
3-3-3	文学研究科 講義・演習の開講科目数	258
3-3-4	文学研究科 講義受講者・単位修得者数	258
3-3-5	文学研究科 演習受講者・単位修得者数	258
3-3-6	文学研究科 講義成績分布	259
3-3-7	文学研究科 演習成績分布	259
3-3-8	博士前期課程修士論文提出状況等（カッコ内は外国人留学生数）	259
3-3-9	修士論文の点数と各科目成績平均点	259
3-3-10	資格等取得状況	260
3-3-11	就職者職業別一覧（博士前期課程）	262
3-3-12	就職者職業別一覧（博士後期課程）	262
3-3-13	研究者・高度専門職業人就職者数	262
3-3-14	学生授業アンケート実施状況	263
	・「平成 16 年度文学部開講科目を対象とする「授業改善のためのアンケート」実施結果報告」	264
	・「平成 16 年度「大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」実施結果報告」	274
3-4	学生への支援体制	286
3-4-1	学部・研究科の入学ガイダンス実施状況	287
3-4-2	学生相談・メンタルヘルスケア等実施体制	289
3-4-3	オフィスアワーの組織としての取り組み状況	290
3-4-4	セクシュアルハラスメント防止対策	291
3-4-5	身体障害学生のための対策実施状況	292

あとがき	293
------	-----

はじめに

大阪大学大学院文学研究科では、2005年度に3名の外部の先生方をお願いして、第2回目の外部評価を行っていただきました。その報告書ができあがりましたのでここに上梓することになりました。

1994年以来、文学研究科では繰り返し自己評価を行ってきており、その結果に基づいて教育と研究の改善に役立ててきました。私たちの文学研究科の抱える問題をより明確に把握し、それを研究科の将来に活かしていくために、外部の方々の意見を広く取り入れていくことは常に行わねばならないことだと思っています。

今回の外部評価は、2002年度の外部評価に続く2回目のもとなります。前回の外部評価が、分野別のピアレビューであったのに対して、今回は、研究科・学部全体の組織としての評価をお願いいたしました。個別の教員や研究室の活動ももちろんのこと、研究科・学部という組織としてのあり方もまた厳しい外部の眼差しによって検証されることは、組織運営上必須なことと思います。

行政改革とそれに伴う法人化など、現在の大学は変革を厳しく求められています。今までのようなどちらかといえば画一的な大学運営から脱皮して、大学独自の道筋を見出さねばならない時期に差し掛かっています。そのような観点に立って、今回の外部評価を行っていただきました。この評価結果を受け止め、私たちの研究と教育にとって実のあるものにするのは、あるいは時間のかかることかもしれません。けれどもここで提出していただいた様々な問題を真摯に受け止め、日々の運営に役立てようと意識し、また従来とは異なる視点にたつことは、今日からでもできるだろうと思います。ここに公表する外部評価書はその第一歩になるはずのものであり、この報告書を足がかりに、さらに多くの忌憚のないご意見をお待ちするものです。

最後になりましたが、外部評価をお願いした委員の方々には、突然の、きわめて不躰なお願いを快くお引受いただき、それぞれじつにお忙しい中、資料の精読と評価書の執筆にご尽力いただきました。この場をお借りして、改めて深くお詫びするとともに、篤くお礼を申し上げる次第です。

2006年3月3日

大阪大学大学院文学研究科長

柏木隆雄

序

経緯と概要

経緯と概要

文学研究科評価活動の経緯

大阪大学大学院文学研究科では、1994 年以来、継続的に自己評価及び外部評価を行なっている。1994 年度、1996 年度、1998 年度において自己評価書を刊行し、その後自己評価書は『年報』として 2002 年度、2004 年度に刊行した。2002 年には、第 1 回目の外部評価を行ない、その結果は『年報 2002』に掲載されている。また、2003 年度には、過去 5 年を対象にした教育面での取り組みについて、大学評価・学位授与機構から評価を受けた。この評価は、大学評価・学位授与機構の「分野別教育評価」のうちの「人文学系」についての評価である。この評価のための資料は『21 世紀の大学と教育』という報告書にまとめられている。ただこれは 1998 年の大学審議会の答申「21 世紀の大学像と今後の改革方策について」をうけて、いわば「試行」として始まった大学評価の一環である。この評価は我々文学研究科が自らイニシアチブをとって行なったものではなく、この点でいささか性格を異にする。以下では、まずこれ以外の文学研究科が行なった自己評価と外部評価の実績を簡単に概観しておく。

1992 年に大阪大学に発足した自己評価委員会を受けて、同年部内にも自己評価委員会が発足して自己評価の作業を開始することになる。1994 年に刊行された『大阪大学文学部 1994 年 1 月』は、その第 1 号目の報告書である。巻頭言を書かれている塚寄智文学部長（当時）は、カントの言葉を引用されて「一切のものが批判を受けねばならない」現代において、この報告書が今後の発展の踏み石となることを希望されている。引き続き本文では、文学部の沿革と理念、組織と規模、学部学生と大学院学生の数や進路、学位授与件数、学術定期刊行物、各講座の状況、教官の活動、社会との連携、国際交流、そして課題と展望を示している。第 1 回目の自己評価書は、主としてデータを中心に収集し、文学部の現状を公開し、今後への指針にしている。

続いて 1996 年に刊行された第 2 回目の自己評価書『現状と課題』では、第 1 号の評価書と基本的には同じ編集方針のまま、新たに「改革に向けて」という章立てを追加している。この章では、各種の部内委員会の現状と課題を報告している。これは 1994 年に教養部が廃止され、配置換となって 17 名の教員を旧教養部から迎え入れ、さらに 5 学科 32 講座で編成されていた学部組織を、大学院重点化を目指して 1 学科 11 講座の大講座制に再編成を行なうという変革が行なわれたのに歩調をあわせるものとなっている。中村元保文学部長（当時）は、「課程博士の学位取得のためのカリキュラム整備と指導体制の充実」を図り、同時に「反省を通じての自己革新」に期待され、「大学改革の試みが着実に成果を挙げうるためには、繰り返し終わることなく自己点検・評価を行なう」ことが必須であると、その巻頭言で述べられている。

さらに、1998 年に刊行された第 3 回目の自己評価書『現状と課題 1998』では、大学改革に対する問題意識がさらに強く反映されている。この報告書では、従来の研究と教育のデータ

の充実もさることながら、大学院重点化及び大講座化に対するアンケートを実施しその報告を掲載している点は注目に値する。重点化・大講座化によって良くなった点、悪くなった点をバランスよく掲載しており、参照するに値するものとなっている。さらには、外部評価として位置づけたシンポジウムを開催し、その報告を掲載していることは特記しておくべきである。文学部創立 50 周年記念の催事として企画されたこのシンポジウムが、従来の意味での外部評価足りえるかどうかは議論があるとしても、300 人以上の聴衆の前で「文学部は必要か」と題されたこのシンポジウムは、多くマスコミにも取り上げられ、逆説的に文学部の存在意義を再認識させる催しとなったことは疑いがない。

このように、3 回の自己評価報告書は時代の問題意識を反映しつつ、成長を遂げてきているように思われる。第 4 回目の自己評価書となる『年報 2002』では、データ収集の項目を増やしたことと同時に、大学院学生の研究業績も合わせて掲載したことで、現行の自己評価書のスタイルの基礎となった。これは私たち文学研究科では、大学院学生の研究業績も、重要な研究教育の成果であるという認識によるものである。同時に教員の社会貢献にもページを割いているのは、その業績が論文執筆や著作執筆だけではなく、多領域にまたがる社会活動にも、文学研究科の仕事の成果が表れていることを示したいという意識を反映している。1998 年度以後、自己評価書はしばしば刊行されず、この『年報 2002』では 1997 年度から 2001 年度までの研究教育のデータを収集したこともあり、大部なものになっている。また 2002 年度は第 1 回目の本格的な外部評価を開催した年でもある。この外部評価は、各分野別評価を行なうピアレビューの形式をとり、述べ 25 人の学外者による外部評価を行なった。同時に 2 名の外国人の評価委員を設けた大規模なものであったことも記しておくべきだろう。

そして昨年刊行された『年報 2004』では、2004 年 4 月からの国立大学法人化を踏まえて機構の再編制や COE などを中心とする外部資金の大幅な導入などをトピックに、新たな問題意識で評価活動を展開していることが分かる。

外部評価 2005 の概要

以上のような経緯をたどってきた文学研究科の評価活動であるが、今回の外部評価についても、その経緯と目的を簡単に示しておきたい。

今回の外部評価は、法人化に伴う中期目標・中期計画に基づき行なわれるものである。ただし、2002 年に大規模な専門分野別ピアレビューを行なっていることもあり、今回は比較的小規模ながら、2002 年度～2004 年度の文学研究科・文学部の組織全体にかかわる組織評価を行なうこととした。組織としてのデータだけを中心にして、教員の研究教育データを評価対象から除外するかどうかは議論になった。結局、文学研究科の研究教育は数的データだけでは正確に反映されないという認識から、これらのデータも評価対象とした。そのため、2002 年度～2003 年度の教員データなどを含む既刊の『年報 2004』もその評価対象とした。本報告書には 2002 年度～2003 年度の教員データや大学院生の研究業績は掲載されておらず、2005 年 9 月末日現在での在籍者のデータのみとなっている。

また、組織としてのデータは、大阪大学が全学をあげて収集をしている「全学基礎データ」

を最大限利用することにした。評価活動は際限のないデータ収集作業と切り離せない。この作業は労力も多く、それ自体は生産性を持たない。また増大する一方の評価活動作業からの負担減も課題として上がっている。これらの点に鑑み、全学の基礎データを評価・広報室全員で再度点検し、今回の外部評価用に編成しなおしたものを作成し、「2005年度外部評価用添付資料」とし、独自に収集した「文学研究科・文学部の基礎的データ」とあわせて、評価対象のデータの一部とした。

また、組織としての評価にかかるという点を考慮し、評価対象として『大阪大学大学院文学研究科紹介』、同じく紹介冊子『大阪大学文学部』、また『シラバス』と『学生便覧』のそれぞれ2002年度から2004年度の各3冊をも評価対象資料とした。これらを補足する形で、『年報2002』、『大阪大学大学案内2006』、『大阪大学プロフィール2005』、「大阪大学文学部紹介ビデオとDVD」を参考資料として添付した。

以上をまとめると、評価対象の資料には、「文学研究科・文学部の基礎的データ」、「2005年度外部評価用添付資料」、『年報2004』、「教員・院生研究活動データ2005」、『大阪大学大学院文学研究科紹介』（2002～2004年度）、『大阪大学文学部』（2002～2004年度）、『シラバス 大阪大学文学部』（2002～2004年度）、『シラバス 大阪大学大学院文学研究科』（2002～2004年度）、『学生便覧』（2002～2004年度）の8種類となった。

評価委員は、以下の3名の学外者に依頼することになった。

藤井讓治 京都大学大学院文学研究科長

中村元保 梅花女子大学・梅花女子大学短期大学部学長

毛利三彌 成城大学教授

それぞれ、現職の国立大学文学研究科長、本学文学部長経験者で現職の大学長、私立大学の学部長または図書館長などの機関長経験者であり、今回の外部評価にはふさわしい評価委員として依頼することができた。

評価に際しては、大きく「研究の状況」「教育・研究の実施体制とその方法」「教育の達成状況」「学生への支援体制」の4項目に分け、その項目の中にさらに詳細に資料やデータを再分類し、評価を受けやすくした。

9月末日までに上記の作業を完了し、3名の評価委員に郵送により送付した。送付資料を基にしての外部評価は、前回2002年度の外部評価の方式によったものである。今回は、評価対象が組織全体にわたり、資料も大部なものになるために評価委員との懇談会も準備した。ただし、文学研究科主催の懇談会は行なわず、評価委員から希望があった時のみ文学研究科内で懇談し、質疑応答を行なうこととした。実際には1名の評価委員が来学され、質疑応答した。

評価委員による評価期間をおよそ3ヶ月設けた。評価書の締め切りを2006年の1月10日に設定した。評価委員全員から締め切り内に評価書を頂くことができた。

それを受けて、評価書について評価・広報室内で協議した。その問題点やそこから汲み取れ

る課題については、本報告書の第2部の「課題と展望」に掲載している。これらの課題や展望については、3月20日にファカルティ・デベロップメントの一環として、外部評価の報告・検討会を全教員対象に行った。評価書で指摘された問題点を他の教育支援室、研究推進室、国際連携室はもちろん全教員にフィードバックし、その共有を図り、次年度以降の研究教育の改善に役立てた。

これらの経緯と協議を踏まえて、2005年度外部評価は本報告書として上梓された。2006年度に刊行予定の『年報 2006』に合本することの可能性も協議したが、評価対象の資料が多岐にわたっていること、『年報』とは基本的な性質を異にすることなどを踏まえ、『外部評価報告書 2005』として刊行することとした。

第 1 部

外部評価書

藤井 讓治

京都大学大学院文学研究科長

2002年度から2004年度にわたる大阪大学文学研究科・文学部の教育・研究の組織的なありかたについて、以下、研究の状況、研究・教育の実施体制とその方法、教育の達成状況、学生への支援体制の順に、外からの立場から意見を述べ、最後に若干のコメントを付すことにする。

研究の状況

教員の研究活動は、ごくごく一部を除いて、堅実に進められている。さらに、科学研究費・COE資金等外部資金等の獲得も積極的になされており、研究のさらなる活性化が図られている様子を読み取ることができる。

学会・研究会・講演会等については、活発に開催されていることは窺えるが、添付資料からは、研究科とそれぞれの講演会等との関わりが、主催者としてなのか、それとも個々の教員の講演者等としてのものなのか等が明確ではなく、その評価をしがたい。成果を示すばあいには、多少区分することが必要であろう。

国際共同研究については、一定程度なされているとあっていいが、近年の同規模の大学での状況からすれば多いとは言えない。

企業との連携は、多くは研究科として取り組んだものとは思われず、個々の研究科の教員がそれにあたったものと思われ、研究科の活動として位置づけることは難しい。なお、この項目は、企業連携というよりは、研究成果の社会への還元、ひろくは社会貢献と位置づけうるものではなかろうか。

公開講座は、懐徳堂センターという明確な社会への窓口が設置され、かつ着実に講座が開催されており、評価できよう。ただ、自己評価にもあるように懐徳堂センターの人的・予算的充実への努力はやはり求められよう。

研究活動の中に位置づけられている大学院生の研究活動も多少の濃淡はあるものの、全体としては活発になされているとあってよいであろう。また、大学院生の学会発表件数が平成16年度に大きく伸びていること、また外国での発表件数も倍増していることは、大変好ましい動向といえよう。それに比して、学生の海外派遣の件数が平成16年度に大きく減少している点は気がかりである。

博士論文審査については、年度によりばらつきがみえ、かつ入学人数からすれば多いとはいえない。課題としてあげられたように、審査水準、また3年という期間をどのように考えるかは大きな問題であり、今後一層の検討を要しよう。

研究・教育の実施体制とその方法

アドミッションポリシーについては、外部評価用添付資料には、平成14年度から16年度ま

でのものとして、学部・大学院のものが示されている。しかし、学部案内では、15年度には明示されているものの、14年度のものには見られず、16年度のものには、3ページにリライトされたものが載せられている。このことをどのように評価するかは、一概には述べがたいが、このアドミッションポリシーがなお十分に定着したものになっていないように思われる。多様な専門分野で成り立っている文学部で、こうした考え方をまとめることは困難をとまなうであろうが、公示する以上は揺るぎないものとする必要があるではなかろうか。

研究科内共同研究の試みは、研究の閉塞化を避けるためにも評価すべきものであり、今後も継続されるべき取り組みであろう。ただ、採用された共同研究をみると、その期間、また成果内容からみれば、従来行われてきた共同研究の成果の取り纏めないし活動助成の性格が強く、もう少し息の長い共同研究計画があってもよいのではなかろうか。

他大学でも取り組みが活発化しつつあるインターンシップの試みは、まだ緒についたばかりといってよいが、学生が意味ある就職をしていくためにも重要であり、評価したい。一方、ファカルティ・デベロップメントの取り組みは、なお模索状態にあるとみえるが、こうした取り組みは、大枠はともかく、分野の多様性からして学部全体として位置づけるには限界があるのではなかろうか。

社会貢献については、なにをもって社会貢献と考えるかにもよるが、懐徳堂セミナーの実施、講演会等の開催、国・自治体からの要請への参画、個々の研究者の研究成果の教科書等を含めた一般書での刊行なども含めて考えるならば、当研究科の活動はかなりの社会貢献をしてきたと評価しうるものである。

教育の達成状況

成績については、その分布があまりに優に偏重しているようにみえる。内実を十分に知らずにいうのは憚れるが、絶対評価ないし達成度を基準としたものであるとすれば、教育はきわめて充実したものとの評価になる。そこまでいえるだろうか。教員の間でも学生に対しても、成績評価の基準をできるかぎり共有・明示する必要があるのではなかろうか。こうした点は、各大学各学部での考え方に大きく左右されるが、近年の奨学金返還免除制度の変更によって成績が免除の基準になるなどの外的状況の変化もあり、学部・研究科での成績評価の考え方を均質化とまでいわないまでも一定の合意を得ておく必要があるだろう。

講義受講者に単位修得者の割合は、約50%と高くはなく一見効率的でないように思われるが、文学部・文学研究科の多様な学問のあり方による文学部的講義提供のあり方、特質の結果として理解しておきたい。

学生アンケートの試みは、多くの生の声を聞けた点で評価できるが、回収率の低さ、特に研究科での低さ、からすれば、なお工夫が必要であろう。

学生への支援体制

1~2年次の教育体制については、どの大学においても多くの問題を抱えているが、なかでも学部専門教育との連続性がみえにくい現状がある。こうした現状に応えたものであろうが1

年次生への「文学部共通概説」の講義は有用な取り組みであると評価できよう。

明確な組織として教育支援室を置いたこと、オフィスアワーの設定は、その内実がどのようになっているかは今後にかかっているが、現在の学生の動向からして評価できる。

性差別問題委員会を設置し、セクシャルハラスメント防止につとめていることは評価できるが、近年、各大学でしばしば問題化するアカデミックハラスメントへの目気張りも必要であろう。

最後に、2004年になされた機構改革と自己点検・評価、ピアレビューとについてコメントしておく。

どの大学でも、法人化、外部資金導入、学術の国際連携・交流、留学生の送り出し・受け入れ、学生の研究・教育への支援、キャンパスハラスメントなど、近年激増してきたさまざまな要請に、従来の委員会方式で応えることはほとんど不可能になってきている。こうした現状に対し、大阪大学文学研究科は、従来の委員会方式の系統性の欠如を総括し、総務委員会に加えて、新たに「研究推進」、「教育支援」、「評価・広報」、「国際連携」の4室を設けることで、答えを出そうとされている。この積極性を、まず評価したい。言うまでもなく、こうした機構改革が、順調に運営されていくことが望まれるが、これらの室が研究・教育にとっていかなる効果を発揮するかはなお未知数であり、またそのことによって教員負担に偏りが生じないかなど、課題も少なくなく、今後もその経過を注意深くみていく必要があるかと思う。

また、当研究科が積極的に実施されてきた自己点検とピアレビューは、教員・職員にとって大きな負担であるが、人文学が大学という場で、生き残るだけでなく新たな地平を開き新たな位置を獲得するには避けて通ることのできない作業といえ、その方法にはなお検討すべき点もあろうが、高く評価したい。

中村 元保

梅花女子大学・梅花女子大学短期大学部 学長

研究の状況

大学の各教員の研究は、学会誌や研究誌での論文発表、学会や研究会での口頭発表、ならびに著書刊行などによって公にされている。しかしそれらの研究成果が、特定の狭い範囲の人々にしか知られていないというケースが多いためが現状である。文学部関係では特にその傾向が顕著であると言える。大学での研究成果はつねに社会に向けて還元されなければならない。

大阪大学大学院文学研究科・文学部に関しては、『年報』等のデータから教員と院生の研究業績の概要を知ることができ、さらにその成果と社会との結びつきの一端を「講演会等実施状況」からうかがうことができる。これら講演会、研究会、セミナー、シンポジウム等は、平成14年度から16年度にかけて開催数が大幅に増加しており、この方面での活動が積極的に展開されていることを示している。

また、国や自治体からの委託調査の受入れ件数も、平成14年度から16年度にかけて増加し、特定の分野に限られてはいるが、社会的な高い信頼を得ていることがわかる。

しかしその一方で、公開講座等の実施がやや手薄になっている感は否めない。多数の有能なスタッフを抱えている組織に対する社会的要請に応えるためにも、この方面にもう少し力を入れるべきであろう。各教員が自分の専門分野に関わるテーマを決めてそれを登録し、企業や自治体、学校やPTAなどの団体から要望があれば、講師としてどこへでも出かけて行って講座をひらく、といういわば出張講座、出前講座のようなものも考えられるだろう。生涯学習が社会全体の目指す方向として定着しつつある現在、大学は社会に向けて大きく開かれていなければならない。

国際共同研究の分野はさらに進展が望まれる。今や国際的な共同研究は世界の主要な大学でさまざまな領域において極めて活発に行われており、そのすぐれた成果が続々と発表されて、社会の発展に大きく貢献している。こうした共同研究によって当該大学の評価は国際的に高まり、それが留学生の送り出しと受入れや教員の交流にプラスに働くのである。

大学院の博士課程では、博士の学位を取得することが一番の目標となるはずであるが、博士論文公開審査の実施状況のデータによれば、平成15年度では前年度の数を上回っているものの、16年度では15年度の数よりも大きく減少している。平成15年度の課程博士の数がデータとして挙げられていないので正確には言えないが、それでも審査件数の大幅な減少はまことに残念である。

教育・研究の実施体制とその方法

教育と研究に関してそれぞれの専門分野に閉じこもってしまうのを避けるために、分野を横断する教育プログラムが設けられたり、共同研究が実施されている。現在、文学研究科内では

3件の共同研究が進行中である。テーマの性格上、大きく異なったさまざまな専門分野から参加者を集めているとは言えないにせよ、こうした試みは望ましいことであり、いっそうの拡充が図られるべきであろう。その場合、共同研究の枠組みの中でこそ、学際的研究の可能性が開けるのであり、それが人文学に新しい展望を加えることになるのだ、ということをも視野に入れておく必要があるだろう。

21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」においても平成16年度中に6編の研究報告書が刊行されたほか、数多くの国際シンポジウム、フォーラム、講演会、ワークショップ、研究会等のイベントが開催されて成果を挙げている。また、他大学と教育交流協定を締結して、学生の派遣と受入れを積極的に行い、教育の面で新しい領域を開拓している。

教育・研究活動の内容はつねに改善されるべきであるという考えに基づいて、担当者による自己点検・評価がどの大学においても実施されるようになった。こうした状況の中で、平成16年度に評価・点検のための組織があらたに設けられ、この問題に意欲的に取り組んでいる。こうした自発的な点検によって浮かび上がってきた問題点をどのようにして改善するのか、が重要であり、平成14年度は企画・評価委員会、15年度は庶務委員会、16年度は研究推進室の各部門において研究の質を改善するための検討が続けられていることは評価に値する。しかし、この問題と関連するファカルティ・デベロップメントの取り組み方は、まだ十分とは言えない。

教育の達成状況

学生の単位修得の状況については、学部学生の場合は「文学部・成績分布」と「卒業論文成績状況」のデータから、また大学院学生の場合はそれぞれ講義と演習の「受講者・単位修得者数」ならびに「成績分布」のデータから容易に把握することができ、優秀な結果が出ている。組織全体として学生に対して丁寧で肌理のこまかい教育上の配慮が行われていると思われる。それが修士論文の点数と各科目の成績平均点のレベルの高さを生み出しているのであろう。ただ、修了までの在学期間がかなり長い学生がいることは、今後何らかの対策を講じるべき問題点のひとつである。

研究の状況のところですでに触れたことであるが、博士の学位の取得状況は、その大学院の研究体制に関連するのみならず、極めて重要な教育上の問題である。博士課程に入学してきた学生はやはり博士学位取得を目標とするべきであって、研究指導もそのことを前提とするべきであろう。しかもできる限り3年間のうちに学位取得ができるような研究計画を立てることが望ましい。

学生による「授業改善のためのアンケート」および「大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」の詳細な結果が報告されている。この種の調査ではややもすると、調査結果の統計的発表に終わってしまうことが多いのだが、この報告の場合は、受講生による検証の結果を踏まえ、改善に向けての強い姿勢が打ち出されていることは頼もしい。

学生への支援体制

現在は多くの大学で、学生のさまざまな相談に応じるために教員がオフィスアワーを設けているが、問題は予め告知した曜日と時間に本当に教員が学生に対応できているかである。システムはあっても決められたことが実行されているかどうか、チェックする体制も同時に必要である。学生のためにつくられたものが逆効果を生む恐れがあるからである。

セクシュアルハラスメント防止のために、性差別問題委員会が設置され、学生と教職員を対象とした説明会や研修会が開催されていることはまことに結構なことであるが、性差別問題に限らずに人権問題一般を守備範囲とするシステムがあってもよいのではないかと思われる。

毛利 三彌 成城大学文芸学部教授

今日、大阪大学が名実ともに日本の大学のトップレベルにあることは衆目の認めるところでしょう。研究、教育の両面ばかりでなく、社会的貢献の面でも注目すべき成果をあげています。殊に人文科学分野が行政から軽視される傾向にある昨今、大阪大学大学院文学研究科の高水準維持は、他大学の同様の研究科にとって、大いに勇気づけられることです。評価資料から判断するかぎり、4つの求められている評価項目のすべてにおいて、ほとんど最高得点が得られると思います。研究状況としてあげられる研究会、講演会、フォーラム、シンポジウムの多彩さ、また各教員、大学院生の業績リストの充実、特に学生のそれが外からの評価につながっていることは、研究助成金獲得状況や博士論文の圧倒的な多さにあらわれています。

本研究科の教育・研究の実施体制とその方法の第1の特徴は、専攻、専修の分野の多様性にあります。実のところ、本研究科に対する評価の大きな部分は、人文科学の研究分野と研究方法の、近年にみられる急速な変化をいち早く察知し、それに即応する体制をとっていることに由来するでしょう。その典型が、文学研究科および学内の他の機関との連携による21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」であることは言うまでもありません。漠然とした内容しか思い浮かばせないこの標題が、まさにその時事性と多様性を示唆しています。そしてこのような研究教育姿勢は、『年報 2002』における2-2の「理念と実践」の項で述べられていることによれば、はるか以前から見られる、いわば本研究科・学部の伝統となっていることのようにです。そう言えば、各専攻、専修における講義、演習内容の少なからずが、まさにインターフェイスの問題を意識しています。これだけ多様にして時事的な研究領域を網羅する教育内容は、世界の大学でも稀でしょう。

それがそのまま、教育の達成状況につながっていると思われれます。統計資料でまず驚くのは、成績の優を取得する割合の圧倒的な多さです。資料のC-1, C-2を見誤っているのでなければ、学部学生で全成績の半数以上、卒業論文の3分の2が優であることは、驚異的と言わねばなりません。学生への支援体制も、おそらく(旧)国立大学としては異例の、受験生、在学生への配慮が見られます。

資料を概観しての、本研究科に対する第1の印象は、以上のようなものです。そして第2の印象は、あえて言えば、出来過ぎだということになります。これは資料自体からの印象も強いのですが(このような周到な資料の作成に、関係者のどれだけの能力と労力と大学の援助体制が必要か、私の経験から推しても、これこそもっとも驚異的な成果です)、研究・教育体制全体の隙のなさによるとでも言いましょうか。本研究科の教員は、むしろ逆だと言うかもしれません。たしかに、「インターフェイスの人文学」というような漠然さあるいは多様性は、両刃の剣であることを、多くはわきまえているでしょう。伝統的な研究、教育体制の「タコつぼ」性を正そうとするあまり、その重要部分であった地道な基礎研究までを消し去る傾向にあり、

研究の多様化が実は細分化となって、学際性を求めることがかえって個々人の専門領域を狭めることになりかねません。本研究科・学部の専攻、専修の細分化は、諸々の制約、条件の下にできた体制だったのかもしれませんが、しかし、何事にもつきまとうプラスとマイナスをどのように解決しようとしているのか、大袈裟に言えば、その七転八倒ぶりがあまり見られないということなのです。たしかに、研究科内の共同研究はその一つの方法だろうと思います。国際フォーラム「台湾における日本文学・日本語学の新たな可能性」などは、非常に有意義な企画です。しかし、このフォーラムが実際にどのような運営の仕方をとったのか、報告や討論が具体的にどのように進化したのかの記述がないために、その成果のほどは分かりません。私の経験からも、この種の催しはやり方如何で成果に雲泥の差がでます。これは、資料編者への批判ではありません。このフォーラムからどのような成果を得たいと考え、努力し、その結果、どのような達成感、失望感があつたかが不明だということは、実は、そのようなものとして運営されなかったのではないかという危惧をいだかせるということです。大変な誤解かも知れず、礼を失した言い方ですが、実はこのようなことが、現在進行中の大学評価のいちばんの問題点なのではないでしょうか。

どのような評価を求め、それをどう利用するのか。もし大阪大学がそれを示してくれたら、他大学にとってはどれほどの恩恵になることか知れません。私への外部評価の求めに対して、あまりに的外れな言い草でしょうが、今回、この見事な評価資料を概観して浮かんだ最初の評価対象は、本研究科の評価観とでも言うべきものでした。私は先回の外部評価で、演劇学研究室の評価を担当しました。演劇学を専攻する私がかろうじて評価能力をもつといえるのは、演劇学研究室のみでしょう。イギリスから招いたガーストル教授がいみじくも口にされたように、この外部評価とは何を求めるものなのか。もちろん理由は記されています。だが、先回の各専攻に対する外部評価は、結局、本研究科の各教員にとって、どのような意味をもったのでしょうか。外部評価によって、なにか変化が生じたのでしょうか。あるいは、無責任な言い方ですが、私のものも含めて、変化を呼ぶような内容の評価があつたのでしょうか。『年報 2004』からは、あまり知ることができません。

私は国公立大学につとめた経験がないので、今回の独立法人化がどのような利点、不利点をもたらすのか、その移行措置にどのような混乱、軋轢が生じたのか、外から得る情報以上に知ることはありません。したがって、私にその点の評価は求められていないでしょう。しかし資料から判断するかぎり、本研究科はこの移行を最大限にいい方向に利用したように思われます。「研究推進」「教育支援」「評価・広報」「国際連携」の4室の設置はその最たるもので、特に「国際連携」に力点をおいたことは、本研究科の今後のあり方の一つの理念をうかがわせます。だがここでも、私には、このような機構整備が、教員への一層の負担増加にならないのかどうか、なるとすればそれをどう解決するか、資料からうかがうことができませんでした。大体、台所裏は分からないように書くのが、この種の資料の常套です。

現在どこの大学でも発行している所属教員、大学院生の研究業績表もそうでしょう。本当の業績を知るにはこれでは不十分であることは、だれもが知っています。たしかに人文科学の分野は、自然科学と違って、論文の客観評価は無理ですが、しかし、伝統的に評価社会である英

米では、私の知るかぎり、その無理なことを徹底してやっています。（もちろん、善し悪しは別問題です。）真似るなら、とことん真似るべきでしょう。そのとき、日本の教員はとても耐え切れなくて、多くが精神的に脱落するかもしれません。そもそも評価社会ではないところに、評価社会の方法を持ち込むことが無理なのです。こんなことは、資料を編集したスタッフの方々は、先刻ご承知のことだろうと思います。アメリカから招いた Cho 教授を囲んでの座談会の結びに、猪飼教授が「日本における固有の評価のあり方を模索していく必要があると強く感じ」と述べられているのは、まったくそのとおりです。しかし模索することにさえ、まわりを巻き込むことの難しさは、私自身、自分の大学で経験しています。それのできるのは、今の日本では、気鋭の意気盛んな大阪大学しかないのではないのでしょうか。

私の「憎まれ口」は、最大の期待のあらわれだと思っていただければ幸いです。

第 2 部

課題と展望

課題と展望

概観

ここでは、頂いた外部評価書に基づき、文学研究科・文学部が何を課題として受け止め、今後それをどのように対処していくのか、現時点での展望を探ってみたい。

評価の対象になったのは、2002年度から2004年度の3年間の組織としての研究と教育である。この3年間には、国立大学法人への移行、従来 of 委員会体制から、研究推進室、教育支援室、評価・広報室、国際連携室の4室体制への転換など、組織全体に関わる大きな変化があった。この変化は始まったばかりであり、研究と教育にどのような効果や影響があるのか、その実際的で本格的な評価は今後のことになるであろう。今回の評価はいわばそのスタート地点での評価であり、今後の私たちの進むべき方向性を探求するための基礎的資料となるべきものである。私たちのこの変革への取組自体は概ね評価されているが、常に自己点検や自己変革を行い、進むべき道筋を見極めていく努力が必要なのは論をまたないであろう。

ここ数年、文学研究科・文学部は、繰り返し自己評価及び外部評価を行っている。1994年、1996年、1998年に自己評価書を刊行している。さらに、2002年度からは、隔年ごとに『年報』の刊行を開始し、自己評価にあてている。その上、1997年度～2001年度には、大規模な分野別外部評価を行い、その結果は『年報 2002』に掲載されている。しかし、これらの評価によって一体何がどう変わり、どのような効果があったかについては、あまり研究科内部でも議論にはなっていない。この点、毛利三彌成城大学教授の指摘にあるように、評価をすることはよいとして、それをどう利用するのか、何のために評価するのかという、いわば「評価観」自体をも評価の対象にするべきだとの指摘は、真摯に受け止めるべきであろう。教員各人の研究業績を列記し冊子として刊行し、学生への授業アンケートを行うことなどは、ややもすればルーティーン化しやすい。今後必要なのは、個別の評価活動をただ単に継続させていくのではなく、それらの作業を通じて私たちがどう質的に変化しているかを見極めていくことであろう。

文学研究科の研究は細分化されており、それが私たちの特色であることに間違いはない。他方、その学問が社会的に貢献しうるものであること、また実際に社会に向けられたものであることを示さねばならない時代に差し掛かって来ているのも、また受け止めざるを得ない事実であろう。この点でも、私たちは相応の努力をしており、概ね肯定的な評価を得ているように思われる。その上で、そのために生じる負担の増大や、従来 of 基礎研究の部分が等閑視されるようなことがあるとすれば、それはまた問題となる。これらの方向の研究は COE や研究科内共同研究において展開され、公開講座などを活発に実施することで社会的な貢献へつなげようと模索している。ただ、その際のプラスばかりではなく、マイナスの側面が、私たちの自己評価にはほとんど表れていないという指摘もあった。自己評価をする際に、自らをマイナス評価することに抑制的になるのは、むしろ自然なことと思われるが、今後私たちはマイナス評価にも

怖れずに向き合うことが必要になってくるのではないだろうか。

現在、日本の大学で盛んに行われている評価活動は、欧米の大学のそれを踏まえるか、もしくは真似たものである。基本的に評価社会である欧米と、私たち日本とでは評価の方法も意味合いも異なるのであろう。また、理科系学問と文科系、とりわけ文学研究科の学問とが性質を異にすることは、私たちが理解しているほど、他の理科系学問分野の研究者が理解しているわけではない。研究成果を数的に把握することが文学研究科の学問に馴染まないのは、私たちならばよく知っている。しかしここ数年行ってきた評価活動はやはり大きく見て、欧米型、もしくは理科系学問の評価体系に、逆に年々非常に接近したものになっているのではないだろうか。隔年刊の『年報』も、詳細に研究業績を掲載するのは非常に有意義であるとして、全体的に見渡せば、ややもすると数量的な判断の材料になりかねない怖れもある。この点、日本固有の評価のあり方の必要性を指摘されている点は、やはり私たちの今後の課題として認識しておくべきだろう。むろん、その固有のあり方が国際的にも評価されるべきものでなければならぬのは言うまでもないが。

私たちの評価・広報室は、その活動をさらに研究評価部門、教育評価部門、広報部門、ネットワーク部門の4つの部門で行っている。以下では、今回の評価を文学研究科の研究・教育に有機的に繋げていくために、この4つの部門からそれぞれ課題となる点を踏まえ、その対応と今後の活動への展望を記しておきたい。

研究評価部門

文学部では、1年次生を対象に、総合的ガイダンス（4月）と専修決定のための専修説明会（9月）を開催している。1研究面については、おもに研究業績、研究体制、さらに研究成果の社会還元という3つの観点から評価をいただいた。おなじ事項に対して評価がかなり異なっている場合もあり、それが人文学の性格を表しているとも言えるが、またあらためて研究面の評価の難しさをも感じさせられた。一方で、複数の評価者が共通して指摘されている問題点についてはとくに真摯に受け止めて、文学研究科における今後の研究戦略の参考にしなくてはならない。

研究業績面では、教員、大学院生ともにその研究活動はおおむね活発に行われているとの評価をいただいた。これは日頃から学問的意欲を持ってそれぞれの研究に取り組んでいる教員、大学院生の研究成果の総和が高い水準にあると評価されたものであろう。論文の本数などはつねに右肩上がりが増加しつづけるという性格のものではないので、少なくとも数量的には現状を維持しながらさらなる質的向上を目指すという考え方で今後に臨みたい。

こうした個々人の研究成果を結合させてあたらしい成果を生み出していくための研究活動として、21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」をはじめ、国際シンポジウム、フォーラム、各種の研究会などは一定の評価をいただいた。文学研究科内の共同研究に対しては、試み自体は評価できるものの、その方法面での工夫や一層の拡充を求める意見が示された。

この点については、たとえば広域文化形態論講座において進行中の「死と生の習俗をめぐる比較史研究」のような、共同研究を軸にさらに大型科研との連携をはかってあらたな展開を目指す取り組みなどは一つの方向性を示していると言える。

一方、文学研究科の規模の割には国際共同研究の実績が少ないという指摘には十分に留意しておかなくてはならない。教員個人としては科研などの外部資金を導入して海外での国際共同調査や共同研究を行っている例は多いので、一つにはそうした活動を文学研究科の活動としてきちんと位置づける工夫が必要であろう。また、文学研究科における研究戦略を検討する研究推進室と評価・広報室との連携を密にしてこうした提言を生かせるよう努力したい。

研究成果の社会への還元という面では、藤井譲治京都大学文学研究科長と中村元保梅花女子大学学長は社会貢献や公開講座の必要性を指摘され、一定の評価を得ている。例えば、懐徳堂記念会との共催による継続的な公開講座は評価されている。これは文学研究科のスタッフが大きく関与しており、様々なアイデアを持ち寄って、より社会の人々に受け入れられ、開かれた文学研究科を目指すためのものであるが、そのほかの公開講座の実施がやや手薄になっているという指摘もあった。確かに、大学における研究成果は社会へ向けて発信されるべきものであり、そうした社会的要請があればできうるかぎり応えていくのが大学の使命でもあろう。大学院大学としての教育指導面、研究面での責務を十分に果たしながら、さらに公開講座等の活発化に取り組むとしたら、組織としてどれほどの力の配分が適正なのか、あるいは可能なのか。重要な課題であり、しばらくは学問の社会的役割を認識しながら、あるべき姿を模索していきたいと考える。

また、外部評価をお願いするにあたって提供した資料の整理方法に、改善を要する点がいくつかあった。とりわけ「外部評価用添付資料」には全学の活動データ収集の一環で作成したものを含んでいたため、「企業との連携状況」「企業等外部に対する技術研修実施状況」といった文学研究科の活動スタイルになじまない項目設定がされている。そこになかば強引に事項を書き込んだために、理解されにくい部分があったことは否めない。また、評価者からも指摘されたように、「講演」「学会」「研究会」などについては個人が参加したものか文学研究科の組織として催行したものかという点が曖昧になっていた。

教育評価部門

教育全般にわたっても広く様々な指摘を受けた。まず、アドミッション・ポリシーがなお十分に定着したものとなっていないように受け取られたことが挙げられる。一部『文学部紹介』で、受験生用にリライトしたために、アドミッション・ポリシーに揺らぎがあるように理解された。アドミッション・ポリシーは、「入学者選抜要項」や文学部 HP などにおいて明示されており、十分に周知のものとされていると思われる。我々としては文章形態には捉われず、その精神を生かすべく、一層の努力をしていく必要がある。また、専門を決めるにあたって「文学部共通概説」が有用であるとの指摘もなされた。現在、第1 Semesterにおいて毎週3種類1コマずつ、学期全体としてはかなり多くのコマ数が設けられており、今後一層効果的なもの

になるようにして行きたい。

成績評価に関して、「優」の数の多さが指摘されている。成績評価については、現在シラバス上に評価基準を明記することを要請しており、ある一定の評価基準は学生に伝達できている。我々は、相対評価ではなく、絶対評価を採用しており、学生の達成度に応じて「優」の数は左右される。成績評価の基準の共有については、教授会においても意見交換を随時行い、その努力は怠っていない。

インターンシップへの取り組みやファカルティ・デベロップメントへの取り組みが不十分であるとの指摘もあった。これらについては、近年開始されたばかりで、十分とは言えず、担当者となった教員の個人的な努力による部分が多く、組織全体としての取り組みは今後の大きな課題である。とりわけ、インターンシップについては、企業等との関わり方について、学部・研究科レベルでより積極的具体的に取り組み、状況に応じ予算措置等を講じる必要もあるかと思われる。

オフィスアワーの設定自体は評価すべきことであるが、その実践についてはなお検討を要する問題があるとの指摘があった。これは制度として設けられたが、実際の運用、また時間数等も、各教員に任せられており、試行段階にあるといえる。

大学院教育については、博士論文の提出状況や在学年数の問題は指摘されるようになった。博士論文（課程）が入学者数からみて少ないこと（特に16年度には15年度に比べて大きく減少している）、審査水準や3年という期間について、どのように考えるべきかが問われているとの指摘をいただいた。年度毎の数字の変化も小さくない問題であるが、全般に3年間で博士論文を完成し提出できる大学院生の数はわずかであり、博士論文の提出に向けて一層の努力を払う必要があると考えられる。審査水準については、予備論文を設けることである一定の水準は保たれているが、研究室において多少のばらつきが見られる。今後は成績の段階評価導入についての議論もあり、教授会で慎重に対応して行きたい。

修士論文についても、修了までの在学期間がかなり長い学生がいることが気になるとの指摘をいただいた。博士前期・後期課程の目標として研究者養成ばかりではなく、高度専門職業人の養成を掲げているので、博士前期課程修了生の進路をめぐっては、今後も一層の配慮と支援が必要と思われる。

学生へのアンケートについては、回収率の低さが問題であり、なお工夫が必要であるとの指摘をいただいた。これについては、平成17年度において、実施された大学院アンケートや卒業生アンケートにおいては、大幅な改善を見ることができたと思われる。さらに、その結果については平成17年度中に全般的なとりまとめと報告を行い、平成18年度においては、具体的にどのように教育に反映させるかについて取り組むことにしている。

自己点検やピアレビューは、教員・職員にとって大きな負担となっているが、必要な作業であり、高く評価するものの、方法の検討や、これらを通じて浮かび上がってきた問題点を改善することが重要であるとの指摘をいただいた。これについては、評価・広報室のみならず、他の3室との連携によってピアレビューの問題点の解決に当たっている。実際にそのための負担は少なくないが、方法のさらなる工夫と効率化を求めてゆくべきであろう。

広報部門

2004年4月1日に独立法人化した大阪大学の文学研究科においては、委員会制度の改革が行われ、整備されたうちの一つの室として評価・広報室が発足し、本広報部門もそれ以来新たな活動を行っている。今回の外部評価書には広報部門に直接関わる言及はなかったが、そもそもこのような外部評価報告書を作成し、自らの組織の評価を社会に問うという活動自体が「広報」活動であるとするなら、外部（及び自己）評価があつてこそその広報であると言えるし、評価というものは広報を前提としたものとも言えるわけで、評価・広報室、ひいては文学研究科のいわばインフラである広報部門が直接評価の対象には成りにくいのは当然かもしれない。

しかし、間接的であるにせよ、外部評価書には広報部門に関わる指摘があるため、それを踏まえた上での自己評価を行い、2年間の成果を総括し今後の展望を示す必要性はあるだろう。

例年公刊している『文学部紹介』は、広報部門の活動の重要な部分を占めているが、2006年度版においては、紙面を増やし、社会貢献に関する活動をアピールすることになっている。藤井譲治京都大学文学研究科長は企業連携を社会貢献の一つと位置づけられているのだが、文学研究科という組織の性質上企業連携はそれほど容易ではないものの、懐徳堂記念会を通じて、様々な企業との繋がりが生まれていることは特筆すべきである。2005年度にも、柏木研究科長の働きかけにより、竹中工務店のご厚意によって、大阪大空襲によって焼失した重建懐徳堂（ちょうけんかいとくどう）の精密な復元模型が製作され、その寄贈式が文学研究科で行われた。そしてその式典においては、大阪大学総長より竹中工務店副社長に感謝状が手渡されるなど、大阪大学全体の広報活動に資するところ大であった。

中村元保梅花女子大学学長からは、学校やPTAといった団体から要望があれば、出張講義・出前講義のようなものを積極的にすべきだとの御指摘があつた。すでに文学研究科の評価・広報部門では、北摂三田高校や長田高校など、このような出張講義を年に何回か行っており、さらに広報部門で支援していきたいと考えている。またこの2年間で、高等学校などから、高校教師が学生たちを率いて文学研究科・文学部を見学させて欲しいという問い合わせも確実に増加しており、このような要望があれば積極的に応えていきたいと考えている。昨年度は大阪府立春日丘高等学校、石川県立金沢二水高等学校などの要請に応じて文学部見学会を催した。また、それとは別に文学部独自の見学会を催して、近隣の高等学校などに案内を送付し、模擬授業や質問コーナー、研究室見学などを毎年行ってもいる。

オープンキャンパスに関しては、上述のように文学研究科・文学部独自でも適宜行っているが、大阪大学の説明会（オープンキャンパス）の一環としても例年行っており、参加する高等学校生の数は年々増加傾向にあり、2005年度はついに一千人を大きく超過した。会場には最大級の収容人数を誇る大講堂を用意したにもかかわらず、全学生を収容しきれなかったことから、来年度以降は対策を講じる必要がある。オープンキャンパスにおける広報活動は充実しているが、問題点は大学院レベルでの見学会・説明会が行われていないことである。外部評価書には、教員への一層の負担増加を危惧して下さる意見もあり、限られた人的リソースの中で多大な広報活動を行うには限界があるものの、文学研究科が2005年度入試から導入している年二回入試（秋期入試と春期入試）の広報が周知徹底していないことを考えると、今後大学院レ

ベルでの説明会、広報活動の強化を考えざるを得ないであろう。

『文学部紹介』の位置づけも今後再検討する必要がある。そもそもこれは、受験生へのアピール、及び専門（専修）へ上がるときの学部1年生に対するアピールという側面を持つものであり、この意味では『文学部紹介』は一定の成果を挙げてきたと考えられる。しかし、社会に対しても大阪大学文学部の実態を広報する必要はあるわけで、2006年度版においてはそのような色彩をも帯びさせるために、「人物クローズアップ」という項目を新たに設け、文学部の教官の何人かを取り上げた。現在『文学部紹介』に比べて『文学研究科紹介』という大学院紹介の冊子は文字ベースの簡素なものになっており、先ほど言及した文学研究科広報の強化と合わせて、文学研究科の社会一般への広報についても考え直さなくてはならない。誰に何をアピールするかという切り分けをしっかりと見据えた上で、効率的な広報戦略を練っていく必要があるだろう。

広報活動のもう一つの柱はインターネットのウェブページによる広報である。ネット社会が確立した現在、ウェブ広報はあらゆる組織の中核になっており、文学研究科・文学部でも、数年間デザインを変更せず小規模な更新を行っていたホームページを一新することになった。よりスリムで分かり易いホームページを目指しており、従来の複雑な構造で情報を取り出しにくかったページの刷新を目指している。

評価あつての広報である。評価の結果は必ずしもプラスのものだけではなく、マイナス点は反省しなくてはならない。毛利三彌成城大学教授の指摘されるように、我々の取り組みの結果「失望感」もあつたはずで、プラスの側面のみを強調した歪んだ評価を行い、そのみを広報することがあつてはいけない。『年報2002』、『年報2004』などを踏まえて、「評価社会ではない日本に評価社会の方法を持ち込むことが難しい」にせよ、「日本における固有の評価のあり方」、さらに言えば「大阪大学文学部における固有の評価のあり方」を常に問題として意識しながら評価を行い、広報部門もそこにコミットして、誤った情報を喧伝しない、しかし正しい評価に基づいた文学研究科・文学部の実態を広く社会に広報していくことが大切だと思われる。そして、その重要性は今後ますます大きくなっていくものと考えてるのである。

ネットワーク部門

文学研究科・文学部ネットワークの問題点としては、発足当初から、人的資源、すなわち管理能力を備えた人材の不足という点にあった。この点を克服するために、一部の、多少なりともコンピュータやネットワークについての知識を持った教員グループが、ネットワーク整備・管理のイニシアティブを取りながら、理学部や基礎工学部などの大学院生を実質的なサーバ管理者としてアルバイト雇用する、という手法を取ってきた。この方式により、なんとか12年余りを乗り越えてきたというのが現状である。サーバのクラッシュやクラッキング、不正アクセスなど、いくつかの障害・事故などはあつたものの、さほど重要な危機にいたらなかったのも、これまで管理にあたってこられた管理者や教員の皆さんの努力のたまものというべきである。またそうであつたからこそ、外部評価書でも特段の注文等がなかったと解釈できるのでは

ないかと考える。

しかしながら、この方式にはやはりいくつかの根本的な問題がある。1)自らの研究が本分であるべき大学院生に、部局のサーバ管理という重い責務を追わせてよいかどうか。 2)アルバイト雇用という形態が、サーバ管理という職務と必ずしもマッチしない。 3)サーバ管理以外の業務では、教員グループに作業の負荷がかかってしまう。

3)については、致し方ないところもあり、直ちに改善の見通しは立たない。これを根本的に解決するためには、文学研究科のネットワーク保守を業務（の一部）とするスタッフを雇用するしかないが、現状では非現実的である。せめて、できるだけ特定の教員に過重な負担が掛からないよう、作業の整理と分担の方式を整えていきたいところである。

一方、1)、2)については、一定の解決の道が見えてきた。サーバの実質管理を担当してこられた基礎工学部の大学院生の方が、修了年次を迎えて退職されることを踏まえ、サイバーメディアセンターに相談したところ、センターがホスティングサービスを請け負うという運びとなった。この原稿執筆段階では、その移行作業の途上であるが、うまく運べば、平成18年度初頭をもって新サーバに移行が完了する予定である。これで、少なくともサーバの保守・管理については文学研究科の手を離れることになる。これは、より安全で安定したネットワーク管理を手に入れることができるということの意味するものであり、文学研究科にとっては望ましい方向へとステップアップできたことになる。

評価・広報室 室長 永田靖
副室長 大庭幸男
研究評価部門チーフ 福永伸哉
教育評価部門チーフ 根岸一美
広報部門チーフ 服部典之
ネットワーク部門チーフ 金水敏

第 3 部

外部評価資料

第1章 文学研究科・文学部の基礎的データ

1-1 学生数について

大阪大学文学研究科は、1998年に文化形態論、1999年に文化表現論の2つの専攻が設置され、大学院重点化が完了した。その結果、博士前期課程、博士後期課程ともに学生数が大きく変化した。

1. 博士前期課程

まず、前期課程の入学人数は、一般選抜及び外国人留学生特別選抜による入学人数がやや増加している一方で、社会人特別選抜による入学人数がやや減少しているが、いずれの年度でも募集人員（82名）をうまわっている。

表1 文学研究科(前期課程)の入学人数

年度	一般	社会人	外国人	計
2002	68	10	13	91
2003	73	8	13	94
2004	77	7	15	99

次に、学生数等については、休学者数、留年者数がともに減少しているものの学生数、修了者数はほぼ同じ水準で推移している。なお、休学者には相当数の海外留学生が含まれていることに留意していただきたい。

表2 文学研究科(前期課程)の学生数、休学者数、留年者数、修了者数

年度	学生数	休学者数	留年者数	修了者数
2002	227	31	50	91
2003	220	28	38	83
2004	230	17	37	85

2. 博士後期課程

博士後期課程では、一般選抜の入学人数が2004年度を見る限りかなり減少している一方で、外国人留学生は増加している。また、社会人選抜はほぼ同じ水準で推移している。いずれの年度でも募集人員（41名）を大きくうまわる入学人数を確保している。

表3 文学研究科(後期課程)の入学人数

年度	一般	社会人	外国人	計
2002	53	8	8	69
2003	60	6	7	73
2004	45	5	15	65

ただし、学生数、休学者数、退学者数は年度ごとに増加の傾向にある。これは、海外留学生や博士論文を執筆するために留年や休学をする学生が増えてきたことによると思われる。また、学位論文提出者数は年度平均して学生数の10%前後を推移している。

表4 文学研究科(後期課程)の学生数、休学者数、学位論文提出者数、退学者数

年度	学生数	休学者数	学位論文提出者数	退学者数
2002	294	63	29	34
2003	318	81	38	42
2004	321	76	26	57

(注)退学者には単位修得退学者をふくむ。

大学院研究生数については、2004年度に日本人の研究生が急増しているおり、総数でも若干の増加がみられる。

表5 文学研究科研究生数

年度	日本人	留学生	計
2002	12	4	16
2003	12	4	16
2004	20	2	22

3. 学部

学部では、一般入試による入学者数が定員（前期日程 125 名、後期日程 40 名、合計 165 名）を 10 名程度上回る数で推移しており、大きな変化はない。

表6 文学部の入学者数

年度	一般	外国人	計
2002	172	2	174
2003	178	2	180
2004	174	0	174

また、学生数も大きな変化はない。ただし、毎年度、休学者数が 5%前後、留年者数が 10%前後あるので、多少懸念される。

表7 文学部の学生数、休学者数、留年者数、卒業生数

年度	学生数	休学者数	留年者数	卒業生数
2002	783	36	79	182
2003	777	41	70	171
2004	773	35	64	150

学部研究生数については、日本人、留学生ともかなりの増減があるものの総数では大きく変化していない。

表8 文学部研究生数

年度	日本人	留学生	計
2002	15	15	31
2003	32	10	42
2004	15	23	38

1-2 外部資金の導入

近年、文学研究科では外部資金の導入が推奨されており、その役割はますます増大している。外部資金はさまざまな形で導入されており、文学研究科の教員が研究代表者になっているものだけでなく、研究分担者になっているものもある。これら全てを含むとかなりの数になるので、その全容の把握は容易ではない。ここでは、本研究科の教員が研究代表者になって取得している外部資金についてのみその概要を提示しておきたい。

1. 科学研究費

科学研究費（日本学術振興会の特別研究員のものも含む）取得については、件数、交付金額ともに順調に伸びている。特に、2004年度は件数、交付金額ともに前年度を超えており、その伸び率は科学研究費の予算総額の増加率を上回っている。

表9 取得された科学研究費の件数と金額変化およびその科研費予算総額との比較

年度	2002年度	2003年度	2004年度
件数	58	62	64
増減	1.00	1.07	1.03
金額(千円)	106,340	103,210	111,476
増減	1.03	0.97	1.11
科研費予算総額(億円)	1,703	1,765	1,830
増減	1.08	1.04	1.04

取得された内訳は、基盤研究(B)や基盤研究(C)が多い。今後より大規模な科研費の取得が求められる。

表10 取得された科研費の内訳

年度	2002年度	2003年度	2004年度
特定領域研究件数	0	0	0
同金額(千円)	0	0	0
基盤研究(A)	3	1	2
同金額(千円)	23,800	11,310	19,400
基盤研究(B)	10	12	13
同金額(千円)	30,200	40,100	47,000
基盤研究(C)	14	25	26
同金額(千円)	16,900	30,200	25,676

2. その他の外部資金

科学研究費以外に、21世紀COEプログラムの大型資金と各種財団からの助成金を含む外部資金がある。後者の外部資金の総額は年々増加している。

表11 21世紀COE

21世紀COEプログラム	合計交付金額(単位:千円)
平成14年度	¥106,000
平成15年度	¥164,000
平成16年度	¥110,200

表 12 補助金事業採択状況(文部科学省科学研究費補助金、21世紀COEを除く)

平成 14 年度 文学研究科

採択補助金事業名	採択件数	合計交付金額	備考
堤助教授研究助成金	1	¥1,900,000	
竹中教授研究助成金	1	¥650,000	
加藤助手研究助成金	1	¥500,000	
藤田教授研究助成金	1	¥250,000	
豪日交流基金助成	1	¥1,230,000	
文化財の効果的なデジタルコンテンツ化と	1	¥7,000,000	受託研究
(財)奈良・シルクロード博記念国際交流財団シルク	1	¥1,800,000	
合計	7	¥13,330,000	

平成 15 年度 文学研究科

採択補助金事業名	採択件数	合計交付金額
神林基金	1	¥1,000,000
キリスト教美術研究助成寄附金	1	¥1,000,000
玉井暲教授研究助成金(藤井基金)	1	¥3,000,000
財団法人国土地理協会学術助成金	1	¥800,000
財団法人河川環境管理財団河川整備基金助成金	1	¥1,000,000
サントリー文化財団共同研究助成	1	¥1,550,000
文部科学省国際シンポジウム開催経費	1	¥1,808,000
(財)奈良・シルクロード博記念国際交流財団シルク	1	¥1,800,000
研究教育環境の国際化推進事業	3	¥2,941,000
合計	11	¥14,899,000

平成 16 年度 文学研究科

採択補助金事業名	採択件数	合計交付金額
人文・社会科学振興プロジェクト研究事業	1	¥6,370,000
海野圭介教育研究助成金	1	¥594,000
入江幸男教育研究助成金	1	¥990,000
福永仲裁助教授研究助成金	1	¥891,000
新村出財団研究助成金	1	¥643,500
「懷徳堂文庫」貴重資料のデジタル・アーカイブ化に	1	¥2,881,500
大川情報通信基金研究助成	1	¥1,000,000
横井小楠遺稿および関係資料の書誌的研究	1	¥2,800,000
福永助教授研究助成金	1	¥900,000
研究教育環境の国際化推進事業	1	¥571,000
(財)大阪大学後援会	1	¥600,000
合計	11	¥18,241,000

1-3 21世紀 COE について

本研究科は人間科学研究科、言語文化研究科と共同で平成 14 年度からの 21 世紀 COE プログラムに応募し、採用された。概要は下記の通りである。

1. プログラム名

「インターフェイスの人文科学」(英語名: Interface Humanities)

2. 担当部局

文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科

3. 拠点リーダー

鷺田清一 (文学研究科教授。現在は大阪大学副学長)

4. 期間 (予定)

平成 14 年 10 月～平成 19 年 3 月

5. 交付金額

「1-2 外部資金の導入」表 11 参照

6. 連絡先

〒560-8532 豊中市待兼山町 1-5 大阪大学大学院文学研究科内
21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」事務局
電話: 06-6850-6716 FAX: 06-6850-6718
E-mail: coe_office@let.osaka-u.ac.jp

7. ホームページ

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/web>

第 3 部

外部評価資料

第2章 教員・院生研究活動データ(2004年度)

2-1 哲学 哲学史

組織としての研究活動(2004 年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	4	1	5	1	0	11

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	3	0	0	0	3

3. 2004 年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

- 津崎良典「フランスにおける高等教育改革覚書——高等師範学校 *Ecole normale supérieure* における LMD 改革を中心に——」大阪大学大学教育実践センター『大阪大学大学教育実践センター紀要』1, pp. 65-78, 2005/3
- 津崎良典「<精神の修練>としてのデカルト哲学(1)——「観念」の本有性と神のア・ポステリオリな実在証明——」『メタフュシカ』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), 35, pp. 37-48, 2004/12
- 中村修一「カント歴史哲学とグローバリゼーション」溝口宏平代表『哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション』課題番号 14310004, 平成 14 年度～平成 16 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2)), pp. 72-81, 2005/3/25
- 中村修一『はじめて学ぶ西洋思想』(「フィヒテ」の章担当), 村松, 小泉, 長友, 嵯峨編, ミネルヴァ書房, pp. 144-146, 2005/3/10
- 中村修一『『純粹理性批判』における「質的な単一性」概念』『フィヒテ研究』12, 晃洋書房, pp. 67-83, 2004/12/20
- 西田充穂「初期レヴィナスにおける存在論についての諸論考」『メタフュシカ』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), 35, pp. 27-35, 2004/12
- 前田直哉「フッサールの『世代発生的考察』について」『待兼山論叢(哲学篇)』38, pp. 33-4, 2004/12
- 前田直哉「超越論的現象学と世代発生的現象学」『メタフュシカ(別冊)』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), 35, pp. 137-144, 2004/12
- 森田邦久「科学理論の意味論的概念による物理学的方法論の分析」『科学哲学』37-2, 日本科学哲学会, pp. 119-132, 2005/2
- 森田邦久「ヘーゲルの労働概念」『人間会議』冬号, 宣伝会議, pp. 78-80, 2004/12
- Yoshinori TSUZAKI, "L'*habitus* scolastique et la vertu cartésienne," in *Revue de philosophie française*, Société franco-japonaise de philosophie, n° 9, pp. 93-102, 2004/9.

(2)口頭発表

中村修一「カントの定義論——『判明性』の数学論——」第29回日本カント協会大会, 京都大学, 2004/11/14

平光哲朗「運動からイマージュへ」日本現象学会, 東洋大学, 2004/11

平光哲朗「ベルクソンにおける物質の諸相」2004年秋季日仏哲学会, 東京大学, 2004/9

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

教員の研究活動(2004年度)

1. 上野 修 教授

1951年生。1982年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。文学修士(大阪大学)。大阪大学助手、山口大学助教授、同教授を経て、2004年4月から現職。専攻：哲学哲学史。

1-1. 論文

上野修「必然、永遠、そして現実性——スピノザの必然主義」『スピノザーナ』6, pp. 5-21, 2005/3

上野修「コギトの確実性——様相の観点から——」『メタフュシカ』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), 35, pp. 1-12, 2004/12

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

上野修「正義／力」「論理／信」「決定論／自由」「時間／意味」「個／責任」「まなざし／人間」『imidas 2005』, pp. 1198-1201, 2005/1

上野修「(ブックガイド)『エチカ』」『現代思想』32-11, pp. 48-51, 2004/9

1-4. 口頭発表

Osamu UENO: 'Faith and Reason in Spinoza's Tractatus Theologico-Politicus'. XIXth World Congress of the International Association for the History of Religions (IAHR) in Tokyo, 日本学術会議, 日本宗教学会主催, 2005/3/29

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

スピノザ協会・運営委員

2002年5月～2006年3月

西日本哲学会・運営委員

2002年12月～2005年12月

2. 入江 幸男 教授

1953年生。1983年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。文学博士(大阪大学)。大阪大学助手、大阪樟蔭女子大学講師、同助教授、大阪大学助教授を経て、2003年10月から現職。専攻：哲学哲学史。

2-1. 論文

入江幸男「グローバル化の中での社会問題と公共性」平成14年度～平成16年度科学研究費補助金・基盤研究(B)(2)研究成果報告書『哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション』(研究代表者：大阪大学大学教育実践センター教授・文学研究科教授(兼任) 溝口宏平), pp. 19-27, 2005/3

入江幸男「三つの「なぜ」の根は一つか」『メタフュシカ(別冊)』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), 35, pp. 59-68, 2004/12

入江幸男「相互知識はいかにして可能か」『アルケー』(関西哲学会), 12, pp. 54-67, 2004/7

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

入江幸男「後期フィヒテの『現象論』について」『フィヒテ研究』(日本フィヒテ協会), 12, pp. 4-12, 2004/12

2-4. 口頭発表

入江幸男「ボランティアから見た社会問題と公共性」、国立民族学博物館「運動の現場における知の再編」研究会にて発表, 2004/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

入江幸男 第一回フィヒテ協会研究奨励賞, 日本フィヒテ協会, 1995/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2004年度～2005年度、財団法人大川情報通信基金研究助成、代表者：入江幸男(研究分担者無し)

研究題目：コミュニケーションにおける相互知識の分析とその応用

助成金額：2004年度 500千円

2-7-2. 2004年度、海外先進教育研究実践支援プログラム、代表者：入江幸男、研究分担者：1名

研究題目：フィヒテ研究のための国際的連携構築

助成金額：607千円

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本フィヒテ協会・会長(任期3年)

2004年3月～現在

同上・賞選考委員

1998年11月～2004年11月

同上・編集委員

1993年11月～2004年11月

同上・常任委員

2000年11月～2004年3月

同上・賞選考委員長	1999年11月～2001年11月
日本哲学会・委員	2003年7月～現在
同上・編集委員	2001年7月～現在
国際ボランティア学会・理事	2002年11月～現在
同上・編集委員	1999年11月～現在
ヘーゲル研究会・論文審査委員	2000年10月～2001年10月

3. 舟場 保之 助教授

1962年生。1992年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学)。立命館大学嘱託講師を経て、2004年4月から現職。専攻：哲学哲学史。

3-1. 論文

舟場保之「ハーバーマスは十分に普遍主義的か」『哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション』(平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(B)(2)研究成果報告書), pp. 82-91, 2005/3

舟場保之「カント実践哲学のコミュニケーション論的転回へ向けて」『別冊情況 特集カント没後200年』(情況出版), pp. 201-211, 2004/12

舟場保之「応答可能性としての責任とカント」『日本カント研究5 カントと責任論』(日本カント協会), pp. 23-37, 2004/7

舟場保之「『本音主義批判』とコミュニケーション」『情況』(情況出版), pp. 102-108, 2004/5

3-2. 著書

舟場保之ほか, 村松, 小泉, 長友, 嵯峨編『はじめて学ぶ西洋思想』(ミネルヴァ書房), pp. 249-251, pp. 262-268, 2005/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

舟場保之「朝倉輝一『討議倫理学の意義と可能性』」(書評)『メタフシカ(別冊)』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), 35, pp. 145-152, 2004/12

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

4. 吉永 和加 助手

1968年生。1997年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学博士(大阪大学)。1997年4月から現職。専攻：哲学哲学史。

4-1. 論文

吉永和加「グローバリゼーションとデモクラシー——デリダにおける「差異の政治」——」『哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション』(平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))課題番号14310004), pp. 99-106, 2005/3

吉永和加「隔絶した自己と他者を繋ぐもの——サルトルにおける責任について——」『メタフィシカ』(大阪大学文学研究科哲学講座), 35, pp. 13-26, 2004/12

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-2 現代思想文化学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	0	1	0	0	1	2

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	0	0	0	0	0

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1) 論文

中野彰則「スピノザにおける「完全性」について——「健康」概念の再検討のために——」大阪大学医学研究科医の倫理学教室『医療・生命と倫理・社会』4, pp. 124-132, 2005/3

中野彰則「創造論と内在因としての実体——ピエール・ペールのスピノザ批判——」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 38, pp. 17-32, 2004/12

(2) 口頭発表

なし

(3) その他(書評・翻訳など)

なし

教員の研究活動(2004年度)

1. 溝口 宏平 教授

1946年生。1975年、京都大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学修士(京都大学)、文学博士(大阪大学)。大阪教育大学講師、同助教授、大阪大学教養部助教授、大阪大学大学院文学研究科教授を経て、2004年4月より大阪大学大学教育実践センター教授。専攻：哲学／倫理学。

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

溝口宏平編『哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション』科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書, p. 106, 2005/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

溝口宏平「西田幾多郎とデイルタイ——西田哲学と解釈学の出会いの可能性——」(招待講演), 西田・田辺記念講演会(京都大学文学部), 2004/6

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2002年度～2004年度, 基盤 B2, 代表者: 溝口宏平

課題番号: 14310004

研究題目: 哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション

研究経費: 2004年度 4,300千円

研究の目的:

現代社会における高度情報化と市場経済のグローバル化と現代哲学・思想文化の領域におけるさまざまな動向(生命倫理、環境倫理、情報倫理、あるいはジェンダー論、多文化主義等に関する研究の多面的展開)の関連を明らかにする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2. 須藤 訓任 教授

京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。大谷大学助教授、同教授を経て、2004年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻: 西洋近現代哲学

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

須藤訓任ほか(共著者: 岡崎文明, 杉田正樹, 加藤泰史, 小浜善信, 菊池伸二, 宮崎隆, 田中敏彦, 須藤訓任, 榊原哲也, 村井則夫, 平田一郎, 柏端達也, 古田智久, 監修者: 渡邊二郎, 編集: 哲学史研究会)『西洋哲学史観と時代区分』(担当論文: 学説と人格のあわい——「哲学史」の成立条件を求めて。), 昭和堂, pp. 265-311(総頁数 484(+xxvi)頁中 47頁), 2004/10

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

須藤訓任「リチャード・ウォーリン著『ハイデガーの子どもたち』を読む」『図書新聞』263, 図書新聞, 2004/9/11

2-4. 口頭発表

須藤訓任「人間において最善なところ」第57回関西哲学会課題研究発表「人間は特異な存在者か」2004/10/24

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本倫理学会年報編集委員・和辻賞選考委員

2003年9月1日～2005年8月31日

3. 望月 太郎 助教授

1962年生。1985年、国際基督教大学教養学部人文科学科卒業(教養学士)。1988年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程(修士課程)哲学哲学史専攻修了(文学修士)。1991年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程哲学哲学史専攻中退。文学博士(大阪大学、1997年)。1991年4月、徳島大学教養部講師。1993年4月、徳島大学総合科学部講師。1994年4月、東海大学文明研究所講師。1997年4月、東海大学文明研究所助教授。1998年4月、大阪大学大学院文学研究科助教授。2004年4月、大阪大学大学教育実践センター助教授。専攻：西洋近世哲学史／フランス哲学、高等教育論。

3-1. 論文

望月太郎「教育評価の国際的基準についての研究(1)——ユネスコ文書を手がかりにした哲学的探究 文脈と展望——」『大阪大学大学教育実践センター紀要』(大阪大学教育実践センター), 1(2004), pp.79-96, 2005/3

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

望月太郎 春季シンポジウム報告「啓蒙と反啓蒙」はじめに『フランス哲学・思想研究』(日仏哲学会), 9, p. 1, 2004/8

3-4. 口頭発表

望月太郎 東南アジア諸国における教育改革の現状から——SEAMEO-UNESCO 教育会議(2004)に参加して——(単), 大阪大学大学教育実践センター第1回大学教育セミナー「世界の大学の現状と今後の課題」2004/9/15

Taro MOCHIZUKI, Crisis of Academic Freedom(単), The International Conference, Managing Teacher Education for Excellence, July 11-14, 2004, Faculty of Education, Chulalongkorn University (Bangkok, Thailand), 2004/7/12

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 2004年度、海外先進教育研究支援プログラム(文部科学省)、代表者：望月太郎

研究題目：教育評価の国際的基準についての研究

助成金額：4,000千円

3-8. 学会役員等の引き受け状況

日仏哲学会・理事・編集委員長

2004年8月～現在

日仏哲学会・理事・編集委員

2001年8月～現在

4. 中橋 誠 助手

1968年生。1993年、神戸大学法学部法律学科政治コース卒業。1996年、大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士前期課程修了。2000年、大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士後期課程単位取得退学。2004年現職。専攻：現代思想文化学。

4-1. 論文

中橋誠「相互承認としての相互闘争——グローバリゼーション・ローカリゼーション問題における民族概念の一考察——」

『哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション』（平成14年度～平成16年度科学研究費補助金・基盤研究(B)(2)研究成果報告書『哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション』（課題番号：

14310004、研究代表者：大阪大学大学教育実践センター教授・文学研究科教授(兼任) 溝口宏平), pp. 63-71, 2005/3

中橋誠「アレーテアから把握される現象学」『倫理学年報』（日本倫理学会), 54, pp. 83-97, 2005/3

中橋誠「実存論的構成としての頽落」『メタフィシカ』（大阪大学大学院文学研究科哲学講座), 35, pp. 49-59, 2004/12

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

中橋誠「ハイデガーの思惟における感性的直観」日本哲学会, 2004/5

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-3 臨床哲学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	2	0	1	0	0	3

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	2	0	0	0	2

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

岸田智「他者から／他者へ——メルロ＝ポンティと他者——」『待兼山論叢(哲学篇)』38, pp. 49-63, 2004/12

桑原英之「何が具体的か?——SDにおける具体例の位置づけ」『臨床哲学』6, pp. 31-40, 2005/1

瀬川睦子, 原頼子「終末期看護実習における死生観構築と共感性育成の効果的指導」川崎医療福祉学会誌, 4-2, 2005/3

(2)口頭発表

原頼子, 瀬川睦子「看護大学生の終末期看護論授業前後の死に対する不安・態度の変化」日本看護研究学会地方学会, 第9回日本看護研究学会九州地方学会学術集会 くまもと県民交流館, 2004/11/13(『学術集会プログラム・抄録集』p. 30)

寺田敦子, 瀬川睦子, 原頼子「終末期における看護学生の実習修得度と共感性の関連」日本看護研究学会, 第30回に本看護研究学会学術集会, 大宮ソニックシティ, 2004/7/29 Journal of Japanese Society of Nursing Research(『看護研究内容要旨』p. 80)

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

教員の研究活動(2004年度)

1. 鷲田 清一 教授

1949年生。1977年、京都大学大学院文学研究科博士課程修了。1978年、関西大学文学部専任講師。1992年、大阪大学文学部助教授。1996年、大阪大学文学部教授。2004年、大阪大学副学長。医学研究科の「医の倫理学」教授を併任。専攻：哲学／倫理学。

1-1. 論文

鷺田清一「身体のクライシス」『大航海』53, 新書館, pp. 40-45, 2005/1

鷺田清一「ヒト胚利用の恩恵が、いかに多大でも、「倫理」をしのぐことにはならない」文藝春秋編『日本の論点 2005』
文藝春秋, 2004/ 11

鷺田清一「働くことの意味？」『倫理学研究』(関西倫理学会), 34, pp. 23-32, 2004/4

1-2. 著書

鷺田清一『ちぐはぐな身体』ちくま文庫, わ-8-1, 筑摩書房, 2005/1/10

鷺田清一『ことばの顔』中公文庫, わ-20-1, 中央公論新社, 2004/4/25

鷺田清一『教養としての「死」を考える』新書 y108, 洋泉社, 2004/4/21

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

鷺田清一, 湯沢英彦『クリスチャン・ボルタンスキー』朝日新聞朝刊, 2004/11/14

鷺田清一「福祉」の未来を見つめる格闘と葛藤●落合恵子『母に歌う子守唄』朝日新聞朝刊, 2004/10/31

鷺田清一「三角測量と強靱な視線が生む「語り」●川田順造『人類の地平から』『アフリカの声』『人類学的認識論のため
に』朝日新聞朝刊, 2004/9/19

鷺田清一「切迫感漂う亡き師の「総括」●熊野純彦『戦後思想の一断面——哲学者廣松渉の軌跡』朝日新聞朝刊, 2004/6/27

鷺田清一「伝わらない不安直視する「対話」●平田オリザ『地図を創る旅——青年団と私の履歴書』朝日新聞朝刊,
2004/6/13

鷺田清一「建築の「強さ」とことん検証の評論集●隈研吾『負ける建築』朝日新聞朝刊, 2004/5/30

鷺田清一「双児のころざし●鎌田實・高橋卓志『生き方のコツ、死に方の選択』集英社文庫, 解説, 2004/5

鷺田清一「現代社会憂う成熟した知性のささやき●チャールズ・テイラー『〈ほんもの〉という倫理』朝日新聞朝刊,
2004/4/18

1-4. 口頭発表

鷺田清一「看護と現象学」静岡県立大学, 静岡県立大学看護学部特別講義, 2004/11/20

Kiyokazu WASHIDA“D'autres visages du Japon”, Universite Marc Bloch, Hall Louis Pasterur, Forum 2004 de
l'universite d'Osaka a Strasbourg, 》Le Japon, d'autres visages 《, 2004/11/5

鷺田清一「聴くことは疲れるが、でも聴かなければならない——聴くことの意味」パシフィコ横浜, 第 20 回日本歯科医
学会総会, 2004/10/30

鷺田清一『「つなぐ」——むすぶ手、かよう心、人と人との暮らしづくり』「研究発表●専門と臨床のあいだ」「シンポジ
ウム●臨床の人間形成論の構築」(田中毎実・鳥光美緒子氏と), 横浜国立大学, 教育哲学会第 47 回大会, 2004/10/16

鷺田清一「鼎談●思いを抱えて(震災後 10 年)」(高木慶子・柳田邦男氏と), 神戸国際会議場, 第 47 回日本病院・地域精
神医学会神戸総会

鷺田清一「特別講演●ケアにおける専門性」名古屋国際会議場, 第 35 回日本看護学会(成人看護 I), 2004/10/1

鷺田清一「からだの現在」若里市民文化ホール(長野市), 日本体育学会第 55 回大会(社団法人日本体育学会), 2004/9/25

鷺田清一「教養としての「死」を考える」奈良市男女共同参画センターあすなら, 特別講座シリーズ●「ケアの文化」
の創造②(たんぼぼの家), 2004/8/22

鷺田清一「めいわくかけてありがとう」ぱ・る・るプラザ KYOTO, 第 29 回会近畿知的障害養護学校教育研究大会,(近
畿知的障害養護学校教育研究協議会), 2004/8/20

鷺田清一「高齢者の心の理解と心のケア」国立京都国際会館, 平成 16 年度近畿老人福祉施設研究協議会京都大会『施
設から地域への発信●新たなケアの方向性をさぐる』第 10 研究分科会「老いを問い直す」2004/7/27

鷺田清一「シンポジウム●健康の視点」仙台国際センター, 日本理学療法学会, 2004/5/28

鷺田清一「看護と哲学をつなぐもの」愛知医科大学, 愛知医科大学看護学研究科創立記念式典, 2004/5/22

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

鷺田清一 紫綬褒章, 内閣府, 2004

鷺田清一 桑原武夫学芸賞, 潮出版社, 2000

鷺田清一 サントリー学芸賞(思想・歴史部門), サントリー文化財団, 1989

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2002年度～2006年度 21世紀COEプログラム 代表者：鷺田清一

研究題目：「インターフェイスの人文学」

課題番号：機関番号 14401、整理番号 D-1

研究経費：2004年度 110,200千円

研究の目的：

環境危機、生命操作、医療と介護、教育、性のあり方、家族とコミュニティ、マイノリティ等をめぐって現代社会が抱え込むさまざまな困難な問題は、もはやかつてのような政治・経済レベルで対応できる問題ではなく、また特定の地域や国家に限定して処理しうる問題でもない。

文明の転換期にあって、これら文化の根幹に関わる諸問題は、文化への根源的な問いかけなくしては解決できない状況にある。その意味で、現代の社会問題は、人文学の視点をこそ強く必要としている。

人文学は、思想や芸術、さらには科学研究をもふくめて文化と歴史の総体を問題とするものでありながら、その研究はこれまで、国家や地域、さらには言語圏によって分割され、その縦割りの制度のなかで文献研究を中心的な方法として追求されてきた。しかし、「ひとつの文化」といわれるものも実際には、複数の文化の接触と越境、交錯と遮断のなかで生成し、流動する。とりわけ、複数文化の接触は近年、一方ではグローバル化の進行によって国家や地域の間でますます加速され、そのことでさまざまな摩擦を引き起こしつつあるとともに、他方でそれぞれの国家や地域の内部でも、民族間、あるいはマジョリティとマイノリティ、「官」と「民」、専門家と一般市民等のあいだでさまざまな文化的軋轢を顕在化させてつつある。いずれの局面でもコミュニケーションとディスコミュニケーションの様相はますます複雑になっている。そういう問題の複雑さに現在の人文学がアクチュアルに対応できていないとすれば、その原因は、国家や地域をある閉じた固定的な枠組みとするこれまでの人文学の考え方にある。

本プログラムは、文化の生成をつねに複数文化のインターフェイスの相対動的に見てゆく〈インターフェイスの人文学〉への、人文学の創造的変換を目的とする。具体的には、複数文化の激しい接触の中で変動する21世紀の社会を的確に捉えるために、人文学を、二つの新しい知、つまり、異なる複数文化の接触・交差・軋轢を、国家・地域横断的に捉える〈横断的な知〉と、文化の諸次元、とりわけ研究者と問題発生の現場、専門家と一般市民とを架橋する〈臨床的な知〉を核とするものへと構造変換するためのプログラムを設計する。このことで、複数文化の交錯のなかで発生するさまざまな社会問題にアクチュアルに対応できる新しい21世紀型の人文学がデザインされる。

1-8. 学会役員等の引き受け状況

京都府文化力創造懇話会委員・部会長	2003年10月1日～現在
京都創生百人委員	2003年10月1日～現在
(財)懐徳堂記念会	2003年8月1日～現在
京都市高齢者介護等調査研究事業研究主任	2003年7月1日～現在
京都帳寿すこやかセンター運営委員会委員	2003年7月1日～現在
京都賞選考委員会・専門委員	2003年4月1日～現在
2003国際クラフト展(伊丹市クラフト協会・工芸審査委員長)	2003年4月1日～現在
朝日新聞社書評委員書評委員	2003年4月1日～現在

痴呆ケア研究会代表	2003年4月1日～現在
関西倫理学会・編集委員	2002年11月1日～現在
(財)国際高等研究所・特別委員	2002年4月1日～現在
日本哲学会・委員	2001年6月1日～現在
同上・『哲学』編集委員	1999年6月1日～2003年5月31日
内閣府総合科学技術会議専門委員(生命倫理)	2001年4月1日～現在
日本現象学会・事務局長	2001年4月1日～2003年3月31日
日本顔学会・評議員	1997年1月1日～2003年3月31日
日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員	2000年8月1日～2002年7月31日

2. 中岡 成文 教授

1950年生。1973年、京都大学文学部哲学科卒。1978年、京都大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程単位修得退学。文学修士(京都大学)。1980年、福岡女子大学専任講師。1987年、大阪大学助教授。1996年9月、大阪大学教授。専攻：倫理学／臨床哲学。

2-1. 論文

中岡成文「「倫理なんて」という前に」『図書』664, pp. 12-15, 2004/8

2-2. 著書

中岡成文他『生命, 第1章講義の七日間——生命に肉薄する言葉』(岩波応用倫理学講義第1巻), 岩波書店, 2004/7

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

中岡成文「臨床哲学の実践と課題」日本哲学会第63回大会ワークショップ「哲学教育を考える」2004/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2004年度～2007年度, 科学研究費補助金基盤研究(B)(2), 代表者：中岡成文

課題番号：16320005

研究題目：新しい公共的対話モデルの有効性の検討

研究経費：2004年度 3,400千円

研究目的

研究代表者・分担者を中核とするチームによってすでに開発されつつある「対話コンポーネンツ」という公共的対話のモデルを多数回実践し、社会的争点について当事者たちが一定の相互理解や合意を達成するうえでそれがどの程度有効であるかを明らかにする。また、その知見をもとに、さらにモデルを改善し、試行する。

対話コンポーネンツという、3段階の公共的対話の方法論はこれまでいかなる国でも知られておらず、独創的であるといえる。これはたんなるディスカッション、意見交換ではない。第1段階では社会的な「争点」(たとえば先端科学技術の危険と可能性)について当事者たちがどんな具体的な「懸念と期待」をもっているかを幅広く探り出し、それを列挙する。第2段階では、当事者たちによる10人程度の小規模対話を何回か組織し、「懸念と期待」の底にある「原点」、すなわち基本的な問題点(たとえばそもそも「リスク」とは何か)をパーセプション(感じ方)のレベルにまで降りて対話参加者

が内省し、そこから「原点」についての合意を模索する。このモデル(または改善されたモデル)を利用することにより、市民参加に新しい局面が開かれると予想される。すなわち、たんに既存の利害得失をもとにした最大公約数的な合意ではなく、参加者各人としても発見があり、社会としても新たな方向性をもつ合意が可能となる。

1. ドイツ語圏やオランダ、イギリスなどでは、「ソクラティック・ダイアログ」(ソクラテスの対話、以下 SD)という少人数の哲学的対話方法論がすでに数十年来研究され、企業や教育、医療・看護・介護などの分野で市民を相手に実践されている。それを踏まえて、オーストリアの B・リティヒは「異種移植」の倫理的問題のアセスメントに SD を導入する研究(欧州委員会により採択)を 2002 年度より 2 年の予定で実施中で、2004 年 3 月までにはその報告が出る。我が国では唯一大阪大学で市民の参加する SD が 1999 年から 30 回近く実践され、その成果も評価・公表されている。本研究はこの実績に基づき、前述したドイツ語圏 SD の実践家たちとの交流および意見交換に支えられ、リティヒとの国際共同研究の側面をもちつつ遂行されるものである。

2. 遺伝子作物や原子力発電所などの争点をめぐる「コンセンサス会議」については、EU 圏の先行例を参考に我が国でも、小林傳司教授(南山大)や平川秀幸助教授(京都女子大)などの STS(社会・科学技術論)関係者、倫理学者が加わって幾度か試行されているが、それについての詳細な評価はこれまでに出不出されていない。本研究代表者はこの人々とも共同して、平成 14, 15 年度に文部科学省の科学技術振興調整費(科学技術政策提言)で「臨床コミュニケーションのモデル開発と実践」の調査研究を行い、本研究で利用する「対話コンポーネツ」のモデルを開発した。本研究は当該調査研究の成果を受けて発展させるものである。

3. 法曹の領域や環境問題、消費者問題における紛争解決の新たなシステムとして、アメリカに続き我が国でも ADR(裁判外紛争処理、「調停」とそれを担うミディエーター(調停人)の制度が注目を集めつつある。本研究は、我が国における ADR 研究および実践者の第一人者である稲葉一人氏(科学技術文明研究所)を分担者に加え、稲葉氏の調停人養成プログラム策定の経験をより幅広い領域で生かしてもらうことをねらっている。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 21 世紀 COE プログラム分担

2-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

3. 本間 直樹 講師

1970 年生。1998 年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士(大阪大学)。1998 年、大阪大学大学院文学研究科哲学講座助手。2000 年 4 月より現職。専攻：哲学／倫理学／臨床哲学。

3-1. 論文

本間直樹「対話を演ずる——「子どもの哲学のため」の二つの実践から」『臨床哲学』6, pp. 40-53, 2004/12

3-2. 著書

本間直樹(分担著執筆)中岡成文編『応用倫理学講義 1 生命』岩波書店, pp. 107-127, 2004/7

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

日本現象学会・委員

2001年4月～2003年3月

4. 紀平 知樹 講師

1969年生。1992年、立命館大学文学部哲学科卒。2000年、大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史(倫理学)専攻単位修得退学、大谷大学特別研修員。2002年、大阪大学大学院文学研究科助手。2003年、文学博士(大阪大学)。2004年、大阪大学大学院文学研究科講師。専攻：哲学／倫理学／臨床哲学。

4-1. 論文

紀平知樹「均された世界と生——自然科学と開発による生活世界の喪失」『哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション』(平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書 研究代表者 溝口公平), pp. 28-38, 2005/3

紀平知樹「フッサール」村松茂美, 小泉尚樹, 嵯峨一郎編『はじめて学ぶ西洋思想——思想家たちとの対話』ミネルヴァ書房, pp. 193-199, 2005/3

紀平知樹「持続可能な開発としてのエコツーリズム」田中朋弘, 柘植尚則編『ビジネス倫理学』ナカニシヤ出版, pp. 145-173, 2004/11

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

日本現象学会国際交流委員

2004年11月13日～2006年11月11日

2-4 中国哲学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	0	1	2	0	0	3

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	2	2	0	0	0	4

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

上野洋子 『夢占逸旨』外篇について 『待兼山論叢(哲学篇)』(大阪大学文学会), 38, pp. 65-78, 2004/12

佐野大介 「孝子義兵衛関連文献と懐徳堂との間 附翻刻」『懐徳堂センター報』(大阪大学文学研究科・文学部懐徳堂センター), 2005, pp. 145-179, 2005/2

佐野大介 『蒙養篇』諸本間の異同について 附校合記 『懐徳』(懐徳堂記念会), 73, pp. 53-69, 2005/1

(2)口頭発表

池田光子 「中井履軒における「心」と「四徳」」(名古屋大学・大阪大学 中国学研究交流会), 大阪大学, 2004/11

上野洋子 「關於《詩論》中的「民性固然」」(先秦思想暨出土文献国際青年学者学術研討会), 台湾大学, 2005/3

上野洋子 『夢占逸旨』と道家の夢理論——「真人不夢」を中心に」(道教学会), 大阪市立大学, 2004/12

佐野大介 「東漢三思想家的対孝的批判与《荀子》的孝的觀念」(先秦思想暨出土文献国際青年学者学術研討会), 台湾大学, 2005/3

(3)その他(書評・翻訳など)

池田光子 「懐徳堂文庫資料解題(22)『懐徳堂文庫の研究』」(大阪大学文学研究科), 2005, pp. 111-113, 2005/2

池田光子 「第一次新田文庫暫定目録(続)『懐徳堂センター報』」(大阪大学文学研究科・文学部懐徳堂センター), 2005, pp. 7-25, 2005/2

池田光子, 黒田秀教 「新出土資料関係文献提要(四)」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 35, pp. 49-55, 2004/6

佐野大介 「懐徳堂文庫資料解題(21)『懐徳堂文庫の研究』」(大阪大学文学研究科), 2005, pp. 107-110, 2005/2

矢羽野隆男, 湯城吉信, 井上了, 佐野大介, 池田光子, 黒田秀教, 上野洋子, 杉山一也 「中井履軒『昔の旅』翻刻訳註および解説」『懐徳堂センター報』(大阪大学文学研究科・文学部懐徳堂センター), 2005, pp. 7-25, 2005/2

上野洋子 「懐徳堂文庫資料解題(22)『懐徳堂文庫の研究』」(大阪大学文学研究科), 2005, pp. 115-121, 2005/2

草野友子「懷徳堂文庫資料解題(22)」『懷徳堂文庫の研究』(大阪大学文学研究科), 2005, pp. 122-124, 2005/2
黒田秀教「懷徳堂文庫資料解題(23)」『懷徳堂文庫の研究』(大阪大学文学研究科), 2005, pp. 114-114, 2005/2

教員の研究活動(2004 年度)

1. 湯浅 邦弘 教授

1957 年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学、大阪大学、1997 年)。北海道教育大学講師、島根大学助教授、大阪大学助教授を経て、2000 年 4 月現職。専攻：中国哲学／中国古代思想史／懷徳堂研究。

1-1. 論文

湯浅邦弘「ロシア軍艦ディアナ号と懷徳堂——並河寒泉の「攘夷」——」『国語教育論叢』14, pp. 151-163, 2005/3

湯浅邦弘「奈良 大阪 墨の道——古梅園蔵懷徳堂墨型について——」『懷徳』73, pp. 6-14, 2005/1

湯浅邦弘「上博楚簡『従政』の竹簡接続と分節について」『中国研究集刊』騰号(36), pp. 113-131, 2004/12

湯浅邦弘「上博楚簡『従政』と儒家の「従政」」『中国研究集刊』騰号(36), pp. 132-153, 2004/12

1-2. 著書

湯浅邦弘、竹田健二『懷徳堂アーカイブ 懷徳堂の歴史を読む』大阪大学出版会, 2005/3

湯浅邦弘『懷徳堂文庫の研究 2005』(大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書), 大阪大学大学院文学研究科, 2005/2

浅野裕一、湯浅邦弘『諸子百家〈再発見〉——掘り起こされる古代中国思想——』岩波書店, 2004/8

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

湯浅邦弘「体験懷徳堂 CD-ROM の制作と懷徳堂モニターの取り組み」『懷徳堂センター報 2005』pp. 1-6, 2005/2

湯浅邦弘「戦国楚簡研究関係 HP 紹介」『中国研究集刊』騰号(36), pp. 94-104, 2004/12

湯浅邦弘「人文学における共同研究と情報発信」『日本中国学会便り』2004 年第 1 号, pp. 4-5, 2004/4

1-4. 口頭発表

湯浅邦弘「大阪大学懷徳堂文庫のデジタルアーカイブ化」第 1 回文科省・知的資産のための技術基盤シンポジウム講演, 大阪大学豊中キャンパスサイバーメディアセンター豊中教育研究棟 7 階会議室, 2005/3

湯浅邦弘「孫子の兵法——勝者と敗者——」中京日本香港貿易協会講演, 名古屋国際ホテル, 2005/2

湯浅邦弘「懷徳堂と適塾——天保山の出会い——」大阪市立高等学校教育研究会社会科部会冬季研修会・講演会, 大阪大学中之島センター, 2005/1

湯浅邦弘「孫子兵法の継承と展開」関西日本香港協会主催チャイニーズ・マネジメント&マーケティング・スクール講演, 香港貿易發展局大阪事務所, 2004/11

湯浅邦弘「兵法——孫子」関西日本香港協会主催チャイニーズ・マネジメント&マーケティング・スクール講演, 香港貿易發展局大阪事務所, 2004/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

湯浅邦弘 大阪大学共通教育賞(2003 年度前期), 大阪大学, 2003/12

大阪大学中国哲学研究室(湯浅邦弘) 蘆北賞(2003 年度), (財)橋本循記念会, 2003/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本道教学会・理事	2004年度～現在
同上・評議員	2000年度～2003年度
懐徳堂記念会・運営委員幹事	2001年度～現在
懐徳堂研究会・代表	2000年度～現在
中国出土資料学会・理事	1999年度～現在

2. 辛 賢 講師

1967年、ソウル生。2002年、筑波大学大学院哲学・思想研究科博士課程修了。博士(文学)。日本学術振興会外国人特別研究員(筑波大学)を経て、2004年4月現職。専攻：中国哲学、漢代易学。

2-1. 論文

辛賢「荀爽の延熹対策について」『待兼山論叢(哲学編)』38, pp. 1-16, 2004/12

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

辛賢(書評)「池田知久他編訳『占いの創造力——現代中国周易論文集——』」『東方宗教』103, pp. 90-95, 2004/6

2-4. 口頭発表

辛賢「荀爽の延熹対策について」阪神中哲談話会(第365回, 茨木市民会館ユーアイホール), 2004/11

辛賢「上海楚簡『周易』について」戦国楚簡研究会(第21回, 於大阪大学会議室), 2004/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

辛賢 日本中国学会賞(哲学・思想部門), 日本中国学会, 2001/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-5 インド学・仏教学

組織としての研究活動(2004 年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	2	0	0	0	0	2

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	0	0	0	0	0

3. 2004 年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

大西啓一「Kumārabhūta 小考」『待兼山論叢(哲学篇)』(大阪大学文学会), 38, pp. 1-17, 2004/12
生野昌範「布薩と罪」『佛教史學研究』47-1, pp. 52-72, 2004/7

(2)口頭発表

なし

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

教員の研究活動(2004 年度)

1. 榎本 文雄 教授

1954年生。京都大学文学部卒、京都大学大学院文学研究科博士後期課程指導認定退学。文学修士(京都大学)、博士(文学、京都大学)。京都大学助手、華頂短期大学専任講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て、1999年8月現職。専攻：インド仏教学。

1-1. 論文

榎本文雄「仏教研究における漢訳仏典の有用性」『中國宗教文獻研究国際シンポジウム報告書』京都大学人文科学研究所, pp. 37-55, 2004/12

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

榎本文雄「仏教研究における漢訳仏典の有用性」中国宗教文献研究国際シンポジウム, 2004/11

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(C)、代表者：榎本文雄

課題番号：15520050

研究題目：初期仏教関係諸典籍の対応関係の研究

研究経費：2004年度 直接経費 1,300千円

研究の目的：

ゴータマ・ブッダを中心とした初期仏教研究は、東南アジアに伝播した南方上座部の伝えたパーリ語経典が主な資料となるが、漢訳の阿含経典が分量的にこの次に位置する。パーリ語仏典に示されたブッダの教説の内容には南方上座部独自の発展が含まれていると考えられるので、ブッダの直説に迫ろうとする時には他の部派の初期仏典との比較が不可欠である。諸部派の初期仏教文献を比較する対照表としては、赤沼智善『漢巴四部四阿含互照録』が70年以上も前に出版されている。しかし、この『漢巴四部四阿含互照録』はその名前からして漢訳阿含経典とパーリ語経典の対応が主体となっているため、特にチベット語資料などに遺漏が目立つ上に、当然のことながら以後に公表された諸インド語テキスト(主にサンスクリット断片)が収録されていない。また、経単位でなく、もっと小さな範囲、例えば韻文経典の場合は、各詩節ごとの対応関係も提示する必要がある。したがって、『漢巴四部四阿含互照録』は大幅な増広、むしろ根本的に作成し直す必要がある。そこで、本研究では、科学研究費の交付を希望する期限内で、この大部な『漢巴四部四阿含互照録』のできるだけ多くの部分を根本的に作成し直すことを目的とする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

東方学会・第29期評議員	2003年9月～2005年9月
仏教史学会・評議員	2003年11月～現在
インド思想史学会・理事	2003年4月～現在
パーリ学仏教文化学会・理事	1999年4月～現在
日本仏教学会・理事	1996年4月～現在
日本印度学仏教学会・理事	1996年4月～現在

2. 堂山 英次郎 講師

1972年生。大阪外国語大学外国語学部卒、東北大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。文学修士(東北大学)、博士(文学、東北大学)。京都大学人文科学研究所助手を経て、2004年4月現職。

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

堂山英次郎『リグヴェーダにおける 1 人称接続法の研究』大阪大学大学院文学研究科紀要(モノグラフ編), 45-2, 大阪大学, 2005/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

堂山英次郎(辞典項目担当):「ガンダーラ」, 「ゾロアスター」三木紀人・山形孝夫編『宗教のキーワード集』別冊國文学 57, 学燈社, 2004/12

2-4. 口頭発表

堂山英次郎【書評】N. Sims-Williams (ed.), *Indo-Iranian Languages and Peoples*. (Proceedings of the British academy 116), Oxford, 2002」中央アジア学フォーラム, 2004/12

堂山英次郎「ヴェーダ語(Vedic)の動詞研究における新段階」土曜ことばの会, 2004/7

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2004 年度～2006 年度、科学研究費補助金、若手研究 (B)、代表者：堂山英次郎

課題番号：16720014

研究題目：ヴェーダ語における接続法の研究——リグヴェーダを中心として——

研究経費：2004 年度 1, 100 千円

研究の目的：

本研究の目的は、ヴェーダ語(古インド語)の動詞組織のうち、話者の心的態度を表わす法(話法、叙法、ムード)の一つである接続法(英 *subjunctive*, 独 *Konjunktiv*)に焦点を当て、その統辞機能を包括的に分析・分類し、機能体系を明らかにすることである。対象とするのは、接続法が唯一生産的なカテゴリーとして機能するヴェーダ語最古層の文献、リグヴェーダ(RV)である。RV における接続法の全用例について語形を再チェックするとともに、動詞語根の構造、語幹の種類、人称、数といった語形自体が有する性質や、関係文、疑問文、複文などの文構造のタイプによって用例を分類し、それぞれにおける統辞機能(用法)を決定・分類することを主たる作業過程とする。更に、それら個々のデータの総合的な分析に基づき、接続法全体の機能体系に一定の理論的仮説を与える一方、その仮説を繰り返し個々の実例と照らし合わせることで、より実的な機能体系を構築することを目指す。最終的には、希求法や命令法といった叙法を始めとする他の動詞組織との比較によって、接続法の機能を、共時体として見た RV の動詞体系全体の中に位置付けることを研究の区切りとしたい。一方でまた、接続法の研究により、RV の詩人や祭官が神々と如何なる関係にあったかといった思想的背景の理解にも迫りたい。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本印度学仏教学会・評議員

2004 年 7 月～現在

印度学宗教学会・評議員

2004 年 6 月～現在

3. 河崎 豊 助手

1975年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程 2003年単位修得退学。博士(文学、大阪大学)。大阪大学助手、大阪大学文学部 COE 研究員を経て現職。専攻: インド学、初期ジャイナ教研究。

3-1. 論文

河崎豊「出征するジャイナ教在家信者」『印度学仏教学研究』53-1, pp. 436-432, 2004/12

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

河崎豊「sallekhanā 研究 ——特に初期仏典に現れる *sallekha* という語について」ジャイナ教研究会第 19 回研究会, 2004/9

河崎豊「ジャイナ教在家信者と戦争」日本印度学仏教学会第 55 回学術大会, 2004/7

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-6 日 本 学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	1	11	0	3	5	20

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	2	3	11	0	0	16

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1)単行本・論文

伊賀みどり「開業助産婦のライフヒストリー作成の実践——<いま——ここ>の語りをどのように構成するか」『日本学報』(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室), 24, pp. 137-148, 2005/3

石川浩士「「アイヌ語復興運動」を考える——『チサンケ ソンコ』の復刊によせて」『日本学報』(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室), 24, pp. 125-136, 2005/3

井濱葉月「眼病と目薬のゆくえ——「治療」概念から「爽快感」へ」『文化／批評』(文化／批評[cultures/critiques]編集委員会), 春季号, pp. 235-271, 2005/3

植野真澄「占領下日本の再軍備反対論と傷痕軍人問題」『大原社会問題研究所雑誌』(大原社会問題研究所), 550・551 合併号, pp. 1-16, 2004/9

金城正樹「成熟の夢——清田政信の叙述より共同性を再考する——」『日本学報』(大阪大学文学研究科日本学研究室), 24, pp. 25-44, 2005/3

崔博憲「自分に新しい名前をつけるために——李良枝、姜信子、そして民族——」『日本学報』(大阪大学文学研究科日本学研究室), 24, pp. 1-24, 2005/3

鈴木景「日本民族、同化、そして社会史へ——喜田貞吉に見る同一であること／差異があるということ——」『文化／批評』(文化／批評[cultures/critiques]編集委員会), 春季号, pp. 180-221, 2005/3

鈴木景「「濃淡」の内意——喜田貞吉の民族論における「日本民族の成立」」『日本学報』(大阪大学文学研究科日本学研究室), 24, pp. 107-124, 2005/3

宋英子「学校現場に取り残された在日朝鮮人教育の課題——子どもの意識調査の読み直しを通して——」『日本学報』(大阪大学文学研究科日本学研究室), 24, pp. 85-106, 2005/3

茶園敏美「おんたちを管理する法制度——花柳病予防法特例から性予防法まで——」『日本学報』(大阪大学文学研究科日本学研究室), 24, pp. 79-99, 2005/3

永岡崇「飯降伊蔵論——「おさしづ」と本席体制」『文化／批評』(文化／批評[cultures/critiques]編集委員会), 春季号, pp.

291-331, 2005/3

- 花森重行「消費財としての「歴史」／「フィクション」という思想」『現代思想』(青土社), 33-3, pp. 194-213, 2005/3
- 花森重行「歴史と反歴史との相克」『日本思想史研究会会報』(日本思想史研究会), 22, pp. 8-18, 2004/12
- 花森重行「「記憶」と「記録」の狭間で——梅棹忠夫の戦中と戦後をめぐって——」『待兼山論叢(日本学篇)』(大阪大学文学研究科), 38, pp. 25-61, 2004/12
- 花森重行「複数の「憲法感覚」へ向けて」『現代思想』(青土社), 32-12, pp. 136-150, 2004/10
- 花森重行「歴史に抗する「歴史」へ」『情況』(情況出版), 3-5-8, pp. 196-223, 2004/8
- 林葉子「娼婦運動家」論・再考——久布白落実と『婦人と日本』(1950-1965)』『日本学報』(大阪大学文学研究科日本学研究室), 24, pp. 63-84, 2005/3
- 日高由貴「「キリシタン」をめぐる記述——新村出と名づけえぬもの——」『日本学報』(大阪大学文学研究科日本学研究室), 24, pp. 79-99, 2005/3
- 兵頭晶子「「人格」概念と精神病学——日本近代における精神病の社会化過程をめぐる一考察——」『文化／批評』(文化／批評[cultures/critiques]編集委員会), 春季号, pp. 222-234, 2005/3
- 渡邊里紗「貞明皇后論——たった一人の「良妻」から、賢母・慈母たる「国母」へ——」『文化／批評』(文化／批評[cultures/critiques]編集委員会), 春季号, pp. 272-290, 2005/3

(2)口頭発表

- 伊賀みどり「病院出産の浸透と『自然』出産——開業助産婦のライフヒストリーより」日本民俗学会第56回年会, 園田学園女子大学, 2004/10/3
- 伊賀みどり「日本の助産院出産の戦後——出産・乳揉みの人類学序説——」日本文化人類学会第38回研究大会, 東京外国語大学, 2004/6/6
- 植野真澄「傷痍軍人・戦争未亡人・戦災孤児」『近代日本思想史研究会』立命館大学, 2005/3/9
- 植野真澄「軍事援護の戦時と戦後」史学会日本史(近現代)部会, 東京大学, 2004/11/14(『史学雑誌』113-12, p. 107)
- 植野真澄「白衣募金者一掃運動にみる傷痍軍人の戦後」15年戦争研究会, ピースおおさか, 2004/10/3(『15年戦争研究会会報』80, p. 2)
- 花森重行「思想を読む」日本思想史研究会春合宿, 立命館大学, 2005/3/16
- 花森重行「戦後思想史における歴史と主体の変容」日本思想史研究会夏合宿, 民宿「美吉野」2004/9/4
- 花森重行「植民地都市・上海——堀田善衛をめぐって」新植民地主義+都市, 立命館大学, 2004/7/16
- 花森重行「『綴方教室』の忘却／再発見」日本思想史研究会, 立命館大学, 2004/7/15
- 花森重行「亡国の民は亡国の歌を歌う」東アジア知識人会議, スユ+ノモ研究所(韓国・ソウル), 2004/5/2(『シンポジウム資料集』pp. 331-341)
- 日高由貴「水脈をさぐる」「文学史を読みかえる」研究会, 京都精華大学, 2005/1/29
- 日高由貴「「キリシタン」をめぐる記述——新村出と名づけえぬもの——」思想史・文化理論研究会, 京都国際交流会館, 2004/11/20
- 兵頭晶子「大正期の「精神」概念——大本教と『変態心理』の相剋を通して——」第19回国際宗教学宗教史会議世界大会, 品川プリンスホテル, 2005/3/26
- 兵頭晶子「精神医学史はなぜ怪異を語るのか」東アジア怪異学会定例会, 京都大学, 2005/2/20
- 兵頭晶子「精神病の日本近代」日本思想史研究会夏合宿, 民宿「美吉野」2004/9/4
- 兵頭晶子「「人格」概念と精神病学」懐徳堂研究会, 河合塾大阪校, 2004/8/21

(3)その他(書評・翻訳など)

- 伊賀みどり「家族研究の展望——『近代家族論再考』より」『日本学報』(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室), 24, pp. 49-54, 2005/3
- 伊藤遊「テレビドラマ・映画レビュー 描かれたオウム真理教団と「教祖」」『文化／批評』(文化／批評[cultures/critiques])

編集委員会), 春季号, pp. 91-99, 2005/3
ディミトリー, ザイツェフ「ロシアとオウム真理教——ドミトリー・シガチョフ被告へのインタビュー——」『文化／批評』(文化／批評[cultures/critiques]編集委員会), 春季号, pp. 105-108, 2005/3
花森重行「棘の先端」『現代思想』(青土社), 32-9, p. 258, 2004/8

教員の研究活動(2004 年度)

1. 川村 邦光 教授

1950 年生。1984 年、東北大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士(東北大学、1978 年)。天理大学文学部助教授、同教授を経て、1997 年 10 月現職。専攻：民俗学／宗教学。

1-1. 論文

川村邦光「生きる」関一敏・大塚和夫編『宗教人類学入門』弘文堂, pp. 114-124, 2004/12
川村邦光「祈りとしての宗教/信仰」『春秋』春秋社, 464, pp. 9-12, 2004/11
川村邦光「誰が死者を弔うか——弔い論序説」『岩波講座宗教 9 宗教の挑戦』岩波書店, pp. 19-38, 2004/7
川村邦光「鬮いと切腹の民俗」『芸芸別冊 武士道入門』河出書房新社, pp. 190-193, 2004/6

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

川村邦光「総合コメント」『第三回 神道の連続と非連続』21 世紀 COE プログラム 神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成神道・日本文化研究国際シンポジウム, 國學院大學日本文化研究所, 國學院大學, 2004/9

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2004 年度、基盤研究(B)(2)、代表者：川村邦光

課題番号：15320013

研究題目：近代日本における宗教とナショナリズム・国家をめぐる総合的研究

研究経費：2004 年度 3,400 千円

研究の目的：

本研究では、近代日本における、宗教と国家との関係を研究することを目的とする。国家の宗教政策が国民の信仰生活に対してどのような影響を及ぼしたのか、宗教がナショナリズムの形成においてどのように関与したのかが、2つの大きなテーマである。

今年度の研究課題は「国家神道体制」概念を検討し、それが国民の宗教生活をどのように組織化していったのかを、戦前・戦中における政府の神社政策、地域の神社や靖国神社・護国神社の動向を調査していくなかから明らかにしていくことである。

特に今年度は、昭和 15 年(1940)に举行された紀元 2600 年式典との関わりで、各地で行なわれた紀元 2600 年を記念する宗教的事業を文献研究を踏まえて現地調査し、宗教がナショナリズムの形成においてどのような役割を果たしたのかを

明らかにすることを目的としたい。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本宗教学会・評議員、理事

1999年9月～現在

2. 杉原 達 教授

1953年生。1975年京都大学経済学部卒業、1977年大阪市立大学大学院経済学研究科前期博士課程修了。博士(経済学)。1977年関西大学経済学部助手、1981年同専任講師、1984年同助教授、1991年同教授、1992年大阪大学文学部助教授、1997年同教授、1998年大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：日本学／文化交流史。

2-1. 論文

杉原達「日本と台湾、アジアの戦後史の闇」徐勝編『東アジアの冷戦と国家テロリズム』お茶の水書房, pp. 17-20, 2004/12

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

上田正昭, 姜尚中, 杉原達, 朴一(座談会)「歴史のなかの「在日」」藤原書店編集部編『歴史のなかの「在日」』藤原書店, pp. 11-88, 2005/3

2-4. 口頭発表

杉原達「コメント」政治経済学・経済史学会秋季学術大会・共通論題「労働のグローバル化と国家・地域——歴史と現状」早稲田大学, 2004/10

杉原達「猪飼野を語る」曹智鉉写真集『猪飼野』のつどい, 2004/4

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(C)(2)、代表者：杉原達

課題番号：15520401

研究題目：戦時期日本の中国人強制連行に関する歴史的研究

研究経費：2004年度 700千円

研究の目的：

本研究の目的は、第二次世界大戦期に行われた中国人強制連行に関して、その主要な産業である土木建築業については秋田県花岡と広島県安野、港湾荷役業については大阪港・新潟港・神戸港・七尾港・伏木港、そして炭鉱業については長崎県高島・端島・崎戸を、それぞれ主要な調査地として設定し、その全体像を歴史的に検討するところにある。

近年、中国人強制連行については、日本やアメリカで訴訟が提起される中、社会的注目を集めてきた。しかし、(1)連行時の中国での実態、(2)連行後の労働・居住実態、(3)帰国後の生活実態、(4)日本で死亡したり、帰国できなかった中国人の遺骨や行方の実態、(5)中国人強制連行の政策立案・展開過程、のそれぞれの具体的側面については、まだまだ学問的に明らかになっていないといえない。

申請者は、これまでの研究成果について杉原(2002)で一応のまとめを行なったが、それは一般書の制約を免れていない。そこでその成果をふまえた上で、上記5課題について、新たな聞き取り調査と更なる文献資料調査に基づいて総合的な学術研究を試みようとするものである。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

3. 荻野 美穂 教授

1945年生。神戸女学院大学文学部卒業。奈良女子大学大学院博士課程中退。人文科学博士(お茶の水女子大学)。奈良女子大学文学部、京都文教大学人間学部助教授を経て2000年より大阪大学大学院文学研究科助教授。2005年8月より現職。専攻：女性史／ジェンダー論。

3-1. 論文

荻野美穂「近代家族と生殖技術」『日本学報』(大阪大学文学研究科), 24, pp. 39-47, 2005/3

荻野美穂「戦後世界における家族計画とジェンダーの史的研究」(平成14年度～平成16年度科学研究費補助金研究成果報告書), p. 66, 2005/3

荻野美穂「ジェンダー論、その軌跡と射程」二宮宏之編『歴史はいかに書かれるか』岩波書店, pp. 189-215, 2004/6

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

Ogino, Miho, "Commentary" 『F-GENS』(お茶の水女子大学21世紀COEプログラム), 3, pp. 217-218, 2005/3

荻野美穂『『反射する当事者性』と身体の政治：〈女性〉にとって男性史とはなにか』(海妻径子との対談)『情況』11月号, pp. 120-139, 2004/11

荻野美穂訳, ジョーン・W・スコット著「改訂版への序文」第10章「ジェンダーと政治について再考する」『ジェンダーと歴史学』改訂版, 平凡社, pp. 9-18, pp. 402-442, 2004/10

荻野美穂「書評：Tiana Norgren, *Abortion before Birth Control: The Politics of Reproduction in Postwar Japan*」『人口問題研究』(国立社会保障・人口問題研究所), 60-3, p. 82, 2004/9

荻野美穂「シンポジウム・コメント」『F-GENS』(お茶の水女子大学21世紀COEプログラム), 創刊号, pp. 96-98, 2004/4

3-4. 口頭発表

荻野美穂「コメント」お茶の水女子大学COEプログラム「ロンダ・シービンガー講演会：Exotic Abortifacients: The Gender Politics of Plants in the Eighteenth-Century Atlantic World」2004/12

Ogino, Miho "Reproductive Technologies and the Feminist Dilemma in Japan", at the conference, "Going Too Far: Rationalizing Unethical Medical Research in Japan, Germany, and the United States", University of Pennsylvania, USA, 2004/4-5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2002年度～2004年度、基盤研究(C)(2)、代表者：萩野美穂

課題番号：14594006

研究題目：戦後世界における家族計画とジェンダーの史的研究

研究経費：2004年度 100千円

研究の目的：

本研究の目的は次の3点にある。

- 1)第二次世界大戦後の日本および国際的環境における家族計画推進の歴史的過程を明らかにする。
- 2)日本における家族計画の成功が、どのように他の国々、とりわけ開発途上国における家族計画の導入と実施に関連していたかを追究する。
- 3)日本および途上国における家族計画の導入と普及が、出産および避妊や中絶などの生殖コントロールの一番の当事者である女性に対してどのような意味を持ち、いかなる変化をもたらしたかを、ジェンダーと権力関係の視点から分析する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

日本女性学会・幹事

2004年6月～現在

4. 富山 一郎 助教授

1957年生。1989年京都大学大学院農学研究科博士課程修了。農学博士。1989年～1997年まで神戸市外国語大学助教授、その後現職。専攻：歴史学／文化理論。

4-1. 論文

富山一郎「経験が重なり合う」(ハングル)『当代批評』(センガグナム(韓国)), 2004年9月号, pp. 302-311, 2004/9

富山一郎「鎮圧の後」『情況』(情況出版), 5-9(第三期), pp. 126-131, 2004/10

富山一郎「帝国日本の人種および人種主義」『「人種」の概念と実在性をめぐる学際的基礎研究』平成13年度～平成15年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書(代表 竹沢泰子), pp. 187-194, 2004/5

4-2. 著書

富山一郎(共著), 竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う』人文書院, 2005/2(総頁数538頁、担当「南島人とは誰のことか」)

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

富山一郎 鼎談「保安処分の新展開」(崎山政毅・田崎英明と)『インパクション』141, pp. 72-83, 2004/5

富山一郎「溢れ出る情動と問答無用の暴力」『インパクション』141, 84-85, 2004/5

富山一郎「戦場の記憶」高等学校国語教科書『新現代文』筑摩書房, pp. 219-226, 2004/5

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

富山一郎 地域農林経済学会賞(奨励賞), 於愛媛大学, 1991/11/2

富山一郎 農業史研究会賞, 於東京大学, 1988/3/31

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

4-7-1. 21世紀 COE プログラム分担

4-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

5. 真鍋 昌賢 助手

1969年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。文学博士。国際日本文化研究センター中核的研究機関研究員を経て2002年現職。専攻：民俗学／メディア文化論。

5-1. 論文

真鍋昌賢「浪花節の「盛衰」と「新作」——近・現代の語り芸研究のための提案——」福田晃編『講座日本の伝承文学十卷 ヨミ・カタリ・ハナシの伝承世界』三弥井書店, pp. 251-264, 2004/8

真鍋昌賢「芸能のポピュラリティーと演者の実践——浪曲師・天龍三郎の口演空間の獲得史——」赤坂憲雄編『現代民俗誌の地平 2 権力』朝倉書店, pp. 135-152, 2004/6

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

真鍋昌賢「The Decline of Rokyoku: 1960s as a turning point in the history of popular culture in Japan'(Imagining Japan: A Symposium)Osaka University's Centre of Excellence's 21st century program(at Japanese Studies Centre Monash University, Australia), 2005/3

真鍋昌賢「志賀志那人の民衆娯楽思想を位置づけるために」志賀志那人研究会(主催者森田康夫)(於大阪市社会福祉研究センター), 2005/1

真鍋昌賢「浪曲師の声をめぐる期待の交差：1930－1940年代——演者の人生史に内在する視点から——」国立歴史民俗博物館共同研究「20世紀における戦争」2005/1

真鍋昌賢「「民俗芸術」概念の成立と展開」国際日本文化研究センター共同研究「出版と学芸ジャンルの再編成——近世から近代へ」2004/9

真鍋昌賢「1920－30年代における「民衆娯楽」としての浪花節」芸能史研究会8月例会, 2004/8

真鍋昌賢「「義士伝」から「乃木伝」へ——浪花節における武士道のゆくえ——」日本国際文化学会第三回全国大会, 2004/7

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2004年度～2006年度、若手研究(B)、代表者：真鍋昌賢

課題番号：16720210

研究題目：「民俗芸術」概念の再検討による芸術・娯楽の民俗学の可能性

研究経費：2004年度 1,800千円

研究の目的：

芸術・娯楽の民俗学の重要な基点となった雑誌『民俗芸術』の分析などにより、「民俗芸術」概念の歴史・社会的な位相、さらには芸術・娯楽というジャンルにこめられていた思想・方法を検討していく。特に以下の点に留意しつつ研究を進めていくことになる。(1)「民俗芸術」関係の基礎文献の収集(2)「民俗芸術」概念をそれ以前の「民衆芸術」概念と比較検討する。さらには「民俗」「土俗」に関心をもった知識人の関心全般のなかに「民俗芸術」を位置づける作業をはじめめる。(3)国際連盟の関連委員会である学芸協力国際委員会の執行機関である学芸協力国際学院が主催した「民俗芸術会議 Congress of Popular Arts」の概要を明らかにし、さらに民俗芸術の会(日本)がその会議に出席することでどのような影響を受けたのかを明らかにする。(4)両大戦間期におけるポピュラーな娯楽・芸術の事例研究をおこなう。対象は浪花節であり、オーディエンスの経験の幅を浪花節の間メディア的位相から検討する。(5)本年度は二回の研究会を開催し、芸術・娯楽の民俗学の可能性をひらかれた議論のもとで相対化することを目指す。(6)領域横断的な場で研究発表をおこない「民俗芸術」研究の意義を理論的に担保していく。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

比較日本文化研究会・運営委員

2004年12月～現在

2-7 日本史学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	5	4	0	1	2	12

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	23	18	1	1	43

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

飯沼雅行「朝鮮通信使・琉球使節通航時の綱引助郷——撰河両国を中心に——」『交通史研究』(交通史研究会), 54, pp. 23-56, 2004/4

大井喜代「明法勘文と関係史料の分析」(梅村喬編『平安時代における訴訟文書および関係史料の研究』第Ⅱ節, 平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書, 梅村喬, pp. 26-31, 2005/3

大井喜代「平安時代訴訟関係研究文献目録(稿)」(梅村喬編『平安時代における訴訟文書および関係史料の研究』第Ⅱ節, 平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書, 梅村喬, pp. 32-36, 2005/3

大田壮一郎『箕面市地域史料 30 中倉家文書目録』箕面市役所, 2005/3(共編著)

佐伯徳哉「第2部(1)銀山開発から盛期における鞆ヶ浦、温泉津・沖泊」『石見銀山街道 鞆ヶ浦・沖泊集落調査報告』島根県教育委員会, pp. 17-27, 2005/1

佐伯徳哉「第3部(1)鞆ヶ浦・沖泊地域の平面構造」『石見銀山街道 鞆ヶ浦・沖泊集落調査報告』島根県教育委員会, pp. 42-48, 2005/1

杉本弘幸「日本近代都市社会政策と「下層社会」研究の再構成——不良住宅地区・被差別部落・在日朝鮮人——」『新しい歴史学のために』(京都民科歴史部会), 256, pp. 14-26, 2005/3

杉本弘幸「府県社会事業行政における都市社会事業の構造と展開——京都府・京都市社会事業行政と財団法人京都共済会の関係構造をめぐって——」(財)世界人権問題研究センター『研究紀要』10, pp. 43-65, 2005/3

豊田裕章「平安宮の朝堂院と豊楽院の模型製作・展示・発表について——養護学校における総合的な学習の試み——」, 『2003年度の研究・実践 いばらぎ』 pp. 80-85, 2004/9

馬部隆弘「大阪府枚方市所在三之宮神社文書の分析——由緒と山論の関係から——」『ヒストリア』(大阪歴史学会), 194, pp. 94-121, 2005/3

馬部隆弘「戦国期毛利氏の領国支配における『検使』の役割」『ヒストリア』(大阪歴史学会), 192, pp. 77-108, 2004/11

馬部隆弘「城郭由緒の形成と山論——『津田城主津田氏』の虚像と北河内戦国史の実態——」『城館史科学』(城館史料

学会), 2, pp. 1-37, 2004/7

(2)口頭発表

- 飯沼雅行「幕府広域役負担基準としての村高——淀川右岸大塚組の綱引役への対応を中心に——」日本史研究会近世史部会, 機関紙会館 3F 日本史研究会事務所会議室, 2005/3/14
- 上田純「將軍九条頼経上洛についての一考察」日本史研究会中世史部会・大阪歴史学会中世史部会共催卒論報告会, 日本史研究会・大阪歴史学会, 大阪市立中央青年センター／大阪府大阪市, 2004/5/16
- 上田長生「19世紀日本の家と由緒——幕末維新期の天皇陵を素材に——」大阪歴史科学協議会 12月例会, 東淀川勤労者センター, 2004/12/12
- 上田長生「日本近世の由緒・系譜研究をめぐって」大阪歴史科学協議会 12月例会報告準備報告(前近代史部会・帝国主義研究部会合同部会), 大阪市立大学文化交流センター, 2004/11/16
- 上田長生「陵墓祭祀と村落祭祀——幕末維新期の飯豊天皇陵を中心に——」陵墓問題に関する検討会, 旅館大文字(奈良市), 2004/9/3
- 江副陽子「近世中後期畿内村落における刑事事件処理過程の一考察——在地代官・村役人層の動向を中心として——」大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, 大阪市立梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2004/9/10
- 太田光俊「小牧長久手の戦いにみる本願寺勢力による軍事的行動」大阪真宗史学研究会 3月例会, 2005/3/30
- 太田光俊「木造荘中世資料調査の成果について(戸木地区に関して)」中世都市研究会三重大会準備会, 久居市戸木巡検, 2004/11/20
- 太田光俊「木造荘中世資料調査の成果について」シンポジウム木造氏と上野遺跡, 久居市教育委員会, 2004/10/3
- 太田光俊「大阪歴史科学協議会大会報告二日目批判」大阪歴史科学協議会前近代史部会・帝国主義研究部会合同部会, 大阪市立梅田東生涯学習ルーム, 2004/8/30
- 尾島志保「1920年代における全国町村長会の歴史的的位置」日本史研究会近現代史部会・大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 機関紙会館 3F 日本史研究会事務所会議室, 2004/5/16
- 尾島志保「論評: 秋田茂「帝國的な構造的権力——イギリス帝国と国際秩序——」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 大阪市立西区民センター, 2004/4/7
- 小杉真之「2004年度大阪歴史科学協議会大会「近代アジアにおける『帝国』支配と地域」反省」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 2004/7/27
- 小杉真之「幕末期の朝議と天皇」日本史研究会近現代史部会・大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 機関紙会館 3F 日本史研究会事務所会議室, 2004/6/20
- 後藤敦史「論評: 山田朗「現代における〈軍事力編成〉と戦争形態の変化」大阪歴史科学協議会前近代史部会・帝国主義研究部会合同部会, 大阪市総合生涯学習センター／大阪府大阪市, 2005/1/31
- 杉本弘幸「日本近代都市社会政策における構造と市政・市会・地域——京都市を事例に——」日本史研究会近現代史部会, 機関紙会館 3F 日本史研究会事務所会議室, 2005/3/24
- 杉本弘幸「府県社会事業行政における都市社会事業の構造と展開——財団法人京都共済会を中心に——」(財)世界人権問題研究センター第2部近現代研究班例会, 世界人権問題研究センター, 2005/1/22
- 杉本弘幸「日本近代都市社会政策と「下層社会」研究の再構成——不良住宅地区・被差別部落・在日朝鮮人——」(財)世界人権問題研究センター第2部近現代研究班例会, 世界人権問題研究センター, 2004/5/22
- 田村正孝「2004年度大会共同研究報告準備会報告」日本史研究会中世史部会, 機関紙会館 3F 日本史研究会事務所会議室, 2004/4/25
- 豊田裕章「豊田期の大坂城について」城郭談話会, 大山崎ふるさとセンター, 2004/9/11
- 豊田裕章「藤原京の宮城と『周禮』(考工記)の國との対比——古代宮都の空間構成の再検討——」続日本紀研究会, アイーナ大阪, 2004/9/3
- 額田政男「書評: 山内晋次著『奈良平安期の日本とアジア』」大阪歴史科学協議会 5月例会, 東淀川勤労者センター, 2004/5/8
- 額田政男「書評: 山内晋次著『奈良平安期の日本とアジア』」大阪歴史科学協議会前近代史部会, 東淀川勤労者センター,

2004/4/28

- 橋本孝成「近世豪農の行動・意識の領域と境界」尾張藩社会研究会, 名古屋芸術大学, 2005/2/26
- 橋本孝成「畿内旗本知行所における大庄屋役とその役割」日本史研究会近世史部会, 機関紙会館 3F 日本史研究会事務所会議室, 2005/1/24
- 橋本孝成「絵図にみる居住地変化とその背景」山口研究会, 大阪工業大学, 2004/10/27
- 橋本孝成「『天明八年』萩城下絵図作成・修正年代について」山口研究会, 大阪工業大学, 2004/7/27
- 橋本孝成「大坂における『尾張藩社会』とその関係性について」大坂諸藩研究会, 関西大学, 2004/7/18
- 橋本孝成「近世の中西家とその活動」守口市文化財講座, 守口市中央公民館, 2004/7/17
- 橋本孝成「萩城下町絵図にみる家臣の居住地について」山口研究会, 大阪工業大学, 2004/6/30
- 橋本孝成「尾張藩大坂屋敷奉行の背景とその活動」日本史研究会近世史部会・大阪歴史学会近世史部会合同部会, 機関紙会館 3F 日本史研究会事務所会議室, 2004/4/26
- 平岡瑛二「論評：藪田貫「変わる近世史像」歴史学入門講座実行委員会勉強会, 歴史学入門講座実行委員会勉強会, 大阪市立東淀川勤労者センター／大阪府大阪市, 2005/3/29
- 廣川和花「歴評特集「ハンセン病と隔離の歴史を問う」に寄せて」大阪歴史科学協議会 3 月例会, 大阪市立今津会館, 2005/3/12
- 廣川和花「歴評特集「ハンセン病と隔離の歴史を問う」に寄せて」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 大阪市立大学文化交流センター, 2005/3/1
- 廣川和花「書評：脇村孝平著『飢饉・疫病・植民地統治——開発の中の英領インド——』」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, クレオ大阪西, 2004/4/28(※松岡弘之氏との共同報告)
- 松永和浩「『勘仲記』裏文書輪読」『勘仲記』裏文書の会, 名古屋大学, 2004/7/4
- 松永和浩「論評：市沢哲「中世王権論のなかの足利義満」(『歴史評論』649, 2004/5)」文殊の会, 京都大学, 2004/6/12
- 馬部隆弘「城郭政策比較試論——西国における『城督』を手がかりに——」第 21 回全国城郭研究者セミナー, 東北大学, 2004/7/31
- 馬部隆弘「城郭政策比較試論——西国における『城督』を手がかりに——」城郭談話会, 大山崎ふるさとセンター, 2004/7/10
- 吉田洋子「『後桜町天皇宸記』宝暦 13 年 11 月 27 日条前半 翻刻および参考資料」後桜町女帝宸記研究会, 後桜町女帝宸記研究会, 京都産業大学第 3 研究室棟 3 階会議室／京都府京都市, 2004/11/30(※野村玄氏・武田和也氏との共同研究報告)
- 吉田洋子「『後桜町天皇宸記』宝暦 13 年 11 月 12 日～15 日条 翻刻および参考資料」後桜町女帝宸記研究会, 後桜町女帝宸記研究会, 京都産業大学第 3 研究室棟 3 階会議室／京都府京都市, 2004/6/22(※野村玄氏・武田和也氏との共同研究報告)
- 吉永壮志「目代に関する基礎的考察——古代から中世における地方行政研究の一視角として——」続日本紀研究会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪／大阪府大阪市, 2005/3/18
- 吉永壮志「在庁官人の成立と展開——国司庁宣と留守所下文を中心に——」日本史研究会・続日本紀研究会共催卒業論文報告会, 日本史研究会・続日本紀研究会, ウイングス京都・セミナー室 B／京都府京都市, 2004/6/6

(3)その他(書評・翻訳など)

- 飯沼雅行「ミニシンポ質疑応答の要旨」『旧真田山陸軍墓地を考える』5, 特定非営利活動法人旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会, pp. 12-13, 2005/3
- 飯沼雅行「第 10 回見学会報告」『真田山』1, NPO 法人旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会, 2004/12
- 大井喜代「部会ニュース(古代史部会): 額田政男報告討論要旨」『日本史研究』(日本史研究会), 510, pp. 239-240, 2005/2
- 大井喜代「部会ニュース(古代史部会): 2003 年 4 月部会報告要旨」『日本史研究』(日本史研究会), 510, pp. 240-241, 2005/2
- 大田壮一郎「新刊紹介: 齋藤夏来著『禅宗官寺制度の研究』」『日本史研究』(日本史研究会), 507, pp. 91-92, 2004/11
- 太田光俊「部会ニュース(中世史部会): 永井隆之報告討論要旨」『日本史研究』(日本史研究会), 509, pp. 86, 2005/1

- 大根田康介「栗山圭子報告討論要旨(2004年度大阪歴史学会大会部会報告)『ヒストリア』(大阪歴史学会), 193, pp. 72-73, 2005/1
- 大根田康介「2003年12月例会彙報『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 178, pp. 63-64, 2004/11
- 串山まゆら「2003年11月例会彙報『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 177, pp. 50-51, 2004/6
- 小杉真之「2003年度『第19回歴史学入門講座』の記録『ヒストリア』(大阪歴史学会), 190, pp. 136-138, 2004/6
- 後藤敦史「歴史学入門講座参加記『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 176, pp. 51-53, 2004/4
- 佐伯徳哉「辞典項目執筆」 菌田稔, 橋本政宣編『神道史大辞典』吉川弘文館, 2004/7
- 杉本弘幸「第38回大会参加記『歴史評論』(歴史科学協議会), 659, pp. 109-110, 2005/2
- 杉本弘幸「書評:小林丈広編著『都市下層の社会史』『ヒストリア』(大阪歴史学会), 193, pp. 217-225, 2005/1
- 杉本弘幸「歴史叙述における専門性と学際性『グローブ』37, (財)世界人権問題研究センター, pp. 16-17, 2004/4
- 田村正孝「書評:桑田和明著『中世筑前国宗像氏と宗像社』『ヒストリア』(大阪歴史学会), 189, pp. 150-157, 2004/4
- 中野賢治「2004年度『第20回歴史学入門講座』の記録『ヒストリア』(大阪歴史学会), 194, pp. 162-164, 2005/3
- 西岡山奈仁子「部会ニュース(近現代史部会):2003年9月部会報告要旨『日本史研究』(日本史研究会), 511, pp. 129-130, 2005/3
- 額田政男「部会ニュース(古代史部会):2003年3月部会報告要旨『日本史研究』(日本史研究会), 510, pp. 238-239, 2005/2
- 額田政男「書評:山内晋次著『奈良平安期の日本とアジア』『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 178, pp. 59-61, 2004/11
- 橋本孝成『簡易図録「平成十六年度守口市文化財展『近世の刷物と庶民の文化』』守口市教育委員会, 2005/3
- 平岡瑛二「山下聡一報告討論要旨(2004年度大阪歴史学会大会部会報告)『ヒストリア』(大阪歴史学会), 193, pp. 168-170, 2005/1
- 廣川和花「2004年『建国記念の日』不承認 2.11大阪府民のつどい」記録『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 177, pp. 38, 2004/6
- 松永和浩「部会ニュース(中世史部会):2003年3月部会報告要旨『日本史研究』(日本史研究会), 503, pp. 102-103, 2004/7
- 馬部隆弘「史料紹介 一五～一六世紀の楠葉今中家文書——中世都市楠葉の構造分析序説——」『枚方市史年報』(枚方図書館市史資料室), 8, pp. 47-58, 2005/3
- 馬部隆弘「三浦家の言順堂と文化人グループ」『大阪春秋』(新風書房), 117, pp. 49-51, 2005/1
- 馬部隆弘「大阪府枚方市に残る織豊政権関係の史料四点」『織豊期研究』(織豊期研究会), 6, pp. 33-43, 2004/10
- 吉永壮志「江草宣友報告討論要旨(2004年度大阪歴史学会大会個人報告)『ヒストリア』(大阪歴史学会), 193, pp. 215-216, 2005/1

教員の研究活動(2004年度)

1. 猪飼 隆明 教授

1944年生。1974年、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士(京都大学、1971年)。熊本大学専任講師、同助教授、同教授を経て、1998年より現職。専攻：日本近現代史。

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

猪飼隆明「歴史科学協議会大会テーマの設定にあたって」「大会報告批判」『歴史評論』2004/3

1-4. 口頭発表

猪飼隆明[報告]「維新政権と横井小楠」全国横井小楠研究会大会, 福井県立図書館, 2004/9/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2004年度～2006年度、基盤研究(B)(一般)、代表者：猪飼隆明

課題番号：16320087

研究題目：横井小楠の遺稿及び関係資料の書誌的研究

研究経費：2004年度 2,800千円(3年間 6,600千円)

研究の目的：

横井小楠研究の新たな進展を目指して、これまでほとんどの研究がよりどころとしてきた山崎正董『横井小楠史料』及び伝記の新資料による再検討をする。さらに全集刊行の基礎作業とすること。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

歴史科学協議会・代表

2003年度就任、2004年度〈2005年11月まで〉

2. 梅村 喬 教授

1945年生。1974年、名古屋大学大学院文学研究科博士課程史学地理学専攻単位取得退学。文学博士(名古屋大学、1990年)。名古屋大学助手、愛知県立大学文学部助教授、同教授を経て、1999年4月、大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：日本史学／古代史。

2-1. 論文

梅村喬「『尾張国郡司百姓等解文』諸写本の校異と考察」『愛知県史研究』9, pp. 103-128, 2005/3

梅村喬「禁制と榜示木簡——袴狭遺跡出土禁制木簡について——」『日本歴史』676, pp. 1-16, 2004/9

2-2. 著書

梅村喬『平安時代における訴訟文書および関係史料の研究』(編著、科学研究費補助金・研究成果報告書), 2005/3

梅村喬『瀬戸市史・資料編三・原始・古代・中世』(共編著、瀬戸市), 2005/2

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2002年度～2004年度、基盤研究B、代表者：梅村喬

課題番号：14310156

研究題目：平安時代における訴訟文書および関係史料の研究

研究経費：2004年度 1,800千円

研究の目的：

平安時代中後期における訴訟と紛争処理の実態を分析するため、法曹官人の答申(明法勘文)を中心に史料収集を行い、太政官体制下の実務組織の解明に努める。併せて10世紀前期以降、約1世紀にわたって百姓愁訴として拡大した民衆行動が政務にいかなる影響を及ぼしたかを考察する。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

歴史科学協議会・常任委員

2003年9月～現在

大阪歴史科学協議会・委員長

2003年6月～現在

3. 平 雅 行 教 授

1951年生。1981年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。文学博士(大阪大学)。京都橘女子大学、関西大学、大阪大学助教授を経て1996年1月より現職。専攻：日本中世史／古代中世仏教史。

3-1. 論文

平雅行「殺生禁断と殺生罪業観」脇田晴子、コルカット、平雅行編『周縁文化と身分制』思文閣出版, pp. 240-268, 2005/3

平雅行「中世寺院の暴力とその正当化」『九州史学』140, pp. 57-71, 2005/2

平雅行「神仏と中世文化」歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座 第4巻 中世社会の構造』東京大学出版会, pp. 167-195, 2004/9

平雅行「青蓮院の門跡相論と鎌倉幕府」河音能平・福田榮次郎編『延暦寺と中世社会』法蔵館, pp. 90-150, 2004/6

3-2. 著書

脇田晴子、コルカット、平雅行共編『周縁文化と身分制』思文閣出版, 2005/3

平雅行『中世寺院の暴力とその正当化』科学研究費補助金基盤研究C(2)研究成果報告書, 2005/3

平雅行, 平松令三『真宗史二』本願寺維持財団, 2005/1

平雅行『真宗史一』本願寺維持財団, 2004/9

平雅行ほか『日本史B 指導資料』実教出版株式会社, 2004/4

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

村井章介, 平雅行「はじめに 日本史講座4」歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座 第4巻 中世社会の構造』東京大学出版会, pp. 5-10, 2004/9

3-4. 口頭発表

平雅行「来世観の変容と天皇家の葬送」死と生の習俗をめぐる比較史研究, 2004/12

平雅行「若き日の親鸞」第12回真宗教学学会講演会, 真宗大谷派・真宗教学学会, 2004/11

平雅行「中世の神国思想と仏教」宗教史研究会例会, 2004/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平雅行 大阪大学共通教育賞, 大阪大学, 2003/12

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2002年度～2004年度、基盤研究(C)(2)、代表者：平雅行

課題番号：14510359

研究題目：中世寺院の暴力とその正当化

研究経費：2004年度 600千円

研究の目的：

本研究は、暴力を素材に、日本の中世寺院や中世仏教の特質を探ることを目的とする。この目的を達するため、本研究は第一に、中世寺院が駆使した暴力の特質を明らかにしたい。特に軍事的武力において武士との差異を確認できるか、検討したい。

第二に、殺人や暴力を正当化する論理を解明する。寺院は個別利害の追求の過程で暴力を行使したが、しかし他方では仏教は慈悲や救済の普遍性をタテマエとしている以上、暴力を行使するには、救済の普遍性との亀裂を糊塗・隠蔽する言説が必要となってくる。

第三に、寺院の暴力に対する俗権力の対応とその歴史の変遷を明らかにしたい。中世の世俗権力が寺社の暴力を禁止した段階から、それを容認・肯定してゆく歴史的過程とその原因を明らかにする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 21世紀COEプログラム分担

3-8. 学会役員等の引き受け状況

史学会・評議員	1999年11月～現在
仏教史学会・評議員	1999年10月～現在
日本宗教史懇話会・呼びかけ人代表	1999年8月～現在
史学研究会・評議員	1990年5月～現在
懐徳堂記念会運営委員会・幹事	1996年6月～現在
日本歴史学協会・委員	2000年7月～2005年6月
大阪歴史学会・特別委員	2000年6月～2005年6月
日根野を考える会・代表	2001年11月～2005年6月
大学設置・学校法人審議会専門委員	2004年7月～2005年3月
同上	2003年4月～2004年3月
科学研究費委員会・専門委員	2003年1月～2004年12月

4. 村田 路人 教授

1955年生。1977年、大阪大学文学部史学科卒業。1979年、大阪大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程修了。1981年3月、大阪大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程中途退学。文学博士(大阪大学、1994年)。大阪大学文学部助手、京都橘女子大学文学部専任講師、同助教授を経て、1996年4月、大阪大学文学部助教授。1999年4月、大阪大学大学院文学研究科助教授。2002年4月、大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：日本近世史。

4-1. 論文

村田路人「寛永後期北河内地域の触と触留帳——『河内国交野郡藤坂村寛永十六～二十年触留帳』の紹介を中心に——」

『枚方市史年報』8, 枚方図書館市史資料室, pp. 1-18, 2005/3

村田路人「近世諸権力の位相」歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座第6巻近世社会論』東京大学出版会, pp. 67-98,

2005/2

4-2. 著書

服部敬, 村田路人ほか『大阪狭山市史第5巻 史料編狭山池』大阪狭山市, 2005/3

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

村田路人「宝永元年の大和川付け替えと大坂」大阪市立大学大学院文学研究科 COE/重点研究共催シンポジウム「水の都市文化」(大黒俊二, 樋脇博敏, 和栗珠里, 見市雅俊, 熊遠報, 村田路人), 2005/3

村田路人「宝永元年大和川付け替えの歴史的意義」大和川水系ミュージアムネットワーク記念シンポジウム「大和川付け替え300年、その歴史と意義を考える」(中九兵衛, 村田路人, 小谷利明, 市川秀之, 八木滋, 黒田淳, 安村俊史, 西田敬之, 矢内一麿), 2004/11

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(C)(2)、代表者：村田路人

課題番号：15520402

研究題目：幕府上方支配における享保改革の研究

研究経費：2004年度 直接経費 600千円 間接経費 0円

研究の目的：

享保期、上方における幕府支配機構のありかたに変化が見られることは、これまでもある程度知られていたが、「幕府上方支配における享保改革」という観点から、享保改革の一環としての機構改革を明確に意識しつつ、その変化をとらえた研究はない。また、従来享保期の変化として明らかになっているものも、京都町奉行および大坂町奉行の裁判管轄地域の変更など、ごく一部にすぎない。本研究は、享保期における幕府上方支配機構の諸変化を総合的に把握するとともに、それを享保改革の一環として位置づけようとするものである。なお、上方における享保改革を考察するには、元禄期における幕府上方支配機構の再編を視野に入れる必要があり、その点にも留意したい。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

大阪歴史学会・事務局長

2002年6月～2004年6月

大阪歴史科学協議会・編集委員長

2000年6月～2002年6月

5. 北泊 謙太郎 助手

1971年生。1995年、大阪大学文学部史学科国史学専攻卒業、1997年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程(史学専攻、専門分野：日本史学)修了、2001年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(文化形態論専攻、専門分野：日本史学)単位修得退学。修士(文学、大阪大学)。大阪大学大学院文学研究科ティーチング・アシスタント(1997年6月～1998年2月)。2001年より現職。専門分野：日本史学／日本近現代史。

5-1. 論文

なし

5-2. 著書

北泊謙太郎(共著者：奥村弘，李東彦，河島真，森下徹，三村昌司，印藤昭一)，三田市総務部総務課市史編さん担当編，『三田市史 第5巻 近代資料I』三田市，2005/3

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

北泊謙太郎「書評：一ノ瀬俊也著『近代日本の徴兵制と社会』」『歴博』(国立歴史民俗博物館)，129，p. 28，2005/3

北泊謙太郎「第38回大会参加記(2004年度歴史科学協議会大会)」『歴史評論』(歴史科学協議会)，659，p. 110，2005/3

北泊謙太郎「共同研究報告 近現代史部会大会報告批判(2003年度日本史研究会大会報告批判)」『日本史研究』(日本史研究会)，502，pp. 65-68，2004/6

北泊謙太郎「都市部におけるフィールドワークをめぐる——「大阪天満宮史料閲覧と天満寺町ウォーク」参加記——」『歴史科学』(大阪歴史科学協議会)，177，pp. 45-48，2004/6

5-4. 口頭発表

北泊謙太郎「問題提起：地域史研究の方法と思想——三つの地域での実践から——」大阪歴史科学協議会創立40周年記念大会報告，大阪歴史科学協議会，2004/6

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

大阪歴史科学協議会編集委員長

2003年6月～現在

歴史科学協議会全国委員

2003年6月～現在

2-8 東洋史学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	2	2	4	1	2	11

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	3	7	4	1	0	15

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

笠井幸代 “Ein Kolophon um die Legende von Bokug Kagan.” 『内陸アジア言語の研究』(中央ユーラシア学研究会), 19, pp. 1-27, 2004/7

坂尻彰宏 「2003年の歴史学界——回顧と展望——内陸アジア1」 『史学雑誌』(史学会), 113-5, pp. 272-276, 2004/5

坂本和子 「織物にみるシルクロードの東西交流」 『シルクロード学研究叢書』10, 奈良, シルクロード学研究センター, pp. 1-17, 2005/2

坂本和子(共著) 『古代オリエント事典』 岩波書店, pp. 152-156, pp. 210-212, 2004/12

坂本和子 "Two Fragments of Luxury Cloth Discovered in Turfan: Evidence of Textile Circulation from West to East", (eds.) D. Durkin-Meisternst and Others, *Turfan Revisited-The First Century of Research into the Arts and Cultures of the Silk Road*, Dietrich Reimer Verlag, Berlin, pp. 297-302, 2004

佐藤貴保 「西夏と黒河流域」 『オアシスプロジェクト会報(総合地球環境学研究所)』 5-1, pp. 16-23, 2005/3

桃木至朗, 佐藤貴保 「第2回全国高等学校歴史教員研修会」 『インターフェイスの人文学 世界システムと海域アジア交通 2004年度報告書』 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-81, 2005/2

佐藤貴保 「十二世紀後半における西夏と南宋の通交」 『待兼山論叢(史学編)』 39, pp. 1-24, 2004/12

佐藤貴保 「シルクロード出土文献の現物調査」 『Interface Humanities』 04, 大阪大学大学院文学研究科 「インターフェイスの人文学」 研究開発委員会, pp. 28-29, 2004/7

鈴木宏節(共著) *Preliminary Report on Japan - Mongolian Joint Archaeological Expedition "New Century Project" 2003*. Kokugakuin Univ. / Niigata Univ. / Institute of Archaeology Mongolian Academy of Science. [——日本・モンゴル共同「新世紀プロジェクト」2003年度調査概報——, 2004/5]

早瀬晋三, 岡本弘道, 蓮田隆志, 大坪加代, 中井潤子(編): 『東南アジア史学会関西例会通報総集編』 18(2003年度版), 東南アジア史学会関西例会, 2004/5

(2)口頭発表

- 赤木崇敏「帰義軍時代沙州オアシスの社会秩序」中央アジア学フォーラム, 大阪大学, 2004/12/18
- 大坪慶之「清末、清朝中央の外交政策決定過程」第18回明清史夏合宿, 山形県山形市, 2004/8/2
- 坂尻彰宏「論文批評: 榮新江「再論敦煌藏経洞の宝物——三界寺与藏経洞——」」中央アジア学フォーラム, 神戸市外国語大学, 2004/8/7
- 佐藤貴保「西夏と黒河流域」オアシスプロジェクト研究会, 総合地球環境学研究所, 2005/3/30
- 佐藤貴保「西夏皇帝の側近集団——西夏語・漢語文献からの復原——」東洋史研究会大会, 2004/11/3(発表要旨: 『東洋史研究』63-3, pp. 162-163, 2004/12)
- 佐藤貴保「西夏と黒河流域」オアシスプロジェクト水曜会, 総合地球環境学研究所(京都市), 2004/7/7
- 鈴木宏節「突厥称号研究序説——中央ユーラシア遊牧国家史上のタルカン——」第5回遼金西夏史研究会大会, 新潟県新潟市, 2005/3/20
- 蓮田隆志 "Seeing Mainland Southeast Asian Experiences from the Early Modern Empire Perspective". Panel 3-6: Critical Dialogues between Maritime Asian Studies and the World-System Theory: The "Early-Modern Empire" Concept from the Viewpoint of Asian History. The 18th IAHA Conference, 8 Dec. 2004, Academia Sinica, Taipei.
- 蓮田隆志「東南アジア史からみた《東アジア近世帝国》」山下範久『世界システム論で読む日本』拡大書評会(科研「近代世界システム以前の諸地域システムと広域ネットワーク」研究会〈代表桃木至朗教授〉), 大阪大学, 2004/10/27
- 蓮田隆志「『華人の時代』と近世北部ベトナム: 1778年の越境事件を素材として」アジア民衆史研究会 2004年度第3回研究会, 早稲田大学, 2004/10/9
- 蓮田隆志 "Khao cuu lai ve su thanh lap nha Le Trung Hung". Hoi thao khoa hoc quoc te lan thu II ve Viet Nam hoc "Viet Nam tren duong phat trien va hoi nhap: Truy en thong va hien dai". 15 July 2004, TP HCM. [「中興黎朝の成立再考」第2回ベトナム学国際会議「ベトナム: 発展・開発と統合への道」2004/7/15, ホーチミン市]
- 蓮田隆志「ベトナムの農村から(1)(2)」追手門学院大学文学部「アジア文化論 I」2004/5/19-26
- 向正樹「忽必烈時代の朝貢与元朝の南海信息」「元代社会文化暨元世祖忽必烈」国際学術研討会, 中国・南開大学(天津), 2004/8/21-22
- 山本明志「モンゴル時代の蔵漢交通」第41回日本アルタイ学会(野尻湖クリルタイ), 長野県信濃町, 2004/7/18(発表要旨『東洋学報』86-3, p. 140, 2004/12, 「彙報」所載〈澁谷浩一氏執筆〉)
- 山本明志「書評: Igor de Rachewiltz, *The Secret History of the Mongols: A Mongolian Epic Chronicle of the Thirteenth Century. Translated with a historical and philological commentary*. 2 vols.(Brill's Inner Asian Library, Vol.7)」中央アジア学フォーラム, 大阪大学, 2004/4/3

(3)その他(書評・翻訳など)

- 大坪慶之「(新刊紹介)陳捷『明治前期中学術交流の研究』」『史学雑誌』113-7, pp. 121-122, 2004/7
- 梶原真「(新刊紹介)松田吉郎『明清時代華南地域史研究』(汲古叢書 37)」『史学雑誌』113-7, pp. 119-120, 2004/7
- 沖田道成, 加藤聡, 佐藤貴保, 高橋文治, 向正樹, 山尾拓也, 山本明志「『烏臺筆補』訳註稿(2)」『内陸アジア言語の研究』(中央ユーラシア学研究会), 19, pp. 109-155, 2004/7

教員の研究活動(2004年度)

1. 森安 孝夫 教授

1948年生。1972年、東京大学文学部東洋史学科卒。1975年、東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻修士課程修了。1981年、東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻博士課程単位修得退学。1982年、金沢大学文学部助教授。1984年、大阪大学文学部助教授。1994年、大阪大学文学部教授。1998年、大阪大学大学院文学研究科教授。博士(文学、大阪大学)。専攻: 東洋史学/中央ユーラシア史/敦煌学/トゥルファン学。

1-1. 論文

森安孝夫「亀茲国金花王と硝砂に関するウイグル文書の発見」『三笠宮殿下米寿記念論集』東京：刀水書房, pp. 703-716, 2004/11

Takao MORIYASU From Silk, Cotton and Copper Coin to Silver. Transition of the Currency Used by the Uighurs during the Period from the 8th to the 14th Centuries. D. Durkin-Meisterernst / S. Raschmann / J. Wilkens / M. Yaldiz / P. Zieme (eds.), *Turfan Revisited -- the First Century of Research into the Arts and Cultures of the Silk Road*, Berlin : Dietrich Reimer Verlag, pp. 228-239, 2004/5

1-2. 著書

Takao MORIYASU *Die Geschichte des uigurischen Manichäismus an der Seidenstrasse. --- Forschungen zu manichäischen Quellen und ihrem geschichtlichen Hintergrund ---*. Übersetzt von Christian Steineck, (Studies in Oriental Religions 50), Wiesbaden : Harrassowitz Verlag, xix + 292 p., 2004/12

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

森安孝夫「中央アジア・シルクロードと中国史」『東洋史からアジア史へ——変わる世界史、広がるアジア——』(明治大学文学部特別企画シンポジウム報告), 明治大学文学部, pp. 3-6, 2005/3

森安孝夫「シルクロード「学」へのまなざし」NHK「新シルクロード」プロジェクト編『NHKスペシャル 新シルクロード 1 楼蘭・トルファン』日本放送出版協会, pp. 196-210, 2005/2

1-4. 口頭発表

森安孝夫「中央アジア・シルクロードと中国史」明治大学文学部特別企画シンポジウム：東洋史からアジア史へ——変わる世界史、広がるアジア——, 明治大学リバティ・タワー1階 1012 教室, 2004/10

森安孝夫「中央ユーラシアから見た世界史」全国高等学校世界史教員研修会, 大阪大学付属図書館, 2004/8

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

森安孝夫 大阪大学共通教育賞(第2回), 大阪大学, 2003/5

森安孝夫 コレージュ=ド=フランス招待教授記念メダル, コレージュ=ド=フランス, 2003/5

森安孝夫 東方学会賞(第7回), (財)東方学会, 1988/11

森安孝夫 流沙海西奨学会賞(第8回), 江上波夫記念流沙海西奨学会, 1975/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 21世紀COEプログラム分担

1-8. 学会役員等の引き受け状況

東方学会『東方学』編集委員	2003年9月～現在
同上・理事	2003年9月～現在
同上・評議員	2000年6月～2003年9月
東洋史研究会・評議員	2001年11月～現在
内陸アジア史学会・常任理事	1994年11月～現在
中央ユーラシア学研究会『内陸アジア言語の研究』編集長	1994年10月～現在
日仏東洋学会・評議員	1991年3月～現在

2. 片山 剛 教授

1952年生。1981年東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。文学修士(東京大学)。1981年高知大学人文学部講師、1984年同助教授、1989年大阪大学文学部助教授、1996年同教授を経て、1998年4月より現職。専攻：中国近世／近代史。

2-1. 論文

片山剛「明代珠江デルタの宗族・族譜・戸籍：一宗族をめぐる言説と史実」井上徹・遠藤隆俊編『宋—明宗族の研究』汲古書院, pp. 459-486, 2005/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

片山剛「江蘇省常州市の寺院における位牌安置の現況」共同研究「死と生の習俗をめぐる比較史研究」(於文12番教室), 2004/10

片山剛「広府人誕生之謎及其社会烙印：里甲制的長存和宗譜的改編」(中国語)講演(於上海, 復旦大学中国歴史地理研究所), 2004/9

片山剛「広府人誕生之謎及其社会烙印：里甲制的長存和宗譜的改編」(中国語)《近代中国郷村社会権勢》国際シンポジウム(於広州, 中山大学), 2004/7

片山剛「《死者祭祀空間の地域的構造：華南珠江デルタの過去と現在》補足および最近の研究動向」共同研究「死と生の習俗をめぐる比較史研究」(於待兼山会館), 2004/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

史学会・評議員

2001年10月～現在

中国史学会・評議員

2001年4月～現在

3. 荒川 正晴 教授

1955年生。1986年、早稲田大学大学院文学研究科博士課程中退。文学修士(早稲田大学)。早稲田大学非常勤講師、大阪大学文学部助教授を経て、2001年4月より現職。専攻：中央アジア古代史。

3-1. 論文

荒川正晴「唐代前半の胡漢商人と帛練の流通」『唐代史研究』7, pp. 17-59, 2004/8

荒川正晴「道路、国家与商人」『読書』304, 北京, pp. 160-165, 2004/7

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

荒川正晴「コータンの「木ぶり」と「根ばり」」『史滴』26, p. 1, 2004/12

3-4. 口頭発表

荒川正晴「トゥルファン文書の世界——高昌国における税役の検討を中心にして——」龍谷大学文学研究科院生協議会主催学術講演会, 龍谷大学, 2004/11

Arakawa M., Sogdian Merchants and Chinese Han Merchants During the Tang Dynasty, Les Sogdiens en Chine, Beijing, 2004/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

荒川正晴 流沙海西奨学会賞, 流沙海西奨学会, 1986/12

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(B)(1)、代表者：荒川正晴

課題番号：15401021

研究題目：東トルキスタン出土「胡漢文書」の総合調査

研究経費：2004年度 直接経費 2,200千円

研究の目的：

東トルキスタン出土の「胡漢文書」が、これまで東洋史学や言語学・文献学などの研究に貴重な資料を提供してきたことは言うまでもない。それは、たとえ断片的な文書であっても、一次資料として既存の見解を大きく覆す可能性を秘めているからである。したがって、散発的に出土した断片的な文字資料であっても、それら資料に関する情報は、できる限り詳細に把握しておく必要がある。とりわけ、新中国成立以降において出土した文字資料の情報に関しては、トゥルファン以外の地域のはほとんど明らかになっていないのが現状であり、今後、集中的に調査をしてゆく必要がある。以上に述べた状況から、本研究は、新中国成立以降においてトゥルファン以外の東トルキスタン各地から出土した、古文書をはじめとする文字資料や文物、またそれらが出土した遺跡に関する情報を収集し公表することを大きな目的としている。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

内陸アジア史学会、監事

1994年4月～現在

4. 桃木 至朗 教授

1955年生。1984年、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。京都大学東南アジア研究センター助手、大阪外国語大学外国語学部専任講師、同助教授、大阪大学教養部助教授、同文学部助教授を経て2001年4月より現職。専攻：東南アジア史／アジア海域史。

4-1. 論文

桃木至朗 「ベトナム王朝国家における「国土」「歴史」「伝統」『歴史評論』659, pp. 19-33, 2005/3

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

桃木至朗 「『東南アジア史』の危機と新しい挑戦」『世界史のしおり』帝国書院, pp. 1-4, 2004/4

4-4. 口頭発表

Yamauchi Shinji, Momoki Shiro, The Relationship between Maritime Merchants and Polities in Northeast and Southeast Asian Seas from the 10th to the 15th Centuries, Workshop on Northeast Asia in Maritime Perspective: A Dialogue with Southeast Asia (The 21st Century COE Program <Interface Humanities>, Osaka University, and The Asia Research Institute, National University of Singapore), Naha, 2004/10

Momoki Shiro, Mandala Champa Seen from Chinese Documents, Workshop: New Scholarship on Champa (Asia Research Institute, National University of Singapore), 2004/8

Momoki, Shiro, Su bien doi xa hoi Dai Viet the ky XIV qua van khac, khao sat trung hop vung Ha Tay, The Second International Conference on Vietnamese Studies, Ho Chi Minh City, 2004/7

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2004年度～2006年度、基盤研究(B)、代表者：桃木至朗

課題番号：16320080

研究題目：近代世界システム以前の諸地域システムと広域ネットワーク

研究経費：2004年度 4,800千円

研究の目的：

ユーラシア諸地域の中・近世における「世界の一体化」に向かう動きの比較研究

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

4-7-1. 2004年度～2005年度、研究助成金、助成金獲得者：桃木至朗

助成金名：サントリー文化財団特別助成

研究題目：東・東南アジアにおける「近世」と「近代」の連続と断絶に関する理論的研究

助成団体名：サントリー文化財団

助成金額：1,900千円

4-7-2. 21世紀COEプログラム分担

4-8. 学会役員等の引き受け状況

史学研究会 評議員

2000年6月～現在

東南アジア史学会 編集委員

2002年1月～2003年12月

5. 青木 敦 助教授

1964年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。東京大学東洋文化研究所助手、岡山大学文学部助教授等を経て2001年4月より現職。専攻：10-14世紀江南社会経済史。

5-1. 論文

青木敦「宋代江西撫州におけるある一族の生存戦略」『宋—明宗族の研究』汲古書院, pp. 95-122, 2005/3

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

青木敦「柳田節子著『宋代庶民の女たち』」『社会経済史学』70-4, pp. 491-493, 2004/11

青木敦「三浦徹・岸本美緒・関本照夫 編『比較史のアジア——所有・契約・市場・公正』」『史学雑誌』113-9, pp. 123-124, 2004/9

5-4. 口頭発表

Aoki, Atsushi, "The Boundaries of the Chinese Empire: Bandits, Barbarians, and Enemies" The 18th International Association of Historians of Asia(Chairperson, 台湾中央研究院), 2004/12

Aoki, Atsushi, "Eminent Judges in Frontier: Kiangnan in the Thirteenth Century"(Chairperson) The 18th International Association of Historians of Asia(台湾中央研究院), 2004/12

青木敦「宋代江西の法文化と契約」旧魏書研究会, 2004/8

青木敦「「地狭人稠」の表象——長江中下流域の土地稀少化と勸農文」第73回社会経済史学会全国大会共通論題報告「土地希少化と勤勉革命の比較史—— 経済史上の近世——」2004/5

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2004年度～、基盤研究(C)、代表者：青木敦

課題番号：16520416

研究題目：江西～湖南を中心とした宋朝「政区」の境界に関する研究

研究経費：2004年度 約1,500千円

研究の目的：

宋代「政区」の概念を、政治力の地理的範囲のみならず、その法的・文化的規範が効力を持ち得た地理的・社会的範囲という概念にまで拡張する。具体的には、治安維持や、法制・科挙による文化的統合、裁判における儒教的倫理観の貫徹といった政治上・文化上の「政区」の境界を、江西～湖南、すなわち長江中流域フロンティアを中心に明らかにする。特に、非漢族が裁判において頻繁に登場する地域的範囲はどこまでか、王朝的な儒教的原理が紛争処理(家産分割など)において通用する人々は、如何なる社会層に属したか、を更に広く文集・地方志史料をも網羅して明らかにする。さらに『宋会要』職官「黜降官」史料を用い、地方官弾劾の内容分析を地域別に行い、南宋において各地方が抱えていた統治上の問題点を数量的な手法で処理し、この時期において王朝の政治力の限界線がどこにあったかを、主に江西湖南付近の開発地帯において明らかにする。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

宋代史研究会・研究報告研究委員

2001年9月～2006年3月

6. 山内 晋次 助手

1961年生。1985年、大阪大学文学部卒。1988年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了。1993年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。2005年、大阪大学大学院文学研究科(世界史講座・東洋史学)助手。博士(文学、大阪大学)。専攻：前近代アジア海域史／日本古代史。

6-1. 論文

Shinji Yamauchi / Shiro Momoki, The Relationship between Maritime Merchants and Polities in Northeast and Southeast Asian Seas from the 10th to the 15th Centuries, *Workshop on Northeast Asia in Maritime Perspective: A Dialogue with Southeast Asia*, The 21st Century COE Program <Interface Humanities>, Osaka University, pp. 12-25, 2005/2

山内晋次「10－13世紀の東アジアにおける海域交流」『唐代史研究』(唐代史研究会), 7, pp. 101-115, 2004/8

6-2. 著書

山内晋次, 神野清一・梅村喬編『改訂日本古代史新講』梓出版社, 2004/4

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

山内晋次「モノと図像が語る琉球史 39/40 冊封琉球使と航海安全の祈り(上)・(下)」『沖縄タイムス』沖縄タイムス社, 2005/1/17-24

6-4. 口頭発表

Shinji Yamauchi / Shiro Momoki, The Relationship between Maritime Merchants and Polities in Northeast and Southeast Asian Seas from the 10th to the 15th Centuries, *Workshop on Northeast Asia in Maritime Perspective: A Dialogue with Southeast Asia*, The Asia Research Institute, National University of Singapore / The 21st Century COE Program <Interface Humanities>, Osaka University, 2004/10

山内晋次「古代・中世の日本列島と海域世界」大阪大学 21世紀 COE プログラム・第2回全国高等学校歴史教員研修会, 2004/8

山内晋次「前近代東アジア海域史の諸相」洛北史学会第6回大会, 2004/6

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 学会役員等の引き受け状況

続日本紀研究会『続日本紀研究』編集委員

1994年8月～現在

2-9 西洋史学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	2	3	1	0	3	9

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	5	10	1	2	18

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

北原靖明「ヒル・ステーション——インド植民地における英国人の特異な空間」川北稔, 藤川隆男 編『空間のイギリス史』(山川出版社), pp. 252-265, 2005/2

北原靖明『インドから見た大英帝国——キプリングを手がかりに』(昭和堂), 2004/4(著書、総頁数 305 頁)

紫垣聡「中世後期ミュンヘンにおける都市自治と都市統治」『待兼山論叢(史学編)』38, pp. 27-51, 2004/9

平山篤子「フィリピナス総督府創設期の対外関係(II)——イスパニア・カトリック王国の対明観——」『帝塚山学術論集』11, pp. 53-91, 2004/12

松田祐子「ベル・エポックのフランスにおけるフェミニズム」『パブリック・ヒストリー 特集 社会人女性大学院生』(大阪大学西洋史研究室), 2, pp. 90-94, 2005/2

松田祐子「パリにおける『住み込み乳母』(1865-1914)」『国立女性教育会館研究紀要』8, pp. 51-60, 2004/8

宮崎章「『コモンウェルス』から『福祉国家』へ——空間のイギリス社会主義史——」川北稔, 藤川隆男 編『空間のイギリス史』山川出版社, pp. 266-278, 2005/2

頼順子「中世後期の戦士的領主階級と狩猟術の書」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史研究室), 2, pp. 127-148, 2005/2

鷺田睦朗「ローマ史研究におけるブランド論の射程」『古代史年報』(属州研究会), 3, pp. 32-38, 2005/3

(2)口頭発表(研究会発表については一部のみを掲載)

木谷名都子「対インド経済政策をめぐるランカシャー綿業利害と日本の存在——1933年英印民間会商とリース・モーデーイー協定をめぐる——」2004年度日本西洋史学会第54回大会, 東北学院大学, 2004/5/22(『日本西洋史学会第54回大会 シンポジウム報告要旨・部会別自由論題報告要旨・ミニシンポジウム報告要旨』p. 67)

紫垣聡「中世末バイエルンにおけるポリツァイ立法と都市」九州西洋史学会 2004年度春季大会, 九州大学, 2005/03/26

平山篤子「16・17世紀明宣教を巡る議論と現代——アコスタ、ヴァリニャーノ、サンチェス神父の議論を中心に——」

- キリシタン文化研究会 2004 年度大会, 上智大学, 2004/12/5
- 平山篤子「フィリピン総督府、創設期(1565-c.1640)における対明関係——スペイン・カトリック王国の対明観——」
東京外国語大学 21 世紀 COE プログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」東京外国語大学, 2004/7/22
- 平山篤子「フィリピン総督府創設期の対チナ観と対チナ関係」海域アジア史研究会, 大阪大学, 2004/4/24
- 松尾佳代子「カルチュレール編纂にみる 11・12 世紀の文書使用——サン・シブリアン修道院の場合——」2004 年度広島史学会大会, 広島大学, 2004/10/31
- 松田祐子「パリにおける『住み込み乳母』(1865-1914)」日仏女性資料センター(日仏女性研究学会), 第 23 回定期総会記念講演会, 日仏会館, 2005/3/12
- 松田祐子「パリにおける『住み込み乳母』(1865-1914)」平成 16 年度 男女共同参画のための女性学・ジェンダー研究・交流フォーラム, 入選論文報告会, 国立女性教育会館, 2004/8/27(『国立女性教育会館研究紀要 第 8 号入選論文報告会+論文の書き方講座』pp. 9-12)
- 水田大紀「受験とクラミング——19 世紀イギリスにおける官僚への「競争精神」の浸透——」第 9 回ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学, 2004/6/19(『パブリック・ヒストリー』2, p. 158)
- 頼順子「中世後期の戦士の領主階級における狩猟と狩猟術の書」2004 年度ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学, 2004/6/19(『パブリック・ヒストリー』2, pp. 158-159)

(3)その他(書評・翻訳など)

- 中尾恭三「〈書評〉周藤芳幸・澤田典子著『ギリシア遺跡事典』」『パブリックヒストリー』2, p. 156, 2005/2
- 中村武司「〈翻訳〉ヴァルター・デーメル著「近世ヨーロッパにおける日本人と中国人のイメージ:身体的特徴・習俗・技術——極東文化へのさまざまなアプローチの比較」『パブリックヒストリー』2, pp. 38-59, 2005/2
- 水田大紀「〈翻訳〉ジョン・ブルーア著「マイクロヒストリーと日常生活の歴史」『パブリックヒストリー』2, pp. 19-37, 2005/2

教員の研究活動(2004 年度)

1. 江川 温 教授

1950 年生。1979 年、京都大学大学院文学研究科博士課程(西洋史学専攻)中退。文学修士(京都大学、1977 年)。大阪大学助手、同講師、同助教授を経て 1996 年、教授。2004 年 4 月より、放送大学客員教授。専攻：西欧中世史。

1-1. 論文

江川温「君主の墓——日本とフランス」『日本、もうひとつの顔 大阪大学フォーラム 2004』阪大フォーラム 2004 実行委員会, 2005/2

1-2. 著書

江川温編著『ヨーロッパの歴史』放送大学教育振興会, 2005/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

江川温(事典項目執筆)「領邦」「封建王政」「親王領」「騎士道」尾形勇, 樺山紘一, 川北稔, 加藤友康, 岸本美緒, 黒田日出男, 佐藤次高, 南塚信吾, 山本博文編『歴史学事典(王と国家)』12, 2005/3

1-4. 口頭発表

江川温「Le tombeau royal et impérial en France et au Japon」, 大阪大学フォーラム 2004, マルク・ブロック大学(ストラスブール), 2004/11/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2004年度、基盤研究(A)、代表者：江川温

課題番号：16202012

研究題目：死者の葬送と記念に関する比較文明史——親族・近隣社会・国家——

研究経費：2004年度 11,300千円(総額 20,500千円)

研究の目的：

東アジア文化圏と西ヨーロッパ文化圏に属する諸地域について、葬送と死者記念の儀礼を比較史的に考察すること

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

史学研究会・評議員

2004年4月～現在

日仏歴史学会・理事

2003年4月～現在

日本西洋史学会・編集委員

1979年4月～現在

2. 竹中 亨 教授

1955年生。1983年、京都大学大学院文学研究科博士課程退学。文学博士(京都大学、1994年)。東海大学講師、同助教授、大阪大学教養部助教授を経て、1995年より現職。専攻：近代ドイツ史。

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

竹中亨「大陸国家」他『歴史学事典第12巻 王と国家』弘文堂、2005/2

竹中亨「書評『ドイツ社会民主党と地方の論理——バイエルン社会民主党 1890～1906』鍋谷郁太郎著」『歴史学研究』795, pp. 70-72, 2004/11

2-4. 口頭発表

TAKENAKA, Toru, Die Rezeption Richard Wagners in Japan, グラーツ大学音楽学研究所特別講演, 2005/1

TAKENAKA, Toru, Fremde Klänge als Kompensation. Soziokulturelle Aspekte in der Rezeption westlicher Musik in Meiji-Japan, フライブルク大学音楽学研究所特別講演, 2004/10

TAKENAKA, Toru, Alien Sound as Compensation: Social Factors in the Reception of Western Music in Meiji Japan, フローニンゲン大学日本学研究所特別セミナー, 2004/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2004年度、日本学術振興会特定国派遣事業オーストリア、代表者：竹中亨、研究分担者：なし

研究題目：「ドイツ語圏から明治日本への文化移転としてのクラシック音楽」

助成金額：2004年度 約1,800千円

2-8. 学会役員等の引き受け状況

『西洋史学』編集委員

1993年4月～現在

3. 秋田 茂 教授

1958年生。1985年、広島大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学、大阪大学、2003年)。大阪外国語大学外国語学部助手、同講師、同助教授を経て、2003年10月より現職。専攻：イギリス帝国史、アジア国際関係史、グローバルヒストリー。

3-1. 論文

秋田茂「イギリス帝国と国際秩序」『歴史学研究・増刊号』(歴史学研究会編), 794, pp. 6-15, 2004/10

3-2. 著書

秋田茂編『イギリス帝国と20世紀 1 パクス・ブリタニカとイギリス帝国』ミネルヴァ書房, 2004/5

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

秋田茂(書評)「ウィリアム・G・ウッドラフ著(原剛, 菊池紘一, 松本康正, 南部宣行, 篠永宣孝訳)『概説現代世界の歴史——1500年から現代まで——』『社会経済史学』70-1, pp. 125-127, 2004/5

3-4. 口頭発表

秋田茂「アジアからのグローバルヒストリーの構築をめざして」中国上海・華東師範大学特別講座, 2005/3/16

秋田茂「1930-50年代のアジア国際経済秩序とイギリス帝国」中国上海・華東師範大学特別講座, 2005/3/14

Shigeru Akita, “Comments to Session I: American Empire in World History”, ReAS’s 4th International Symposium in Tokyo: “American Empire, Past and Present”, at Tokyo Green Palace, Tokyo, 2005/3/12

秋田茂「戦間期のイギリス帝国とアジア世界」大学講座「帝国の興亡VII:イギリス帝国」伊丹市教育委員会, 2005/1/29

秋田茂『『パクス・ブリタニカ』とイギリス帝国』大学講座「帝国の興亡VII:イギリス帝国」伊丹市教育委員会, 2005/1/22

秋田茂「1950年代の東アジア経済秩序とスターリング圏」東北学院大学渡辺科研研究会(東京大学), 2004/12/25

秋田茂「グローバルヒストリー研究の現状」市民社会のグローバルヒストリー研究会, 大阪大学中ノ島センター, 2004/12/23

秋田茂「グローバルヒストリーの構築とアジア世界」大阪大学大学院文学研究科教員研究フォーラム, 2004/11/18

秋田茂「世界システム・アジア交易圏と近代日本」第二回全国高等学校歴史教員研修会(大阪大学 21世紀 COE「インターフェイスの人文科学」), 大阪大学, 2004/8/11

秋田茂「コメント Bruce Cumings, “The Korea-Centric Japanese Imperium and the Transformation of the International System from the 1930s to the 1950s”」大阪大学第五回グローバルヒストリー・セミナー, 大阪大学, 2004/7/23

Shigeru Akita, “The East Asian International Economic Order in the 1950s”, Anglo-Japanese Relations and International Politics in East Asia, at London (LSE), UK, 6-7, 2004/7

秋田茂「イギリス帝国史研究と地域史の対話」2004年度大阪歴史科学協議会大会報告, 関西大学, 2004/6/12

秋田茂「コメント John Brewer, “Historians and The Study of Everyday Life”」大阪大学第四回グローバルヒストリー・セミナー, 大阪大学, 2004/6/9

秋田茂「イギリス帝国と国際秩序」2004年度歴史学研究会大会報告(国立), 一橋大学, 2004/5/29

秋田茂, 横井勝彦「司会 国際シンポジウム『帝国の終焉と国際秩序の再編——アジアをめぐる欧米諸国の相克——』」日本西洋史学会第54回大会(仙台), 東北学院大学, 2004/5/21

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

秋田茂 第20回大平正芳記念賞, 大平正芳記念財団, 2004/6

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし (ただし、大阪大学21世紀COE「インターフェイスの人文学」「世界システムとアジア海域交通」研究班のグローバルヒストリー・セミナー関係で850千円)

3-8. 学会役員等の引き受け状況

日本南アジア学会・理事	2004年10月～現在
日本西洋史学会・『西洋史学』編集委員	2000年10月～現在
西洋史研究会(東北大学)・評議員	1998年10月～現在

4. 藤川 隆男 教授

1959年生。大阪大学大学院文学研究科前期課程修了。文学修士(大阪大学)、MA(ANU)。帝塚山大学教養学部講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：西洋史、とくにオーストラリアの歴史。

4-1. 論文

藤川隆男(責任編集)「特集 白人と白人性」『民博通信』105, 2004/6

4-2. 著書

藤川隆男(川北稔)編著『空間のイギリス史』山川出版社, 2005/2

藤川隆男, 木村和男編『世紀転換期のイギリス帝国』(共著), ミネルヴァ書房, 2004/10

藤川隆男編著『オーストラリアの歴史』有斐閣, 2004/4

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

藤川隆男(編)「特集 社会人入学大学院生」『パブリック・ヒストリー』2, pp. 73-104, 2005/2

藤川隆男(監修)「フォーラム 白人性と帝国」『パブリック・ヒストリー』2, pp. 105-126, 2005/2

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2003年度、2004年度、基盤研究(C)(2)、代表者：藤川隆男

課題番号：15510200

研究題目：19世紀オーストラリア連邦運動の研究

研究経費：2004年度 900千円

研究の目的：

主な目的は、オーストラリアにおける史料の調査と、既存の史料のデータ・ベース化である。オーストラリア連邦運動の集会に関するデータの基本項目を整理して、これをデータ・ベース化することが第1の目的である。これによって、連邦運動に関する基礎的な事実の確定が、従来に比べてはるかに容易になり、今後の研究の展開の基礎にできる。第2に、連邦憲法制定会議の議事録のデータ・ベース化の手法を検討する。これは、記述史料を数量化して、より体系的な分析を行うための第1段階である。デジタル化されたデータをいかに有効活用できるかは、データ・ベースの設計に依存しているので、今後の活用の見通しを立てながら、設計の基本構想は立てる。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

オーストラリア学会理事

2004年4月～現在

日本西洋史学会・『西洋史学』編集委員

1996年4月～現在

5. 栗原 麻子 助教授

1968年生。1995年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程(西洋史学専攻)指導認定のうえ退学。博士(文学、京都大学、1998年)。京都大学研修員、日本学術振興会特別研究員を経て、1996年より奈良大学講師。2004年より大阪大学文学研究科助教授。専攻：西洋古代史。

5-1. 論文

栗原麻子「アッティカ碑文にみる役職者と私人についての予備的考察」『奈良大学総合研究所所報』13, pp. 53-63, 2005/3

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

栗原麻子「古典古代をめぐる座標軸 エック報告と葛西報告へのコメント」国際シンポジウム 近代ヨーロッパにおける人文主義の継承と変容 政治文化・古典研究・大学、2005年3月。南川高志・小山哲編『国際シンポジウム報告書 近代ヨーロッパにおける人文主義の継承と変容 政治文化・古典研究・大学』pp. 175-180, 2005/3

栗原麻子『『何人でも欲するものによる訴追』再考』西洋史読書会大会、2004年11月。『西洋史読書会大会報告要旨』pp. 1-2, 2004/11

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2004年度、基盤研究(C)、代表者：栗原麻子

課題番号：15520470

研究題目：古典期アテナイにおける復讐と刑罰

研究経費：2004年度 900千円

研究の目的：

古代ギリシアの国家ポリスの人的紐帯は、「友を助けるを害する」ことを正義とみなす、ギリシア人の価値観に貫かれていた。「友を助ける」とは、すなわち相互扶助であり、「敵を害する」とは、すなわち復讐である。復讐は、共同体内部の秩序を破壊するものであると同時に、共同体精神の発露でもある。本研究は、ポリス共同体が復讐をどのようなかたちで制御していたのかということ、法制度と民衆意識の両面から検討することを目的とする。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

日本西洋史学会・編集委員

2004年10月～現在

6. 水野 祥子 助手

1970年生。2001年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士(文学、大阪大学)。2003年より現職。専攻：イギリス史・環境史。

6-1. 論文

水野祥子「イギリス帝国林学と環境保護主義——大戦間期における森林保護論の展開を通して——」『歴史評論』650, 2004/6

6-2. 著書

水野祥子, 川北稔・藤川隆男編『空間のイギリス史』山川出版社, 2005/2

水野祥子, 秋田茂編『パックス・ブリタニカとイギリス帝国』ミネルヴァ書房, 2004/5

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

水野祥子「イギリス帝国林学と環境保護主義」生物学史分科会／日本科学史学会阪神支部例会, 2004/6

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2004年度、若手研究(B)、代表者：水野祥子

課題番号：16720176

研究題目：20世紀国際社会における環境保護論の展開とイギリス帝国

研究経費：2004年度 1,400千円

研究の目的：

森林保護に関わる国際的な議論の展開を分析し、今日のグローバルな環境保護主義が、20世紀の国際社会の中でどのように形成されてきたのかを明らかにする。具体的には、国際林学会議の議事録や世界各国の主要な林学専門誌を分析し、環境保護を推進する担い手となった森林管理官がどのように環境問題を認識し、また、いかなる保護論を展開していったのかを捉える。その際、植民地の森林管理官が国際的な環境保護論の展開に与えたインパクトに注目する。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 学会役員等の引き受け状況

日本西洋史学会・『西洋史学』編集委員

2003年4月～現在

大阪大学西洋史学会・理事

2003年4月～現在

2-10 考古学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	3	0	0	0	5	8

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	1	5	6	0	1	13

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

- 石井智大「弥生時代中期から後期への社会変化——丹後地域の事例から——」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室, pp. 291-308, 2005/3
- 高松雅文「竪穴式石室の編年的研究」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室, pp. 451-468, 2005/3
- 田中由理「剣菱形杏葉と6世紀前葉の馬具生産」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室, pp. 641-656, 2005/3
- 田中由理「f字形鏡板付轡の規格性とその背景」『考古学研究』(考古学研究会), 51-2, pp. 97-114, 2004/9
- 中原計「出土状況からみた弥生時代木製品の製作」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室, pp. 175-198, 2005/3
- 中村大介「無文土器時代前期における石鏃の変遷」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室, pp. 51-86, 2005/3
- 中村大介「方形周溝墓の成立と東アジアの墓制」『朝鮮古代研究』5, 朝鮮古代研究刊行会, pp. 27-50, 2004/11
- 吉田知史「善通寺西遺跡出土櫛の意義」『香川考古』9, 香川考古刊行会, pp. 29-55, 2004/11

(2)口頭発表

- 石井智大, 高松雅文, 柏原龍嗣「勝福寺古墳出土の龍文銀象嵌刀装具付鉄刀について」古代武器研究会, 滋賀県立大学, 2005/1/8
- 高松雅文「竪穴式石室の編年研究」大阪歴史学会, 大阪市文化財協会, 2005/1/21
- 中原計「植生から見た瓜生堂遺跡周辺の自然環境」瓜生堂遺跡の最新研究ミニシンポジウム, 大阪府立弥生文化博物館, 2005/3/13(『関連科学が明らかにした瓜生堂遺跡の実像発表資料』)
- 中原計「木質遺物から見た高地性集落」第18回古代学協会四国支部大会徳島大会, 徳島大学, 2004/12/4-5(『第18回古代学協会四国支部大会徳島大会 弥生時代の群像——高地性集落の実態—— 発表要旨集』)
- 丸山真史, 中原計, 山崎健, 寺前直人「近世における大坂, 京都の水産物利用——久留米藩蔵屋敷跡出土の資料を中心に——」日本考古学協会第70回総会, 千葉大学, 2004/5/23(『有限責任中間法人日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』 pp. 190-191)

中村大介「方形周溝墓の系譜とその社会」近畿弥生の会, 京都, 2005/3/13

中村大介, 長友朋子「縄文時代後・晩期の土器の容量」煤・焦げ・黒斑ワークショップ(小林正史科研), 熊本, 2005/3/12

中村大介「無文土器時代前期編年の再検討」東アジア研究会, 大阪, 2004/11/21

Daisuke Nakamura, "Relationship of funeral rituals between Korea and Japan", the Society for East Asian Archaeology, Korea, 2004/7/16

長友朋子, 庄田慎矢, 所一男, 久世建二, 小林正史, 松尾奈緒子, 中村大介, 鐘ヶ江賢二, 渡辺誠「弥生時代における覆い型野焼きの受容と展開」日本考古学協会第70回総会, 千葉大学, 2004/5/23 (『有限責任中間法人日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』)

中村大介「土器副葬習俗の系譜とその変容」東北アジア考古学研究会, 東京, 2004/5/21

渡辺今日子「弥生時代の石器生産・流通と消滅過程」考古学研究会関西例会／大阪, 2005/3/26

渡辺今日子「近畿地方における弥生時代中期後半～後期の石器の様相」京都弥生談話会／京都, 2004/5/8

(3)その他(書評・翻訳など)

石井智大「埋葬施設 SX01」『日吉ヶ丘遺跡』(京都府加悦町教育委員会), pp. 37-41, 2005/2

石井智大「土製品・絵画土器等の概要」『日吉ヶ丘遺跡』(京都府加悦町教育委員会), pp. 91-93, 2005/2

石井智大「日吉ヶ丘遺跡 SZ01 関係の弥生時代中期墳墓集成 丹後・北丹波の墳墓」『日吉ヶ丘遺跡』(京都府加悦町教育委員会), pp. 207-241, 2005/2

石井智大「鉄製ヤリガンナ」『綾部山 39 号墓発掘調査報告書』(兵庫県御津町教育委員会), pp. 56-57, 2005/2

大賀克彦, 望月誠子, 戸根比呂子, 小山雅人「奈具岡遺跡再整理報告(1) ——翡翠・ガラス製品——」『京都府埋蔵文化財情報』(京都府埋蔵文化財調査研究センター), 95, pp. 1-12, 2005/3

口野博史, 富山直人, 池田毅, 松林宏典, 前田佳久, 渡辺今日子「伯母野山遺跡の研究——斎藤英二氏寄贈資料の整理報告を中心として——」『神戸市立博物館研究紀要』(神戸市立博物館), 21, pp. 83-150, 2005/3

教員の研究活動(2004 年度)

1. 福永 伸哉 教授

1959 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学博士(大阪大学)。大阪大学埋蔵文化財調査室助手、大阪大学大学院文学研究科助教授を経て、2005 年より現職。専攻：日本考古学(特に弥生時代、古墳時代)。

1-1. 論文

福永伸哉「三角縁神獣鏡と画文帯神獣鏡のはざままで」『待兼山考古学論集』大阪大学大学院文学研究科, pp. 469-484, 2005/3

福永伸哉「弥生時代から古墳時代にいたる社会変化」『文化の多様性と 21 世紀の考古学』考古学研究会, pp. 130-149, 2004/4

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

福永伸哉「鏡に映る古墳出現期の激動」滋賀民報, 2004/6/27

福永伸哉「三角縁神獣鏡の成分分析」西日本新聞, 2004/6/8

1-4. 口頭発表

福永伸哉「勝福寺古墳調査成果の学術的意義」平成 16 年度勝福寺古墳発掘調査報告講演会, 川西市教育委員会, 2005/3

福永伸哉「西摂地域の古墳と日本古代史」平成 16 年度西宮市歴史講座, 西宮市教育委員会, 2004/12

福永伸哉「弥生時代から古墳時代にいたる社会変化」考古学研究会 50 周年記念国際シンポジウム, 考古学研究会, 2004/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

福永伸哉 大阪大学共通教育賞, 大阪大学共通教育機構, 2003/12

福永伸哉(雪野山古墳発掘調査団) 雄山閣考古学特別賞, 雄山閣出版, 1997/6

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2004 年度～、基盤研究(C)(1)、代表者：福永伸哉

課題番号：16520461

研究題目：原始古代埋葬姿勢の比較考古学的研究——日本及び旧世界の事例を中心に——

研究経費：2004 年度 直接経費 1,800 千円

研究の目的：

原始古代葬制にかんする諸要素の中でも本格的な考察が遅れている埋葬姿勢について比較考古学的な視点を重視しながら検討し、人類史における埋葬姿勢と生業・階層差・社会発展段階・性別・死生観・信仰・成人と小児の違いなどとの多様な関係を考察する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2004 年度、研究助成金、助成金獲得者：福永伸哉

助成金名：「豊かで活力ある長寿社会の構築をめざして」を基本テーマとした研究助成

研究題目：デジタル技術を用いた高齢者に優しい考古学・遺跡体験システムの研究

助成団体名：ユニバーサル財団

助成金額：900 千円

1-8. 学会役員等の引き受け状況

考古学研究会関西例会・世話人 2004 年 4 月～2005 年 3 月

考古学研究会関西例会・世話人 2002 年 4 月～2004 年 3 月

2. 高橋 照彦 助教授

1966 年生。1992 年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(京都大学、1991 年)。国立歴史民俗博物館考古研究部助手、奈良国立博物館学芸課研究員を経て、2002 年より現職。専攻：日本考古学(特に奈良時代、平安時代)。

2-1. 論文

高橋照彦「銭貨と陶磁器からみた日中間交流——日本古代銭貨の発行を主な検討材料として——」『シルクロード学研究』

23<中国沿海地帯と日本の文物交流の研究——港・船と物・心の交流——>, シルクロード学研究センター, pp. 75-112, 2005/3

高橋照彦「欽明陵と檜隈陵——大王陵最後の前方後円墳——」『待兼山考古学論集——都出比呂志先生退任記念——』大阪大学考古学研究室(大阪大学考古学研究室友の会), pp. 731-754, 2005/3

高橋照彦「古代銭貨をめぐる諸問題」『考古学ジャーナル』526, pp. 10-14, 2005/2

高橋照彦「鹿蔵山遺跡出土奈良三彩について」『鹿蔵山遺跡——大社町立大社小学校改築事業に伴う発掘調査報告書——』大社町教育委員会, pp. 55-56, 2005/1

高橋照彦「阿武山古墳小考——鎌足墓の比定をめぐる——」『待兼山論叢(史学篇)』大阪大学大学院文学研究科(大阪大学文学会), 38, pp. 1-25, 2004/12

2-2. 著書

佛敎大学尼雅遺迹学術研究機構編, 高橋照彦他『絲綢之路 尼雅遺址之謎』天津人民美術出版社, 2005/1

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

高橋照彦「まとめ」『京都府亀岡市篠窯跡群大谷3号窯発掘調査現地説明会資料』大阪大学考古学研究室篠窯調査団, pp. 7-8, 2004/8

2-4. 口頭発表

高橋照彦「長門・近江の施釉陶器生産の展開と特質」陶磁器調査過程(古代), 2005/2

高橋照彦「大阪大学考古学研究室による調査の概要と今後の計画」篠窯業生産遺跡調査に係る連絡会議, 2004/7

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2003年度～2006年度、基盤研究(B)(1)、代表者：高橋照彦

課題番号：15320108

研究題目：須恵器生産における古代から中世への変質過程の研究——近畿地方を主な検討材料として——

研究経費：2004年度 直接経費 4,200千円

研究の目的：

本研究は、研究の手薄な、9～11世紀頃の須恵器生産を主な検討対象とする。対象地域は、研究期間の関係上、近畿地方に限定する。平安時代は、須恵器生産の衰退時期と捉えられがちであるが、古代から中世への過渡期である。そこで、律令期の窯業生産把握がいかに中世的な須恵器生産に変容したかという問題を、具体的な窯跡群を構造的に分析することにより、跡付けることにしたい。

また、各地の窯跡群を統合した視点で横断的に比較検討することや、須恵器と併焼された施釉陶器や瓦を含めて多面的に検討すること、さらには胎土の理化学的分析を系統的に試みることなどを通して、各地の生産体制や製品供給体制、特に国衙権力の関与の度合いを把握し、当該期の須恵器生産の全体構造と特質を抽出し、そこからその前後の時代についても特質をあぶり出すことを目指したい。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

東洋陶磁学会・幹事

1997年10月～現在

3. 寺前 直人 助手

1973年生。2001年、大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学、大阪大学)。大阪大学教務補佐員をへて、2003年現職。2003年より神戸女学院非常勤講師。専攻：日本考古学。

3-1. 論文

寺前直人「弥生時代における石棒の継続と変質」大阪大学考古学研究室『待兼山考古学論集』真陽社, pp. 129-148, 2005/3

寺前直人「弥生時代における石製短剣の伝播過程」『古代武器研究』(古代武器研究会), 5, pp. 19-28, 2005/1

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

寺前直人「後円部でみつかった新たな石室について」兵庫県川西市勝福寺古墳発掘調査講演会，川西教育委員会，兵庫(川西市中央公民館)，2005/3

寺前直人「6世紀における古墳の変質とその背景」古代を偲ぶ会，大阪(森ノ宮)，2005/2

寺前直人「武器の普及と集落形態の関係」『弥生社会の群像——高地性集落の実態——』第18回古代学協会四国支部大会，徳島(徳島大学)，2004/11

丸山真史，中原計，山崎健，寺前直人「近世における大坂，京都の水産物利用——久留米藩蔵屋敷跡出土の資料を中心に——」日本考古学協会第70回総会，千葉大学，2004/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2004年度、科学研究費補助金若手(B)、代表者：寺前直人

課題番号：16720184

研究題目：弥生時代における経済構造の研究——石器流通と金属器流通の比較分析——

研究経費：900千円

研究の目的：

日本列島における弥生時代における経済構造について、在来素材である石器と外来素材である金属器のありかたを比較検討することにより、列島における社会複雑化、階層化の契機である弥生時代の社会構造を解明する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

考古学研究会常任委員

1999年5月～現在

2-11 人文地理学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	2	1	0	0	0	3

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	1	9	0	0	0	10

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

波江彰彦「ごみの排出とリサイクルにみられる地域間差異——福井県を事例に——」『人文地理』(人文地理学会), 56-2, pp.170-185, 2004/4

小林茂, 渡辺理絵, 鳴海邦匡「アジア太平洋地域における旧日本軍の空中写真による地図作製」『待兼山論叢(日本学編)』38, pp. 1-24, 2004/12

渡辺理絵, 小林茂「日本—中国間の地図作製技術の移転に関連する資料について」『地図』(日本国際地図学会), 42-3, pp. 13-28, 2004/9

(2)口頭発表

折橋幸代「高齢者の外出行動パターン」2004年度人文地理学会大会, 佛教大学, 2004/11/14(『2004年度人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 98-99)

佐々木信行「国際航空ネットワークの結節構造——地域内と地域間関係に着目して——」2004年度人文地理学会大会, 佛教大学, 2004/11/14(『2004年度人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 110-111)

中村有作「沖永良部島和泊町における水資源開発と農業生産の変容」日本地理学会 2005年度春季学術大会, 青山学院大学, 2005/3/28(『日本地理学会発表要旨集』67, pp. 92)

波江彰彦「大阪市におけるごみ処理事業の機能的変化」, 2004年度人文地理学会大会, 佛教大学, 2004/11/14(『2004年度人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 80-81)

朴澤龍「過疎地域における高齢者の日常生活行動——奈良県吉野郡川上町を事例として——」2004年度人文地理学会大会, 佛教大学, 2004/11/14(『2004年度人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 96-97)

渡辺英明「江戸時代の関東在方市町における町場を描いた絵図の作製契機とその表現内容」2004年度人文地理学会大会, 佛教大学, 2004/11/14(『2004年度人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 58-59)

渡辺理絵, 小林茂「20世紀初頭における日本—中国間の測量技術の移転——三角測量を中心として——」科学研究費基

盤研究 A1「アジアとその周辺地域における伝統的地理思考の近代地理学の導入による変容過程」国際シンポジウム, 国際日本文化研究センター, 2005/2/13

渡辺理絵, 小林茂「日中間における地図作製技術の移転について——広西省を中心として——」2004年度人文地理学会大会, 佛教大学, 2004/11/14(『2004年度人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 88-89)

小林茂, 渡辺理絵, 鳴海邦匡「旧日本軍による空中写真要図の作製時期と範囲」2004年度人文地理学会大会, 佛教大学, 2004/11/14(『2004年度人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 214-215)

長澤良太, 今里悟之, 渡辺理絵「旧日本軍撮影の空中写真の特徴とその利用可能性」日本地理学会 2004年度秋季大会, シンポジウムⅦ「外邦図の基礎的研究」広島大学, 2004/9/26(『日本地理学会発表要旨集』66, p. 66)

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

教員の研究活動(2004年度)

1. 小林 茂 教授

1948年生。1974年、京都大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学、京都大学)。東京都立大学助手、九州大学講師・助教授・教授、大阪大学文学部教授を経て1999年現職。2003年より放送大学客員教授をつとめている。専攻: 文化地理学/文化生態学。

1-1. 論文

小林茂「太宰府市の土地利用変化と景観」高倉洋彰, 磯望, 小林茂, 石松好雄, 長洋一編『太宰府市史 通史編Ⅰ』太宰府市, pp. 193-202, 2005/3

Sasaki, H., Kawasaki, T., Ogaki, T., Kobayashi, S., Itoh, K., Yoshimizu, Y., Sharma, S., Acharya, G. P. A, "The prevalence of diabetes mellitus and impaired fasting glucose/glycaemia (IFG) in suburban and rural Nepal: the community-based cross-sectional study during the democratic movements in 1990", *Diabetes Research and Clinical Practice*, 67(2), pp. 167-174, 2005/2

小林茂, 渡辺理絵, 鳴海邦匡「アジア太平洋地域における旧日本軍の空中写真による地図作製」『待兼山論叢(日本学篇)』32, pp. 1-24, 2004/12

佐々木悠, 川崎晃一, 大柿哲朗, 伊藤和枝, 小林茂, 吉水浩, 斉藤篤志, Sashi Sharma, Gopal P. Acharya「ネパール王国チベット難民キャンプ(Jawalakhel Refugees Camp)における肥満・糖尿病の変遷」*Diabetes Frontier*(メディカルレビュー社), 15(5), pp. 711-716, 2004/10

渡辺理絵, 小林茂「日本—中国間の地図作成技術の移転に関する資料について」*地図(日本国際地図学会)*, 42(3), pp. 13-28, 2004/9

佐々木悠, 川崎晃一, 大柿哲朗, 伊藤和枝, 小林茂, 吉水浩, 斉藤篤志, Sashi Sharma, Gopal P. Acharya「ネパール王国・丘陵農村における2型糖尿病の増加: コテン村(Kotyamg:rural village)における経年的有病率の変化について」*Diabetes Frontier*(メディカルレビュー社), 15(3), pp. 361-367, 2004/6

1-2. 著書

高倉洋彰, 磯望, 小林茂, 石松好雄, 長洋一編『太宰府市史 通史編Ⅰ』太宰府市, 2005/3

小林茂ほか『外邦図研究ニューズレター』3, 外邦図研究グループ, 大阪大学大学院文学研究科人文地理学教室, 2005/3

渡辺正氏所蔵資料集編集委員会(世話人, 小林茂)『終戦前後の参謀本部と陸地測量部: 渡辺正氏所蔵資料集』大阪大学文学研究科人文地理学教室, 2005/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

小林茂「はしがき」渡辺正氏所蔵資料集編集委員会(世話人, 小林茂)『終戦前後の参謀本部と陸地測量部：渡辺正氏所蔵資料集』大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. i-iii, 2005/3

小林茂「本書の編集経過と構成について」渡辺正氏所蔵資料集編集委員会(世話人, 小林茂)『終戦前後の参謀本部と陸地測量部：渡辺正氏所蔵資料集』大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. 1-2, 2005/3

濱野真二郎, 小林茂「ネパールにおけるマラリアに対する文化的・生物学的適応：ヘモグロビン異常とマラリア」医学のあゆみ(医歯薬出版株式会社), 212(4), pp. 285-289, 2005/1

1-4. 口頭発表

小林茂, 濱野真二郎, 白川卓, 鈴木朗「マラリアに関連する赤血球遺伝子の頻度と住民のマラリア観の関係」日本地理学会発表要旨集, 67, p. 159, 2005/3

渡辺理絵, 小林茂「20世紀初頭における日本—中国間の測量技術の移転——三角測量を中心として——」科学研究費基盤研究A1「アジアとその周辺地域における伝統的地理思考の近代地理学の導入による変容過程」国際シンポジウム, 国際日本文化研究センター, 2005/2

小林茂, 鳴海邦匡, 渡辺理絵「旧日本軍による空中写真要図の作製時期と範囲」2004年度人文地理学会大会発表要旨, pp. 214-215, 2004/11

渡辺理絵, 小林茂「日中間における地図作製技術の移転について：広西省を中心として」2004年度人文地理学会大会研究発表要旨, pp. 88-89, 2004/11

小林茂「外邦国研究の成果と課題：2年半の経過をふりかえって」日本地理学会発表要旨集, 66, p. 67, 2004/9

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

小林茂 第4回人文地理学会賞, 人文地理学会, 2004/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(B)(1)、代表者：小林茂

課題番号：15406009

研究題目：ネパールにおけるマラリアに対する遺伝的適応の調査研究：文化的適応との対比を通じて

研究経費：2004年度 3,700千円

研究目的：

1996年以來のネパール中間山地低地部での調査により、高度1200メートル以下に居住してきた民族集団では高頻度(54%)で α +サラセミアがみられるが、それよりも高所に居住し、マラリア感染をさけてきた民族集団では、この頻度が低い(4～14%)ことが判明した。この成果をもとに関係住民のマラリア感染をDNA診断により検査したところ、正常の住民では24.2%に達するのに対し、 α +サラセミアの住民では12.9%と大きな差があることが判明した。くわえて年齢別に乾季の感染率を検討したところ、10歳以下の子どもでは8.5%と、それ以上の年齢層(18.8%)に比べていちじるしく低いことも判明した。

本研究では、これらの成果をもとにとくに学齢期の子どもを中心にマラリア感染の季節変動を検討する。子どもは、成人のようにたび重なるマラリアの感染を受けておらず、免疫が未発達で、 α +サラセミアとマラリア感染との関係が明確にあらわれると考えられる。またあわせて、 α +サラセミアについて、ホモ・ヘテロ・健常の赤血球でマラリア原虫の培養実験をおこない、その差異を検討する。さらに他の寄生虫についても調査をおこなう。

1-6-2. 2002年度～2004年度、基盤研究(A)(1)、代表者：小林茂

課題番号：14208007

研究題目：「外邦国」基礎的研究：その集成および地域環境資料としての評価をめざして

研究経費：2004年度 直接経費 8,100千円 間接経費 2,430千円

研究の目的：

旧日本軍が作成した「外邦図」と呼ばれる現在の日本領土外の地図は、現在、国内では東北大学・お茶の水女子大学・京都大学・広島大学・東京大学・国立国会図書館など、海外ではアメリカ議会図書館・アメリカ地理学協会・大英図書館などに分散している。

本研究の目的は、①分散して所蔵され一部は未整理状態にある外邦図の全貌を把握し、その研究・利用にむけて、作製・出版年代や縮尺などを記載した所在目録を整備し公開する、②陸軍参謀本部からの持ち出し作業や整理作業にあたった関係者にインタビューし、その経緯や当時の実情を復元する、③戦時下の地図作製に関連する旧日本軍の組織や経過を解明する、④外邦図の保存および利用の簡便化をはかるため、画像データベース化を進め、戦前の地形や植生を克明に示す資料として GIS の適用も試みる、以上の 4 点である。

この作業を通じて、旧日本軍作製地図の所在ならびに資料価値を確定するとともに、貴重な地域環境資料として外邦図の再利用をはかることを最終的な目的とする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

人文地理学会・協議員	2004年11月～現在
同上・理事(集会担当)	2002年11月～2004年10月
同上・評議員	2000年11月～2004年10月
太平洋学術研究連絡委員会委員(日本学術会議)	2003年10月～現在
広島大学総合地誌研究資料センター客員研究員	2003年8月～現在
日本国際地図学会・評議員	2003年2月～現在
農耕文化研究振興会・『農耕の技術と文化』編集委員	2001年4月～現在
太宰府市史編集委員会委員	1995年10月～現在
『文明のクロスロード: Museum Kyushu』(博物館等建設推進九州会議)編集委員	1984年6月～現在
柳川市史専門研究員	2003年5月～2004年3月
同上	2002年4月～2003年3月
(財)国土地理協会研究助成審査員	2001年～2004年
国立歴史民俗博物館展示プロジェクト委員	2003年4月～9月

2. 堤 研二 助教授

1960年生。1986年3月、九州大学大学院文学研究科修士課程修了(史学・地理学専攻)。文学修士。1986年4月、国立佐世保工業高等専門学校助手。1988年4月、同校講師。1990年10月、島根大学法文学部講師。1993年7月、同学部助教授。1999年4月、大阪大学大学院文学研究科助教授。専攻：人文地理学。

2-1. 論文

堤研二「高度成長期の太宰府」『太宰府市史・通史編・第Ⅲ編』太宰府市, pp. 662-698, 2004/9

堤研二「社会地理学研究の系譜」『空間の社会地理』(水内俊雄編), 朝倉書店, pp. 1-22, 2004/6

2-2. 著書

堤研二『構造改革期における農山村・人口減少地域の変動と政策課題』平成15年度～平成16年度・日本学術振興会・科学研究費基盤研究(C)(1)研究成果報告書, 研究代表者：堤研二, 2005/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Tsutsumi, Kenji, "Aging, Landscape, Restructuring and Conflicts in an Old New Town: *Senri New Town in Osaka Metropolitan Area*". The 9th Japanese-German Geographical Conference (Ruhr University Bochum, Bochum, Germany), 2004/8

Tsutsumi, Kenji, "Fundamental Functions of Living in a Small Community: Some Cases in Depopulated Areas in Japan". The Workshop on "Social Capital and Development Trends in Japan's and Sweden's Countryside"(Mid-Sweden University, Östersund, Sweden), 2004/8

堤研二「環境・地域・暮らしと地理的思考」大阪府第一学区校長会依頼事業(出前講義), 大阪府立池田高等学校(大阪府池田市), 2004/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堤研二 地域地理学会賞, 地域地理学会, 1997/7

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2003 年度～2004 年度(2 年間)、日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)(1)、代表者：堤研二

課題番号：15520497

研究題目：構造改革期における農山村・人口減少地域の変動と政策課題

研究経費：2004 年度 1,400 千円

研究の目的：

本研究の研究目的のキーワードは、「点検」、「現状分析」、「展望」の3つである。すなわち、構造改革による大変動期を迎えた中で人口減少地域・農山村を対象として、(1)過疎政策や種々の振興法政策などのこれまでの地域政策を「点検」し、(2)当該地域での現実問題を整理して、「現状分析」を行い、(3)これらの地域がいかなる方向に動きつつあるのか、またそれに対応してどのような政策課題や地域生活機能の問題が新たに生じ、今後構想されるべき政策・対策は何かを「展望」するのが本研究の目的である。(1)の「点検」に関しては当該地域の社会経済的データをもとにデータベース(DB)を構築し、これまでの過疎行政・振興法行政の効果・功罪を点検していく(初年度～2年度目前半)。(2)の「現状分析」に関しては、マクロなスケールレベルでのDBに基づいた分析をふまえながら、研究組織構成メンバー6人が分担して実証的地域調査を行い、当該地域の現状・問題・課題・動向を整理する(初年度後半～2年度目前半)。とくに、ポスト公共事業・ポスト企業誘致の時代における就業問題、自立的・自律的あるいは内生的な住民組織や地域社会活動、森林をはじめとする農山村の基幹産業と国土・環境保全との連携関係、さらにエコツーリズムやグリーンツーリズムなどの新展開に焦点を絞る。(3)の「展望」に関しては、21世紀の構造改革下での地域政策の課題・方法論を検討する。(2年度目)

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

【学会役員など】

人文地理学会・評議員(任期2年2期)	2001年度～現在
同上・編集委員(任期1年)	2004年度
同上・選挙管理委員長(任期1年)	2004年度
同上・大会準備委員(任期1年)	2003年度

同上・地理思想研究部会世話人代表(任期 1 年 2 期)	2001 年度～2003 年度
同上・地理学ウィーク企画委員(任期 1 年 1 期)	2001 年度
The 3 rd East Asia Regional Conference in Alternative Geography (EARCAG)組織委員	2003 年度
【公共団体等関連委員など】	
島根県隠岐郡 7 町村ほか 隠岐空港整備利用促進協議会オブザーバー	2001 年度～現在
島根県・島根県中山間地域研究センター地域づくり支援ブレーン	1998 年度～2004 年度
島根県安来市ほか五町村・鉄の道文化圏調査研究委員	1997 年度～2004 年度
福岡県太宰府市・太宰府市史資料調査員	1988 年度～2004 年度
島根県・島根県航空行政推進会議委員・隠岐空港部会座長	1997 年度～2003 年度

2-12 日本文学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	5	1	15	0	2	23

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	6	20	0	0	26

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

石原のり子「『大鏡』における「魂」観の再検討」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 36, pp. 30-41, 2004/10

井真弓「女君の人物描写に見る『石清水物語』の救済の構図」『文学・語学』(全国大学国語国文学会), 179, pp. 22-30, 2004/8

井真弓「『石清水物語』の後日談に示される「不義の子」の可能性とその意義」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 35, pp. 77-89, 2004/4

于永梅「平安時代の漢詩文における「猿声」「鹿鳴」の受容」『待兼山論叢 文学篇』(大阪大学大学院文学研究科), 38, pp. 1-16, 2004/12

岡崎昌宏「辻邦生「サラマンカの手帖から」論」『解釈』(解釈学会), 50-7・8, pp. 48-53, 2004/8

木下美佳「泣く昔男——『伊勢物語』の物語構成——」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 36, pp. 1-10, 2004/10

黄如萍「志賀直哉「児を盗む話」論——父親の〈言葉〉をめぐって——」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 3, pp. 28-43, 2005/3

黄如萍「志賀直哉「濁つた頭」論——「ジャスティファイ」を中心に——」『解釈』(解釈学会編集), 51-1.2, pp. 12-18, 2005/2

越野優子「伝国冬本源氏物語の世界」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 35 pp. 59-76 2004/4

坂井二三絵「芥川龍之介『お律と子等と』論——複雑さの中から浮かび上がるもの——」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 3, pp. 44-58, 2005/3

辻村尚子「秋成の宇万伎入門——『文反古』所収書簡をめぐって——」『上方文藝研究』(上方文藝研究会), 1, pp. 76-84, 2004/5

徳永光展「静への眼差し——夏目漱石『心』論——」『近代文学論集』(日本近代文学会九州支部), 30, pp. 39-47, 2004/11

徳永光展“Time in Memoranda as a Reflection of Time in Testament: A Study of Kokoro by Sōseki Natsume.”, *Comparative Culture*, 10(December 2004), pp. 209-215, 2004/12

中井賢一「柏木不在の論理——柏木・弁少将の機能と夕霧・弁少将の対峙の構造——」『詞林』(大阪大学古代中世文学研

- 研究会), 35, pp. 32-58, 2004/4
- 中川真弓「醍醐寺蔵『菅茶集』について——付翻刻『仏教修法と文学的表現に関する文献学的考察——夢記・伝承・文学の発生——』(科学研費成果報告書, 基盤研究 C(2) 課題番号 14510462 研究代表者 荒木浩 平成 14 年度～平成 16 年度), pp. 87-116, 2005/3
- 中川真弓「国立歴史民俗博物館蔵田中穰氏旧蔵『菅茶集』について——付翻刻『小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求』(大阪大学大学院文学研究科共同研究成果報告書), 2005/3
- 中川真弓『『宝物集』梅檀像震旦将来譚考』『語文』(大阪大学国語国文学会), 82, pp. 13-23, 2004/6
- 西尾元伸「泉鏡花『沼夫人』論』『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 3, pp. 13-27, 2005/3
- 西村真由美「宮沢賢治『なめとこ山の熊』論——小十郎の持つ二面性——』『語文』(大阪大学国語国文学会), 83, pp. 12-24, 2004/12
- 細川知佐子「定家の百首歌における「有明」——四季歌を中心に——』『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 35, pp. 100-111, 2004/4
- 溝端善子「正宗白鳥『何處へ』論』『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 3, pp. 1-12, 2005/3
- 松本陽子「武田泰淳『非革命者』論』『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 3, pp. 59-71, 2005/3
- 山田理恵「『後水尾院和漢千句』における固有名詞の特徴について——和漢聯句と和漢俳諧との比較——』『語文』(大阪大学国語国文学会), 83, pp. 1-11, 2004/12

(2)口頭発表

- 石原のり子『『大鏡』における兼家と三条天皇——もうひとつの系譜——』中古文学会 2004 年度秋季大会, 広島大学, 2004/10/10
- 石原のり子『『大鏡』言葉を発する天皇』大阪大学古代中世文学研究会第 161 回例会, 大阪大学, 2004/7/17
- 井真弓『『石清水物語』の主人公造型に見る物語の構図』2004 年度中古文学会春季大会, 東京大学, 2004/5/23(『2004 年度中古文学会春季大会研究発表資料』 pp. 3-4, pp. 25-28)
- 奥田雅子『『徒然草』と『十訓抄』——出典の問題について——』大阪大学古代中世文学研究会第 159 回例会, 大阪大学, 2004/5/8
- 木下美佳『『伊勢物語』泣く「昔男」——八十三段の場合——』大阪大学古代中世文学研究会第 160 回例会, 大阪大学, 2004/6/26
- 木下美佳「〈禁忌の恋〉における『伊勢物語』の語り』大阪大学古代中世文学研究会第 167 回例会, 大阪大学, 2005/2/20
- 高兵兵「菅原道真の居住空間の表現と白居易』大阪大学古代中世文学研究会第 158 回例会, 大阪大学, 2004/4/11
- 越野優子「伝国冬本の「ひかるきみ」——桐壺巻を中心に』物語研究会第 292 回例会, 横浜市立大学, 2004/6/19
- 越野優子「『柏木』の呼称——伝国冬本を素材として』大阪大学古代中世文学研究会第 162 回例会, 大阪大学, 2004/9/18
- 澁谷浩史「西行の伊勢移住の意図』大阪大学古代中世文学研究会第 165 回例会, 大阪大学, 2004/12/18
- 鈴木隆広『『無名草子』と女性』大阪大学古代中世文学研究会第 167 回例会, 大阪大学, 2005/2/20
- 勢田道生『『新葉和歌集』における後醍醐天皇とその時代』大阪大学古代中世文学研究会第 166 回例会, 大阪大学, 2005/1/29
- 辻村尚子「其角『新山家』の方法』大阪大学国語国文学会, 大阪大学中之島センター, 2005/1/8
- 高嶋藍『『とはすがたり』における二条の庇護と後見——御所追放以前について——』大阪大学古代中世文学研究会第 158 回例会, 大阪大学, 2004/4/11
- 高山明子『『有明の別』左大臣と女院——巻二・三の構造——』大阪大学古代中世文学研究会第 159 回例会, 大阪大学, 2004/5/8
- 丹下暖子『『建礼門院右京大夫集』前半部の構想』大阪大学古代中世文学研究会第 166 回例会, 大阪大学, 2005/1/29
- 陳秉珊「兼好の無常観における荘子の齊物論』大阪大学古代中世文学研究会第 160 回例会, 大阪大学, 2004/6/26
- 中井賢一「夕霧不在の論理』大阪大学古代中世文学研究会第 164 回例会, 大阪大学, 2004/11/13
- 中川照将『『源氏物語』転移する不審』大阪大学古代中世文学研究会第 165 回例会, 大阪大学, 2004/12/18

中川真弓「『菅芥集』についての基礎的考察」大阪大学古代中世文学研究会第162回例会, 大阪大学, 2004/9/18
中川真弓「続群書類従所収『願文集』の嵯峨念仏房関係願文について」中世文学会平成16年度春季大会, 成蹊大学,
2004/5/30(『中世文学会平成十六年度春季大会資料集』p. 4, pp. 29-34)
中村友美「真観と資経本私家集」大阪大学古代中世文学研究会第163回例会, 大阪大学, 2004/10/30
白雨田「宇治十帖における〈香〉の力」大阪大学古代中世文学研究会第161回例会, 大阪大学, 2004/7/17
日名子達郎「朝家の守護者としての頼光」大阪大学古代中世文学研究会第164回例会, 大阪大学, 2004/11/13
細川知佐子「定家の百首歌における「有明」, 中世文学会平成16年度春季大会, 成蹊大学, 2004/5/30(『中世文学会平成
十六年度春季大会資料集』)
松本陽子「武田泰淳『非革命者』論」大阪大学国語国文学会, 大阪大学中之島センター, 2005/1/8

(3)その他(書評・翻訳など)

徳永光展「松田文字著『日本語複合動詞の習得研究——認知意味論による意味分析を通して——』(ひつじ書房)『比較
文化』10, pp. 225-228, 2004/12
徳永光展「国際日本近代文学研究の必要性——ヨーロッパ日本研究協会ワルシャワ大会から——」『全国語学教育学会・
日本教育カウンセラー協会山口支部研究紀要』9, pp. 158-164, 2004/8
徳永光展「翻訳研究の領域」『全国語学教育学会・日本教育カウンセラー協会山口支部研究紀要』9, pp. 164-169, 2004/8

教員の研究活動(2004年度)

1. 後藤 昭雄 教授

1943年生。1970年、九州大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。1982年、文学博士(九州大学)。鹿児島県立短期大学助教授、静岡大学助教授、大阪大学教養部助教授、同教授を経て、1994年4月、現職。専攻：日本古代漢文学。

1-1. 論文

後藤昭雄「『経国集』の作者序論」『続日本紀の諸相』塙書房, pp. 139-158, 2004/10

後藤昭雄「『三宝感応要略録』金剛寺本をめぐる」『説話論集』14, 清文堂, pp. 391-412, 2004/10

後藤昭雄「大江匡衡の「詩境記」——十一世紀日本人所写の中国詩略史——」『台大日本語文研究』6, pp. 1-22, 2004/6

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

和漢比較文学会・代表理事

2003年11月～2005年10月

2. 出原 隆俊 教授

1951年生。京都大学大学院博士後期課程中退。文学修士。県立広島女子大学講師・助教授・京都教育大学助教授・大阪大学助教授を経て現職。専攻：日本近代文学。

2-1. 論文

出原隆俊「〈内部〉と〈外部〉という問題——日本近代文学の一端——」『国語と国文学』81-4, pp. 1-16, 2004/4

出原隆俊「泉鏡花作品における〈内〉と〈外〉——〈魔〉を中心に——」『文学』隔月刊, 5-4, pp. 94-103, 2004/7

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

出原隆俊「〈郊外〉と〈貧民窟〉——生活環境という問題——」フォーラム「環境と文学——〈環境文学〉の可能性とその社会的効用」2004/3/18

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本近代文学会・評議員

1994年4月～2006年3月

日本近代文学会・編集委員

2003年4月～2005年3月

3. 飯倉 洋一 教授

1956年生。1985年九州大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学、九州大学、1998年)。九州大学助手・山口大学専任講師・同助教授・同教授・大阪大学助教授を経て、2004年4月より現職。専攻：日本近世文学。

3-1. 論文

飯倉洋一「人はばけもの」——『西鶴諸国はなし』の発想——」『国文学解釈と鑑賞』別冊, pp. 550-556, 2005/3

飯倉洋一「日本近世〈小説〉と寓言」『古典文学研究』(韓国古典文学会), 26, pp. 151-164, 2004/12

飯倉洋一「上方の「奇談」書と寓言——『垣根草』第四話に即して——」『上方文藝研究』1, pp. 65-75, 2004/5

3-2. 著書

飯倉洋一『秋成考』翰林書房, 2005/2

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

飯倉洋一「日本近世小説史の新領域——「奇談」という書物たち」韓国日本学会第70回学術大会 韓国日本学会, 高麗大
学校, pp. 550-556, 2005/2/19

飯倉洋一「日本近世〈小説〉と寓言——伏斎樗山を中心に——」2004年韓国古典文学会寓言文学国際学術会議「東アジア
ア寓言文学の性格」仁荷大学, 韓国古典文学会・仁荷大韓国学研究所予稿集, pp. 78-82, 2004/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

飯倉洋一 第3回柿衛賞, 財団法人柿衛文庫, 1993/5

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2004年度～2006年度、基盤研究(C)(2)、代表者：飯倉洋一

課題番号：16520103

研究題目：「奇談」書を手がかりとする近世中期上方仮名読物史の構築

研究経費：2004年度 1,000千円

研究の目的：

本研究は申請者のこれまでの「奇談」書研究から展開するものである。すなわち宝暦四(1754)年刊『新增書籍目録』および明和九(1772)年刊『大増書籍目録』という、享保から明和期に出版された書籍の総合目録である両書に「奇談」として登載される百余点の仮名読物の、文学史的な位置づけを、とくに近世上方の初期読本成立と関わらせる形で行おうとするものである。その結果、従来の近世文学史の記述を考え直す視点を提供することになるのではないかという見通しを立てている。「浮世草子」「読本」らの概念を一度白紙に戻し、あらたな文学史を構築することにもつながるだろう。すでに完成している八文字屋全集や、談義本年表・読本年表などの従来型文学史に即した大きな企画にも、それぞれに関わるとともに、それらに相対的視点をもたらすことになるはずである。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

懐徳堂記念会運営委員幹事	2003年4月～現在
日本近世文学会・常任委員	2002年8月～現在
日本近世文学会・委員	2000年8月～現在
柳川市史・専門研究員	1995年4月～現在
「近世文芸」(日本近世文学会機関誌)・編集委員	1991年4月～1995年3月

4. 荒木 浩 助教授

1959年生。1986年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。愛知県立女子短期大学・愛知県立大学講師、助教授、大阪大学教養部助教授を経て現職。専攻：日本文学。

4-1. 論文

荒木浩「明恵『夢記』再読——その表現のありかゆくえ——」(荒木編『仏教修法と文学的表現に関する文献学的考察——夢記・伝承・文学の発生——』(平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書(研究課題番号:14510462)), pp. 7-33, 2005/3

荒木浩「『沙石集』と〈和歌陀羅尼〉説について——文字超越と禅宗の衝撃——」(荒木編『仏教修法と文学的表現に関する文献学的考察——夢記・伝承・文学の発生——』(平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書(研究課題番号:14510462)), pp. 35-49, 2005/3

荒木浩「中世の二重の顔」(荒木編『仏教修法と文学的表現に関する文献学的考察——夢記・伝承・文学の発生——』(平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書(研究課題番号:14510462)), pp. 51-66, 2005/3

荒木浩「中世日本の二重の顔 宝誌和尚像から落語まで」《Le double visage du Japon medieval-de la statue du pretre Hoshi au conte du Rakugo》) (『Le Japon, d'autres visages 日本、もうひとつの顔 Forum 2004 de l'Universite d'Osaka a Strasbourg』編集・発行 阪大フォーラム 2004 委員会大阪大学 21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」), pp. 114-128, 2005/2

荒木浩「玄宗・楊貴妃・安禄山と桐壺帝・藤壺・光源氏の寓意——続古事談から見る源氏物語——」『詞林』36, 大阪大学古代中世文学研究会, pp. 11-29, 2004/10

荒木浩「モノ・ツクモ、カガミ・ココロ」『INTERFACE HUMANITIES』04号特集 モノの人文科学, pp. 18-19, 2004/7/30

4-2. 著書

荒木浩編『仏教修法と文学的表現に関する文献学的考察——夢記・伝承・文学の発生——』平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書(研究課題番号:14510462), 2005/3

荒木浩編(荒木浩責任編集, 海野圭介・中山一麿編集, 中川真弓編集協力)『大阪大学大学院文学研究科共同研究研究成果報告書 小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求』大阪大学, 2005/3

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

荒木浩「影印随心院本『寓言鈔』」荒木編『仏教修法と文学的表現に関する文献学的考察——夢記・伝承・文学の発生——』(平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書(研究課題番号:14510462)), pp. 117-143, 2005/3

荒木浩「随心院蔵『啓白諸句』解題・翻刻——付作者索引」荒木浩編『大阪大学大学院文学研究科共同研究研究成果報告書 小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求』大阪大学, pp.284-305, 2005/3

荒木浩, 項目執筆「木」「秘密」「眼」『宗教のキーワード集』(三木紀人、山形孝夫編, 学燈社, 別冊國文学 No. 57), p. 48, p. 123, p. 137, 2004/11

4-4. 口頭発表

荒木浩「中世日本の二重の顔」《Le double visage du Japon medieval》, 阪大フォーラム 2004, 日本、もう一つの顔(Le Japon, d'autre visage), フランス・ストラスブール, マルクブロック大学, 2004/11/6

荒木浩「随心院所蔵文献と日本古典文学の一隅——源氏物語「北山のなにがし寺」と大雲寺、また『啓白諸句』逸文のことなど——」2004年度大阪大学大学院文学研究科共同研究費研究・大阪大学古代中世文学研究会例会 共同開催, 小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求、第一回研究会発表, 大阪大学文学部第一会議室, 2004/10/30

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

荒木浩 第18回日本古典文学会賞, 1992/6

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2002年度～2004年度、基盤研究(C)(2)、代表者：荒木浩

課題番号：14510462

研究題目：仏教修法と文学的表現に関する文献学的考察——夢記・伝承・文学の発生——

研究経費：2004年度 900千円

研究の目的：

本研究は、古代・中世日本文学研究の立場から、密教を中心とした仏教文献(その対象には、関連する分野である禅宗等諸仏教、神道関係資料、さらには歴史史料や文学資料なども含まれる)の文献学的研究を基盤に、仏教修法に関わる文献や仏教文化圏などの研究を契機として、中世的な文学表現の根元を探ることを目途とする。明恵『夢の記』や『沙石集』研究など、研究代表者がこれまで蓄積した研究成果をもとに、単なる表現研究に留まらない、広く深い文献学的研究を目指す。さらに、より実践的な成果として各種文庫(特にこれまでの継続的対象である随心院などを中心に)に所蔵される文書の調査、紹介、読解などを行う。如上の研究成果は、デジタル画像を中心にCD-ROM等に蓄積し、目録作成等、データベース化を試みるが、調査・研究は、大学院生など若手研究者との共同研究的なスタンスで行い、研究成果は、研究課題総体と関連する調査資料の翻刻、分析、さらに、理論的研究としての論文の形などで公表し、成果報告書に結実していく。またこれまでの研究代表者の研究経過を踏まえ、海外との研究交流を継続する。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

4-7-1. 2004年度、大阪大学文学部共同研究、代表者：荒木浩(分担者7人)

研究題目：小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求

研究経費：750千円(当初配分額)

4-8. 学会役員等の引き受け状況

説話文学会・委員

1995年4月～現在

佛教学会・委員

2003年4月～2004年3月

5. 海野 圭介 助手

1969年生まれ。大阪大学文学部卒。大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了。1999年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士(文学、大阪大学)。日本学術振興会特別研究員を経て2002年現職。専攻：日本文学(和歌文学)

5-1. 論文

海野圭介「随心院門跡伝来の歌書類と九条家」『小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求』(大阪大学大学院文学研究科), pp. 37-58, 2005/3

海野圭介「海外における源氏物語の世界 翻訳と研究」『文学・語学』(全国大学国語国文学会), 179, pp. 44-55, 2004/8

海野圭介、尾崎千佳「東山御文庫蔵『古今伝授御日記』『古今集御講義陪聴御日記』解題・翻刻」『上方文藝研究』(上方文藝研究会), 1, pp. 10-20, 2004/5

5-2. 著書

荒木浩、海野圭介、中山一麿編『小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求』(大阪大学大学院文学研究科), 2005/3

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

海野圭介「慈恵大師七猿歌の周辺」『島津忠夫著作集』5, 和泉書院, 月報, 2004/10

海野圭介「古今集の注釈・享受」「古今集の注釈書」山本登朗、田中登編『平安文学研究ハンドブック』和泉書院, pp. 37-38,

5-4. 口頭発表

海野圭介「シンポジウム 漢字文化圏と〈古典〉：漢訳仏典の受容と和歌」(国際フォーラム「台湾における日本文学・日本語学の新たな可能性」会場：長榮大學日本研究所〔台湾〕), 2004/12

海野圭介「道晃聞書から後水尾院御抄へ——古今集後水尾院御抄の成立と伝来をめぐって——」(和歌文学会第84回関西例会 会場：八坂神社), 2004/4

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2003年度～2005年度、若手研究(B)、代表者：海野圭介

課題番号：15720035

研究題目：御所伝授関連資料の総合的調査及びその基礎的研究

研究経費：2004年度 900千円

研究の目的：

主として江戸時代初期から中期にかけて、天皇、上皇、および近臣公卿との間で行われた伝授を介在させた和歌に関わる学問的な営みである「御所伝授」の実態の究明を総括的なテーマとし、宮内庁書陵部、京都御所東山御文庫、京都大学附属図書館等に保管されている和歌の注釈と伝授に関わる諸資料(以下「伝授資料」と称す)の総合的な把握を目指し、基礎的事項(書誌データ・著述内容の同定・テキスト相互の比較検討と一覧、等)データ化を目指す。具体的課題と達成目標は下記の通りである。

1. 京都大学附属図書館、京都大学総合博物館に所蔵される中院家旧蔵の伝授資料の書誌調査と基礎的書誌データ一覧の作成、著述内容の検討・同定、および、重要資料の画像データ・テキストデータ化。
2. 東山御文庫に所蔵される伝授資料(宮内庁書陵部にマイクロフィルム保管)の著述内容の検討・同定と内容細目の作成。および、重要資料の画像データ、テキストデータ化。
3. 宮内庁書陵部に所蔵される伝授資料(烏丸家旧蔵、桂宮家旧蔵)の書誌的調査と基礎的データ一覧の作成、著述内容の検討・同定、および、画像データ・テキストデータ化。

上記いずれも、今後の研究において共通の基盤となる基幹資料の集積を意図する。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

5-7-1. 2004年度、財団法人 大阪大学後援会 教育研究助成金、代表者：海野圭介(分担者なし)

研究題目：随心院門跡の学芸及び学芸資料に関する基礎的研究

研究経費：600千円

研究の目的：

前近代の日本において学芸(学問・文芸)活動の一翼を担ってきたのは社寺であった。本研究は、撰閑家である九条家との血縁関係や東大寺・春日大社(奈良)との領袖関係により、様々な典籍を現在に伝える随心院門跡(京都市山科区)に所蔵される様々な学芸に関わる典籍・文書類の総合的調査を通して、室町後期～江戸初期の門跡寺院の学芸の実態を明らかにし、併せて、前近代における〈知〉のネットワークの実態の解明に寄与することを目的とする。

5-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-13 比較文学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	0	0	0	0	10	10

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	1	9	2	0	0	12

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

梅津彰人「リルケと安部公房」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 2, pp. 59-76, 2004/5

大廣典子「大正十年代における寺田寅彦の連句観についての考察」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 2, pp. 77-90, 2004/5

崔殷景「三島由紀夫『サド侯爵夫人』論——「一心同体」の幻想をめぐる」『学芸国語国文』(東京学芸大学国語国文学会), 36, pp. 49-60, 2005/3

崔殷景「『わが友ヒットラー』論」『日本近代学研究』(韓国日本近代学会), 9, pp. 99-118, 2004/11

崔殷景「戯曲『サド公爵夫人』と『わが友ヒットラー』の比較——ルネとサド、レームとヒットラーの関係を中心に」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 2, pp. 105-119, 2004/5

荘中孝之『Kazuo Ishiguro と川端康成——遠い記憶のなかの日本——』『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 2, pp. 31-42, 2004/5

出口馨「西條八十詩集『砂金』とメーテルランク」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 2, pp. 43-58, 2004/5

寺内伸介「谷崎潤一郎の映画論——映画・女・国民」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 2, pp. 121-138, 2004/5

平松秀樹「セーニー・サオワボン『ワンラヤーの愛』——タイ文学における新しい女性像——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 2, pp. 91-103, 2004/5

久田原泰子「ユルスナールの『沼地での対話』と能の関わりについて——『江口』から三島由紀夫の『班女』まで——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 2, pp. 1-29, 2004/5

(2)口頭発表

久田原泰子「マルグリット・ユルスナールによる三島由紀夫の『近代能楽集』の翻訳について」日本比較文学会第66回全国大会, 日本比較文学会, 東洋大学/東京, 2004/6/27

- 金華栄「女性が「女性」を描くこと——^{ナヘソク}羅蕙錫の裸体画における「女性」日本比較文学会第40回記念関西大会, 日本比較文学会, 徳島大学/徳島, 2004/11/7
- 李寧「東洋人が描いたロンドンの霧——老舎の『二馬』と漱石の「霧」を中心に——」日本比較文学会第66回全国大会, 日本比較文学会, 東洋大学/東京, 2004/6/26
- 莊中孝之「Kazuo Ishiguro と原爆——Araki Yasusada 事件を参照して——」日本比較文学会第66回全国大会, 日本比較文学会, 東洋大学/東京, 2004/6/26
- 平松秀樹「タイ文学における環境と文学」フォーラム「環境と文学——〈環境文学(Eco-Literature)〉の可能性とその社会的効用」日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト, 大阪大学, 2005/3/18
- 平松秀樹「大蔵経とパリ経」国際フォーラム「台湾における日本文学・日本語学の新たな可能性——国際化の中の日本文学・日本語学」長榮大学, 台南/台湾, 2004/12/12
- 平松秀樹「タイ現代文学に見る女性の「解放」: セーニー・サオワボン『ワンラヤーの愛』を例として」天理大学第4回東南アジア研究特別講義, 2004/12/6
- 平松秀樹「チャート・コープチッティ『裁き』——出家と実存のはざままで」日本比較文学会第40回記念関西大会, 徳島大学, 徳島, 2004/11/7
- 平松秀樹「タイ現代文学に見る女性の「解放」——セーニー・サオワボン『ワンラヤーの愛』を例として」日本比較文学会第66回全国大会, 東洋大学, 2004/6/26
- 大廣典子「瞬間を巡る写真と俳句——福原信三の写真論を中心に——」日本比較文学会第40回記念関西大会, 日本比較文学会, 徳島大学/徳島, 2004/11/7
- 姜素英「横光利一の「機械」と韓国作家朴泰遠の「距離」における内的独白」日本比較文学会第40回記念関西大会, 日本比較文学会, 徳島大学/徳島, 2004/11/7
- 鈴木暁世「芥川龍之介における「透ける耳」の描写——『母』を手がかりとして」日本比較文学会第40回記念関西大会, 日本比較文学会, 徳島大学/徳島, 2004/11/7

(3)その他(書評・翻訳など)

- 田辺裕視(事典項目)「道化の華」志村有弘・渡部芳紀編『太宰治大事典』勉誠出版, pp. 551-553, 2005/1/10

教員の研究活動(2004年度)

1. 内藤 高 教授

1949年生。1986年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。1985年、パリ第4大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士(東京大学、1978年)・文学博士(パリ第4大学、1987年)。同志社大学専任講師、同助教授、同教授を経て、1996年10月現職。専攻：比較文学。

1-1. 論文

内藤高「トポスとしての島」『大阪大学 大学院文学研究科紀要』45, pp. 1-18, 2005/3

1-2. 著書

内藤高『明治の音 西洋人が聴いた近代日本』中央公論新社(中公新書), 2005/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

内藤高「トポスとしての島」日本比較文学会第40回記念関西大会シンポジウム(司会兼パネリスト), 2004/11

内藤高「<水の風景>を通して日仏の交流を考える」京都大学人文科学研究所日仏文化交渉の研究会, 2004/9

内藤高「生と死の表象——近現代文学における生と死」(出原隆俊氏との対談)懐徳堂春季講座第 107 回, 2004/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本比較文学会・理事

2001年6月～現在

2-14 中国文学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	3	0	0	0	0	3

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	0	0	0	0	0

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

加藤聡, 小林春代, 高橋文治, 谷口高志, 富永鉄平, 西尾俊, 藤原祐子「成化本『白兔記』訳註稿」(2)『中国研究集刊』35, pp. 84-138, 2004/6

谷口高志「唐詩の音楽描写——その類型と白居易「琵琶引」——」『日本中国学会報』56, pp. 78-93, 2004/10

富永鉄平「『西遊記』の叙述法について」『待兼山論叢』38, pp. 33-46, 2004/12

(2)口頭発表

なし

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

教員の研究活動(2004年度)

1. 高橋 文治 教授

1953年生。1982年、京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学。文学修士(京都大学、1979年)。追手門学院大学講師、同助教授、同教授を経て、2000年10月現職。

1-1. 論文

赤松紀彦, 井上泰山, 金文京, 小松謙, 佐藤晴彦, 高橋繁樹, 高橋文治, 竹内誠, 土屋育子, 松浦恒雄(共著)「元刊雜劇の研究(一)「尉遲恭三奪槊」全訳校注」『京都府立大学学術報告 人文・社会』56, pp. 1-44, 2004/12

沖田道成, 加藤聡, 佐藤貴保, 高橋文治, 向正樹, 山尾拓也, 山本明志(共著)『『烏臺筆補』訳註稿(2)』『内陸アジア言語の

研究』19, pp. 109-155, 2004/7

加藤聰, 小林春代, 高橋文治, 谷口高志, 富永鉄平, 西尾俊, 藤原祐子(共著)「成化本『白兔記』訳註稿(二)」『中国研究集刊』35, pp. 84-138, 2004/6

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

高橋文治[書評]「森田憲司著『元代知識人と地域社会』」『東洋史研究』63-4, pp. 138-147, 2005/3

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

高橋文治 東方学会賞, 東方学会, 1989/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(C)(2)、代表者：高橋文治

課題番号：15520223

研究題目：成化本『白兔記』についての基礎的研究

研究経費：2004年度 直接経費 900千円

研究の目的：

成化本『白兔記』は、南戯系『白兔記』の最古のテキストであるばかりでなく、南戯そのものの現存する最古の版本である。したがって、その歴史的価値はきわめて高いが、一方本書は粗雑で俗なテキストでもあり、誤字、脱字、衍字、訛字、当て字が多いばかりでなく、当時の俗語、方言、スラングもふんだんに使われており、非常に難解である。そのため、1967年に発見されて以来、本格的な研究は殆ど発表されていない。本研究は、この成化本『白兔記』の注釈書、翻訳書を作成すべく、その基礎作業として、本書を校訂しつつコンピューター入力し、俗語や方言、スラングの意味の確定を行い、使用される曲牌について可能な限り格律の確定を行うことを第一の目的とする。また、初期の南戯の性格、ならびに初期の戯曲テキストの性格、劉知遠と李三娘の物語の演変、南曲の文学史的意義などについても、あわせて考察したい。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2. 浅見 洋二 助教授

1960年生。東北大学大学院文学研究科博士課程中途退学。文学修士(東北大学、1986年)。東北大学助手、山口大学助手、同講師、同助教授を経て、1996年10月、現職。専攻：中国文学。

2-1. 論文

浅見洋二「作者の夢、読者の夢——宋代における詩の解釈学をめぐる——」『文藝論叢』(大谷大学文藝学会), 64, pp. 26-44, 2005/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

浅見洋二[翻訳]『幸福なる魂の手記』楊煉著, 思潮社, pp. 1-239, 2005/3

浅見洋二[批評]「言葉と物——古典中国の詩と詩学 11——」『るしおる』(書肆山田), 56, pp. 122-127, 2005/3

浅見洋二[批評]「言語と鏡——古典中国の詩と詩学 10——」『るしおる』(書肆山田), 54, pp. 110-115, 2004/8

浅見洋二[批評]『空谷幽蘭』と『水月鏡花』(続)——古典中国の詩と詩学 8——」『るしおる』(書肆山田), 53, pp. 116-121, 2004/5

2-4. 口頭発表

浅見洋二「『形似』の変容——いわゆる宋詩の日常性をめぐって——」国際シンポジウム『伝統中国の日常空間』2005/1

浅見洋二「作者の夢、読者の夢——宋代における詩の解釈学をめぐって——」大谷大学文藝学会学術公開講演会, 2004/12

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-15 国語学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	4	1	4	0	1	10

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	6	0	0	0	6

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

衣畑智秀「副助詞ダニの意味と構造とその変化——上代・中古における——」『日本語文法』(日本語文法学会), 5-1, pp. 1-18, 2005/3

衣畑智秀, 楊昌洙「役割語としての「軍隊語」の成立」『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』(平成15年度～平成16年度科学研究費基盤研究(c)研究成果報告書), pp. 73-101, 2005/3

衣畑智秀「古代語・現代語の「逆接」——古代語のトモ・ドモによる意味対立を中心に——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 83, pp. 49-58, 2004/12

小川志乃「カラニの一用法——接続助詞カラの成立の可能性をめぐって——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 82, pp. 47-59, 2004/6

高宮幸乃「ヤラ(ウ)による間接疑問文の成立——不定詞疑問を中心に——」『三重大学日本語学文学』(三重大学日本語学文学会), 15, pp. 17-31, 2004/6

竹内史郎「上代語における助詞トによる構文の諸相」『国語語彙史の研究』(国語語彙史研究会), 24, 和泉書院, pp. 167-184, 2005/3

竹内史郎「サニ構文の成立・展開と助詞サニについて」『日本語の研究』(日本語学会), 1-1(『国語学』通巻220号), pp. 2-17, 2005/1

竹内史郎「ム型・ブ型・ミス型動詞とミ語法の形態論的必然性による推移」『萬葉』(萬葉学会), 191, pp. 19-40, 2005/1

林浩恵「上代に見られる形容詞語幹の副詞的用法——意味と形態との関係を中心に——」『待兼山論叢(文学篇)』(大阪大学文学会), 38, pp. 17-31, 2004/12

深澤愛「外来語の片仮名表記と表記体——『太陽』前誌群による考察——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 83, pp. 36-48, 2004/12

(2)口頭発表

黒木邦彦「スル形式の意味の変遷」筑紫国語談話会 200 回記念大会, 九州大学/福岡県, 2005/1/29

黒木邦彦「形式と意味内容——現代日本語と古代日本語のテンス・アスペクト——」熊本県立大学日本語日本文学会総会, 熊本県立大学, 2004/6/26

高宮幸乃「格助詞を伴わないカの間接疑問文について」大阪大学国語国文学会 平成 16 年度総会, 大阪大学中之島センター, 2005/1/8

蜂矢真弓「被覆形・露出形の型の通時的相違」筑紫国語学談話会 200 回記念大会, 九州大学/福岡県, 2005/1/29

深澤愛「外来語の片仮名表記と表記体——『太陽』と『太陽』前誌群を資料として——」第 4 回表記研究会, キャンパスプラザ京都, 2004/9/26

深澤愛「漢字表記から片仮名表記へ——近代における外来語表記の移行について——」日本語学会 2004 年度春季大会, 実践女子大学, 2004/5/23

(3)その他(書評・翻訳など)

岡島昭浩, 衣畑智秀, 大田垣仁, 覚野吾郎, 鳩野恵介「ビジン日本語その他資料」『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』(平成 15 年度～平成 16 年度科学研究費基盤研究(C)研究成果報告書), pp. 73-101, 2005/3

小川志乃「抄注・北原白秋第一詩集『邪宗門』語彙」項目執筆『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』(平成 15 年度～平成 16 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書), pp. 45-71, 2005/3

竹内史郎「抄注・北原白秋第一詩集『邪宗門』語彙」項目執筆『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』(平成 15 年度～平成 16 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書), pp. 45-71, 2005/3

蜂矢真弓「抄注・北原白秋第一詩集『邪宗門』語彙」項目執筆『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』(平成 15 年度～平成 16 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書), pp. 45-71, 2005/3

林浩恵「抄注・北原白秋第一詩集『邪宗門』語彙」項目執筆『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』(平成 15 年度～平成 16 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書), pp. 45-71, 2005/3

教員の研究活動(2004 年度)

1. 蜂矢 真郷 教授

1946 年生。京都大学文学部卒業、同志社大学大学院文学研究科修士課程修了。博士(文学)。親和女子大学専任講師、同助教授、帝塚山学院大学助教授、奈良女子大学文学部助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：国語学。

1-1. 論文

蜂矢真郷『長塚節歌集』の形容詞『国語語彙史の研究』(国語語彙史研究会), 24, 和泉書院, pp. 241-258, 2005/3

蜂矢真郷「一九六五～一九七五年度頃の略字」『国語文字史の研究』(国語文字史研究会), 8, 和泉書院, pp. 197-214, 2005/3

蜂矢真郷「ウマシクニソとウマシキクニソ——ウマシ [シク活用] の問題から——」『萬葉』(萬葉学会), 190, pp. 52-59, 2004/9

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

蜂矢真郷「抄注・北原白秋第一詩集『邪宗門』語彙」項目執筆『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』(平成 15 年度～平成 16 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書), pp. 45-71, 2005/3

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

蜂矢真郷 第17回新村出賞, 新村出記念財団, 1998/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2003年度～2004年度、基盤研究C(2)、代表者:蜂矢真郷

課題番号:15520290

研究題目:文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について

研究経費:2004年度 直接経費 900千円 間接経費 0円

研究の目的:

従来の、歴史的文献に基づく国語史(日本語史)研究では、「口語性」を反映していると言われる文献が特に重要視されてきた。また、特に口語的でない文献からも、「口語性」が露呈していると言われる部分を恣意的に取り出して利用するということが行われてきた。本研究は、このような従来の観点を裏返し、むしろ「口語性」と不連続・不整合を見せる語彙あるいは形態を積極的に取り上げ、その由来、発展の過程を明らかにすることを目的とする。

従来の国語史は、「口語性」という必ずしも実態の明らかでない尺度によって文献を恣意的に選択し、切り取ることによって成立している一面がある。本研究はこれとまったく発想を異にし、文献の作り手が国語をどのように認識し、自らの表現を作り上げているかという観点に基づく研究であり、文献が本来持っている主体性、表現性を中心とする語彙・語法研究である。また、今までは切り捨てられてきた資料に光を当てることによって、国語のより豊かな実態が明らかになるであろう。本研究を押し進めることにより、日本語の歴史的な流れはより重層的・立体的に捉えられることになるはずであり、従来の硬直した国語観にも大幅な改変が迫られることもありうる。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

国語学会(2004年4月より日本語学会と名称変更)・常任査読委員	2004年5月～現在
同上・評議員	2000年4月～現在
訓点語学会・委員	2003年11月～現在
国語文字史研究会・委員	2002年4月～現在
国語語彙史研究会・幹事, 代表幹事	2001年4月～現在
萬葉学会・編輯委員	1979年12月～現在

2. 金水 敏 教授

1956年生。1982年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学。文学修士(東京大学、1981年)。東京大学助手、神戸大学教養部講師、大阪女子大学助教授、神戸大学文学部助教授を経て、2000年4月現職。専攻:国語学/言語学。

2-1. 論文

金水敏「歴史的に見た「いる」と「ある」の関係」日本語文法学会(編)『日本語文法』5-1, くろしお出版, pp. 138-157, 2005/3

金水敏「近代日本小説における「(人が)いる/ある」の意味変化」『待兼山論叢(文学篇)』(大阪大学大学院文学研究科), 38, pp. 1-14, 2004/12

金水敏「研究手帳:〈アルヨことば〉その後」『いずみミニ通信』3, 和泉書院, pp. 5-6, 2004/11

金水敏「全国共通語「おる」の機能とその起源」近代語学会(編)『近代語研究』12, 武蔵野書院, pp. 393-412, 2004/8

金水敏「文脈の結果状態に基づく日本語助動詞の意味記述」影山太郎・岸本秀樹(編)『日本語の分析と言語類型』柴谷方良教授還暦記念論文集, くろしお出版, pp. 47-56, 2004/7

金水敏「敬語動詞における視点中和の原理について」音声文法研究会(編)『文法と音声 IV』くろしお出版, pp. 181-192, 2004/5

金水敏「日本語の敬語の歴史と文法化」『言語』33-4, 大修館書店, pp. 34-41, 2004/4

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

金水敏〔書評〕「李 長波著『日本語指示体系の歴史』」『国語学』日本語学会, 55-3 (通巻第 218 号), pp. 1-6, 2004/7

2-4. 口頭発表

金水敏, 吉村和真「近代日本漫画の言葉と身体」阪大フォーラム 2004 〈ストラスブール〉「日本、もうひとつの顔」マルクブロック大学パレ・ユニヴェルシテール, 119 ホール(フランス: ストラスブール), 大阪大学+21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」2004/11/6

Kinsui, Satoshi, "Interaction between Argument and Non-argument in the Historical Change of the Japanese Syntax," Oxford-Kobe Seminars, The Second Linguistics Seminar International Symposium: The History and Structure of Japanese Kobe Institute Oxford University, 2004/9/29

金水敏「「俺」の歌、「僕」の歌——日本流行歌に見る「男性性」の表現——」「日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開」国際学術会議 北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟, 2004/9/3

Kinsui, Satoshi, "Interaction between Honorification and Identification in the History of Japanese Grammar," Functional Approaches to Japanese Grammar: Towards the Understanding of Human Language, August 20-22, 2004 University of Alberta University of Alberta, 2004/8/22

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

金水敏, 原口裕他 豊田賞, 日本英学史学会, 1992/10

金水敏, 田窪行則 日本認知科学会論文賞, 日本認知科学会, 1991/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2004 年度～2006 年度、基盤研究(B)(1)、代表者：金水敏

課題番号：16320059

研究題目：日本語史の理論的・実証的基盤の再構築

研究経費：2004 年度 1,800 千円

研究の目的：

本研究は、日本語の歴史的研究を発展させていく上で、伝統的な研究によって蓄積された知見と、新たな言語理論によってもたらされる視点を統合・整理し、いかなる研究形態がもっとも有用であるかという点についての指針を提示することを目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 21 世紀 COE プログラム分担

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本語学会(旧・国語学会)・評議員

2003 年 4 月～2009 年 3 月

言語処理学会・理事	2004年3月17日～2008年評議員会当日
日本語文法学会・評議委員	2003年4月～2007年3月
同上・学会誌委員	2000年12月～2004年3月
日本言語学会・委員	2003年4月～2006年3月
語用論学会・編集委員, 大会運営委員(企画担当)	2004年～現在
同上・運営委員	2002年4月～2004年3月
同上・編集委員	2002年4月～2004年3月
訓点語学会・委員	2003年5月16日～現在
関西言語学会・委員	2000年～現在

3. 岡島 昭浩 助教授

1961年生。1987年、九州大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(九州大学、1986年)。九州大学文学部助手、京都府立大学女子短期大学部講師・助教授、福井大学教育学部(教育地域科学部)助教授を経て現職。専攻：国語学。

3-1. 論文

岡島昭浩「大矢透以前の史的五十音図研究」『語文』82, pp. 37-46, 2004/6

3-2. 著書

前田富祺監修(編集・執筆 安部清哉, 岡島昭浩, 小椋秀樹, 小野正弘, 木村義之, 佐藤貴裕, 田中牧郎, 矢田勉, 山本真吾, 渡部圭介)『日本語源大辞典』小学館, 2005/2

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

岡島昭浩『『俚言集覧』と『増補俚言集覧』——『今昔物語(集)』の引用を中心に——』第76回国語語彙史研究会, 2004/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2003年度～2004年度、基盤研究(C)(2)、代表者：岡島昭浩

課題番号：15520287

研究題目：近世後期から近代前期にかけての五十音図研究についての研究

研究経費：2004年度 直接経費 500千円

研究の目的：

五十音図の歴史的研究を最初に行ったのは明治から昭和初期にかけての国語学者、大矢透であり、それ以前には歴史的・実証的な研究はなかったものと考えられてきた。たとえば平田篤胤が『古史本辞経』で示したのは、観念的で独断的なものであった。しかし、その一方で、実証的・歴史的な研究も行われていた。たとえば、伴信友の語学研究であり、さらにはその弟子である谷森善臣の語学研究がそれである。伴信友が『比古婆衣』の中で、いろは歌に先行する「たみにの歌」に言及していることは、知られておらず、「たみにの歌」の研究は、大矢透に始まるとの見方が一般的である。谷森善臣は伴信友の弟子に当たる人物であるが、その書き残したものをみると、「たみにの歌」への言及があり、さらには五十音図の研究もある。その五十音図研究が今まで国語学界に未紹介であったことは残念である。この谷森善臣の稿本類は宮内庁書陵部に蔵されているが、かなり多量なものであり、随筆のスタイルでもあり、さまざまな箇所に分かれて出てく

るので、基本的調査が必要である。大矢透以前の五十音図研究がどこまで進んでいたのかを見極めることを目標とし、国学者の国語学から近代的な言語史研究へと、どのように発展していったのかについて考える一助としたい。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

日本語学会 大会企画運営委員・電子化委員
国語語彙史研究会 委員

2003年6月～2006年5月
2003年4月～現在

4. 岡崎 友子 助手

1967年生。2004年、大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学、大阪大学)。同志社女子大学非常勤講師。2004年現職。専攻：国語学。

4-1. 論文

岡崎友子「「コソアで指示する」ということ——直示(ダイクシス)についての覚え書き——」『語文』83(大阪大学国語国文学会), pp. 59-70, 2004/12

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

岡崎友子「項目「ゆらゆる」他：抄注・北原白秋第一詩集『邪宗門』語彙」(蜂矢真郷編集), 2005年3月『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』2003～2004年度科学研究費基盤研究(C)(2), 研究成果報告書, pp. 45-71, 2005/3

4-4. 口頭発表

岡崎友子「台湾における日本語学への提言」国際フォーラム「台湾における日本文学・日本語学の新たな可能性——国際化の中の日本文学・日本語学——」(於長榮大学, 台南, 台湾), 2004/12/12

岡崎友子「心的なモデルによる現代語・古代語の指示詞の考察——ソ系の曖昧指示・否定対極表現を中心に——」日本語学会 2004年度秋期大会(於熊本大学), 2004/11/14

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

岡崎友子 第二十二回 新村出記念財団研究助成金, 2004/11/21

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-16 英米文学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	11	2	0	0	7	20

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	5	2	0	0	7

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

伊藤佳子「The Return of the Native —— Clym の顔を読む」Osaka Literary Review (Osaka University), 43, pp. 73-86, 2004/12

伊藤佳子『『はるか群衆を離れて』における擬人法』『ハーディ研究』(日本ハーディ協会), 30, pp. 53-66, 2004/9

市橋孝道 “The Representation of the ‘Gentleman’ in Barry Lyndon: The Narrative Function of the German Setting,” Machikaneyama Ronso (Literature) (Osaka University), 38, pp. 17-32, 2004/12

垣口由香 “The Inevitable Destruction of the Mediated Self: The Future Dead Tape-recording and Tape-recorded in Beckett’s Krapp’s Last Tape,” Osaka Literary Review (Osaka University), 43, pp. 153-164, 2004/12

垣口由香「研ぎ澄まされた聴覚——『しあわせな日々』におけるウィニーの腹話術的声の身体——」玉井暲, 仙葉豊編『病いと身体の英米文学——阪大英文学会叢書1——』(英宝社), pp. 286-306, 2004/5

片山美穂「ファンタジーの世界——a「グラス・タウン」」中岡洋, 内田能嗣編『ブロンテ姉妹を学ぶ人のために』(世界思想社), pp. 44-51, 2005/2

片山美穂「母なる大地に棄てられた子供——Emily Bronte の詩における死のテーマ——」『ブロンテ・スタディーズ』(日本ブロンテ協会), 4-2, pp. 29-40, 2004/10

小久保潤子「アメリカン・ゴシック」森岡裕一, 片渕悦久編『新世紀アメリカ文学史——マップ・キーワード・データ——』(英宝社), pp. 76-84, 2004/10

桐山恵子『『ドリアン・グレイの肖像』における不在の悪魔と逆転した空間』『オスカー・ワイルド研究』(日本オスカー・ワイルド協会), 6, pp. 55-63, 2004/11

高橋信隆 “Haunted America: The American Scene as Gothic Landscape”, Osaka Literary Review (Osaka University), 43, pp. 87-103, 2004/12

高橋信隆「暴力・リンチ・カニバリズム」森岡裕一, 片渕悦久編『新世紀アメリカ文学史——マップ・キーワード・デー

- ター——』(英宝社), pp. 157-165, 2004/10
- 武内正美「リリパットの国家身体——『ガリバー旅行記』における近代古代論争——」玉井暲, 仙葉豊編『病いと身体の英米文学——阪大英文学会叢書 1——』(英宝社), pp. 29-64, 2004/5
- 田中沙織 “Mirror Images Reflecting Self: Narcissism in F. Scott Fitzgerald’s This Side of Parade,” Osaka Literary Review (Osaka University), 43, pp. 123-140, 2004/12
- 橋幸子 “A Beautiful and Damped Woman: Gloria Gilbert Patch as a Heroine,” Osaka Literary Review (Osaka University), 43, pp. 141-152, 2004/12
- 橋幸子「アメリカン・ドリーム」森岡裕一, 片渕悦久編『新世紀アメリカ文学史——マップ・キーワード・データ——』(英宝社), pp. 85-93, 2004/10
- 中井麻記子 “The Defective Copy of God: Imitative Acts in Of Human Bondage,” Osaka Literary Review (Osaka University), 43, pp. 105-122, 2004/12
- 三浦誉史加 “The Disappearance of ‘Narration’ in The Winter’s Tale,” Osaka Literary Review (Osaka University), 43, pp. 45-55, 2004/12
- 三浦誉史加「『終わりよければすべてよし』と精神的不調——『二人の貴公子』を照射して——」玉井暲, 仙葉豊編『病いと身体の英米文学——阪大英文学会叢書 1——』(英宝社), pp. 111-132, 2004/5
- 森本道隆 “The Structure of ‘Collaboration’ in Sam Shepard’s Fool for Love,” Machikaneyama Ronso (Literature) (Osaka University), 38, pp. 33-46, 2004/12
- 吉野麻子 “Abandoned and Natural Children’ in Jane Austen’s Emma,” Osaka Literary Review (Osaka University), 43, pp. 57-71, 2004/12

(2)口頭発表

[学会]

- 市橋孝道 “‘fable-land’と Kindergarten —— The Newcomes にみる教育の寓話 ” 日本ヴィクトリア朝文化研究学会 第4回全国大会, 甲南大学, 2004/11/20(『研究発表要旨』 p. 2)
- 片山美穂 『島の人々』におけるゴシック」日本プロンテ協会 2004 年大会, シンポジウム『島の人々』に描かれた政治、幻想、および喜劇性について」甲南女子大学, 2004/10/16
- 小久保潤子 「自制とパッション——The Scarlet Letters における分裂した男性主体」日本アメリカ文学会第 43 回大会, 2004/10/20
- 小久保潤子 『『ウェイクフィールド』を読み直す』日本ホーソン協会 2004 年大会, ワークショップ, 2004/5/21
- 三浦誉史加 『二人の貴公子』における恋の病——医者と患者の境界線の消失」日本英文学会中国四国支部第 57 回大会, 山口大学, 2004/10/23 (『第 57 回大会研究発表・シンポジウム梗概』 p. 4)

[研究会]

- 武内正美 「政治的身体としての衣装——『桶物語』の〈衣装哲学〉——」18 世紀英文学研究会, 同志社大学, 2004/7/24
- 田中沙織 「ナルシシズムとフィッツジェラルド」関西地区院生談話会, 2004/12/4

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

教員の研究活動(2004 年度)

1. 玉井 暲 教授

1946 年生。1969 年、大阪大学文学部(英文学専攻)卒業。1971 年、大阪大学大学院文学研究科修士課程(英文学専攻)修了。文学博士(大阪大学、2000 年)。大阪大学助手、大阪府立大学助手、和歌山大学助教授、大阪大学文学部助教授を経て、1999 年 1 月現職。専攻：英文学。

1-1. 論文

- 玉井暲「J. ヒリス・ミラーの批評再考——ハーディの詩「引き裂かれた手紙」をめぐって——」『テキストの地平——森晴秀教授古稀記念論文集』英宝社, pp. 183-197, 2005/3
- 玉井暲『『ヴィレット』』『ブロンテ姉妹小説を学ぶ人のために』世界思想社, pp. 211-228, 2005/2
- 玉井暲「ペイターとロマンティック・コネクション」『日本ペイター協会会報』25, pp. 5-6, 2004/10
- 玉井暲「人の顔、風景の顔」『日本ハーディ協会ニュース』56, pp. 1-2, 2004/9
- 玉井暲「英文学研究の喜び」『週刊読書人』2538, p. 8, 2004/5

1-2. 著書

- 玉井暲, 仙葉豊と共編『病いと身体の英米文学——阪大英文学会叢書 1——』英宝社, 2004/5

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 玉井暲, マイケル・ルーイス(書評)『ゴシック・リヴァイヴァル』(栗野修司訳、英宝社)『週刊読書人』2565, p. 5, 2004/12

1-4. 口頭発表

- 玉井暲「ワイルド文学と身体」日本ワイルド協会・第29回大会シンポジウム, 2004/11
- 玉井暲「世紀末文学と身体」京都女子大学文学部英文学会, 2004/11
- 玉井暲「オスカー・ワイルド『サロメ』の魅力——言葉と映像の創る世界」愛知淑徳大学文学部英文学会, 2004/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

- 1-6-1. 2002年度～2004年度、萌芽研究、代表者：玉井暲

課題番号：14651083

研究題目：イギリス19世紀「社交界小説(fashionable novel)」の研究

研究経費：2004年度 600 千円

研究の目的：

本研究は、イギリス19世紀前半の1825～50年頃に現れた「社交界小説(fashionable novel)」と呼ばれる一群の小説のもっている文学的・文化的意味を考察し、その新たな今日的意義を明らかにしようとするものである。

まず、「社交界小説」の執筆およびその出版に関わった作家たち、たとえば Bulwer-Lytton, Benjamin Disraeli, Robert Plumer Ward, T.H. Lister, Mrs Gore, T.E. Hook, Charlotte Susan Bury らの作品や一次資料を収集する。次に、この派の作家たちの活動とその意味を論じた先行研究およびそれに関わる種々の文献を収集し、それらの検証作業を行わねばならない。

また、「社交界小説」に属する作品の中から、主要な小説作品を選別し、それらをまとめて復刻出版することも検討する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

- 1-7-1. 2004年度

玉井暲(代表)「環境と文学——環境文学の可能性とその社会的効用」、日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト「文学・芸術の社会的媒介機能——芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」(藤田治彦代表)、850 千円

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本英文学会・学会誌『英文学研究』編集顧問

2004年4月～現在

日本英文学会中国四国支部学会・『中国四国英文学研究』編集委員	2003年10月～現在
日本英文学会・理事	2001年4月～現在
日本ブロンテ協会・理事	2004年4月～現在
阪大英文学会・会長	2003年11月～現在
日本オスカー・ワイルド協会会長	2003年11月～現在
日本ヴィクトリア朝文化研究学会・理事	2001年11月～現在
日本テキスト研究学会・幹事	2001年8月～現在
日本ジョージ・エリオット協会・理事	1997年11月～現在
日本トマス・ハーディ協会・運営委員	1992年10月～現在
日本ウォルター・ペイター協会・理事	1991年10月～現在

2. 森岡 裕一 教授

1950年生。1979年、大阪大学大学院修士課程修了。文学修士(大阪大学、1979年)。大阪大学助手、講師、奈良女子大学助教授、大阪大学文学部助教授を経て、2000年4月現職。専攻：アメリカ文学。

2-1. 論文

森岡裕一「酔いどれアメリカ文学」森岡裕一他編『新世紀アメリカ文学史』英宝社, pp. 166-174, 2004/10

2-2. 著書

森岡裕一(共編著)『新世紀アメリカ文学史』英宝社, 2004/10

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2001年度～2004年度、基盤研究(C)、代表者：森岡裕一

課題番号：13610567

研究題目：アメリカ文学／文化とアルコールの関係に関する研究

研究経費：2004年度 500千円

研究の目的：

本研究は植民地時代から現代にいたるアメリカの歴史を射程に入れ、アメリカ文化における酒の持つ意味を、民族、地域間の格差を考慮しつつ考察する。とりわけ19世紀の節酒／禁酒運動にみられる発想法とレトリックを文学との関わりの中であとづけ、革新主義時代アメリカのイデオロギーに文学者たちがいかなる反応をしたかをさぐる。20世紀初頭にあっては、作家たちの反禁酒法的態度をある種のモダニズムの身振りとしてとらえる視点から分析を進め、今日にいたるまでのアメリカの酒文化と芸術創造の関わりを探りたい。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本アメリカ文学会・関西支部副支部長	2003年4月～2005年3月
同上・代議員	2002年4月～2005年3月
同上・関西支部評議員	1997年4月～現在

3. 服部 典之 助教授

1958年生。1981年、大阪大学文学部(英文学専攻)卒業。1983年、大阪大学大学院文学研究科修士課程修了。同博士課程中途退学。文学修士(大阪大学、1983年)。文学博士(大阪大学、2003年)。和歌山大学教育学部助手、大阪大学言語文化学部講師、同助教授を経て、2000年10月現職。専攻：英文学。

3-1. 論文

- 服部典之「反乱のスコットランド——ジャック大佐とエドワード・ウェイバリー」富山太佳夫、加藤文彦、石川慎一郎編『テキストの地平——森晴秀教授古稀記念論文集』英宝社, pp. 183-197, 2005/3
- 服部典之「亡命者たちとバラバラ死体——『オルノーコ』から『ロビンソン・クルーソー』へ」玉井暲、仙葉豊編『病いと身体の英米文学——阪大英文学会叢書1——』英宝社, pp. 5-28, 2004/5
- 服部典之「<トレインスポッティング>スコットランド」『英語青年』研究社, pp. 24-26, 2004/4

3-2. 著書

木村茂雄, 服部典之他『ポストコロニアル文学の現在』晃洋書房, 2004/6

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2003年度～2005年度、萌芽研究、代表者：服部典之

課題番号：15652017

研究題目：イギリス小説起源論におけるスコットランド問題

研究経費：2004年度 直接経費 700千円

研究の目的：

本研究は、この20年ほど行われてきた「イギリス小説起源論」に、スコットランドという新たな観点を導入することで、イギリス小説という<世界「近代小説」>の元祖とされる文化媒体の誕生のダイナミズムを解明する研究である。また、イギリス18世紀から19世紀初頭のスコットランド人及びスコットランド文化が「小説の起源」に果たしてきた大きな役割を明らかにすることで、文学と政治経済社会などとの関わりが明らかになると考えている。文学のみに限定されず、歴史・政治・経済などの面でスコットランドを考察することは、分野横断的研究という新たな試みをすることであり、この意味において萌芽研究で申請する次第である。

イギリス小説の起源に関しては、Ian Wattの古典的研究 *The Rise of the Novel* (1957) によって、Daniel Defoe や Henry Fielding が最初の小説家とされて以来、18世紀イングランド人が、社会の近代化に即した形で近代社会の市民層の新たな文学ジャンルとして「小説」を創始したということが、定説になっていた。ところが、Lennard J. Davis の *Factual Fictions* :

The Origins of the English Novel(1983)によって、小説がそれだけで自立したジャンルとして突如創生されたのではなく、17世紀には「ニュース」というジャンルと「ノベル」という「フィクションか事実か」の区別を問わない「差異化されない混交体」が存在し、ここから二者に分かれていったことが証明された。これにより、17世紀から18世紀の社会政治的背景と「小説の起源」を連続させて論じるという視野が生まれた。その後、様々な起源論が生まれ、画期的なHomer Obed Brownの*Institutions of the English Novel*(1997)が発表された。これは、「小説」の起源は、その制度が整った時点で遡及的に確定されるのだとし、スコットランド人、Walter Scott(1771~1832)が国民小説を築いたとし、スコットランド人であるScottとイングランド人Defoeが小説起源に大きく関わることを主張し、スコットランド問題が、小説起源に関わる重要な視座であることを示唆した。私の研究の着想の契機となったのはこのBrownの説である。

しかしながら、H.O.Brownはスコットランド問題に着目しながらも、現実の政治社会の動きにまで分析が及んでいないため、スコットランド問題を十分論じているとは言いがたい。

本研究の目的は、第一に、イングランド・スコットランド合併(1707)締結に大きな役割を果たしたデフォーの一次資料をスコットランドの公文書等に直接あたることによって、なぜ彼が59才という晩年になって初めて*Robinson Crusoe*(1719)という小説を書くに至ったかという経緯を探り直ことである。第二に、この合併が起こった後18世紀のスコットランド人の多くの知識人(Tobias SmollettやJames Boswellなど)が文学に携わるようになりロンドンに出ていった背景、および特にSmollettがDefoeの悪漢小説の系譜を引いている意義をスコットランド・イングランド問題から明らかにする。第三に19世紀のWalter Scottの編纂したデフォー全集を検討し、彼がデフォーを再評価しその影響を受けることで、真の意味でスコットランドとイングランドの文化が合併した国民小説(「ブリティッシュ・ノベル」)を確立したことの意義を探ることを目的とする。

イングランドが近代国家を形成する際に、スコットランドと合併して、対フランス・対カトリック同盟をくむことが必須であったとされる。このような時代形成に直接関わったDefoeの一次資料を探りその役割を明らかにすることは、これまで歴史学、文学などの観点を合同した形で研究されたことはなかった。また、イングランド・スコットランド合併の政治・文化的波紋が19世紀に至るイギリスの文化的変遷に色濃く現れており、それらが生み出した「イギリス小説」は次の19世紀の世代のイギリス人が世界に躍進する、モラル的基盤を形成したと思われる。このような広い観点からスコットランド問題が研究されることはなかった。たとえばイギリス近代国家形成を論じたもっとも有名な著書であるLinda Colley, *Britons: Forging the Nation*(1992)においても、当時の文学の果たした大きな意味が指摘されながらも、その扱いは不十分なものである。本研究、「イギリス小説起源論におけるスコットランド研究」は、こうして、18世紀から19世紀前半にわたる文学・歴史・文化研究のなかで欠落していた観点を補い、新たな角度から文化のダイナミズムを探る研究である。この萌芽的研究が結実するならば、新たな「イギリス小説起源論」が期待されるのみならず、この時代の歴史・文化的に重要な新局面が明確になると期待される。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

4. 片瀨 悦久 助教授

1965年生。1995年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士(大阪大学、1991年)。北陸大学講師、同志社女子大学講師、助教授を経て、2003年4月現職。専攻：アメリカ文学、20世紀ユダヤ系小説、現代小説。

4-1. 論文

片瀨悦久「アメリカのユダヤ人、その生と死——『ラヴェルスタイン』における病い、身体、自己」玉井暲, 仙葉豊編『病いと身体の英米文学』英宝社, pp. 65-85, 2004/5

4-2. 著書

森岡裕一, 片渕悦久他『新世紀アメリカ文学史——マップ、キーワード、データ——』英宝社, 2004/10

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

片渕悦久「Saul Bellow の “The Old System” ——ユダヤ系アメリカ文学入門として——」『英語青年』150・2, pp. 84-85, 2004/5

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

日本ソール・ベロー協会・理事

2004年10月～現在

5. ポール・ハーヴィ 外国人教師

1961年生。1980年9月、Oriental College, Oxford University 入学。1986年6月 Oriental College, Oxford University 卒業退学 (MA, MPhil 取得)。MA English Language and Literature, MPhil English Studies 1500-1660 (Renaissance Poetry and Prose) Oxford University。1986年10月、京都大学教養部招聘研究員 (1年間)。1988年4月、大阪大学言語文化学部講師。1990年4月、カナダ商工会議所専務理事 (1年間)。1991年4月、大阪大学言語文化学部講師。1995年4月、大阪大学言語文化学部助教授。1999年10月、大阪大学文学部・大阪大学大学院文学研究科外国人教師に着任し現在に至る。専攻：シェイクスピア／イギリスルネッサンス／英文学。

5-1. 論文

Harvey, Paul A.S. and Bernice W. Kliman "Ninagawa Macbeth: Fusion of Japanese and Western Theatrical Styles" in Bernice W. Kliman, *Macbeth* (second edition) Manchester: Manchester University Press, pp. 159-182, 2004

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

Harvey, Paul A. S., "Unsex Me Here: Lady Macbeth in Translation", The Shakespeare Society of Japan 第43回, 2004/10/11

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

6. 好井 千代 助手

1959年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。文学修士(大阪大学)。1987年大阪大学文学部助手。専攻：アメリカ文学。

6-1. 論文

なし

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

なし

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

好井千代 福原賞, 福原記念英米文学研究助成基金, 1993/2

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-17 ドイツ文学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	2	1	0	0	0	3

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	1	1	0	0	2

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

吉田耕太郎(特別研究生)「啓蒙と視覚 18世紀におけるABC絵本の成立とその思想史的背景の考察」『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 20, pp. 29-52, 2004/11

吉田耕太郎「文学的営為と道徳——C. F. ゲラートの演劇論・文学論の分析から」『Der Keim』(東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会), 28, pp. 1-18, 2005/3

吉田耕太郎「よき社会秩序とは何か——ポリツァイヴィッセンシャフトの言説分析の試み」『クアドランテ』(東京外国語大学海外事情研究所編), 7, pp. 381-392, 2005/3

(2)口頭発表

吉田耕太郎「作家や知識人はどのように交流していたのか?——18世紀ドイツのメディアと知的公共性に関する研究状況報告」大阪大学ドイツ文学会 第11回総会・研究発表会, 2004/12/18(『独文学報』第21号に概要掲載予定)

吉田耕太郎(特別研究生)「近代的警察(ポリツァイ)の誕生——カール・ゴットロープ・レッシッヒの『ポリツァイ教程』(1786)を中心に」海外事情研究所定例研究会, 2004/12/1

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

教員の研究活動(2004年度)

1. 林 正則 教授

1944年生。大阪大学大学院文学研究科修士課程(ドイツ文学専攻)修了。文学博士(大阪大学)。大阪大学文学部助手、同言語文化部講師、同助教授、文学部助教授を経て1996年より現職。専攻：ドイツ文学。

1-1. 論文

林正則「牧歌か悲歌か?——シラーの『素朴文学と情感文学』から見たゲーテの『アレクシスとドーラ』」『独文学報』20, pp. 73-92, 2004/11

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本ゲーテ協会・理事	2002年6月1日～現在
ドイツ語学 文学振興会・評議員	2001年4月1日～現在
大阪大学ドイツ文学会・会長	2000年4月～現在
日本ヘルダー学会・常任理事	1994年5月～現在
『ゲーテ年鑑』(日本ゲーテ協会編)編集委員	2002年6月1日～2005年5月

2. 三谷 研爾 助教授

1961年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。文学修士(1986年)。大阪府立大学助手、講師をへて2000年4月から現職。専攻：ドイツ、オーストリア文学および文化研究。

2-1. 論文

三谷研爾「脱領域の言語——プラハのユダヤ系ドイツ語作家における言語的アイデンティティ」『ドイツ文学』(日本独文学会編), 117, pp. 36-46, 2005/3

三谷研爾「流通のディスクール キッシュ『娘飼い』における近代都市の経験」『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会編), 20, pp. 93-113, 2004/11

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

三谷研爾 書評「鈴木隆雄監修『オーストリア文学小百科』」『ドイツ文学論攷』(阪神ドイツ文学会編), 46, pp. 108-110,

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

三谷研爾 大阪大学共通教育賞(2002 年度前期)

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2003 年度～2005 年度、基盤研究(C)、代表者：三谷研爾

課題番号：15520176

研究題目：プラハ・ドイツ人社会における文化的アイデンティティの形成と機能

研究経費：2004 年度 直接経費 1,100 千円

研究の目的：

本研究は、典型的な中欧の多民族都市であった世紀転換期のプラハにおいて、言語的マイノリティに転落したドイツ人が、意識的に推進したドイツ文化アイデンティティ強化の動きと、それに拮抗して若い世代のユダヤ系知識人層のあいだに生じた美的モダニズムの相互作用を検証するプログラムである。

主として後者の運動に注目し、卓越した芸術表現の主体(リルケ、カフカ、ヴェルフェルなど)に還元して議論しがちであったこれまでの研究を再検討し、むしろ前者の実態をより正確に理解することに重点を置く。

この枠組のもとで、ナショナル・アイデンティティの強化をめざす動きと美的モダニズムとが交錯する地点を、主要メディアをとおして流通していた言説の分析をとおして、文化史的に明らかにする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2004 年度、文部科学省海外先進教育プログラム補助金

2-8. 学会役員等の引き受け状況

関西チェコ/スロバキア協会・副会長	2003 年 4 月～現在
大阪大学ドイツ文学会・『独文学報』編集委員長	2004 年 4 月～2005 年 3 月
同上・企画委員	2001 年 1 月～2003 年 12 月
日本独文学会・編集委員	2003 年 6 月～2004 年 3 月
同上	2001 年 6 月～2003 年 5 月
阪神ドイツ文学会・幹事	2002 年 4 月～2004 年 3 月

3. イヨルク・ノヴァコヴィッチ 外国人教師

1952 年生。1989 年、ミュンヘン大学博士課程中途退学。文学修士(ミュンヘン大学、1987 年)。1980-82 年、熊本大学外国人教師。1989 年より現職。専攻：日本学／社会学／中国学。

3-1. 論文

なし

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

4. 三谷(阪井) 葉子 助手

1961年生。1984年、大阪大学文学部卒業、1986年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了、1991年、大阪大学大学院博士後期課程単位修得退学。文学修士。1991年より大阪大学文学部助手。専攻：ドイツ文学。

4-1. 論文

Yoko Sakai: Hakushu Kitahara und 'Kinderliederbewegung' im Umkreis der Zeitschrift *Das rote Vögelein* (1918-1936). In: "Das 20. Jahrhundert im Spiegel seiner Lieder". Tagungsbericht Erlbach / Vogtland 2002 der Kommission für Lied-, Musik- und Tanzforschung in der Deutschen Gesellschaft für Volkskunde e. V. (Schriften der Universitätsbibliothek Bamberg Bd.12) 2004/12 S.233-257(ドイツ民俗学会部会シンポジウム発表にもとづく論文集、バンベルク大学図書館叢書 12 巻として発行)

阪井葉子「口承と表象のあいだ ドイツ語圏における民謡研究史の再検討」『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会編), 20, pp. 165-186, 2004/11

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

三谷(阪井)葉子編『ドイツ市民社会における聴覚文化の位置とその言語的表象』平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, 2005/3

フライア・ホフマン著 阪井葉子, 玉川裕子訳『楽器と身体 市民社会における女性の音楽活動』春秋社刊, 2004/12

4-4. 口頭発表

Yoko Sakai, "Stimme des Volkes?", Internationales Kolloquium der Japanischen Gesellschaft für Germanistik., 2004/10

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2002年度～2004年度、基盤研究(C)(2)、代表者：三谷葉子

課題番号：14510583

研究題目：ドイツ市民社会における聴覚文化の位置とその言語的表象

研究経費：2004年度 直接経費 600千円

研究の目的：

本研究は、ドイツにおいてブルジョワ的ライフスタイルが形成されていった19世紀前半に時期を限定して、その当時の聴覚をめぐる文化的位置づけを検証するものである。そのさい、「家庭音楽」(Hausmusik)と呼ばれていた、非職業的な愛好家＝ディレタントによる音楽消費に注目しながら、ドイツ社会において市民階層が音、殊に楽音に対して抱いていたイメージを、その社会史的背景を含めて再構成することが、研究の主眼となる。また、聴覚にかかわるこうしたイメージは、文学作品によって読者公衆、とりわけ女性読者のあいだに広く流通し、増幅され、いつその定着をみることになったと考えられる。そこで、文学作品のみならず、作家の手紙や日記をも分析することによって、このイメージ形成のプロセスを検証する。以上のふたつの方向からのアプローチによって、文学者による民謡の収集と出版にはじまった口承文化再発見のプロジェクトが、市民社会におけるライフスタイルとしての音楽消費、すなわち聴覚文化へと変容していった様相を明らかにする。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

大阪大学ドイツ文学会 庶務・会計委員

1995年4月～現在

関西ゲルマニスティネンの会・世話人代表

2002年4月～2003年3月

(ドイツ語圏の研究に携わる女性研究者の会)

2-18 フランス文学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	9	0	0	0	0	9

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	3	4	0	0	7

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

足立和彦 “*Boule de suif*: l'existence problématique de la prostituée” *GALLIA*, 44, pp. 1-8, 2005/3

足立和彦 “Le trajet vers Le Horla — La « peur » dans les contes « fantastiques » de Maupassant —” *Études de Langue et Littérature Françaises*, 85.86, pp. 89-105, 2005/3

上江洲律子 「マルロー作品における「生暖かさ」についての考察」 *GALLIA*, 44, pp. 41-48, 2005/3

坂巻康司 “La « théâtralité négative » de Mallarmé dans les années 1860 — Sur « Le Faune, intermède héroïque » —” *Études de Langue et Littérature Françaises*, 85.86, pp. 74-88, 2005/3

坂巻康司 「マラルメの観たゾラの演劇——自然主義と象徴主義の狭間で——」『関西フランス語フランス文学』(日本フランス語フランス文学会関西支部), 11, pp. 27-38, 2005/3

谷口智美 “Le rôle de la voix dans *L'Imposture* et *La Joie*” *GALLIA*, 44, pp. 25-32, 2005/3

中尾雪絵 「フランス『百科全書』の「なめし」について」『部落解放研究』(部落解放; 人権研究所), 156, pp. 73-90, 2004/2

岩村(西川)和泉 「バルザック『コルネリウス卿』『赤い宿屋』における犯罪の表象」『関西フランス語フランス文学』(日本フランス語フランス文学会関西支部), 11, pp. 15-26, 2005/3

林千宏 “Le Temple de Mémoire dans les *Hymnes* de Ronsard” *Études de Langue et Littérature Françaises*, 85.86, pp. 1-12, 2005/3

(2)口頭発表

安部朋子 「ディドロ『ラモーの甥』に追加された挿話の役割」大阪大学フランス語フランス文学会研究会, 大阪大学, 2005/3/5

坂巻康司 「同時代演劇に対するマラルメの視線」日本フランス語フランス文学会関西支部大会, 神戸大学, 2004/11/27

坂巻康司 「メーテルランクの初期戯曲におけるマラルメの演劇観」関西マラルメ研究会, 2004/11/6

西川和泉 「『赤い宿屋』『コルネリウス卿』における犯罪の表象」日本フランス語フランス文学会関西支部大会, 神戸大学,

2004/11/27

林千宏「ロンサール『讃歌集』における記憶の神殿」日本フランス語フランス文学会春季大会, 白百合女子大学, 2004/5/29
廣田大地「アナロジーの詩学——ボードレール韻文詩における直喩の変遷をめぐって——」第19回ボードレール研究会,
甲南女子大学, 2004/09/11
脇聡「ネルヴァルの『塩密輸入たち』『アンジェリック』におけるヴァロワ地方の描写に関して」大阪大学フランス語フ
ランス文学会研究会, 大阪大学中之島センター, 2004/9/25

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

教員の研究活動(2004年度)

1. 柏木 隆雄 教授

1944年生。1969年3月大阪大学文学部卒、1971年大阪大学大学院修士、1975年大阪大学大学院博士課程単位取得退学、
1981年パリ第7大学博士課程入学。1982年パリ第7大学第三期博士課程博士。1975年神戸女学院大学文学部講師、1981
年同助教授、1983年大阪大学文学部助教授、1991年大阪大学文学部教授、1999年大阪大学大学院文学研究科教授。2001
年より日本フランス語フランス文学会副会長。専攻：フランス文学。

1-1. 論文

柏木隆雄 『美しき諷い女』カトリーヌ・レスコーとは誰か『視覚芸術と比較文化』大手前大学, 2004/5

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

柏木隆雄 「南仏の『作家と出会う会』に参加して」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/10/4

柏木隆雄 「私のフランス語会話事始め」『室報』49, 大阪大学文学研究科・文学部国際交流センター, 2004/9/30

柏木隆雄 「包丁の外国語」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/6/22

柏木隆雄 「グローバルな言語」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/6/2

柏木隆雄 「共通語」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/5/22

柏木隆雄 「天国のような場所」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/5/17

柏木隆雄 「平成の懷徳堂」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/5/13

柏木隆雄 「宣長と秋成」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/5/7

柏木隆雄 「私のプティット・マドレーヌ」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/4/24

柏木隆雄 「倦まず怠らず」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/4/19

柏木隆雄 「講義情報」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/4/8

柏木隆雄 「懷徳堂講座の思い出」『懷徳堂だより』(懷徳堂記念会), 2004/4/1

柏木隆雄 「国立大学の新しい出発」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/4/2

柏木隆雄 座談会「八犬伝」(再読)『文学』岩波書店, 2004年5-6月号, pp. 2-21, 2004/5

1-4. 口頭発表

柏木隆雄 「幕末日本とフランス」京都大学人文研究所, 2004/12/18

柏木隆雄 “Le Japon vu par un français à la fin de l'époque d'Edo”, Forum à l'université Marc Bloch, 2004/11/6

柏木隆雄 「横のものを縦にする——日本近代文学の秘密——」大阪大学総合博物館第3回企画展, ミニレクチャー, 中之島

センター, 2004/9/18

柏木隆雄 Démons et revenants dans l'*Ugetsumonogatari*(*Contes de pluie et de lune*) d'Ueda Akinari, communication faite à la neuvième Rencontre d'Aubrac, « Aubracadabura : Figures du fantastique dans les contes et nouvelles——conférences, contes, films », Sr-Chély d'Aubrac, 2004/8/27

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

柏木隆雄 Ordre de chevalerie République française, 2000/6

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 21世紀COEプログラム分担

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本フランス語フランス文学会副学会長

2002年4月～現在

評価学位授与機構評価委員

2003年6月～2004年3月

2. 和田 章男 教授

1954年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。パリ第四大学第三課程博士(文学)。大阪大学文学部助手、言語文化学部講師、助教授を経て、1993年大阪大学文学部助教授、1999年大阪大学大学院文学研究科助教授、2004年より同教授。専攻：フランス文学。

2-1. 論文

和田章男 “Proust et la Normandie baudelairienne”, *Bulletin Marcel Proust*, 54, pp. 115-125, 2004/12

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

和田章男 “Proust et Leconte de Lisle : un autre poète dans le *Contre Sainte-Beuve*”, 国際シンポジウム « Manuscripts de Proust : Approches critiques et problèmes éditoriaux », 東京日仏会館, 2004/7/16

和田章男 「プルーストとノルマンディー地方——ボードレールとの関係を中心に——」関西プルースト研究会, 京都大学, 2004/4/3

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

大阪大学フランス語フランス文学会・幹事	1993年4月～現在
日本フランス語フランス文学会・関西支部 幹事	2003年4月～2005年3月
同上・関西支部 編集委員	2000年6月～2002年6月
同上・編集委員	1996年6月～1999年6月
同上・関西支部 幹事	1994年4月～1996年3月

3. アニエス・ディソン 外国人教師

ブザンソン大学、パリ第四大学にて言語学、文学を学ぶ。近代文学の教授資格(CAPES)、記号学・言語学博士号取得。パリの言語学研究所(BELC)に勤めた後、イタリア、モロッコ、日本で教鞭をとる。1982年より現職。

3-1. 論文

アニエス・ディソン “Parataxe et enjambement : la poésie d’Anne Portugal et Pierre Alferi”, *Etudes de Langue et Littérature Françaises*, 85-86, pp. 195-205, 2005/3

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

アニエス・ディソン “Roubaud sur Rimbaud : rimbaldisme, rupture métrique et monstration poétique”, Colloque International Rimbaud, Institut du Kansai/Université de Kyoto, 2004/6

アニエス・ディソン “Le DVD est un livre : les ciné-poèmes de Pierre Alferi”, 20th-21th Century French and Francophone Studies International Colloquium, Florida State University, Tallahassee, USA, 2004/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-19 英 語 学

組織としての研究活動(2004 年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	7	1	4	0	1	13

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	8	10	4	0	0	22

3. 2004 年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

Ohkawa, Yuya “Referentiality of Noun Phrases in Japanese Existentials” *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 9, pp. 53-65, 2005/3

Ohkawa, Yuya “Generics and Topicality” *Osaka Literary Review (OLR)*, 43, pp. 1-11, 2004/12

黒川尚彦「vice versa の語用論—「逆」とは何か?—」*JELS(日本英語学会)* 22, pp. 61-70, 2005/3/10

貞光宮城「英語第二公用語論とは何か」*Osaka Literary Review (OLR)*, 43, pp. 13-30, 2004/12

Nishiguchi, Sumiyo “Consonant Assimilation and Sonority: A Case Study in Daasanach” *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 9, pp. 39-51, 2005/3

Nishiguchi, Sumiyo “Temporal Dynamic Semantics of Factual Counterfactuals” *Proceedings of JSAI 2004 International Workshop on Logic and Engineering of Natural Language Semantics, in conjunction with the 18th Annual Conference of the Japanese Society for Artificial Intelligence, 2004*, pp. 73-81, 2004/5

Fujii, Tomohiro “Some Preliminary Notes on the Scope of Numeral Phrases and Restructuring Contexts” *Machikaneyama Ronso (Japanese Studies)*, 38, pp. 47-60, 2004/12

Fujii, Tomohiro (ed.) (with P. Chandra, U. Soltan, and M. Yoshida) *University of Maryland Working Papers in Linguistics* (Department of Linguistics, University of Maryland, College Park), 13, 2004/12(総頁数 262 頁)

Fujii, Tomohiro “Multiple *zibun*” *Proceedings of the Fifth Tokyo Conference on Psycholinguists* (Hituzi Syoboo), pp. 87-109, 2004/11

Minami, Yusuke “On the Categorization of “Appropriateness” Predicates in English and Japanese Property-Predicating Sentences” *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 9, pp. 25-38, 2005/3

森英樹「感嘆文の認知構造」*KLS(関西言語学会)*24, pp. 228-237, 2004/10

森英樹「トートロジーとメタファーについて」『日本認知科学会第 21 回大会発表論文集』pp. 240-241, 2004/7

Yoshimoto, Mayumi “A-Movement and Deletion in Comparative Clauses” *OUPEL (Osaka University Papers in*

(2)口頭発表

- 大川裕也「英語における総称文とトピック性」関西言語学会第29回大会, 京都外国語大学, 2004/10/31
- 川原 功司 “Toward a Syntactic Treatment of Japanese Causatives” 日本言語学会 第129回大会(日本言語学会第129回大会予稿集, pp. 207-212), 富山大学, 2004/11/21
- Kawahara, Koji “Case Feature and Interpretation of DPs” Generative Lyceum, K.G. Hubsquare, Hotel Hankyu International, 2004/7/11
- 黒川尚彦「vice versa の語用論——「逆」とは何か?——」日本英語学会第22回大会, 獨協大学, 2004/11/13(日本英語学会 Conference Handbook 22, pp. 21-24)
- 榊原愛「「やっぱり」の談話機能と関連性: その交感的な使用をめぐる」関西言語学会第29回大会, 京都外国語大学, 2004/10/30
- 貞光宮城「共感覚比喩表現の転用——嗅覚について——」第13回福岡認知言語学会, 西南学院大学, 2005/3/26
- Nishiguchi, Sumiyo “Covert *Only* and NPI Licensing,” The 79th Annual Meeting of the Linguistic Society of America, Marriott Oakland City Center, 2005/1/6
- Nishiguchi, Sumiyo “Temporal Dynamic Semantics of Factual Counterfactuals” 人工知能学会全国大会 第19回 (JSAI 2004), 国際ワークショップ “Logic and Engineering of Natural Language Semantics” 石川厚生年金会館, 2004/5/31
- Nishiguchi, Sumiyo “Five Types of Affective Contexts: Nonmonotonic NPI Licensing” The 40th Annual Meeting of the Chicago Linguistics Society (CLS 40), The University of Chicago, Chicago, 2004/4/16
- 平松佳二郎「使役移動構文と再帰代名詞の出現に関する一考察」関西言語学会第29回大会, 京都外国語大学, 2004/10/31
- 平松佳二郎「使役移動構文と再帰代名詞の出現に関する一考察」関西レキシコンプロジェクト(KLP)研究会, 西宮市大学交流センター, 2004/10/2
- 平松佳二郎「英語の結果構文に現れる擬似目的語に関して」関西レキシコンプロジェクト(KLP)研究会, 西宮市大学交流センター, 2004/5/29
- Fujii, Tomohiro “Long Distance Subject Raising and Cyclic Chain Reduction” Workshop “The Copy Theory of Movement on the PF Side”, Institute of Linguistics OTS, Utrecht, Netherlands, 2004/12/15
- Fujii, Tomohiro “Copy-raising and A-chain Pronunciation” The Thirteenth Conference of the Student Organisation of Linguistics in Europe (ConSOLE XIII), Universitetet i Tromsø, Tromsø, Norway, 2004/12/4
- Fujii, Tomohiro “Binding and Scope in Japanese Backward Control” Workshop “Control Verbs in Cross-linguistic Perspective”, Zentrum für Allgemeine Sprachwissenschaft, Berlin, Germany, 2004/5/1
- 南佑亮「〈行為〉が生みだす属性とその言語化——Tough 構文を中心に」日本英語学会第22回大会(ワークショップ), 獨協大学, 2004/11/13
- 南佑亮 “Pretty 構文”再考——to 不定詞句は「余剰」か?」日本英文学会 第76回大会, 大阪大学, 2004/5/22
- Mori, Hideki “On Identification and Categorization” International Language and Cognition Conference 2004, Pacific Bay Resort, Coffs Harbour, Australia, 2004/9/11
- Mori, Hideki “Toward an Integrated Theory of Language and Emotion” International Conference of Language, Culture, and Mind 2004, University of Portsmouth, Portsmouth, England, 2004/7/19
- 森英樹「トートロジーとメタファーについて」日本認知科学会 第21回大会(ポスター発表), 日本未来科学館, 2004/7/31
- 森英樹「情動表出行動としての言語」日本感情心理学会 第12回大会(ポスター発表), ザ・パレスサイドホテル, 2004/5/16
- 森英樹「外界を認知するために」日本記号学会 第24回大会(ポスター発表), 京都精華大, 2004/5/16

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

教員の研究活動(2004年度)

1. 大庭 幸男 教授

1949年生。九州大学大学院文学研究科修士課程(英語学専攻)修了。文学博士(大阪大学、1997年)。山口大学助手、同講師、大阪大学言語文化部講師、同助教授、大阪大学大学院文学研究科助教授を経て、1999年4月より現職。専攻：英語学。

1-1. 論文

大庭幸男, 有村兼彬「無生物主語を伴う二重目的語について」『生成文法理論における中核的な統語現象と周辺の統語現象の研究』(平成14年度～平成15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, pp. 1-6, 2004/5)

大庭幸男, 有村兼彬「特定性効果とフェイズ不可侵条件」『生成文法理論における中核的な統語現象と周辺の統語現象の研究』(平成14年度～平成15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, pp. 7-13, 2004/5)

大庭幸男, 有村兼彬「二重目的語構文の構造——分散形態論の枠組みを用いて——」『生成文法理論における中核的な統語現象と周辺の統語現象の研究』(平成14年度～平成15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, pp. 14-30, 2004/5)

大庭幸男, 有村兼彬「間接目的語と主題化/抽出規則」『生成文法理論における中核的な統語現象と周辺の統語現象の研究』(平成14年度～平成15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, pp. 31-45, 2004/5)

大庭幸男, 有村兼彬“The Double Object Construction and the Extraction of the Indirect Object”『生成文法理論における中核的な統語現象と周辺の統語現象の研究』(平成14年度～平成15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, pp. 47-87, 2004/5)

1-2. 著書

大庭幸男編 *Osaka University Papers of English Linguistics(OUPEL)*, 9(2005/3)

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

大庭幸男「言語と認知」(N. Chomsky 著)『英語教育』大修館書店, 53, pp. 87-88, 2004/6

大庭幸男「生成文法の方法——英語統語論のしくみ」(長谷川欣佑著)『英語青年』150-1, 研究社, pp. 56-57, 2004/4

1-4. 口頭発表

大庭幸男「構文の意味と構造」第22回日本英語学会シンポジウム『構文・語彙の意味と構造について——英文法教育に生かす方途を探る——』2004/11

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

大庭幸男 市河賞, 財団法人 語学教育研究所, 1998/10

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2004年度～2005年度、科学研究費補助金(萌芽研究)、代表者：大庭幸男

課題番号：16652035

研究題目：インターネットを利用した所有名詞表現の分布と情報構造に関する理論的・実証的研究

研究経費：2004年度 直接経費 2,300千円

研究の目的：

本研究の目的は2つある。(1)現代英語における所有表現(NP₁'s NP₂)の使用傾向を電子化された雑誌、論文、小説等からインターネットを通じて探ることである。(2)その傾向の主たる原因を明らかにすることである。英語の所有表現では、John's car/?the car of Mary, ?the mountain's foot/the foot of the mountain のように所有形 NP₁ が人かどうかで容認性

が異なる。Quirk et. al (1972)は、Gender Scale (human male and female<human dual<human common<human collective<higher animals<higher organisms<lower animals<inanimates)で、また、Hawkins (1981)は、Animacy Hierarchy (human<human attribute <non-human animate<non-human inanimate))でこの現象を説明している。両者は共通して、NP₁には[human]の方が[animal]より好まれると主張している。しかし、17世紀の所有表現(NP₁'s NP₂)を調査したAltenberg (1982)によれば、NP₁には animal(44%)の方が[human collective](10%)よりも断然多く生じている。この事実は Quirk et. al や Hawkins の予測とは異なっている。そこで、本研究は、現代英語の所有表現の実態を調査し、その結果を分析・説明する方法を考察することを目的とする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本英語学会・評議員	2004年4月～2007年3月
同上・監事	2003年4月～2007年3月
同上・ <i>English Linguistics</i> 編集委員	2003年10月～2005年9月
関西言語学会・運営委員	1993年4月～現在
日本英文学会・『英文学研究』編集委員	2000年4月～2004年3月
同上・『英文学研究』編集委員長	2002年4月～2003年3月

2. 岩崎 真哉 助手

1976年生。2004年、大阪大学文学研究科後期博士課程単位取得退学。修士(文学、大阪大学)。2004年より現職。専攻: 英語学。

2-1. 論文

Iwasaki, Shin-ya “Reconsidering So-called Temporal Bare-NP Adverbials in English : A Construction Grammar Account” *OUPEL(Osaka University Papers in English Linguistics)*, 9, pp. 1-23, 2005/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-20 日本語学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	6	2	8	1	4	21

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	7	9	8	0	0	24

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

阿部貴人「名古屋方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』(大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室), 7, pp. 1-20, 2005/3

阿部貴人「を格のスタイル切換え——東京下町・大阪市・津軽方言の対照——」『阪大社会言語学研究ノート』(大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室), 7, pp. 21-38, 2005/3

李宝瓊「韓国話者の日本語音声によるパラ言語情報の実現——「問い返し」と「疑い」の比較を中心に——」『日語教育』(韓国日本語教育学会), 30, pp. 83-106, 2004/12

廣利正代, 上田和子, 押尾和美, 歳森真紀「年少者を対象としたインターネット日本語試験「すしテスト」開発報告」国際交流基金日本語教育紀要編集委員会『国際交流基金日本語教育紀要』(独立行政法人国際交流基金), pp. 241-248(予定), 2005/3

金智英「在日コリアン一世の否定表現」真田信治, 生越直樹, 任榮哲編『在日コリアンの言語相』(和泉書院), pp. 141-158, 2005/1

金智英「在日コリアン一世の指示詞の運用」『日本語教育論集 世界の日本語教育』(国際交流基金日本語国際センター), 14, pp. 21-34, 2004/11

金美貞「韓国における接客言語行動意識——客側からの評価——」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 17, pp. 91-110, 2005/2

佐竹久仁子「〈女ことば／男ことば〉規範をめぐる戦後の新聞の言説——国研「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」から——」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 17, pp. 111-137, 2005/2

佐竹久仁子「〈女ことば／男ことば〉規範の形成——明治期若年者向け雑誌から——」『日本語学』(明治書院), 23-7, pp. 64-74, 2004/6

篠原玲子「間投助詞のスタイル切換え——方言間の対照——」『阪大社会言語学研究ノート』(大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室), 7, pp. 39-50, 2005/3

- 高木千恵「大阪方言の述語否定形式と否定疑問文——「～コトナイ」を中心に——」『阪大社会言語学研究ノート』(大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室), 7, pp. 73-87, 2005/3
- 高木千恵「若年層関西方言の否定辞にみる言語変化のタイプ」国立国語研究所『日本語科学』(国書刊行会), 16, pp. 25-46, 2004/10
- 高田祥司「岩手県遠野方言の非動詞的述語及び否定のテンス——〈過去〉の場合における「-ケ」の使用を中心に——」『日本語文法』(日本語文法学会), 4-2, pp. 103-119, 2004/9
- 永見昌紀「友だちとの会話と第2言語学習は両立するか——L1使用者とL2使用者の会話における訂正と発話援助——」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 17, pp. 27-57, 2005/2
- 林雅子「動詞テ形と連用形の使用差に関する計量的調査研究——中級以上の作文・小論文指導のために——」『龍谷大学国際センター研究年報』(龍谷大学国際センター), 14, pp. 15-23, 2005/3
- 林雅子「動詞テ形と連用形の使用差に関する計量的調査研究——新聞・小説における「なる」の用法を中心に——」『計量国語学』(計量国語学会), 24-7, pp. 325-349, 2004/12
- 範玉梅「日本語学校における一人っ子の中国人留学生増加に伴う問題」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 17, pp. 59-90, 2005/2
- 前田達朗『『在日』の言語意識——エスニシティと言語』真田信治, 生越直樹, 任榮哲編『在日コリアンの言語相』(和泉書院), pp. 87-114, 2005/1
- 前田達朗『『失う』不安』『インターフェイスの人文科学』ニューズレター』(「インターフェイスの人文科学」研究開発委員会), 05, p. 16, 2005/1
- 水谷美保「方言敬語動詞に共通して生じる意味領域の変化」『待兼山論叢(日本学篇)』(大阪大学文学会), 38, pp. 17-34, 2004/12
- 八木真奈美「日本語学習者の日本社会におけるネットワークの形成とアイデンティティの構築」『質的心理学研究』(日本質的心理学会), 3, pp. 157-172, 2004/4

(2)口頭発表

- 嵐洋子「縦断的調査から考察する特殊モーラ意識の習得過程——モーラか音節かの選択——」第18回音声学会大会予稿集, 日本語音声学会, 東京外国語大学, 2004/9/26
- 出野晃子「関西方言話者の使用する共通語の韻律的特徴」近畿音声言語研究会12月例会, 近畿音声言語研究会, 西宮市大学交流センター, 2004/12/4
- 上田和子, 羽太園「「開かれた研修」のための装置の実践」『教育現場からの日本語教育実践研究フォーラム予稿集』日本語教育学会2004年度研究集会 第5回実践研究フォーラム, pp. 60-63, 日本語教育学会, 昭和女子大学, 2004/7/31
- 江崎哲也, 田川恭識, 岡田祥平, 尹英和, 岡本耕介, 嵐洋子, 出野晃子, 橋本貴子, 土岐哲「『非母語話者による日本語話し言葉コーパス』の設計」韓国日本語学会第10回学術発表会予稿集, pp. 239-243, 韓国日本語学会, 誠信女子大学, 2004/9/18
- 江崎哲也, 田川恭識, 岡田祥平, 尹英和, 岡本耕介, 嵐洋子, 出野晃子, 橋本貴子, 土岐哲「『非母語話者による日本語話し言葉コーパス』の構築」日本音声学会第309回例会, pp. 41-46, 日本音声学会(共催: 音声研究会(電子情報通信学会・日本音響学会)・聴覚研究会(日本音響学会)), ATR, 2004/6/25
- 岡田祥平「助詞「を」の発音は[o]か[wo]か?——『日本語話し言葉コーパス』を使用した分析——」第15回社会言語科学会研究大会, 社会言語科学会, 早稲田大学, 2005/3/20
- 岡田祥平「助詞「を」の発音は[o]か[wo]か?——『日本語話し言葉コーパス』を使用した分析——」近畿音声言語研究会月例会, 近畿音声言語研究会, 西宮市大学交流センター, 2005/1/8
- 岡田祥平, 出野晃子, 郡史郎「京都人にとっての大阪方言、大阪人にとっての京都方言——近隣方言の相互認知研究の一例として——」第79回日本方言研究会研究発表会, pp. 25-34, 日本方言研究会, 熊本市市民会館, 2004/11/12
- 岡田祥平, 出野晃子, 郡史郎「京都人にとっての大阪方言・大阪人にとっての京都方言——アクセントと音声に関する項目を中心に——」近畿音声言語研究会11月例会, 近畿音声言語研究会, 聖和大学, 2004/10/2

- 岡田祥平「音声変異の重層性について」韓国日本語学会第10回学術発表会予稿集, 韓国日本語学会, 誠信女子大学, 2004/9/18
- 岡田祥平『日本語話し言葉コーパス』に観察される母音連続/ei/のバリエーション——和語・漢語の場合——」早稲田大学日本語学会, 早稲田大学日本語学会, 早稲田大学, 2004/7/3
- 岡田祥平『日本語話し言葉コーパス』に観察される母音連続/ei/のバリエーション——外来語の場合——」音声の基礎と応用シンポジウム(日本音声学会第309回例会), 音声学会, 電子情報通信学会: 音声研究会, IEEE SP Society JapanChapter 共催, ATR, 2004/6/25
- 岡田祥平, 出野晃子, 郡史郎「ミニシンポジウム 京都方言話者と大阪方言話者の音声——知覚と意識——」近畿音声言語研究会5月例会, 近畿音声言語研究会, 西宮市大学交流センター, 2004/6/5
- 岡田祥平「日本語の接続母音/ei/のバリエーション——『日本語話し言葉コーパス』の分析結果——」近畿音声言語研究会月例会, 近畿音声言語研究会, 西宮市大学交流センター, 2004/4/3
- 齊藤美穂「会話の構造と複文——いわゆる「逆接」の複文を中心に——」『2004年度国際学術 SYMPODIUM・冬季国際学術大会 発表論文集』 pp. 181-187, 韓国日語日文学會, 韓國外國語大學校, 2004/12/11
- 司空煥「韓国語話者による『ザ行音』の調音的特性に関する研究——パラトグラフィによる分析から——」韓国日本語学会第10回学術発表会予稿集, pp. 19-26, 韓国日本語学会, 誠信女子大学, 2004/9/19
- 司空煥「韓国人学習者による日本語「ザ行音」の調音的特性に関する研究」日本音声学会第309研究例会, 日本音声学会, 国際電気通信基礎技術研究所(ATR), 2004/6/25
- 田川恭識「The Influence of F0 Patterns on Perception of Declaratives and Declaratives with Dissatisfaction: The Case of Expression “awanaino”」, The proceedings of ICA2004, International Congress of Acoustics, 京都国際会議場, 2004/4/7
- 林雅子「動詞テ形と連用形の使用差に関する計量的調査研究——新聞・論述文・小説における語彙調査の結果から——」日本言語学会第128回大会予稿集, pp. 251-256, 日本言語学会, 東京学芸大学, 2004/6/20
- 方允炯「現代日本語における「うえ」の意味・機能」『2004年度国際学術 SYMPODIUM・冬季国際学術大会 発表論文集』 pp. 116-123, 韓国日語日文学會, 韓國外國語大學校, 2004/12/11
- 水谷美保「「イラッシャル」「イラッシャイ」の意味領域の縮小」日本語学会2004年度秋季大会, pp. 111-118, 日本語学会, 熊本大学, 2004/11/14
- 蓑川恵理子「商品名の構造とその変遷から見た固有名成立のメカニズム——家庭用電気製品『三種の神器』を対象として」土曜ことばの会, 土曜ことばの会, 大阪大学, 2004/7/10
- 関淳奎「「同～」表現の分類」土曜ことばの会, 土曜ことばの会, 大阪大学, 2005/1/22
- 尹英和「日本語リズムの単位に関する基礎的考察——韓国語を母語とする学習者との比較の場合——」韓国日本語学会第10回学術発表会予稿集, 韓国日本語学会, 誠信女子大学, 2004/9/18

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

教員の研究活動(2004年度)

1. 真田 信治 教授

1946年生。1970年、東北大学大学院文学研究科修士課程修了、1972年、同博士課程中退。文学博士(大阪大学)。国立国語研究所研究員、大阪大学助教授などを経て、1993年8月より現職。専攻：日本語学/社会言語学。

1-1. 論文

真田信治「方言と地名——地域人の空間認識——」吉田金彦・糸井通浩編『日本地名学を学ぶ人のために』世界思想社, pp. 190-201, 2004/11

1-2. 著書

- 真田信治, 津田葵(責任編集)『言語の接触と混交 台湾残存日本語の談話データ』大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」報告書, 2005/3
- 真田信治, 津田葵(責任編集)『言語の接触と混交 共生を生きる日本社会』大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」報告書, 2005/3
- 真田信治, 津田葵(責任編集)『言語の接触と混交 国際シンポジウム「多言語・多文化社会としての日本の現状と課題」』大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」報告書, 2005/3
- 真田信治『都道府県別 気持ち伝わる名方言 141』講談社, 2005/1
- 真田信治, 生越直樹, 任榮哲編『在日コリアンの言語相』和泉書院, 2005/1
- 佐治圭三, 真田信治監修『文化・社会・地域』東京法令出版, 2004/6
- 佐治圭三, 真田信治監修『言語一般』東京法令出版, 2004/6
- 佐治圭三, 真田信治監修『音声, 文字・表記』東京法令出版, 2004/6
- 佐治圭三, 真田信治監修『文法・語彙・日本語史』東京法令出版, 2004/6
- 佐治圭三, 真田信治監修『日本語教授法』東京法令出版, 2004/6
- 佐治圭三, 真田信治監修『異文化理解と情報』東京法令出版, 2004/6

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 真田信治「方言の行方——方言と標準語をめぐる葛藤の歴史から——」『方言からみた丹波』丹波の森協会, pp. 33-37, 2005/3
- 真田信治「東アジアの日本語——旧統治領に残存する日本語について——」神戸親和女子大学国語国文学会「会報」35, pp. 5-7, 2005/3
- 真田信治「<書評>言語表現は社会的環境を反映する『日本語の「配慮表現」に関する研究』」『東方』282, pp. 31-33, 2004/8
- 真田信治「ネオ方言はどのように生まれるのか」『フィールドワークは楽しい』岩波書店, pp. 21-38, 2004/6

1-4. 口頭発表

- 田原広史, 井上文子, 鳥谷善史, 佐藤亮一, 江川清, 真田信治「方言音声データベースの作成と普及について——『日本のふるさとことば集成』の紹介——」日本語学会 2004 年度春季大会デモンストレーション, 2004/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 真田信治 第 8 回とやま賞受賞, 富山県置県百年記念財団, 1991/5
- 真田信治 第 18 回金田一京助記念賞受賞, 金田一記念会, 1990/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2003 年度～2005 年度、基盤研究(C)(2)、代表者：真田信治

課題番号：15520288

研究題目：薩南諸島におけるネオ方言(中間方言)の実態調査

研究経費：2004 年度 1,000 千円

研究の目的：

かつての方言と標準語をめぐる葛藤の歴史の中から、基盤である方言と習得目標であった標準語との大きな隔たりの間に、本来の方言にも、また標準語にも見られない第三の言語変種(ネオ方言)が各地で生成されつつある。

たとえば、奄美大島の名瀬あたりでは、標準語を話そうとしても完全な標準語が出せなくて、方言と標準語とが混ざった状態になったものを「トン普通語」と呼ぶことがある。この「トン」は「さつま芋」を表す奄美大島北部の方言である。ちなみに鹿児島ではこのようなスピーチスタイルを「カライモ普通語」と称している。この「カライモ」もまた「唐芋」でやはり「さつま芋」を表す鹿児島方言である。

本研究では、薩南諸島を主たるフィールドとして、これら中間方言の実態を明らかにすることをめざす。

- ①奄美大島、およびその周辺地域をフィールドに、各世代における比較的フォーマルな場面での談話を集録し、その談話データを文字化する。そして、データをさまざまな観点から分析し、特に若い世代におけるスピーチスタイルを記述する。
- ②「トン普通語」「カライモ普通語」などと名づけられる対象は、本来それぞれの方言のフィルターによって変形した標準語を指すものであったが、当該地域の若者たちは今や伝統的な純粋方言は、いわば文化財の地位のものに祭り上げ、これら変形標準語を、自分たちの生活方言(地域語)として活用しているという状況がある。本研究ではそのプロセスを具体的に解明することになるはずである。
- ③本研究の代表者は、これら接触によって生まれた新しい中間方言を「ネオ方言」と総称して、日本各地での動態を追究している。このような状況の生まれる背景には、標準としての東京語に牽引されつつも、そこからある程度の距離を置く、置きたい、そしてそのことを確認したい、といった現代の地域人の心情があるように思われる。なお、このような流れは世界の各地で今進行しつつある少数民族言語の復権の動きとも連動するものである。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 21世紀 COE プログラム分担

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本語学会・理事	2003年5月～2009年5月
財団法人新村出記念財団・評議員	2005年7月～2008年7月
同上	2002年7月～2005年7月
日本方言研究会・世話人	2002年5月～2008年5月
NPO 日本語しことば協会・理事	2005年4月～2007年3月
同上	2003年4月～2005年3月
山口大学大学院『東アジア研究』・編集顧問	2002年4月～現在

2. 土岐 哲 教授

1946年生。早稲田大学日本文学科卒業。文学士。アメリカ・カナダ 11 大学連合日本研究センター専任講師、プリンストン大学東アジア学系客員講師、東海大学専任講師、同助教授、名古屋大学助教授、大阪大学助教授を経て、1996年から現職。専攻：日本語教育学、音声学。

2-1. 論文

土岐哲「日本語音声教育の新視点」単著『バンコク日本文化センター日本語教育紀要』1, 国際交流基金, pp. 5-17, 2004/8

土岐哲「インタビュー・聞き書きと質問調査法」単著『日本語学 6 月臨時増刊号 2004. vol23』明治書院, pp. 32-43, 2004/6

2-2. 著書

松岡弘ほか編, 土岐哲「音声研究と日本語教育」『開かれた日本語教育の扉』スリーエーネットワーク, pp. 137-148, 2005/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

土岐哲「音声教育の新環境への期待」シンポジウム「新時代の音声教育」第 18 回日本音声学会全国大会, 東京外国語大学, 2004/9/25

江崎哲也ほか, 土岐哲 「非母語話者による日本語話し言葉コーパス」の構築」日本音声学会第309回研究例会, 国際電気通信基礎技術研究所, 2004/6/25

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本音声学会・評議員	1998年4月～2010年3月
同上・理事、編集委員長	2004年4月～2006年3月
国際交流基金関西国際センター・事業協力委員	2000年4月～2006年3月
日本国際学習支援協会 国際交流基金・「日本語能力試験」試験小委員会 主任アドバイザー	2003年10月～2005年9月
日本国際学習支援協会・「日本語教育能力検定試験」実施委員会委員	1998年4月～現在
言語文化教育学会・理事	2002年9月～現在
日本語教育学会・日本語教育学会賞選考委員	2002年4月～2004年3月

3. 工藤 真由美 教授

1949年生。東京大学大学院人文科学研究科博士後期課程単位修得退学。博士(文学、大阪大学、1999年)。横浜国立大学教育学部講師、同助教授を経て、1998年4月より現職。専攻：現代日本語文法論。

3-1. 論文

工藤真由美, 佐藤里美, 八亀裕美 「体験的過去をめぐって——宮城県登米郡中田町方言の述語構造——」『阪大日本語研究』17, pp. 1-25, 2005/2

八亀裕美, 佐藤里美, 工藤真由美 「宮城県登米郡中田町方言の述語のパラダイム——方言のアスペクト・テンス・ムード体系記述の試み——」『日本語の研究』1-1(通巻220), 日本語学会, pp. 51-64, 2005/1

工藤真由美 「現代語のテンス・アスペクト」『朝倉日本語講座6 文法Ⅱ』朝倉書店, pp. 172-192, 2004/6

3-2. 著書

工藤真由美他 「方言における述語構造の類型論的研究」科学研究費報告書, 2005/3

工藤真由美他 「方言における述語構造の類型論的研究」科学研究費報告書 CD-ROM版, 2005/3

工藤真由美編著 『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系——標準語研究を超えて——』ひつじ書房, 2004/11

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

工藤真由美 「日本語のアスペクト」『中日国際シンポジウム』2004/12

工藤真由美 「グローバルジャパンにおける日本語学のあり方」『韓国日語日文学会 2004年度国際学術シンポジウム』

2004/12

工藤真由美「現代日本語のAspect——基本的な意味と派生的な意味・機能——」華東師範大学講演, 2004/11

工藤真由美「日本語文法と日本語教育——名詞・動詞・格を中心に——」華東師範大学講演, 2004/11

工藤真由美「時間・認識・感情——現代日本語研究の視点から——」『中・日・韓日本言語文化研究国際フォーラム』2004/7

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(B)(1)、代表者：工藤真由美

課題番号：15320056

研究題目：方言の述語構造の類型論的研究

研究経費：2004年度 5,400千円

研究の目的：

本研究は、(1)欧米における動詞述語、名詞述語、形容詞述語に関する類型論的研究の優れた成果を視野に入れ、(2)東北から沖縄に至るまでの全国諸方言の述語構造を「統一した枠組み」に基づいて記述し、(3)共通する(普遍的)側面と相違する側面とから、共時的バリエーションと通時的变化を考慮したタイプ化を行い、(4)文の中核をなす述語構造に基づく分布図を描き出そうとするものである。(5)伝統的方言体系の変化と標準語の浸透による言語接触の社会言語学的観点からの本格的アプローチも実施し、言語接触論への新たな展望も切り開く。

3-6-2. 2004年度～2005年度、萌芽研究、代表者：工藤真由美

課題番号：16652032

研究題目：ブラジル沖縄系移民社会における言語接触

研究経費：2004年度 1,900千円

研究の目的：

多様化した「日本語」の一つとして把握される、移民社会や多言語文化圏の中での日本語の実態に注目すべきことは、言語学のみならず文化人類学など人文諸科学における共通理解ともなっている状況である。その中でもブラジル日系移民の日本語に至っては、その移民構成員の多くが沖縄系であることから、琉球方言といった沖縄の言語を考慮する必要があるため、精緻な理論的枠組みと憶断を排した実証的研究が大いに望まれているところであった。本研究はかかる状況からブラジル沖縄系移民社会における日本語の問題を、言語接触の立場から、包括的に考察を試みようとするものである。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 21世紀COEプログラム分担

3-8. 学会役員等の引き受け状況

日本語文法学会・評議員

2000年～現在

国語学会・評議員

1996年～現在

4. 青木 直子 教授

1983年、上智大学外国語学専攻科言語学専攻博士課程前期修了。PhD(Trinity College, Dublin, 2003年)。産能短期大学助教授、静岡大学教育学部助教授、大阪大学助教授を経て、2004年4月より現職。専攻：第二言語教育学。

4-1. 論文

Aoki, Naoko, "Teachers' conversation with partial autobiographies", *The Teacher Trainer*, 18(3), pp. 3-8, 2004/9

(Hong Kong Journal of Applied Linguistics より転載)

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

青木直子「学習者オートノミー」2004年度第11回日本語教育学会研究集会講演, 2005/3

青木直子「ナラティブ・モードの研究の意義と方法」ヴィゴツキー学ワークショップ, 2004/8

Aoki, Naoko, "Histories and aspirations: Reflecting on our learner autonomy practice and development as a pro-autonomy teacher", Keynote speech at Autonomy and Language Learning: Maintaining Control., 2004/6

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

日本学術振興会科学研究費委員会専門委員	2003年4月～2005年3月
日本語教育国際研究大会・研究発表セッション(自律学習)司会	2004年8月
日本質的心理学会・設立発起人	2004年3月
全国語学教育学会・国際大会学習者ディベロプメント・フォーラム司会	2003年11月
同上・国際大会学習者ディベロプメント研究部会招待講演者リエゾン	2001年11月～2002年11月
日本語教育学会・日本語研究コース講師	2003年5月
国立国語研究所・日本語教育上級研修講師	2003年3月
国際応用言語学会・Scientific Commission on Learner Autonomy 選挙管理委員	1999年8月～2002年12月

5. 石井 正彦 助教授

1958年生。1983年、東北大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(東北大学、1983年)。国立国語研究所研究員、同室長を経て、1999年10月より現職。専攻：日本語学／計量言語学。

5-1. 論文

石井正彦「現代日本語語彙の『中心』と『周縁』——語彙の構造を動的にとらえる——」『日語日文学研究』50-1, pp. 1-18, 2004/8

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

石井正彦「コーパス言語学と『キーワード』」『言語』33-12, pp. 90-91, 2004/12

石井正彦「日本語の学習サイト」『言語』33-6, pp. 70-71, 2004/6

5-4. 口頭発表

石井正彦「現代日本語語彙の『中心』と『周縁』——語彙の構造を動的にとらえる——」韓国日語日文学会・2004年度国際学術大会, 2004/6

石井正彦「日本語コーパス言語学における探索的データ解析の有用性」漢語語彙学第1回国際学術シンポジウム, 2004/4

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(C)(2)、代表者：石井正彦

課題番号：15520289

研究題目：探索的データ解析による日本語研究法の開発

研究経費：2004年度 1,200千円

研究の目的：

本研究は、(a)「探索的データ解析」という統計手法が日本語研究において有効な分析ツールとなることを、これまでの計量的日本語研究の成果・知見を検証・追試することによって確認し、その上で、(b)探索的データ解析が用意する一連の手法のうちのどれが、日本語についてのどのような調査・研究に利用可能であるのかを、独自に用意したコーパスを試料として明らかにすることによって、(c)日本語研究における探索的データ解析の利用法を、具体的な事例に基づいた手引書としてまとめることを目的とする。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

情報知識学会・理事

2003年4月～現在

6. 渋谷 勝己 助教授

1959年生。東京外国語大学外国語学研究所日本語学専攻修了、大阪大学大学院文学研究科日本学専攻中退。学術博士(大阪大学、1990)。梅花女子大学講師、京都外国語大学助教授を経て、1996年10月より現職。専攻：日本語学。

6-1. 論文

渋谷勝己「山形市方言のモダリティ形式『ッダ』」『阪大社会言語学研究ノート』7, pp. 51-61, 2005/3

渋谷勝己「大阪人は大阪弁をどう思っているか」『日本語学』23-11, pp. 18-26, 2004/9

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

なし

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 学会役員等の引き受け状況

日本語教育学会・査読委員	2003年1月～2006年12月
国語学会／日本語学会・常任査読委員	2003年6月～2006年6月
日本言語学会・大会運営委員	2003年4月～2006年3月
同上・編集委員	2000年4月～2003年3月
日本語政策学会・理事	2002年11月～現在
第二言語習得研究会編集委員	2004年1月～2005年12月
日本語文法学会・学会誌委員	2000年12月～2004年3月
社会言語科学会・学会誌編集委員	1997年7月～2003年7月

7. 松丸 真大 助手

1973年生。1997年、国際基督教大学教養学部卒業。2001年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了。2004年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。修士(文学)。2004年より大阪大学大学院文学研究科助手。専門：社会言語学／方言学。

7-1. 論文

松丸真大「島根県松江市方言のガ系文末詞」『阪大社会言語学ノート』7, pp. 62-72, 2005/3

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

なし

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 学会役員等の引き受け状況

日本方言研究会・事務局

2004年12月～2005年12月

2-21 美学・文芸学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	2	0	0	0	0	2

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	1	12	0	0	0	13

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

猪谷聡「工芸における‘製作’という概念——民芸理論に関する一考察——」『藝術研究』17, pp. 43-50, 2004/7

平井直子「イタリア合理主義建築——G・テッラーニ、フィジーニとポッリーニを中心に」『フィロカリア』21, pp. 1-33, 2005/3

(2)口頭発表

生島美紀子「アルチュール・オネゲルの旋律志向——《交響曲第1番》《第3番典礼風》創作における旋律性の探求」美学会西部会第250回研究発表会, 美学会, 大阪大学/大阪, 2004/9/25

石黒義昭「ハイデガーの思惟における音楽と思索」実存思想協会・ドイツ観念論協会第13回合同シンポジウム, 京都工芸繊維大学, 実存思想協会・ドイツ観念論研究会, 2004/6/27

井上由里子「ヴァレール・ノヴァリナにおける言葉の物質性——『時間に住むあなた』とポストドラマへの視座」第55回美学会全国大会・若手研究者フォーラム, 京都工業繊維大学/京都, 2004/10/10

猪谷聡「吉田章也論」意匠学会, 大阪市立デザイン教育研究所, 2004/7/24

大塚美左恵「ミケル・デュフレンヌにおける情感的アプリオリについて」第55回美学会全国大会, 京都工芸繊維大学, 2004/10/10

堂尾知里「猪熊弦一郎再考」第55回美学会全国大会若手研究者発表枠, 京都工芸繊維大学/京都, 2004/10/9

萩原康一郎「物語が生まれる前に——「前——物語」における行動の先行理解について」美学会全国大会・若手フォーラム, 京都工業繊維大学(京都), 2004/10/10

春木有亮「エティエンヌ・スーリオは芸術作品をどのようにとらえたか」第51回美学会全国大会, 京都工芸繊維大学, 2004/10/10

平光睦子「明治期の工芸論における『嗜好』と『流行』——京都での展開から」美学会全国大会, 美学会, 京都工芸繊維大学/京都, 2004/10/11

- 平井直子「ミラノの近代建築と『場所』性——フィジーニ+ポッリーニ、G・テラーニ、G・ポンティの建築と1920年代、30年代の都市」美学会西部会第252回研究発表会，京都大学，2004/12/11
- 松友知香子「パウロ・クレーの色彩と形態」美学会第55回全国大会・若手研究者フォーラム，京都工芸繊維大学／京都，2004/10/10
- 孟白麗「南宋修内司官窯の青磁について——杭州老虎洞窯址出土品を中心に」意匠学会，2004/6/5
- 林承緯「台湾民間の縁起物および庶民精神」第2回台湾文化研究発表会，拓殖大学，東京，2004/6/6

(3)その他(書評・翻訳など)

- 秋岡啓子「鹿田淳史 モニュメント・近松門左衛門へのオマージュ」(尼崎市)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004年
- 生島美紀子「アンサンブル・カプリスの第8回演奏会」(神戸うはらホール)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/6/2
- 生島美紀子「かぶとやま交響楽団<協奏曲の愉しみ>」(いずみホール)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/9
- 池田(村田)葉子「ウェンディ・シュイ・ウォン論考」(翻訳)国際デザイン史論研究誌『デザイン・ディスコース』304号別冊，2004/5
- 井上由里子「滋賀・佐川美術館 佐藤忠良の彫刻 人間の深奥に迫る」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/1/26
- 井上由里子「人間とは何か」問う 劇団「維新派」新作の『キートン』『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/11/24
- 猪谷聡「いのちを考える」展(伊丹市立美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/9/1
- 猪谷聡「いきもの図鑑 牧野四子吉の世界」(大阪市立自然史博物館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/5/26
- 大塚美左恵「現代美術はこう見る 京都国立近代美術館 痕跡——戦後美術における身体と思考展」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/12/15
- 岡本梓「「ロートレック賛歌——ポスター芸術の魅力——」展批評」『美学研究』4, pp. 87-89, 2005/3/31
- 岡本梓「「日本漫画映画の全貌展」 観客に届く豊かな想像世界」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/1/12
- 清澤暁子「新鮮によみがえる映画「映画がいっぱい——和田誠シネマランド」 KPO キリンプラザ大阪」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/3/23
- 清澤暁子「『光の教会』日本基督教団茨木春日丘教会」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/10/6
- 金聖恵「野田秀樹の「若い」芝居に対する挑戦 「走れメルス——少女の唇からダイナマイト! ——」」『美学研究』4, pp. 83-85, 2005/3/31
- 金聖恵「意味あるグロテスク 大阪府立青少年会館プラネットステーション「アジサイ天使」」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/11/10
- 金相美「中東のイメージを再考「アラビアンナイト大博覧会」展」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/11/17
- 佐伯瑠理子「八木一夫」展(京都国立近代美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/10/20
- 佐伯瑠理子「『睡蓮2004 森ヲ アツメル 山荘で過ごす夏』北尾博史が誘う想像の『森』展(アサヒビール大山崎山荘美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/8/4
- 佐々木優「Under1945 共生する美術」(京都芸術センター)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/7/14
- 島本英明「兵庫県立美術館コレクション展II」(兵庫県立美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/8/11
- 島本英明「『壁ヲ通過スル。』展」(芦屋市立美術博物館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/5/19

島本英明「堀内正和展」(京都国立近代美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/4/14

城崎有沙「『作家からの贈りもの展』」(大丸ミュージアム・梅田)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/8/25

城崎有沙「特別展示『京の町家・夏のしつらえ』」(紫織庵)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/6/30

高山由佳「「アーキグラムの実験建築 1961—1974」展と「アーキラボ 建築・都市・アートの新たな実験展 1950—2005」展」『美学研究』4, pp. 96-100, 2005/3/31

高山由佳「<中村真木「パッサジオ」>」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/10/13

堂尾知里「「ジャック・カロ版画展」表情や動き線で表現」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/2/23

堂尾知里「没後30年、福田平八郎展」(西宮市大谷記念美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/11/3

堂尾知里「Reflection——山崎つる子展」(芦屋市立美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/8/18

堂尾知里「大チャンバラ祭」(京都映画祭開催イベント)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/5/12

萩原康一郎「馬野訓子「The Proof of Our Existence」展 音と映像の洪水 エジンバラお風景」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/3/9

萩原康一郎「「INDEXLESS——ノブのないドア」展 注目すべき日比野の作品」(アサヒビール大山崎山荘美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/12/22

萩原康一郎「白隠 禅と書画」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/6/9

春木有亮「高橋直樹「明日香むらの吹きガラス展」 もらったイメージ村へ還元」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/3/2

平井直子「写真の内と外に空間 芦屋市立美術博物館「震災から十年 米田知子」展」2005/3/16

平井直子「大阪府立中之島図書館」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/5/5

平光睦子「高島華宵展 大正・昭和☆レトロ・ビューティー」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/4/21

松友知香子「本田宗一郎と井深大展」『大阪日々新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/2/9

楊氷「横山大観の美術展について」(京都国立近代博物館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/7/28

吉田馨「山田知事とざっくばらんに」『Leaf5 月号』 pp. 57-59, 2005/3/25

吉田馨「『ローレライ』 嫌味なく味わいすっきり」『信濃毎日新聞』<シネマの味かた> p. 20, 2005/3/17

吉田馨「『パッチギ!』 心にしみる素顔の京都」『信濃毎日新聞』<シネマの味かた> p. 24, 2005/2/17

吉田馨「『TAXY NY』 心をうばう「走る」快感」『信濃毎日新聞』<シネマの味かた> p. 20, 2005/1/20

吉田馨「『Mr.インクレディブル』 家族愛で闘うヒーロー」『信濃毎日新聞』<シネマの味かた> p. 13, 2004/12/23

吉田馨「第47回朝日ベストテン映画祭講評」『朝日新聞』 p. 2, 2004/12/10

吉田馨「『隠し剣 鬼の爪』 京都の風格薫る時代劇」『信濃毎日新聞』<シネマの味かた> p. 13, 2004/11/25

吉田馨「中島貞夫監督特集上映トーク 中島貞夫 VS 上倉庸敬&吉田馨」シネ・ヌーヴォ, 2004/10/31

吉田馨「『スウィングガールズ』 ジャズの魔法にかかると」『信濃毎日新聞』<シネマの味かた> p. 20, 2004/10/28

吉田馨「『青空天使』 敗戦5年後の夢物語」『信濃毎日新聞』<映画の缶づめ> p. 13, 2004/9/30

吉田馨「第4回新京極映画祭『遊撃の美学』 映画監督中島貞夫に聞く・映画愛」誓願寺境内, 2004/9/24

吉田馨「YAMAMORI ラジオ」KBS 京都放送, 2004/9/20

吉田馨「ザ・ワイド」日本テレビ, 2004/9/20

吉田馨「情報ツウ」読売テレビ, 2004/9/20

吉田馨「武部博の日曜トーク」KBS 京都放送, 2004/9/19

吉田馨「得だねテレビ」KBS 京都放送, 2004/9/17

吉田馨「京都映画祭ガイド」(13回シリーズ)京都三条ラジオカフェ, 2004/9/1-9/17

吉田馨「京都まんまんなか最新案内」『関西ウォーカー』 pp. 56-57, 2004/9/15

吉田馨「市民手作りの京都映画祭」『毎日新聞』 p. 25, 2004/9/15

吉田馨「みやびじょんワイド」みやびじょん, 2004/9/10

吉田馨「京都ちゃちゃちゃっ！」KBS 京都放送, 2004/9/9
吉田馨『誰も知らない』4人の生静かに激しく『信濃毎日新聞』〈映画の缶づめ〉 p. 13, 2004/9/2
吉田馨「今年もやります！新京極映画祭」京都三条ラジオカフェ, 2004/8/30
吉田馨「第4回京都映画祭『ターンオーバー』トーク」つたや, 2004/8/26
吉田馨『LOVERS』壮大な美の迷宮 満悦の悦び『信濃毎日新聞』〈映画の缶づめ〉 p. 13, 2004/8/5
吉田馨『メダリオン』ジャッキー50本目ももはや不滅『信濃毎日新聞』〈映画の缶づめ〉 p. 26, 2004/7/8
吉田馨『カレンダー・ガールズ』裸になった淑女たち『信濃毎日新聞』〈映画の缶づめ〉 p. 20, 2004/6/10
吉田馨「銀幕の湖国出版」『朝日新聞』〈あいあい広場〉 p. 3, 2004/6/9
吉田馨『ピーター・パン』夢見る心いつまでも『信濃毎日新聞』〈映画の缶づめ〉 p. 20, 2004/5/13
吉田馨「YAMAMORI ラジオ！」KBS 京都放送, 2004/5/4
吉田馨「真夜中の京都映画祭」(6回シリーズ)京都三条ラジオカフェ, 2004/4/28-5/3
吉田馨『恋愛適齢期』名優競演・大人の喜劇『信濃毎日新聞』〈映画の缶づめ〉 p. 13, 2004/4/8
吉田馨「海の撮影は琵琶湖で・京都映画人に聞き取り」『朝日新聞』〈テーブルトーク〉 p. 13, 2004/4/8
林承緯「台湾の縁起物について」『PACIFIC TIMES』米国 ロサンゼルス, 2004/7/12

教員の研究活動(2004年度)

1. 大橋 良介 教授

1944年2月8日生。1969年、京都大学哲学科卒業。1974年、ミュンヘン大学大学院哲学科博士課程、学位取得。1983年、ヴェルツブルク大学で哲学教授資格(ハビリタチオン)取得。専攻：美学・哲学・現象学。

1-1. 論文

大橋良介「歴史における美の感性——ひとつのアドルノ論——」『待兼山論叢(美学篇)』38, pp. 1-26, 2004/12

大橋良介「横溢する半」と「エトランジュテ」——日仏文化の建築論的考察(英訳表題 The "Excessive Half" and the "Etrangeté). A Reflexion on Japanese and French Culture"), 『デザイン・ディスコース』(英文表題 Design Discourse), 創刊準備号(Inaugural Preparatory Issue, pp. 8-21, 2004/5)

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

大橋良介「花随想・無情と有情」『同仁』3, pp. 29-31, 2004/7

1-4. 口頭発表

大橋良介「夏目漱石『門』——近代日本人のアイデンティティ」「岡倉天心『茶の本』——ヨーロッパの視点から見た日本」社団法人日本能率協会・「MA マネジメント・インスティテュート」講演, 神戸ポートピアホテル, 2004/12/6

Ohashi, Ryosuke, "Zusammenleben der Religionen", ベルリン日独センター (Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin), 主催シンポジウム「諸宗教の共生」議長スピーチ, 2004/9/27

Ohashi, Ryosuke, "Aesthetics of Emptiness as an Example of the Asian Aesthetics", アジア美学芸術学会講演 台北市国立図書館/台湾, 2004/8/27

大橋良介「哲学と建築(3)」かほく市, 西田幾多郎記念哲学館, 2004/8/24

大橋良介「都市を生かすもの、殺すもの」大阪中之島センターシンポジウム講演。平成16年度徳徳堂春季講座「生のかたち、死のかたち」でのシンポジウム「都市の生と死。廃虚とパラダイスのはざままで」2004/5/26

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

大橋良介 ベルリン高等研究所フェローシップ, 1997/10/1~1998/7/31

大橋良介 フンボルト・メダル(フンボルト財団総長より), 1996/3/31

大橋良介 ジーボルト賞(ドイツ連邦共和国大統領より), 1990/7/3

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

西田哲学館名誉館長	2002年4月~現在
国際ヘーゲル協会(Internationale Hegel-Vereinigung)理事	1997年12月~現在
日本フィヒテ協会理事	1995年6月~現在
国際高等研究所特別委員	1993年4月~現在
日本シェリング協会理事	1992年2月~現在
日独文化研究所理事	1991年6月~現在
実存思想協会理事	1988年7月~現在
国際インターカルチャー哲学会(Gesellschaft für Interkulturelle Philosophie) 副会長	1995年6月~2004年6月

2. 上倉 庸敬 教授

1949年生。専攻：美学／芸術学／映画学。

2-1. 論文

上倉庸敬「日本に『建築 architecture』はない」『美学研究』3, pp. 1-14, 2005/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

上倉庸敬「映画評」朝日新聞 大阪本社版夕刊, 2004/6~2005/3

「パッション」(2004/6/17), 「ベジャール、バレエ、リュミエール」(2004/7/15), 「キング・アーサー」(2004/8/25),

「きみに読む物語」(2005/1/26), 「香港国際警察」(2005/3/9), 「インファナル・アフェアIII 終極無間」(2005/3/31)

上倉庸敬「美術評」大阪日々新聞, 「前原真証展」(2004/12/29), 「山本洋三水彩画展」(2005/2/2)

上倉庸敬「書評 中島貞夫『遊撃の美学』」大阪日々新聞, 2004/9/20

2-4. 口頭発表

上倉庸敬「乳首に生えた長い毛とパステル・カラー——吉行淳之介の芸術その初めと終わり——」第14回文芸学研究会, 神戸大学, 2004/9/18

Kamikura, Tsuneyuki, "The Logic of the Senses – on "Tokyo Story" by Yasujiro Ozu", The 3rd Asian Art Symposium in Taipei, 2004/8/25

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2003年度～2004年度、基盤研究(C)、代表者：上倉庸敬

課題番号：1552008

研究題目：ドラマ空間における音楽に対する観客反応の実証的な研究

研究経費：2004年度 1,000千円

研究の目的：

芸術作品の制作理論と、それに基づいて出来あがった作品と、観客とのあいだには、どのようなズレがあるか。本研究はそれを明らかにしたい。いいかえれば「予想された観客」と「実際の観客」のズレを、できるかぎり客観的つまり実証的に明らかにしたい。そのためには、作品の意図などという曖昧な対象ではなく、作品中で何か他のものに役立とうとしていることが明らか対象を選ばなくてはならない。本研究では、ドラマの伴奏音楽を対象にして、それに対する観客の反応データを多数・多様に集積し、可能なかぎり客観的に記述、考察をほどこしたい。

映画監督の黒澤明は「映画制作において、映画をいちばん熟知しているのは監督であるから音楽担当者は監督の指示にしたがわねばならぬ」と主張したが、同監督の作品『乱』において音楽監督をつとめた武満徹は「音楽をいちばん熟知しているのは音楽担当者であるから監督といえどもその提案を受け容れるべきだろう」と反論した。黒澤と武満の対立が現実には『乱』という作品に解消されたのは、劇映画において映像・音楽それぞれが従わねばならぬ対象が、映像・音楽いずれでもなく、「劇」すなわち「ドラマ」だからである。

『乱』の完成後も武満は「音楽の知識が50年前でストップしている黒澤では現代の十分な映画音楽はつくれぬ」と堂々、不平を洩らすことができた。黒澤とは作品制作の考え方が違うと武満は思っていたろう。しかし実際は両者の「予想する観客」が質的に異なっていたというべきであろう。

映画史100年のなかで映画音楽を革新したのは、ヒッチコック監督『サイコ』の Bernard Hermann だといわれているが、その画期の基準は制作の観点から立てられている。制作側からすれば観客は「予想された観客」でしかない。実際の観客はどうであったか。たとえば活弁につけられたような、剣戟のときは勇ましく2分の1拍子、悲劇のときは短調などという単純な音楽は、観客側からみても否定されるべきなのかどうか。

ドラマをつくりあげる映像について、観客に対し、どのような音楽がどのような効果をあげるかという問題は、一般理論として未だ解決をあたえられていない。映画の場合だけではない。言葉によってドラマをつくりあげる演劇の場合も、おなじ問題がある。演劇をつくりあげる言葉について、観客に対し、どのような音楽がどのような効果をあげるか。

たとえ伴奏音楽のような二義的なものについてであれ、理論の予想する観客と実際の観客のズレが客観的に実証されれば、その結論は広い範囲のさまざまな問題を明らかにしてくれるだろう。一例をあげれば古典芸能における「型」である。「型」の変遷は「予想された観客反応」と「実際の観客反応」のズレのなかで跡づけるができよう。さらに一例をあげれば、造形作品の様式変遷の問題にも照明をあてることのできる。本研究の射程範囲は広く遠いというべきである。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

おおさかシネマフェスティバル実行委員会・委員

2004年4月～現在

第4回京都映画祭実行委員会・企画委員

2003年10月～2005年3月

美学会・委員

1992年10月～2004年9月

日本学術会議芸術学研究連絡委員会・委員

2001年4月～2003年3月

3. 藤田 治彦 教授

1951年生。大阪市立大学大学院生活科学研究科博士課程修了。学術博士(大阪市立大学、1983年)。京都工芸繊維大学工学芸学部助教授、ルーヴェン・カトリック大学客員教授、大阪大学大学院文学研究科助教授などを経て、現職。

専攻：美学・芸術学。

3-1. 論文

Fujita Haruhiko, "History and Philosophy of Design History Forum, 1998-2004," 4th International Conference on Design History & Design Studies, Universidad de Guadalajara, pp. 28-29, 2004

3-2. 著書

藤田治彦編『芸術・コミュニケーション・デザイン』国際フォーラム論文集, 2005/3

藤田治彦(川端康雄ほか19名との共著、藤田治彦監修)『アーツ・アンド・クラフツと日本』思文閣出版, 2004/9

藤田治彦(ピーター・コーマックほか10名との共著、藤田治彦監修)『ウィリアム・モリスとアーツ&クラフツ』梧桐書院, 2004/7

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

藤田治彦「ウィリアム・モリスのイギリス・6・テムズ川の流れに」『英語教育』53-13, 大修館書店, 巻頭グラビア頁, 2005/3

藤田治彦「ウィリアム・モリスのイギリス・5・ケルムスコットとコッツウォルズ地方」『英語教育』53-12, 大修館書店, 巻頭グラビア頁, 2005/2

藤田治彦「ウィリアム・モリスのイギリス・4・レッド・ハウスからクイーン・スクエアへ」『英語教育』53-11, 大修館書店, 巻頭グラビア頁, 2005/1

藤田治彦「ウィリアム・モリスのイギリス・3・オックスフォード」『英語教育』53-10, 大修館書店, 巻頭グラビア頁, 2004/12

藤田治彦「ウィリアム・モリスのイギリス・2・モールバラ校とエイヴベリ」『英語教育』53-9, 大修館書店, 巻頭グラビア頁, 2004/11

藤田治彦「ウィリアム・モリスのイギリス・1・ウォルサムストウとエピングの森」『英語教育』53-7, 大修館書店, 巻頭グラビア頁, 2004/10

3-4. 口頭発表

Fujita Haruhiko, "History and Philosophy of Design History Forum, 1998-2004," 4th International Conference on Design History & Design Studies, Guadalajara, 2004/11/4

Fujita Haruhiko, "Changing Ways of Arts, *Geido*," XVI International Congress of Aesthetics, Rio de Janeiro, 2004/7/22

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

藤田治彦 意匠学会賞, 2002/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2004年度～2006年度、基盤研究(B)、代表者：藤田治彦

課題番号：16320022

研究題目：近代工芸運動の総合的国際比較研究

研究経費：2004年度 5,200千円

研究の目的：

本研究の目的は、イギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動、フランスの応用美術推進運動、ドイツとオーストリアの工芸博物館活動などの19世紀に興った近代工芸運動、イギリスの影響を受けながらも独自の展開を示したアメリカのク

ラフツマン運動、アール・ヌーヴォー、アール・デコ、ユーゲントシテイルなどの 19 世紀から 20 世紀初頭にかけて高まった近代装飾美術の諸動向、そして 20 世紀前半の近代建築・デザイン運動という西欧と北米を舞台とした複数の同行の相互関係および、それらと日本の民芸運動や北欧の工芸運動など世界各地の関連諸運動との関係を、各国文化と諸芸術分野の専門家による分担や共同研究を通じて明らかにすることである。工芸・建築・装飾芸術という近代造形芸術の重要な諸分野における思想と活動の変遷を、近代絵画や彫刻のそれと比較しながら体系的に研究し、美学・美術史上の位置づけを試みる。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 21 世紀 COE プログラム分担

「インターフェイスの人文学」(代表者: 鷺田清一)

3-8. 学会役員等の引き受け状況

意匠学会・会長	2005 年 4 月～現在
同上・委員	1994 年 4 月～現在
デザイン史フォーラム・代表	2005 年 3 月～現在
美学会・委員	2000 年 4 月～現在
民族藝術学会・理事	2000 年 4 月～現在
日本デザイン学会・評議員	1994 年 4 月～現在

4. 加藤 浩 助教授

1960 年生。1983 年、大阪大学文学部美学科卒業。1985 年、大阪大学大学院文学研究科修士課程修了。文学修士(大阪大学、1985 年)。1987 年 10 月 岡山大学助手、1995 年 4 月 岡山大学助教授、1998 年 10 月 大阪大学助教授。専攻: 文芸学/西洋古典学/美学。

4-1. 論文

なし

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

5. 渡辺 浩司 助手

1962年生。1994年3月、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。1994年より現職。博士(文学、大阪大学、1998年)。専攻：文芸学／西洋古典学。

5-1. 論文

なし

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

渡辺浩司訳・註・解説『デメトリオス 文体論』(『ディオニュシオス/デメトリオス 修辞学論集』所収), 京都大学学術出版会, pp. 399-506, pp. 548-559, 2004/8

渡辺浩司「海外雑誌論文紹介」『古代哲学研究 METHODOS』36, p. 74, p. 76, p. 79, 2004/5

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

民族芸術学会委員(庶務)

1994年4月～現在

2-22 音楽学・演劇学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	4	11	1	0	1	17

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	1	13	14	2	0	30

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

(音楽学)

井手口彰典「「非——芸人」としてのストリートミュージシャン——「他者」の機能を中心に——」『ポピュラー音楽研究』(日本ポピュラー音楽学会), 8, pp. 3-16, 2004/12

沈金雲「观摩“神戸欢喜合唱团”排练及思考」『人民音楽』中国文学幻術界联合会, 2004/12

中村真「『正しい』デクラメーションに託された音楽的戦略——オタカル・ホスチンスキー『チェコ語の音楽的デクラメーションについて』の理念」『スラヴ研究』(北海道大学スラヴ研究センター), 51, pp. 373-390, 2004/5

Nakamura, Makoto, “Janáček's case: the 'fear of novelty' and his earliest folk music studies,” *Horror novitatis* (Colloquium Musicologicum Brunense 37, 2002), Praha: KLP —— Konisch Latin Press, [2004], pp. 128-134,

袴田麻祐子「寶塚少女歌劇にみる『西洋』の意味とその変化」『フィロカリア』(大阪大学大学院文学研究科 芸術学・芸術史講座), 22, pp. 35-52, 2005/3

福本康之「日本におけるベートーヴェン受容Ⅴ——明治40年までの演奏記録を読む: 資料と解題」『音楽研究所年報』(国立音楽大学), 18, pp. 177-190, 2005/3

Yamada, Takashi (山田高誌), “L'Impresa de *Li napoletani in America: nell'attivit  di Gennaro Bianchi, impresario del Teatro Nuovo*”, in Yamada Takashi, *Edizione scientifica, Piccinni & Cerlone, Li Napoletani in America*” (1768, Napoli): *Commedia per musica di Francesco Cerlone, musica di Niccol  Piccinni*. (Centro Ricerche Musicali “Casa Piccinni” del Conservatorio di musica di Bari, 2004/10), pp. V-XVIII

山田高誌「町から宮廷へ、娯楽から作品へ; 1760年代から70年代のナポリの喜劇オペラの社会的地位の変化と、台本における「笑い」の重心の変化」『演劇研究センター紀要』(早稲田大学21世紀COEプログラム)演劇の総合的研究と演劇学の確立”, 4, pp. 57-69, 2005/1

(演劇学)

菊池あずさ「一九九九年の蜷川幸雄演出『リア王』——道化の演出を中心に——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研

- 究科演劇学研究室), 7, pp. 196-227, 2004/12
- 澤野加奈『『妙』の現出をめぐる世阿弥の思索——その方法と位の問題を中心に——』『フィロカリア』(大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座), 22, pp. 53-64, 2005/3
- 團夕紀子「古浄瑠璃〔日本大王〕と林鶯峰『日本王代一覽——神話物古浄瑠璃上演の背景試論——』『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 7, pp. 68-84, 2004/12
- 團夕紀子「竹本義太夫推定正本『頼朝七騎落』をめぐる諸問題』『芸能史研究』(芸能史研究会), 165, pp. 1-20, 2004/4
- 中尾薫「明和本《冊子洗》をめぐる諸問題——詞章・演出・改訂者——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 7, pp. 394-403, 2004/12
- 中尾薫「田安宗武と明和改正謡本——田安家旧蔵『版本番外謡本』の書込みをめぐる——」『芸能史研究』(芸能史研究会), 166, pp. 1-19, 2004/7
- 中尾薫「明和改正謡本と田安宗武——新作能《梅》を中心に——」『能と狂言』(能楽学会), 2, pp. 90-102, 2004/5
- 橋場夕佳「観世大夫元章の小書——《富士太鼓》「現之楽」を中心として——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 7, pp. 403-410, 2004/12
- 正木喜勝「様式の交代——村山知義作・演出『孤児の処置』の分析——」『待兼山論叢(美学篇)』(大阪大学文学会), 38, pp. 77-98, 2004/12

(2)口頭発表

(音楽学)

[学会]

- 井手口彰典「『レコード鑑賞』再考——テクノロジー進展に伴う新たな鑑賞モデルの提唱——」日本音楽教育学会第35回大会, 武蔵野音楽大学, 2004/11/3
- 井手口彰典「音楽における「送り手」と「受け手」との融合: 音系を事例に」日本ポピュラー音楽学会関西地区第1回研究例会, 関西大学, 2004/5/3
- 小石かつら「Felix Mendelssohn Bartholdy(1809-1849)のロンドン演奏活動」日本音楽学会関西支部例会, 神戸大学, 2004/6/26
- 谷正人「イラン伝統音楽保存普及センターの目指した知識観・教育観」日本オリエント学会第46回大会, 東京外国語大学, 2004/10/24
- 谷正人「ダストガーというしくみ: イラン伝統音楽の即興を支える記憶のありかた」ラウンドテーブル「即興: 音楽生成のモデルとその実践をめぐる」東洋音楽学会東日本支部第13回例会, お茶ノ水女子大学, 2004/5/15
- 谷正人「イラン音楽にみる Charkh——演奏形式と楽曲構造から」日本中東学会第20回年次大会, 明治大学駿河台キャンパス, 2004/5/9
- 中村真「いかにしてヤナーチェクは『民族的』な芸術音楽を目指すに至ったのか?——初期の作品と理論的著作群(1870年代-1880年代)を中心に——」民族芸術学会第96回研究例会, 大阪市立東洋陶磁美術館, 2005/3/5
- 袴田麻祐子「寶塚少女歌劇にみる『西洋』の意味とその変化」日本音楽学会第55回全国大会, 名古屋芸術大学, 2004/11/6
- 福本康之「聖と俗の西洋音楽受容——仏教界の事例を中心に」『パネル: 音楽を通してみる近代日本の諸相』東洋音楽学会・西日本支部第222回定例研究会, 神戸大学発達科学部, 2005/2/5
- 福本康之[シンポジウム]テレビ公開討論「アジアにおける仏教音楽の歴史と可能性」(全2回), 韓国仏教学会&韓国仏教音楽学会(放送: 韓国仏教テレビ), 2004/5/26-27
- 山田高誌「1760年後半から80年代のナポリの喜劇オペラにおける“異国趣味”への趣味の異なり; ピッチンニとパイジェッロ、チマローザの作風から。」日本音楽学会・第55回全国大会, 名古屋芸術大学, 2004/11/7
- Yamada, Takashi (山田高誌) “L’Impresa del Teatro Nuovo di Napoli negli anni 1770-71: il caso della “famosa” e mai documentata rappresentazione de *Le Trame per amore* di Paisiello”, Società Italiana di Musicologia, undicesimo convegno (イタリア音楽学会・第11回全国大会), Università di Lecce, Italia(イタリア・レッチェ大学), 2004/10/23
- 山田高誌「1770年、パーニーはナポリで「誰」を観た? ; 私立劇場興行師の銀行口座から再構築した、パイジェッロ《Le

《Trame per amore》の運営細目と、劇場運営」日本音楽学会・関東支部第308回例会，東京藝術大学，2004/4/10
[研究会]

小野真紀，What did Szymanowski experience in Biskra? [研究発表]”: an attempt at historical reconstruction based on Bartok's collection” 伊東信宏，ステラ・ジブコバと共同(ワルシャワ芸術史家協会)，2004/11/16

谷正人「イラン音楽における『手癖』と『即興演奏』」国立民族学博物館2004年度共同研究「音楽と身体に関する民族美学的研究(代表者山田陽一)，国立民族学博物館，2004/10/16

袴田麻祐子「憧れはフランス、花のパリ——昭和初期レビューをめぐる『パリ』イメージの構築」日仏文化交渉の研究班，京都大学人文学研究所，2005/2/28

牧野淳子[講演とワークショップ]「アジアにおける竹の音楽文化」平成16年度神戸市長田区PTA連合会コンサート，兵庫県立文化体育館，2005/2/18

牧野淳子[研修会講演]「教員研修会：音楽づくりを身近なものに——サウンドスケープからのアプローチ——」宝塚市立高司小学校，2004/6/23

Yamada, Takashi (山田高誌) “La storia e la prospettiva di rappresentazione dell’opera barocca in Giappone”.

Simposium internazionale “I suoni di Ulisse”(モンテヴェルディ《ウリッセの帰還》と古楽オペラに関する国際シンポジウム)，Centro Ricerche Musicali “Casa Piccinni” del Conservatorio di Musica “Niccolo Piccinni” di Bari(バリー音楽院付属音楽研究所)，2005/2/6

Yamada, Takashi (山田高誌)，“L’Impresa de *Li napoletani in America* al Teatro de’ Fiorentini; nell’attività di Gennaro Blanchi impresario del Teatro Nuovo.” Sinposium internazionale “Gluck”(グルックに関する国際シンポジウム)，Centro Ricerche Musicali “Casa Piccinni” del Conservatorio di Musica “Niccolo Piccinni” di Bari(バリー音楽院付属音楽研究所)，2004/10/18

山田高誌「町から宮廷へ、娯楽から作品へ、ナポリの喜劇オペラの転換点1760-70年代——パイジェルロ作曲『中国の偶像』(1767)、『なりきりソクラテス』(1775)における笑い」早稲田大学演劇博物館演劇研究センター21世紀COEプログラム，西洋演劇理論研究「オペラ研究会」早稲田大学，2004/4/27

(演劇学)

菊池あずさ「蜷川幸雄の『ハムレット』——平幹二郎から藤原竜也まで——」近現代演劇研究会，大阪大学，2004/7/24

田中みどり「『戀に破れたるサムライ』(1937年)の上演意義」待兼山芸術学会，大阪大学，2004/4/17

團夕紀子「上方板歌舞伎浄瑠璃『絵番付』小考——宝暦期浜芝居を中心に——」芸能史研究会大会，キャンパスプラザ京都，2004/6/6

團夕紀子「講読『大友真鳥』」演劇研究会五月例会，2004/5/29

團夕紀子「講読『大友真鳥』」演劇研究会四月例会，2004/4/17

陶原洋子「資料紹介 謡曲「水分」」六麓会，神戸勤労会館，2004/12/12

中尾薫「田安家と明和改正謡本——田安家旧蔵版本番外謡本の書込みをめぐる——」芸能史研究会大会，キャンパスプラザ京都，2004/6/6

正木喜勝「アヴァンギャルドからプロレタリアへ——村山知義の場合——」文芸学研究会，大阪大学，2005/3/5

梶井智英「近代俳優術とプラーナ・気の関係」近現代演劇研究会，大阪大学，2004/12/18

(3)その他(書評・翻訳など)

(音楽学)

井手口彰典(白石奏人と共同)[レクチャーの企画、構成]音楽学オープンセミナーシリーズ「阪大コレギウム・ムジクム」第2回「スピネット～家庭で愛された小さな鍵盤楽器～」(講師＝三島郁；監修＝根岸一美、伊東信宏)，大阪大学旧医療技術短期大学部本館1階人文学オープンセミナー室(大阪)，2005/3/17

井手口彰典「第16回大会報告 ワークショップA」日本ポピュラー音楽学会『NEWSLETTER』#63，2005/2

岡村睦[企画構成・編曲及びレクチャー]「きらめきコンサート——バロック音楽への誘い——」きらめきキッズアカデミー生涯学習会館多目的ホール(神戸市)，2004/10/23

- 小野真紀「特集：大学院ってどんなところ？音楽大学のその先 学生さんの声」『ショパン』(ショパン), 246(7月号), p. 47, 2004/7
- 川端美都子[演奏会の解説]プログラム・ノート, 話担当「アルゼンチンの20世紀の奇才アルベルト・ヒナステラの世界」企画(瀬田敦子と共同), カフェ・クレオール(神戸), 2004/7/30
- 小石かつら[演奏会の解説]プログラム・ノート「多川響子ピアノリサイタル」青山記念音楽会館バロックザール(京都), 2004/11/7
- 小林ひかり[演奏会の解説]プログラム・ノート「日本・ノルウェー音楽家協会第5回演奏会《ニューイヤーコンサート2005》カスケードホール(東京), 2005/1/8
- 小林ひかり[演奏会の解説]プログラム・ノート「日本・ノルウェー音楽家協会第4回演奏会《山々からきこえる歌》ノルウェーの民俗音楽と芸術音楽」東梅田教会礼拝堂(大阪), 2004/10/2
- 小林ひかり[演奏会の解説]プログラム・ノート「日本・ノルウェー音楽家協会第2回演奏会《新しい時代にむかって》ノルウェーの管楽・ピアノ作品」自由学園明日館講堂(東京), 2004/6/12
- 小林ひかり[演奏会の解説]プログラム・ノート, 話, 編曲担当「ノルウェー音楽家協会第1回演奏会《ノルウェーの抒情》グリーグとその仲間たち」企画(井上勢津と共同), タワーホール船堀(東京), 2004/4/2
- 白石奏人(井手口彰典と共同)[レクチャーの企画、構成]音楽学オープンセミナーシリーズ「阪大コレギウム・ムジクム」第2回「スピネット～家庭で愛された小さな鍵盤楽器～」(講師＝三島郁；監修＝根岸一美、伊東信宏)大阪大学旧医療技術短期大学部本館1階人文学オープンセミナー室(大阪), 2005/3/17
- 白石奏人[公演プログラム]ひょうごオリジナル音楽公演「佐渡裕とスーパーキッズ・オーケストラ」(神戸, 和田山, 龍野, 2004/8/28-30)公演プログラム曲目解説(※曲目＝ホルスト《セント・ポール組曲》より第1, 2, 4曲；ヴィヴァルディ《四季》より〈夏〉；バッハ《無伴奏チェロ組曲第3番》より〈前奏曲〉；モーツァルト&シュレーダー《アイネ・クライネ・ラッハムジーク》；《カーペンターズ・メドレー》；アンダーソン《プリंक・プランク・プルンク》；バッハ《無伴奏チェロ組曲第2番》より〈前奏曲〉；レスピーギ《リュートのための古風な舞曲とアリア》より第1, 3, 4曲), 2004/8/28-30
- 谷正人[事典項目]『総合百科事典デジタルポプラディア 2005』「ペルシア音楽」項目の音源(サントゥール演奏)と解説(ポプラ社), 2004/11
- 谷正人[共著]「イラン音楽の楽しみかた——三つの観点から——」『イランを知るための65章～エリア・スタディーズ～』(明石書店), pp. 132-137, 2004/9
- 福本康之[解説：CD]「念仏～日々のうた」浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター勤式・仏教音楽研究所, HONG0403, 2004/12
- 福本康之[放送：企画・台本・出演]NHK-FM「バロックの森」日本放送協会, 2004/4/26-30, 5/24-28, 6/21-25, 7/19-23, 8/23-27, 9/13-17
- 牧野淳子[田嶋謙一氏とのセミナーコンサート]「藝術夜会——竹の心——」OBPアーツプロジェクト・レクチャー実演シリーズ, 大阪ビジネスパーク松下IMPビル5F-C会議室, 2005/3/1
- 牧野淳子[ワークショップ]「竹による創造的な音楽づくり」福祉における「グリーン化」セミナー, (財)たんぼの家アートセンター-HANA, 2005/2/20
- 牧野淳子[演奏とワークショップ]「海のシルクロードの国々をたどる文化の伝播」亀岡市交流活動センターワールドフェスタ 2005, (財)亀岡市交流活動センター, 2005/2/6
- 牧野淳子[演奏&ワークショップ]「バンブーフェスタ」(財)亀岡市交流活動センター, 2004/10/9
- 山口篤子[寄稿]「ブレイクタイム」『ホールニュースとよなか』(豊中市), 192～204, 2004/3～2005/3
- 山口篤子[演奏会の解説]「池田混声合唱団秋のコンサート ハイドン オラトリオ《四季》」池田市民文化会館, 2004/9/12
- 山田高誌[楽譜校訂]Edizione critica "Li Napoletani in America" (1768, Napoli); Commedia per musica di Francesco Cerlone con musica di Niccolò Piccinni. (Centro Ricerche Musicali "Casa Piccinni" del Conservatorio di musica di Bari, 2004/10) XVIII(43)p.+ 454p.

(演劇学)

團夕紀子『日本大学総合学術情報センター所蔵 DVD 版歌舞伎番付集成』(作業分担)粕谷宏紀・歌舞伎年表研究会編, 八木書店刊, 2004/11

教員の研究活動(2004 年度)

1. 天野 文雄 教授

1946 年生。国学院大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)。上田女子短期大学助教授、大阪大学文学部助教授を経て、1996 年から現職。専攻：能楽研究。

1-1. 論文

天野文雄「『高砂』の主題と成立の背景——応永二十九年の阿蘇大宮司雑掌の上洛と義持の治政をめぐる——」『演劇学論叢』7, pp. 14-51, 2004/12

天野文雄「明和改正謡本と現代の能(二)——濁音から清音への改訂をめぐる——」『演劇学論叢』7, pp. 378-385, 2004/12

天野文雄「貝塚御坊願泉寺蔵『翁之大事次第』をめぐる二、三の問題」『おもて』83(能苑逍遥 24), pp. 4-5, 2004/12

天野文雄「『田村』の「男体」や『芭蕉』『葛城』などの「女体」は世阿弥の芸論用語なるべし」『おもて』82(能苑逍遥 23), pp. 4-5, 2004/9

天野文雄「開口についての覚書」『横浜能楽堂冊子〔ワキとその職能(六)〕』pp. 3, 2004/9

天野文雄「ワキと地謡」『横浜能楽堂冊子〔ワキとその職能(五)〕』pp. 3, 2004/8

天野文雄「空蟬はなぜ碁に負けたのか——『碁』を再読する——」『能楽観世座サマースクール冊子』pp. 4-5, 2004/8

天野文雄「『脇留め』とその歴史」『横浜能楽堂冊子〔ワキとその職能(四)〕』pp. 3, 2004/7

天野文雄「新出能楽資料五点」『おもて』81(能苑逍遥 22), pp. 4-5, 2004/6

天野文雄「アイの段におけるワキの語り」『横浜能楽堂冊子〔ワキとその職能(二)〕』pp. 3, 2004/5

天野文雄「『真之次第』と『礼脇』」『横浜能楽堂冊子〔ワキとその職能(三)〕』pp. 3, 2004/5

天野文雄「夢の憂世の中宿の——『頼政』の主題と趣向——」『第二回廣田鑑賞会能冊子』pp. 5-7, 2004/5

天野文雄「夢幻能のワキは観客の代表なのか」『横浜能楽堂冊子〔ワキとその職能(一)〕』pp. 3, 2004/4

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

天野文雄「『金札』の作意と成立の背景——永徳元年「花の御所」造営との関連——」芸能史研究会十一月例会, 京都キャンパスプラザ, 2004/11

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

天野文雄 第18回観世寿夫記念法政大学能楽賞, 法政大学, 1996/1

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

民族芸術学会・理事	2003年4月～2006年3月
芸能史研究会・委員	2003年4月～2006年3月
日本演劇学会・副会長	2002年4月～2006年3月
能楽学会・委員	2002年4月～2006年3月

2. 根岸 一美 教授

1946年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。文学修士。大阪音楽大学専任講師，大阪教育大学助教授・教授，大阪大学文学部教授を経て現職。専攻：音楽学。

2-1. 論文

根岸一美 「復活の夢限りなく」 読売新聞大阪本社版夕刊(「潮音風声」欄), p. 7, 2004/11/17

根岸一美 「オーストリアへ」 読売新聞大阪本社版夕刊(「潮音風声」欄), p. 8, 2004/11/16

根岸一美 「“音”の再現へ」 読売新聞大阪本社版夕刊(「潮音風声」欄), p. 9, 2004/11/15

根岸一美 「チラシも貴重」 読売新聞大阪本社版夕刊(「潮音風声」欄), p. 7, 2004/11/12

根岸一美 「ラスカとの出会い」 読売新聞大阪本社版夕刊(「潮音風声」欄), p. 3, 2004/11/11

根岸一美 「A. ブルックナー《テ・デウム》」 京都シティーフィル合唱団第30回演奏会 プログラム冊子, pp. 8-11, 2004/11

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

根岸一美 「大阪シンフォニカー交響楽団第97回定期演奏会」 『関西音楽新聞』 p. 3, 2005/3

根岸一美 「ヨーゼフ・ラスカの生涯と本日の演奏曲目について」 「日本の絵～ヨーゼフ・ラスカ没後40年記念演奏会」 プログラム冊子(含歌詞対訳), pp. 3-14, 2004/11

根岸一美 「過去そして本日のプログラムによせて」 大阪シンフォニカー交響楽団第11回いずみホール定期演奏会「古典派の現在」 プログラム冊子, p. 7, 2004/9

根岸一美 「ザ・タローシンガーズ第11回定期演奏会」 『関西音楽新聞』 p. 3, 2004/9

根岸一美 「ヘンデル《メサイア》(プラウト版)」 川西市民合唱団設立10周年記念・川西市市制施行50周年記念演奏会 プログラム, p. 6, 2004/7

根岸一美 「第46回大阪国際フェスティバルから 劇場コンサート・オペラ《ラ・ボエーム》」 『関西音楽新聞』 p. 3, 2004/6

根岸一美 「モーツァルト《ピアノ協奏曲第9番「ジュノーム」》，ブルックナー《交響曲第4番「ロマンティック」》」 関西フィルハーモニー管弦楽団第165回定期演奏会 プログラム冊子, pp. 4-5, 2004/6

2-4. 口頭発表

根岸一美 「ブルックナーの《テ・デウム》について」 京都シティーフィル合唱団合宿，関西セミナーハウス, 2004/9/4

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本音楽学会関西支部監事

2003年4月～2005年3月

3. 永田 靖 教授

1957年生。1981年、上智大学外国語学部ロシア語学科卒業、1988年、明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程単位取得退学。文学修士。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究所客員研究員、鳥取女子短期大学助教授を経て、1996年から現職。専攻：演劇学。

3-1. 論文

永田靖「ロシア演劇史」『比較演劇史の方法論の構築』科学研究費基盤研究(B)(1)報告書, pp. 105-113, 2005/3

永田靖「如月小春の80年代都市的演劇」『日本、もうひとつの顔』ストラスブール大阪大学フォーラム 2004, pp. 152-165, 2005/2

永田靖「演劇史とナショナル・モデル——ロシアにおける演劇史記述の諸問題」『演劇学論叢』大阪大学大学院演劇学研究室, 7, pp. 249-268, 2004/12

永田靖「演劇史としての回想——ボグダノワ・オルロワ『ノーラ』を稽古するメイエルホリドを読む」『演劇学論集』日本演劇学会紀要, 42, pp. 33-50, 2004/11

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

永田靖「パリ陥落と『ボン・ヴォヤージュ』」『ボン・ヴォヤージュ』日本配給用プレスキット, Asmik Ace, pp. 18-19, 2004/10

永田靖「ロシア演劇は我らの同時代人!？」『ACT』創刊号, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, pp. 16-17, 2004/5

3-4. 口頭発表

Yasushi Nagata, Sanat-Art and Social Engagement, commentator, International Forum; Art and Communication, 2005/3/14

永田靖「劇と場所」日本演劇学会分科会近現代演劇研究会上海集会, 上海戯劇学院, 2005/2/24

永田靖「アジア演劇への／からの研究視座」司会, 日本演劇学会秋の研究集会, 福岡女学院大学, 2004/11/27

永田靖「世界の最先端をゆく舞台芸術」『国境を越えた舞台芸術』舞台美術家協会, 大阪芸術大学, 2004/11/15

Yasushi Nagata, Lin Yu Pin, Le theatre moderne japonais et son double – La renaissance et l'évolution du theatre d'avant-garde japonais dans les années 80's, Forum 2004 de l'Université d'Osaka a Strasbourg, 2004/11/6

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2002 度～2004 年度、基盤研究(C)(2)、代表者：永田靖

課題番号：14510063

研究題目：「20 世紀演劇」の誕生と演劇史学の研究

研究経費：2004 年度 直接経費 700 千円

研究の目的：

- ① 本研究は3年計画の研究である。従来の演劇研究は各国別の言語域に分けて独自の発展様態をたどる研究が多かった。しかし 20 世紀演劇は 19 世紀までの演劇と、様々な理由で様相を異にしており、「20 世紀演劇」という様式を生み出すに至ったと考えられる。それは 20 世紀に特有の現象、交通網の発達や情報伝達手段の高速化などによって、それまでになく、多くの地域での連鎖によって演劇が形成されている。そのためにこの時代に形成された演劇は幾つかの演劇的文化を共有し、また欧米世界の多くの場所で共有しうる主題を持つことになった。この研究では、その「20 世紀演劇」が誕生し展開する経緯を踏まえながら、「20 世紀演劇」なるものの本質を解明する。
- ② 先に触れたように、現在の演劇研究は当該の言語による各国別の研究が主流であった。それはそれで豊かな成果をもたらしたといえるが、現在の段階で演劇研究がなすべき事は、それらの縦に積みあげられた研究を横断的に調査検討を加えていって、再整理することだろうと思われる。とりわけ 20 世紀には演劇における異文化交流が活発化し、地域的な演劇ではなく、よりグローバルな演劇の形態が探求されている。この研究はそのような演劇の異文化交流のあり方にも視野を向けるもので、まさに現代的な課題を孕んでいると思われる。さらに、この研究では、20 世紀の演劇の誕生に焦点をしぼり、横断的に考察していきたい。第 2 には、それは 19 世紀演劇との関係によって考察される必要がある。従来は 19 世紀と 20 世紀とは演劇的に断絶として考えられていたが、19 世紀の広い演劇的土壌の中から 20 世紀的な演劇が誕生してきている。19 世紀との連続の側面から 20 世紀演劇に照明を当てる必要が生じている。第 3 には、大衆娯楽演劇との関係の中で 20 世紀演劇の誕生を考える。従来の演劇史演劇学では芸術的な価値を議論する傾向が高く、20 世紀演劇は、芸術のモダニズムという枠組みの中で議論されてきている。しかし 20 世紀演劇には、19 世紀後半期以後の大衆娯楽演劇の諸要素が抜きがたく吸収されており、その側面からの照射が必要とされている。このような研究をなすためには、演劇史研究の渉猟が不可欠となる。演劇の場合には、他の芸術ジャンルと異なって、作品自体は残らない。そのため、過去の作品の研究をする場合には、歴史的研究を基礎に据えねばならない。演劇学は 20 世紀初頭から開花した比較的若い学問であるが、演劇史を研究する場合には、その演劇の史的記述のイデオロギーを検討していかなければならない。20 世紀後半の人文諸学の発達によって、歴史記述の客観的な記述は言わば疑問に付され、歴史的記述もまたイデオロギー的な負荷を備えていることが明らかになっている。そのために、基本的に演劇史の研究は、演劇史学の研究でもある必要がある。この研究が、演劇史学の研究を含まざるをえないのはこのためである。ただ演劇的な事実を回収していくのではなく、その史的事実が記述されているイデオロギーを相対化することなしには、演劇史研究は成り立ち得ない時点に来ているのである。これらの 4 つの点がこの研究を独自のものとするだろう。第 1 に、各国別の演劇研究ではなく、それらを横断的に渉猟して、20 世紀に特徴的だった「20 世紀演劇」的なものの芸術的本質を把握する。第 2 に、それは 19 世紀までの演劇との対極的な視野のもとに考察されることになるだろう。と同時に、第 3 に同時代の大衆娯楽演劇という芸術研究から抜け落ちたジャンルとの連鎖の中で考察される必要がある。そして最後に、従来の演劇史研究のイデオロギーを再検討することになるだろう。

この研究は基本的には演劇研究の分野で書き継がれてきた演劇史研究を根底から洗い直すことになるだろう。例えば、Oscar Brockett や Alladyce Nicoll は 20 世紀後半の演劇史研究を支える演劇史を書き継いできている。Brockett の代表的なものは *History of the Theatre*. Allyn&Bacon. であるが、これは 1968 年に出版され、世界各国の演劇学科で教科書に採用されることになる演劇史であるが、現在これは 8 版を数えている。あるいは Nicoll の *The World Drama* は 1949 年に初版された後、改訂を続け、10 版を数えている。が共に各国別の記述に重点がある。この研究は演劇研究の成果を再整理することで演劇の美的特質を解明するものである。現在までのところ、この方向性での研究は、戯曲(ドラマ)研究では一定の成果を見せている。それは近代劇という様式が広く欧米アジアに展開されたために、各国別研究にとらわれず、近代劇の精神を研究者が広く探求するところとなっている。しかし、上演をも含めたこの種の研究は現在までのところそれほど顕著なものではない。というのも、演劇研究においては、基本的には上演研究よりも、戯曲

研究が先に行われ、広く成果を見せたからである。上演研究は、どうしても研究対象が戯曲のようにテキストに固定されるのではなく、過去の資料に痕跡がのこされるだけであるので、戯曲の研究と比較すると、進度が遅いということになる。しかし、現在の演劇研究の深化を見ると、おおよそ上演研究もほぼ揃い始めており、申請者の見るところ、この種の研究は今後多数成果を見せてくるように思われる。この研究はその意味でも新しい試みになるだろう。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 21世紀COEプログラム分担

3-8. 学会役員等の引き受け状況

Internationa Federation for Theatre Research(国際演劇学会)理事	2004年11月～現在
日本演劇学会・理事	2002年4月～現在
同上・事務局長	2002年4月～現在
同上・分科会近現代演劇研究会事務局	2000年12月～現在
同上・関西支部幹事	2000年4月～2003年3月
日本映像学会・理事	2002年4月～現在
同上・関西支部幹事	2002年4月～現在
同上・紀要『映像学』編集委員	2002年4月～現在
同上・国際版紀要 ICONICS 編集委員	2002年4月～現在
日露演劇交流推進会議理事	2002年3月～現在

4. 伊東 信宏 助教授

1960年京都生れ。大阪大学文学部卒業、同大学院博士課程単位取得退学。文学修士。リスト音楽院、ハンガリー科学アカデミー音楽学研究所などに留学。1993年より大阪教育大学助教授。2004年4月より現職。

4-1. 論文

なし

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

伊東信宏 演奏会評「アンサンブル・ゼフィロ」朝日新聞文化欄, 2005/2/3夕刊

伊東信宏 演奏会評「ソフィア国立オペレッタ『メリー・ウイドウ』」朝日新聞文化欄, 2005/1/1夕刊

伊東信宏 解説「ハイドンとショスタコーヴィチをめぐる」小澤征爾第34回サントリー音楽賞受賞記念コンサート解説, サントリーホール, 2004/12/12

伊東信宏 パリのロシア風ナイト・クラブ--ケッセル『朝のない夜』再読(日本室内楽振興財団機関誌『奏』22, pp. 7-8, 2004/11)

伊東信宏 演奏会評「二期会『イエヌーフア』」朝日新聞文化欄, 2004/11/9夕刊

伊東信宏 解説「ラカトシュ・アンサンブル: 正統と異端と」『ラカトシュ・アンサンブル演奏会解説書』ザ・フェニックスホール, 2004/11/4

伊東信宏 演奏会評「クレーメル&クレメラータ・バルティカ演奏会」朝日新聞文化欄, 2004/10/28夕刊

伊東信宏 演奏会評「読売日響『ストラヴィンスキー・チクルス』」朝日新聞文化欄, 2004/10/7夕刊

伊東信宏 演奏会評「ニューヨーク・ハーレムシアター『ポーギーとベス』」朝日新聞文化欄, 2004/9/16夕刊

伊東信宏 「音楽の謀略家としてのJ・ハイドン」『レコード芸術』53-8, pp. 42-44, 2004/8

伊東信宏 演奏会評「タランテッラ——地中海の民の音楽」朝日新聞文化欄, 2004/8/2夕刊

伊東信宏 「《東京の夏》が形成してくれたもの」第20回《東京の夏》音楽祭2004フェスティバル・マガジン, pp. 74-75, 2004/7

伊東信宏 演奏会評「パウル・バドゥラ・スコダ ピアノ・リサイタル」朝日新聞文化欄, 2004/7/7夕刊

伊東信宏 演奏会評「コンポージアム2004 リンドベルイ『三つの協奏曲』」朝日新聞文化欄, 2004/6/10夕刊

伊東信宏 「水車小屋の娘はなぜ不実なのか？」日本室内楽振興財団機関誌『奏』21, pp. 7-8, 2004/5

伊東信宏 解説「バルトーク《弦楽四重奏曲第1・4・6番》」静岡AOIレジデント・カルテット演奏会, 静岡AOIホール, 2004/5

伊東信宏 サントリー音楽財団コンサート「対話する作曲家、権代敦彦」(2004年5月22日、ザ・シンフォニーホール), 企画, およびインタビュー記事「作曲家と語る」(同コンサート・パンフレットpp. 6-7)

伊東信宏 演奏会評「N響定期(コパチンスカヤ独奏)」朝日新聞文化欄, 2004/4/27夕刊

伊東信宏 「作品解説」『ドヴォルジャーク交響曲第9番ホ短調《新世界より》作品95』音楽之友社, pp. 3-8, 2004/4

伊東信宏 演奏会評「コリン・デイヴィス指揮ロンドン響」朝日新聞文化欄, 2004/4

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

伊東信宏 1990 年度アリオン賞(音楽評論部門)奨励賞, アリオン音楽財団, 1991/3

伊東信宏 第7回吉田秀和賞, 吉田秀和芸術振興基金, 1997/11

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2003 年度～2005 年度、基盤研究(C)、代表者：伊東信宏

課題番号：15520088

研究題目：東欧の村の楽師たちと 20 世紀音楽の前衛：ロマ(ジプシー)とクレズマーを中心に

研究経費：2004 年度 1, 100 千円

研究目的：

本研究は、東欧やロシアの農村において、結婚式や葬式などの機会に器楽奏者として雇われ、舞曲などを提供してきたロマ(ジプシー)やクレズマー(東欧ユダヤ人社会の大衆音楽家)による音楽について、それを 20 世紀音楽史の総体の中に位置づけ、その影響と意味を探ろうとするものである。これらの音楽は、まず第一に、現在の大衆音楽の原型として大きな意味を持っており、そして第二に様々な回路を通じて 20 世紀音楽の動向に影響を及ぼしてきた。このような重要な意味をもつ音楽について、本研究は次の諸点を明らかにすることを目指す。1)ロマの音楽家やクレズマーの音楽の実態、2)この二種の音楽の相互関係、3)これらが 20 世紀の前衛音楽に与えた影響、4)これらが 20 世紀前半の大衆音楽に与えた影響、5)彼らがアジアでの西洋音楽受容に際して果たした役割。これらの検討を通じて、音楽史学の新しい視座が得られるであろう。

2003 年度においては、上記の諸点のうち、特に 1)および 4)について先行研究の把握とその検討を行う必要がある。クレズマーについては、とりわけアメリカにおいて近年飛躍的に研究が進んでおり、その前線について文献情報の整理が必要となろう。またロマについても、民族学の分野での研究が盛んとなりつつあり、それらを検討せねばならない。それ以外の 2、3、5)の諸点については、筆者の把握しているかぎり、先行研究にはほとんど見るべきものがない。2)ロマとクレズマーの相互関係については、多くの文献が言及しているものの、具体的記述はほとんどない。申請者は、かつて実際にこのような相互交流が起こったと思われるモルドヴァ(ルーマニア)のロマの村において、2003 年度中に現地調査を行い、情報を整理したいと考えている。本年度に計上されている外国旅費および研究支援者雇用費はこの調査旅行のための経費である。この調査では、また 1)のうちロマの音楽の実態についての情報をも収集する。さらにこれらと並行して、3)20 世紀前衛音楽との関係について、おもに文献調査および作品分析を通じて、研究を進める予定である。とりわけ 2003 年度には、既に準備の進んでいるストラヴィンスキー(ロシアの楽師と関連の深い作品を残した)やバルトーク(ルーマニア

での民俗音楽調査を通じて現地の器楽に深い共感を寄せた)などの作品について、東欧の村の楽師という視点から、再検討する。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

日本音楽学会関西支部長	2003年4月～2005年3月
日本音楽学会関西支部委員	2001年4月～2003年3月

5. 上野 正章 助手

1966年生。1999年、大阪大学文学研究科博士課程修了。博士(文学、大阪大学)。1989年から1990年まで富山県立図書館司書。2004年より大阪大学助手。専攻：音楽学。

5-1. 論文

なし

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

上野正章「書評:『ジェルジ・リゲティ論 音楽における現象学的空間とモダニズムの未来』『音楽学』(日本音楽学会), 49-3, pp. 171-172, 2004/6

5-4. 口頭発表

上野正章「ジョン・ケージのプリペアド・ピアノ 書かれた音と鳴り響く音」音楽学オープンセミナーシリーズ 阪大コレgium・ムジクム第1回, (『Letters and Music』2005年春号, pp. 15-16, 2005/春), 2004/12/16
上野正章「日本における1980年代のジョン・ケージ評について——鍵谷幸信を中心に」日本音楽学会第315回例会, 2004/9/18

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

日本音楽学会・関西支部委員(IT)	2005年4月～現在
サウンドスケープ協会・理事	2005年4月～現在
日本音楽学会・選挙管理委員	2002年度、2004年度
東洋音楽学会・西日本支部委員(例会企画, 運営およびホームページ担当)	2004年9月～現在

民族藝術学会・委員(例会・会報)

2004年4月～現在

東洋音楽学会・西日本支部委員(例会企画, 運営およびホームページ担当)

2002年9月～2004年8月

同上・関西支部委員(参事)

2000年9月～2002年8月

2-23 美術史学

組織としての研究活動(2004年度)

大学院生等による論文発表等

1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	0	2	0	1	0	3

2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	1	3	3	0	0	7

3. 2004年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

赤木美智「河村若芝の研究——文献と初期作品を中心に——」『フィロカリア』(大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座), 22, pp. 65-100, 2005/3

池上裕子「反復のパラドックス: アド・ラインハートとアンディ・ウォーホル」『西洋美術研究』(三元社), 11, pp. 66-86, 2004/9

小谷真弓「ウィリアム・ブレイクの『無垢と経験の歌』」『フィロカリア』(大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座), 22, pp. 121-143, 2005/3/29

(2)口頭発表

出川哲朗・青木智史「熱ルミネッセンス年代測定法による小形唐三彩の年代推定」「洛陽の夢 唐三彩展」開催記念シンポジウム「唐三彩研究の新成果」愛知県陶磁資料館, 2004/11/21-22(『「洛陽の夢 唐三彩展」開催記念シンポジウム「唐三彩研究の新成果」資料集 pp. 出川 1-出川 13』)

池上裕子 "Lost in Translation"?: Robert Rauschenberg in Tokyo, 1964" 国際美術史学会, モントリオール, パレ・ド・コングレ, 2004/8/25(国際美術史学会プログラムに要旨掲載)

池上裕子「ロバート・ラウシェンバーグのゴールド・スタンダード」美術史学会全国大会, 慶應義塾大学, 2004/5/23(『美術史』157, pp. 199-200 に要旨掲載)

大野陽子「ヴァラッロのサクロモンテ——初期構想とその展開——」イタリア学会第52回大会, 東北大学, 2004/10/23

郷司泰仁「山王の絵像」物語／絵画研究会, 和歌山市立博物館, 2005/1/10

古谷優子「石山寺蔵涅槃図試論——大乘涅槃経との関わり——」物語／絵画研究会, 学習院大学, 2005/3/5

森實久美子「華嚴宗祖師絵伝についての一考察——中国絵画の受容——」物語／絵画研究会, 学習院大学, 2005/3/5

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

教員の研究活動(2004年度)

1. 若山 映子 教授

1943年生。1965年、京都市立美術大学(現京都市立芸術大学美術学部)西洋画科卒業。1970年、イタリア共和国、ミラノ市、ミラノ・カトリック大学文学哲学科修了。Dottore in Lettere(ミラノ・カトリック大学、1970年11月)。1971年11月、ミラノ・カトリック大学助手(美術批評・理論史講座)。1976年4月、大阪大学助手(文学部美学科美術史第二講座)。1981年4月、福井大学助教授(教育学部美術科)。1987年1月、福井大学教授(教育学部美術科)。1990年4月、大阪大学助教授(文学部美学科美術史第二講座)。1996年1月、大阪大学教授(文学部)。1999年4月、大阪大学大学院教授(文学研究科)。専攻：イタリア美術史／イタリア美術評論史。

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

若山映子 ロンバルディア美術史研究所功績賞、ロンバルディア美術史研究所(イタリア共和国)、1998/12/15

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2002年度～2004年度、萌芽研究、代表者：若山映子

課題番号：14651013

研究題目：ミラノ大聖堂のトリヴルツィオ大燭台とルネサンス期の鑄造作品との比較研究

研究経費：2004年度 500千円

研究の目的：

西洋美術史研究において、1200年頃のブロンズ製工芸作品を代表するものと見なされているトリヴルツィオ大燭台は、それを構成している極めて精緻なつくりのゆえに、今日知られている限り、他に比肩される作例を見ない。4.52メートルの高さ、3.96メートルの広がりをもつ大燭台を支える脚部を構成する四頭の竜は、それぞれ両側から四種類の生き物、すなわち子供、猿、グリフォン、獅子に顔面を攻撃されて個性的な苦痛の表情を見せている。張りのある大きな曲線を描く胴体に続く尾は、唐草にと変貌して輪を描く。それぞれの竜の間に生命の樹を暗示する唐草が複雑に絡み合っふくらみをもった籠を形成し、その間に旧約聖書に着想した諸場面、寓意像、怪物や小動物が見事な調和をもって立体的に配されている。裸体像は、制作者が解剖学的に正確な知識をもっていたことを証している。

この大燭台の様式の特徴を中世およびルネサンス期に制作されたブロンズ作品と比較し、図像の源泉を中世写本に探ることで、その制作者が工芸技術者というより空間の芸術家として、大燭台が鑄造された時代を代表する彫刻家であったことを明らかにする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

イタリア学会・学会誌編集委員

2002年10月～現在

イタリアで発行されている美術史専門誌 *Arte Lombarda* 編集顧問

1990年～現在

2. 奥平 俊六 教授

1953年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程1984年単位取得退学。文学修士。大阪府立大学総合科学部専任講師、大阪大学文学部助教授を経て1997年現職。日本文化研究センター共同研究員、京都国立博物館調査員、東北大学、名古屋大学、岡山大学などの講師を歴任。専攻：日本美術史／中近世絵画史。

2-1. 論文

奥平俊六「こう見えるからこう描く——自閉症の人の認知と表現——」『コミュニティ・アート・シンポジウム』（「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」コミュニティ・アート部門），pp. 26-34, 2005/3

奥平俊六「遍在する異文化」『一冊の本』（朝日新聞社），pp. 52-54, 2004/5

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

奥平俊六「戸田和孝『まちなみまんがな草子』『紫明』（紫明の会），15, p. 96, 2004/10

2-4. 口頭発表

奥平俊六「こう見えるからこう描く——自閉症の人の認知と表現——」コミュニティ・アート・シンポジウム, 2005/3/21

奥平俊六「カブキの時代のミヤコ——舟木本「洛中洛外図」の世界——」千里ライフサイエンスフォーラム, 2005/3/18

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

奥平俊六, 國華賞(第2回), 國華社・朝日新聞社, 1990/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

美術史学会・常任委員

2004年5月～現在

3. 園府寺 司 教授

1957年生。大阪大学文学部美学科(西洋美術史)卒、アムステルダム大学美術史研究所大学院修了。Doctor der Letteren (文学博士・アムステルダム大学)。広島大学総合科学部講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：西洋美術史。

3-1. 論文

なし

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

KODERA, Tsukasa, “AICA VII International Congress, Warsaw, 1960. ‘L’Art – Les Nations – L’Univers’

‘Sztuka – Narody – Świat’ Spotkanie Japońskich i Polskich Historyków Sztuki i Muzykologów Stowarzyszenie Historyków Sztuki, Warszawa, 2004/11/16

KODERA Tsukasa, “Evolution of Perspectives in Japanese Early Modern Art and its Relation to European Art”, III

spotkanie historyków sztuki i konserwatorów dzieł sztuki Orientu na Wydziale Sztuk Pięknych Uniwersytetu Mikołaja Kopernika w Toruniu, 2004/6/17

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

圀府寺司 エラスムス研究賞(オランダ、エラスムス財団)Praemium Erasmianum, Studieprijis(Stichting Erasmusprijs),

1989/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2001年度～2004年度、基盤研究(C)、代表者：圀府寺司

課題番号：1450077

研究題目：モダニスト・イコノクラスムの研究

研究経費：2004年度 800 千円

研究の目的：

モダニズムの絵画、彫刻、建築などについて、そのイコノクラスム的性質に注目し、それらがそのような営みだったのかを明らかにする。

3-6-2. 2004年度、基盤研究(C)(企画調査)、代表者：圀府寺司

課題番号: 16632001

研究題目：中・東欧の近現代芸術に関する国際・学際共同研究

研究経費：2004年度 2,900 千円

研究の目的：

これまで研究と情報の乏しかった中・東欧の近現代芸術について、現地の研究者との国際・学際共同研究を立ち上げるため、組織、情報データベースとネットワーク、教育普及・成果発表の体制を整備する。また、プロジェクトの一環として2006年前半期に計画している国際シンポジウム「中・東欧の近現代芸術」の準備もあわせて行なう。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 2004年度、日本学術振興会 特定国派遣 (ポーランド ワルシャワ ユダヤ歴史研究所)圀府寺司

研究題目：「近代美術史におけるポーランド系ユダヤ人芸術家、批評家の研究——エコール・ド・パリ期を中心に——」

研究経費：渡航費(学術振興会) 滞在費・国内旅費(ポーランド学術アカデミー PAN)

3-7-2. 21世紀COEプログラム分担

3-8. 学会役員等の引き受け状況

民族芸術学会理事	2002年度～2004年度
美術史学会常任委員	2002年度～2003年度

4. 泉万里教授

1957年生。1980年東北大学文学部史学科卒業。1992年大阪大学文学研究科博士課程後期課程単位取得退学。1996年博士(文学)を取得。大阪大学文学部美学科助手、神戸市看護大学助教授をへて、2005年より現職。専攻：日本美術史、中世絵画史。

4-1. 論文

泉万里「南蛮屏風試論」『平成14年度～平成16年度科学研究費補助金 基盤研究 B(1)研究成果報告書 南蛮屏風に関する総合的研究』pp. 18-44, 2005/3

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2003年度～2005年度、萌芽研究、代表者：泉万里

課題番号：15652010

研究題目：幸若舞と絵画

研究経費：2004年度 500千円

研究の目的：

芸能としてはすでに絶えてしまったといってもよい幸若舞は、演じられるだけでなく、そのひとつひとつの演目の台本が物語として読み継がれ、さらに、その物語の絵画化が積極的に行われていることが近年確認されつつある。具体的には、屏風や扇面といった物語本文を伴わない形式から、絵入り本や絵巻という、本文を伴った形式までさまざまな形式にわたる作例が残されている。そして、ながらく画題不明とされてきた作例が、幸若舞によって読み解かれたという例も少なくない。本研究では、幸若舞という芸能がどのように絵画化されてきたのか、ということ把握することをめざし、それによって、この芸能がどのように享受されてきたかを考察することを第1の目的とする。そして、それは同時に近世初期の物語絵画の豊かな1ジャンルを解明することになると予想する。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

5. 藤岡 穰 助教授

1962年生。東京芸術大学大学院修士課程修了。芸術学修士。1990年4月～1999年3月大阪市立美術館学芸員、1999年4月～現職。専攻：東洋美術史。

5-1. 論文

藤岡穰「ブロンズ国立博物館蔵「癩王像」をめぐって」平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(A)1)研究成果報告書『東南アジア彫刻史における<インド化>の再検討(論文編)』(研究代表者 肥塚隆), pp. 26-32, 2005/3

5-2. 著書

藤岡穰(芝田寿朗, 須田悦生, 高早恵美, 戸田浩之, 森田恵理子, 吉田純一, 杉本泰俊, 前川幸雄), 美浜町誌編纂委員会編『わかさ美浜町誌<美浜の文化>第三巻 拝む・描く』美浜町, 2005/3

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

藤岡穰「蔵王権現の説話と形相」絵画／物語研究会, 2004/9

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

藤岡穰 第3回国華賞, 国華社, 1991/10

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2004年度～2005年度、基盤研究(C)(2)、代表者名：藤岡穰

課題番号：16520080

研究題目：隋時代彫刻における紀年銘作品の研究

研究経費：2004年度 1,400千円(総額2,400千円)

研究の目的：

本研究は、中国・隋時代(581-618A.D.)の紀年銘を有する主要な彫刻作品を網羅的に調査し、信頼しうる基礎データを集成し、カタログを作成することを目的としている。隋時代彫刻は、中国で初めて本格的に仏教彫刻が制作された南北朝時代と強大な統一王朝のもとで再び仏教彫刻が隆盛した唐時代とのほさまにあって、従来は必ずしも積極的な評価を受けてこなかった。しかしながら、仏教史研究において、隋時代は北周末の廃仏により一時的に断絶していた西域やインドとの仏教文化の交流が再開して新しい思潮が生まれ、都長安を中心に国際的な仏教文化が花開いた変革の時代とされている。こうした認識を踏まえて彫刻作品を見直すと、実はそこにはインド・グプタ美術、さらにはペルシア・ササン朝美術からの影響や東南アジア彫刻との類似などきわめて豊かな国際性が認められ、隋時代彫刻がむしろ仏教彫刻史における大きな画期を形成していた可能性が想定される。本研究は、こうした観点から隋時代彫刻に着目し、その様式理解の基準を確立することを目的としており、中国のみならず日本も含めた東アジア全体の彫刻様式の理解に新たな視座をつくるものである。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

美術史学会・西支部常任委員

2004年7月～2005年6月

6. 赤木 美智 助手

1977年生。2000年、大阪大学文学部人文学科卒業。2004年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了。文学修士(大阪大学、2004年)。2005年4月、大阪大学大学院文学研究科助手。専攻：日本近世絵画史

6-1. 論文

赤木美智「河村若芝の研究——文献と初期作品を中心に——」『フィロカリア』(大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座), 22, pp. 65-100, 2005/3

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

なし

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 学会役員等の引き受け状況

民族芸術学会・会計委員

2005年4月～現在

2-24 文化基礎学(広域文化形態論講座)

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

文化基礎学の名称に見られるとおり、主に哲学的な観点から人文学全体を貫く基礎的な諸問題を人文学のみならず、場合によっては社会科学、自然科学の領域をも視野に入れて研究する。

2003年度までは「科学と社会」をテーマとする研究プロジェクトを遂行してきたが、それを受けて2004年度からは3年間の予定で「コミュニケーションと現代社会」を共同研究のテーマとして取り上げている。コミュニケーションの重要さはいつの時代でも変わることはないが、現代社会にはコミュニケーションに伴う特有の諸位相がある。各領域の専門家と非専門家(市民)との公共的対話をサポートすることも重要である。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月から)

教授 1 助教授 0 講師 0 助手 0

教授：中岡成文（兼任）

II. 組織としての教育・研究活動(2004年度)

1. 客員研究員等の受け入れ状況

招へい教授 1名(大阪外国語大学外国語学部教授：高田珠樹)

2. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

3. 刊行物

なし

4. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

5. 専門分野主催の研究会等活動状況

大北全俊、桑原英之、高橋綾「高等教育における哲学・倫理学教育のありかたについて」	2005年3月12日
堀江剛「遺伝カウンセリング：現代社会における医療コミュニケーションの課題」	2004年11月6日
鏡史織「対話が生まれる場所——哲学カフェについて」	2004年7月31日
屋良朝彦「薬害エイズと予防の原則」	2004年5月29日

2-25 地域社会論(広域文化形態論講座)

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本研究分野は、主に歴史学、考古学、地理学、民族学、民俗学などの学問分野に関わるテーマについて、本研究科内外の研究者と博士後期課程の大学院学生による共同研究を行い、人文学の新たな分野を開拓することをめざしています。2004年度より「死と生の習俗をめぐる比較史研究」をテーマとする共同研究がスタートしました。日本、アジア、欧米などの諸文明圏、あるいは文明圏のなかの個別地域における、死の習俗のあり方とその「生」のあり方への影響、およびその時代的变化等の意味、さらに習俗という実態と理念との間の相関などを、地域社会や国家・宗教・民族・ジェンダーの問題と関連させながら解明するとともに、これら個別研究を人類史全体のなかに位置づける方向をめざしています。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月から)

教授 1 助教授 0 講師 0 助手 0

教授：片山 剛

II. 組織としての教育・研究活動(2004年度)

1. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

2. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

3. 刊行物

なし

4. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

5. 専門分野主催の研究会等活動状況

2004年度 共同研究テーマ「死と生の習俗をめぐる比較史研究」 研究報告 13本

長井伸仁(徳島大学助教授)「フランスの『無名戦士の墓』」2005年1月8日

平雅行(本研究科教授)「来世観の変容と天皇家の葬送」2004年12月11日

村田路人(本研究科教授)「鳴物停止令と近世支配」2004年12月11日

荒川正晴(本研究科教授)「漢人仏教徒の葬礼文書と冥界観：トゥルフアン出土資料の検討を中心として」

2004年11月27日

指昭博(神戸市外国語大学教授)「幽霊と宗教改革：死者の魂の行方」2004年11月27日

成田静香(関西学院大学助教授)「中国の自梳女」2004年11月20日

福永伸哉(本研究科助教授)「葬送儀礼のコントロールと政治権力：前方後円墳の歴史的評価をめぐって」

2004年11月20日

片山剛(本研究科教授)「江蘇省常州市の寺院における位牌安置の現況」2004年10月9日

中村生雄(本研究科教授)「死者と生者の相関：日本の死者儀礼に見る慣習と革新」2004年10月9日

江川濫(本研究科教授)「帝王の墓と記念：日仏比較の試み」2004年7月31日

中村武司(本研究科博士後期課程3年・西洋史)「セント・ポール大聖堂：陸海軍の英雄のための"イギリスのパンテオン"」2004年7月31日

早瀬晋三(大阪市立大学教授)「ポスト戦後の慰霊：現代東・東南アジアのなかの日本との戦争」2004年6月5日

片山剛(本研究科教授)「《死者祭祀空間の地域的構造：華南珠江デルタの過去と現在》補足および最近の研究動向」

2004年5月15日

2-26 言語文芸学(広域文化表現論講座)

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本専門分野は、広く言語表現をめぐる諸領域に関連して、文学・芸術作品とそれが生まれた時代や社会背景との相互関連、また広く人間にとっての文学・芸術の意味を追求するため、多元的・総合的に言語文芸の諸相を考究する学際的な共同研究をすすめている。

2002年度からは、中国文学兼任の浅見洋二助教授が共同研究「テキストの読解と伝承——〈書くこと〉と〈読むこと〉、〈聴くこと〉と〈話すこと〉を結ぶ言説の場に関する社会文化論的研究——」を開催、メディア論的な視点をも踏まえながら、文学作品を中心とするテキストの制作・受容・読解・伝承の諸過程をめぐる研究を行っている。これと連動する形で、本研究科客員研究員である周裕鍔四川大学教授らとともに、恵洪『石門文字禪』の共同訳注の作成を行った。

I. 現在の組織

1. 教員(2005年10月現在)

教授 0 助教授 1 講師 0 助手 0

助教授：浅見 洋二（兼任）

II. 組織としての教育・研究活動(2004年度)

1. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

2. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

3. 刊行物

なし

4. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

5. 専門分野主催の研究会等活動状況

第六回特別研究会・研究報告	2004年12月17日
尚永亮（武漢大学教授）『以意逆志』説の特質について	
第五回特別研究会・研究報告	2004年11月24日
蔡罕（浙江万里学院教授）「浙東文化の特質」	
何俊（浙江大学教授）『宋元学案』全氏補本の性質とその思想史観	
第四回特別研究会・研究報告	2004年10月6日
衣若芬（中央研究院研究員）「瀟湘八景の詩と絵画」	

2-27 留学生専門教育

教員の研究活動(2004 年度)

1. 鄭 聖汝 講師

1957 年生。1999 年、神戸大学大学院文化科学研究科博士後期課程修了。博士(学術、神戸大学、1999 年)。日本学術振興会外国人特別研究員(大阪大学)を経て現職。専攻：言語学／韓国語学、日本語学。

1-1. 論文

鄭聖汝「分裂自動詞性の本性について——類型論の観点から見た非対格性の仮説とその問題点——」『大阪大学紀要』45, 大阪大学, pp. 19-58, 2005/3

鄭聖汝「規範的使動構文と非規範的使動構文」*Language Research* 41-1. Language Research Institute Seoul National University. , pp. 49-78, 2005/3

鄭聖汝「韓国語の自動詞とヴォイス——自発と受身の連続性——」影山太郎・岸本秀樹編『柴谷方良教授還暦記念論文集 日本語の分析と言語類型』くろしお出版, pp. 319-335, 2004/6

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

鄭聖汝「言語類型論から見た能格性と非体格性の仮説」全国冬季学術発表大会, 大邱：言語科学会, 2005/2/19

鄭聖汝「自他交替とサセ」国際フォーラム「台湾における日本文学・日本語学の新たな可能性——国際化の中の日本文学・日本語学——」長栄大学(台湾), 2004/12/12

鄭聖汝「状態述語のふるまいから見た分裂自動詞性——動格言語の分裂主語システムと韓国語の自動詞システムの証拠から——」第 29 回関西言語学会, 京都外国語大学, 2004/10/30

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

第 3 部

外部評価資料

第3章 評価用添付資料

3-1 研究の状況

文学研究科・文学部の研究については、各教員の発表論文・口頭発表・著書刊行などの直接的な研究業績は言うまでもなく、学会・研究会・講演会などの開催や学会役員の引受状況、社会における研究活動の展開の様相、また他大学や外部機関との連携や講演、出張授業などの学外での活動も含めて資料を提示している。また、大学院学生の研究状況の資料も合わせて提示している。ただし、指導教員と大学院学生との連名による研究論文執筆などを行う自然科学系部局とは異なり、文学研究科・文学部では、大学院学生は指導教員の指導を受けても執筆した論文は個人名による単著となる。

まず、各教員の発表論文・口頭発表・著書刊行などの研究業績については、評価用資料『年報 2004 — 研究・教育 (2002 年度～2003 年度) —』と評価用資料『教員・院生研究活動データ 2005 (2004 年度)』に専門分野ごと研究業績の詳しい内容（たとえば、論文名、刊行物名、ページ数、発行月日等）を掲載している。

次に、学会・研究会・講演会などの実施状況については、評価用添付資料 (3-1-1) と (3-1-2) を参照のこと。(3-1-2) の国際共同研究実施件数は大幅な変化はみられないものの、(3-1-1) の講演会等実施件数は年度ごと増加している。

3-1-1 「講演会等実施状況」

3-1-2 「国際共同研究実施状況」

また、他大学や外部機関との連携については、評価用添付資料 (3-1-3) ～ (3-1-10) の通りである。特に、(3-1-5) の公開講座等実施件数と(3-1-8) の国、自治体からの委託調査の受入件数は年度ごとに増加している。

3-1-3 「産学連携組織一覧」

3-1-4 「企業との連携状況（包括提携、合同企画などの共同研究以外の連携）」

3-1-5 「公開講座等実施状況」

3-1-6 「企業等外部に対する技術研修実施状況」

3-1-7 「企業を対象とした懇談会・交流会の開催状況」

3-1-8 「国、自治体からの委託調査の受入状況」

3-1-9 「小中高への教員派遣状況」

3-1-10 「学内施設等開放状況」

学生の研究状況については、学会発表件数、学術雑誌掲載論文数等の総数を文学研究科の前期課程・後期課程と文学部に分けて(3-1-11)、(3-1-12)に示している。なお、学生の個々人の研究業績の詳しい内容（たとえば、論文名、刊行物名、ページ数、発行月日等）については、評価用資料『年報 2004 — 研究・教育 (2002 年度～2003 年度) —』と評価用資料『教員・院生研究活動データ 2005 (2004 年度)』を参照のこと。また、研究活動以外の状況は評価用添付資料(3-1-13)～(3-1-17)の通りである。

3-1-11 「学生の学会発表件数」

3-1-12 「学生が著者となった学術雑誌掲載論文数」

3-1-13 「学生の海外派遣の状況（非常勤職員として雇用されているものも含む）」

3-1-14 「学生の研究助成金獲得状況（学生が代表者となっているもの）」

3-1-15 「博士論文公開審査（公聴会）の実施状況」

3-1-16 「学生の出張状況（国内）（非常勤職員として雇用されているものも含む）」

3-1-17 「学生の受賞状況」

3-1-1 講演会等実施状況

平成14年度 文学研究科

行事区分(講演会・シンポジウム・フォーラム・セミナー)	テーマ名	開催期間	開催場所	参加者数
学術講演	Emille Zola au Japon	平成15年3月20日	coférence donnée à l' Université de Strasbourg-II	60名
学会	計量国語学会第46回大会	平成14年9月7日	大阪大学待兼山会館	33名
第35回阪大英文学会	英文学・英語学	平成14年11月9日	大阪大学豊中校舎文法経講義棟第41番教室	150名
グループ会議	「ブラジル日系社会における言語の総合的研究」第1回	平成14年12月15日	大阪大学待兼山会館会議室	10名
グループ会議	「ブラジル日系社会における言語の総合的研究」第2回	平成14年12月20日	国際協力事業団サンパウロ事務所会議室	8名
グループ会議	「ブラジル日系社会における言語の総合的研究」第3回	平成15年1月10日	カンピーナス大学文学部	8名
グループ会議	「ブラジル日系社会における言語の総合的研究」第4回	平成15年1月17日	国際交流基金会議室(ブラジル)	8名
グループ会議	「ブラジル日系社会における言語の総合的研究」第5回	平成15年1月24日	カンピーナス大学文学部	9名
グループ会議	「ブラジル日系社会における言語の総合的研究」第6回	平成15年2月17日	大阪大学大学院文学研究科日本学棟 405室	6名
研究会	近現代演劇研究会	平成14年10月26日	大阪大学大学院文学研究科B13教室	19名
20世紀ディアスポラ研究会	世紀末の多民族都市プラハ	平成14年11月30日	名古屋大学情報文化学部	30名
研究会	近現代演劇研究会	平成14年12月24日	大阪大学大学院文学研究科B13教室	23名
研究会	「海域アジア史研究会」2003年1月例会	平成15年1月25日	大阪大学大学院文学研究科史学科共同研究室	14名
研究会	近現代演劇研究会	平成15年2月1日	大阪大学大学院文学研究科B13教室	25名
研究会	ウチナーヤマトウグチ・プロジェクト第1回	平成15年2月15日-16日	琉球大学法文学部	6名
研究会	COE研究会「言語の接触と混交」	平成15年2月20日	大阪大学大学院文学研究科第一会議室	15名
研究会	「海域アジア史研究会」2003年2月例会	平成15年2月22日	大阪大学大学院文学研究科史学科共同研究室	10名
研究会	第1回 日本・ブラジル合同研究会	平成15年3月10日	大阪大学待兼山会館会議室	12名
研究会	「海域アジア史研究会」2003年3月例会	平成15年3月22日	大阪大学大学院文学研究科史学科共同研究室	11名
講演会(第5回適塾研究会)	古文書の読み方	平成14年8月6日	千里朝日阪急ビル(千里中央)	約30名
講演会	哲学と建築	平成14年8月25日	石川県西田哲学館	約200名
講演会(第5回適塾研究会)	洪庵の手紙を読む(その1)	平成14年9月3日	千里朝日阪急ビル(千里中央)	約30名
講演会	「参加」の政治学と「臨床」の哲学	平成14年9月14日	千里阪急ホテル	20名
講演会	ホスピスと緩和ケア	平成14年9月15日	千里阪急ホテル	22名
講演会	Die Sprache als Ort	平成14年10月1日	ドイツ・ミュンヘン大学	約150名
講演会	言語学の未来と奥田靖雄	平成14年10月5日	大阪大学大学院文学研究科中庭会議室	55名
講演会	痛みとコミュニケーション	平成14年11月2日	千里阪急ホテル	15名
講演会	参加型テクノロジーアセスメントと集合的科学研究リテラシー	平成14年11月3日	千里阪急ホテル	15名
講演会(公開講座フェスタ2002)	江戸時代の村々支配と「触れ」	平成14年11月27日	大阪府立文化情報センター(谷町6丁目)	約100名
講演会	第1回ミュージアム・レクチャー「追憶パーミヤーン石窟」	平成14年11月	大阪大学総合学術博物館	50名
講演会	文化学術講演会「ヒンドゥー教とムスリム文化—インドのムガル時代の細密画を中心に—」	平成14年11月	国際高等研究所	50名
講演会	ヴィクトル・ユゴーの世界—ユゴー生誕200年記念—	平成15年1月1日	三重日仏協会	30名
講演会	ヴィクトル・ユゴー、パリの王様の真実—生誕200年にあたって	平成15年1月25日	津アスト・ホール	150名
講演会	オーストリア政府の生命倫理委員会	平成15年2月17日	大阪大学大学院文学研究科	14名

行事区分(講演会・シンポジウム・フォーラム・セミナー)	テーマ名	開催期間	開催場所	参加者数
講演会	ネオ・ソクラテック・ダイアローグー持続可能な発展に関する倫理教育の1方法	平成15年2月20日	大阪大学大学院文学研究科	12名
講演会	新しいバイオテクノロジーの倫理性についての市民意識の向上	平成15年2月22日	大阪大学待兼山会館	22名
講演会	オロフ・パルメ国際センターと開発援助	平成15年3月1日	大阪大学大学院文学研究科	15名
講演会	マネジメントの哲学ー英米圏の概観	平成15年3月7日	大阪大学待兼山会館	18名
講演会	文学の楽しみ羽曳野市第4回「畑田塾」講演	平成15年3月29日	羽曳野市教育委員会文化財保護課	50名
国際研究会	越境する日本語ーブラジル日系社会の言語をめぐる	平成15年3月11日	大阪大学大学院文学研究科中庭会議室	60名
懇話会	待兼山演劇懇話会	平成15年3月24日	大阪大学大学院文学研究科美学棟PAC	16名
シンポジウム	2002年度第1回日本学方法論の会「越境の中の近現代日本」	平成14年6月14日	大阪大学大学院文学研究科	30名
シンポジウム	2002年度第3回日本学方法論の会「拠点としての日常、日常批判の身ぶり」	平成14年7月19日	大阪大学大学院文学研究科日本学講座	100名
シンポジウム	ゾラと日本文学	平成14年10月26日	日本フランス語フランス文学会秋季大会、九州大学	300名
シンポジウム	「“係り結び”から見えるものー古い問題への新しい取り組みー	平成14年10月27日	桃山学院大学	200名
阪大英文学会シンポジウム	「英文科」に何を期待するか	平成14年11月9日	大阪大学大学院文学研究科	100名
日本ワイルド協会シンポジウム	21世紀のオスカー・ワイルド	平成14年11月30日	東京農業大学	100名
シンポジウム	イギリス関税改革運動とシティ金融資本 A.C. Howe(LSE)桑原完爾(熊本大学)古賀大介(山口大学)(熊本大学文学部西洋史研究室と共催)	平成14年12月14日	熊本大学文学部	50名
シンポジウム	東洋音楽学会西日本支部第212回定例研究会 シンポジウム「表演芸術における映像記録化」	平成15年2月8日	大阪大学基礎工学部 国際棟シグマホール	55名
シンポジウム	第1回対話シンポジウムー対話を促進する方策と、場の構築のための連携ー	平成15年2月23日	大阪大学共通教育本館(イ号館イ講堂)	93名
シンポジウム	ブルーストによるフェルメール発見	平成15年3月8日	大阪大学	40名
シンポジウム	「日本文学国際研究会」基調報告とシンポジウム	平成15年3月16日	グランキューブ(大阪国際会議場)1202会議室	200名
セミナー	18世紀英文学書評の会(第一回)	平成14年7月21日	大阪大学大学院文学研究科	9名
テキスト研究会セミナー	ヒリス・ミラーの批評再考	平成14年8月30日	京都女子大学	150名
セミナー	広域文化表現論講座共同研究「テクストの読解と伝承」第一回特別研究会	平成14年11月5日	大阪大学待兼山会館	約30名
セミナー	18世紀英文学書評の会(第二回)	平成14年12月22日	大阪大学大学院文学研究科	9名
セミナー	18世紀英文学書評の会(第三回)	平成15年3月21日	大阪大学大学院文学研究科	9名
第69回待兼山ことばの会	”metarepresentationと日本語”	平成14年9月20日	大阪大学豊中校舎文法経講義棟第41番教室	60名
第70回待兼山ことばの会	”属格表現の統語構造”	平成14年12月20日	大阪大学大学院文学研究科第一会議室	50名
発掘調査現地説明会	勝福寺古墳発掘調査現地説明会	平成14年8月10日	川西市火打2丁目、勝福寺古墳	100名
フォーラム	第7回戦死者のゆくえ研究会	平成14年4月8日	大阪大学大学院文学研究科日本学講座	30名
フォーラム	第8回戦死者のゆくえ研究会	平成14年5月31日	大阪大学大学院文学研究科日本学講座	50名
フォーラム	第9回戦死者のゆくえ研究会	平成14年6月28日	大阪大学大学院文学研究科日本学講座	80名
フォーラム	第16回中央アジア学フォーラム	平成14年7月20日	神戸市外国語大学	28名
フォーラム	異文化フォーラム「アフガニスタンの美術ー文明の十字路の古代と現代」	平成14年11月	登録文化財畑田家住宅保存会	60名
フォーラム	第17回中央アジア学フォーラム	平成14年12月7日	大阪大学大学院文学研究科	37名
フォーラム	第10回戦死者のゆくえ研究会	平成14年12月13日	大阪大学大学院文学研究科日本学講座	30名

行事区分(講演会・シンポジウム・フォーラム・セミナー)	テーマ名	開催期間	開催場所	参加者数
フォーラム	第18回中央アジア学フォーラム	平成15年3月29日	神戸市外国語大学 教官等2階会議室	37名
フォーラム	第1回文化／批評研究会	平成15年3月31日	大阪大学大学院文学研究科 日本学講座	20名
フォーラム	第3回国際デザイン史フォーラム「画像と文字」	平成15年3月8日-9日	大阪市立住まい情報センター3Fホール(8日)大阪歴史博物館3階講堂(9日)	200名
ワークショップ	Globalization and the British Empire A.G.Hopkins (University of Texas) A.C.Howe (LSE) (イギリス帝国史研究会と共催)	平成14年12月7日	京都市京大会館	50名
ワークショップ	人文学者による映像記録化のためのビデオ撮影入門	平成15年3月10日	大阪大学大学院文学研究科 文13教室	15名
大阪イギリス史研究会	ホスピタリティ	平成14年4月13日	大阪大学待兼山会館	10名強
大阪イギリス史研究会	空間のイギリス史	平成14年6月15日	大阪大学待兼山会館	10名強
大阪イギリス史研究会	英米史	平成14年9月14日	大阪大学待兼山会館	10名強
大阪イギリス史研究会	空間のイギリス史	平成14年12月15日	大阪大学待兼山会館	10名強
大阪イギリス史研究会	空間のイギリス史	平成15年2月22日	大阪大学待兼山会館	10名強
大阪イギリス史研究会	空間のイギリス史	平成15年3月15日	大阪大学待兼山会館	10名強

平成15年度 文学研究科

行事区分(講演会・シンポジウム・フォーラム・セミナー)	テーマ名	開催期間	開催場所	参加者数
アーツ・アンド・クラフツ・セツルメント国際会議	近代日本の芸術と社会	平成15年7月	関東学院大学	100名
拡大書評会	山下範久著『世界システムで読む日本』	平成15年11月9日	大阪大学大学院文学研究科	15名
研究会	「海域アジア史研究会」2003年4月例会	平成15年4月26日	大阪大学大学院文学研究科 史学科共同研究室	16名
研究会	近現代演劇研究会	平成15年5月10日	大阪大学大学院文学研究科 文学部B13教室	20名
研究会	第1回メディア・デザイン・インターカルチャー論合同研究会	平成15年5月12日	大阪大学大学院文学研究科 美学棟B41講義室	15名
研究会	「海域アジア史研究会」2003年5月例会	平成15年5月24日	大阪大学大学院文学研究科 史学科共同研究室	23名
研究会	第2回「記憶と対話」研究会	平成15年5月29日	大阪大学大学院人間科学研究科東館5階 512研究室	11名
研究会	第2回メディア・デザイン・インターカルチャー論合同研究会	平成15年6月17日	大阪大学待兼山会館会議室	50名
研究会	「海域アジア史研究会」2003年6月例会	平成15年6月28日	大阪大学大学院文学研究科 史学科共同研究室	20名
研究会	近現代演劇研究会	平成15年7月12日	大阪大学大学院文学研究科 文学部B13教室	20名
研究会	「海域アジア史研究会」2003年7月例会	平成15年7月12日	大阪大学大学院文学研究科 史学科共同研究室	21名
研究会	第3回メディア・デザイン・インターカルチャー論合同研究会	平成15年7月12日	大阪大学大学院文学研究科 美学棟4階 美学・文芸共同研究室	15名
研究会	「海域アジア史研究会」2003年9月例会	平成15年9月27日	大阪大学大学院文学研究科 史学科共同研究室	11名
研究会	近現代演劇研究会	平成15年10月11日	大阪市立大学	24名
研究会	近現代演劇研究会	平成15年11月29日	関西外国語大学	23名
研究会	国語語彙史研究会第75回	平成15年12月13日	大阪大学豊中校舎文法経講義棟文41教室	70名
研究会	「海域アジア史研究会」2003年12月例会	平成15年12月13日	大阪大学大学院文学研究科 史学科共同研究室	9名
研究会	古代武器研究会	平成16年1月8日	滋賀県立大学	80名

行事区分(講演会・シンポジウム・フォーラム・セミナー)	テーマ名	開催期間	開催場所	参加者数
研究会	近現代演劇研究会	平成16年1月30日	大阪大学大学院文学研究科B13教室	20名
研究集会	日本文学国際研究集会「海外における源氏物語の世界 翻訳と研究」	平成15年12月6日	大阪大学コンベンションセンター大会議室	330名
研修会	全国高等学校世界史教員研修会	平成15年8月5日-7日	大阪大学図書館本館 A6階 図書館ホール	100名
公演	ヨーゼフ・ラスカ パレエ・パントマイム《父の愛》世界初演	平成16年1月24日	ピッコロシアター大ホール	600名
講演会	幕末・明治の異文化交流「異文化を考える」	平成15年4月11日	追手門大学公開講座	100名
講演会	音とたち(その2) 2002年度RVMVベトナム少数民族文化遺産の調査報告	平成15年5月13日	大阪芸術大学芸術情報センター AVホール(B1F)	120名
講演会	言語の接触と混交	平成15年5月27日	大阪大学言語文化研究科3階講義室	29名
福岡女子大学英文学会講演	ブロンテ小説の楽しみ方	平成15年7月5日	福岡女子大学	250名
日本ブロンテ協会関西支部講演	「ヴィレット」のダブル・エンディングを考える	平成15年7月12日	関西大学	150名
講演会	「生命力への賛歌—マトウラー彫刻—」	平成15年7月	奈良国立博物館	200名
関西ゲルマニスティーンの会 講演会・研究発表会	志水紀代子(哲学・追手門学院大)「ハンナ・アーレントとフェミニズム」	2003年8月2日 13時~17時	大阪大学待兼山会館会議室	18名
講演会	哲学と建築	平成15年8月26日	石川県西田哲学館	約200名
講演会(第18回藤井寺市市民文化財講座)	大和川付替普請の労働力編成	平成15年10月11日	藤井寺市立生涯学習センター	約100名
講演会	子どものための哲学教育	平成15年10月19日	大阪大学待兼山会館	20名
講演会	大阪大学総合学術博物館第2回企画展 ミニレクチャー「アフガニスタンの失われた仏たち」	平成15年10月	大阪歴史博物館・NHK大阪放送会館アトリウム	30名
講演会	「友情」の過去と現在—文学の沃野から—	平成15年11月1日	「阪神奈大学・研究機関生涯学習ネット」	150名
講演会	幹細胞研究—生命の新たな歩兵	平成15年11月9日	大阪大学大学院文学研究科	18名
講演会	第5回情報学セミナー 文化遺産と情報学—日本・東洋美術を中心に—「美術史研究における画像データ援用の可能性—南・東南アジア美術を例にして」	平成15年11月	静岡大学情報学部	30名
講演会	私が言語学の勉強をはじめたころ	平成15年12月13日	大阪大学待兼山会館	65名
講演会	デモクラシー・ディセンサス・コミュニケーション	平成16年1月14日	大阪大学待兼山会館	30名
講演会	ヤナーチェクの音楽を聴くために	平成16年2月1日	水戸芸術館コンサートホール	400名
講演会	アルフォンソ・ドーデ『最後の授業』をめぐって—南仏、アルザスそして日本—	平成16年3月27日	三重日仏協会	30名
講座	平成15年度 懐徳堂春季講座 第105回 中欧三都市物語—都市の景観と文化—	平成15年5月28日-30日	大阪府立文化情報センター さいかくホール	374名
講座	平成15年度 懐徳堂秋季講座 第106回 欧羅巴—近代日本からの眼差し—	平成15年11月5日-7日	大阪府立文化情報センター さいかくホール	203名
国際会議	〈第3回〉アーツ・アンド・クラフツ・セツルメント国際会議 横浜・大阪 2003 近代日本の芸術と社会	平成15年7月25日・26日・28日・29日	関東学院大学(725-26),大阪 市立社会福祉センター(7/28),大阪市社会福祉研修・情報センター(7/29)	500名
国際会議	第四回日英歴史家会議 State and Empire in British History	平成15年9月9日-12日	京都市国際交流会館	200名
コンサート	神戸女学院大学音楽部第10回サマーコンサート	平成15年6月24日	伊丹アイフォニックホール	500名
コンサート兼ワークショップ	伝統芸術創造プログラム「継ぐこと・伝えること21 浪曲」	平成15年4月13日	京都芸術センター	60名
懇話会	待兼山演劇懇話会	平成15年7月15日	大阪大学大学院文学研究科 美学棟PAC	15名

行事区分(講演会・シンポジウム・フォーラム・セミナー)	テーマ名	開催期間	開催場所	参加者数
シンポジウム	日本語史研究の将来——理論と実証との接点——	平成15年5月17日	堺市民会館	300名
シンポジウム	2003年度第1回日本学方法論の会 それぞれのマンガ体験、それぞれの語りの位置—マンガの語り方国際比較研究—	平成15年5月26日	グランキューブ大阪(大阪国際会議場)	100名
東南アジア史学会第69回研究大会自由企画シンポジウム	「東・東南アジア近世海域世界」の成立	平成15年6月2日	東京外国語大学	約60名
シンポジウム	ナショナリティとエコロジー	平成15年6月29日	立教大学	40名
シンポジウム	対話・教育・哲学	平成15年7月12日-13日	大阪大学待兼山会館	25名
シンポジウム	先端医療技術をめぐる倫理・社会	平成15年7月26日	大阪大学全学共通教育機構	25名
シンポジウム	The 3rd East Asia Regional Conference in Alternative Geography	平成15年8月5日-9日	東京・大阪	130名
国際シンポジウム	ブルーストとカミーユ・コロ	平成15年9月18日	京都大学	50名
シンポジウム	2003年度第3回日本学方法論の会「〈古代〉の表象」	平成15年9月20日	大阪大学大学院文学研究科	30名
日本ペイター協会シンポジウム	ペイターとロマンティック・コネクション	平成15年10月18日	埼玉学園大学	50名
シンポジウム	「海域アジア史研究会」創立10周年記念沖縄例会「海域アジア史のポテンシャル」	平成15年11月1日-2日	沖縄県立芸術大学附属研究所	40名
シンポジウム	メディア・デザイン・インターカルチャー論 パリ・シンポジウム	平成15年12月2日-3日	パリ・ラ・ヴィレット建築大学	150名
国際シンポジウム	先端医療技術における政策形成	平成15年12月13日	大阪大学大学院文学研究科	30名
シンポジウム	第5回文化／批評研究会(2003年度第3回日本学方法論の会)	平成15年12月20日	大阪大学大学院文学研究科 日本学講座	50名
シンポジウム	2003年度第4回日本学方法論の会「民俗芸術」再考—「生活」と「芸術」の相克: 1920—30年代—	平成16年3月19日	大阪大学大学院文学研究科	30名
国際シンポジウム	戦国楚簡と中国思想史研究	平成16年3月26日-27日	大阪大学待兼山会館会議室	延べ85名
セミナー	広域文化表現論講座共同研究「テクストの読解と伝承」第二回特別研究会	平成15年7月5日	大阪大学大学院文学研究科 第1会議室	約40名
セミナー	広域文化表現論講座共同研究「テクストの読解と伝承」第三回特別研究会	平成15年7月19日	大阪大学待兼山会館	約20名
セミナー	18世紀英文学書評の会(第四回)	平成15年7月20日	大阪大学大学院文学研究科	9名
セミナー	ヴォルフガング・ケルステン Wolfgang Kersten 氏講演会・公開セミナー	平成15年10月5日	京都市国立近代美術館レクチャーホール・法然院	60名
セミナー	グローバルヒストリーと英領マラヤ Nick White(Liverpool John Moores University)	平成15年10月27日	大阪大学大学院文学研究科	20名
セミナー	グローバルヒストリーと南アジア Tom Tomlinson(SOAS, University of London)	平成15年11月8日	大阪大学大学院文学研究科	20名
セミナー	18世紀英文学書評の会(第五回)	平成15年12月21日	大阪大学大学院文学研究科	9名
セミナー	18世紀英文学書評の会(第六回)	平成16年3月28日	大阪大学大学院文学研究科 西洋文学・語学研究室	9名
第36回阪大英文学会	英文学・英語学	平成15年11月8日	大阪大学豊中学舎文法経講義棟第41番教室	150名
対話セッション	在宅における医療行為	平成15年11月29日-30日	東洋ホテル	15名
発掘調査現地説明会	勝福寺古墳発掘調査現地説明会	平成15年8月9日	川西市火打2丁目、勝福寺古墳	150名
フォーラム	第2回文化／批評研究会	平成15年6月6日	大阪大学大学院文学研究科 日本学講座	20名
フォーラム	現代の中央アジアと国際秩序 清水学(宇都宮大学)S. リューネフ(神戸学院大学)(アジア太平洋研究会と共催)	平成15年7月5日-6日	赤穂市・国民宿舎	30名
フォーラム	第19回中央アジア学フォーラム	平成15年7月26日	大阪大学大学院文学研究科	39名
国際フォーラム	国際フォーラム「映像のカー・日越両国文化の比較と交流のために」	平成15年8月31日-9月1日	越日人材協力センター(ハノイ貿易大学構内)多目的ホール	115名
フォーラム	第3回文化／批評研究会	平成15年10月3日	大阪大学大学院文学研究科 日本学講座	30名
フォーラム	第4回文化／批評研究会	平成15年10月17日	大阪大学大学院文学研究科 日本学講座	40名

行事区分(講演会・シンポジウム・フォーラム・セミナー)	テーマ名	開催期間	開催場所	参加者数
フォーラム	在宅における医療行為	平成15年10月25日	大阪大学待兼山会館	22名
フォーラム	文化庁国際文化フォーラム2003「文化の多様性」討論会「文化による協調と共存」事例報告「古代における仏教とヒンドゥー教との共存」	平成15年11月27日	薬師寺	100名
フォーラム	第20回中央アジア学フォーラム	平成15年12月13日	神戸市外国語大学 教官等2階会議室	35名
フォーラム	千里ライフサイエンスフォーラム「美術作品を通してヒンドゥー教を考える」	平成15年12月	千里ライフサイエンスセンター	50名
レクチャーコンサート	ハイドンの奇想	平成15年6月7日	ザ・フェニックスホール	300名
レクチャーコンサート	クレオールとしてのハイドン	平成15年6月26日	東京オペラシティ(近江楽堂)	100名
ワークショップ	「イメージとしての<日本>」研究プロジェクト第1回ワークショップ それぞれのマンガ体験、それぞれの語りの位置ーマンガの語り方・国際比較研究ー	平成15年5月26日	グランキューブ(大阪国際会議場)801.802会議室	59名
ワークショップ	「イメージとしての<日本>」研究プロジェクト第2回ワークショップ 占領地における日本軍のイメージ形成とプロパガンダ	平成15年7月6日	大阪大学待兼山会館会議室	49名
ワークショップ	アジアから見たグローバルヒストリー Andrew Porter (King's College, University of London)	平成15年9月16日-17日	富山市・自遊館 魚津・新川文化ホール	30名
ワークショップ	ワークショップ「現場という領域、情報という領域」	平成15年9月22日-23日	千里阪急ホテル	70名
ワークショップ	「イメージとしての<日本>」ワークショップ	平成15年9月27日-28日	大阪大学豊中校舎文法経講義等	122名
ワークショップ	「イメージとしての<日本>」研究プロジェクト第3回ワークショップ 創造性の管理と文化の政治学	平成15年10月29日	大阪大学待兼山会館会議室	34名
ワークショップ	イギリス帝国史研究と南アジア (イギリス帝国史研究会と共催)	平成15年12月6日	東京外国語大学・本郷サテライト	40名
ワークショップ	社会的な問題へのSDの適用ーオーストラリアと日本の実践例から	平成16年2月28-29日	大阪大学待兼山会館	22名
大阪イギリス史研究会	空間のイギリス史	平成15年4月26日	大阪大学待兼山会館	10名強
大阪イギリス史研究会	空間のイギリス史	平成15年6月8日	大阪大学待兼山会館	10名強
大阪イギリス史研究会	空間のイギリス史	平成15年7月13日	大阪大学待兼山会館	10名強
大阪イギリス史研究会	空間のイギリス史	平成15年9月27日	大阪大学待兼山会館	10名強
大阪イギリス史研究会	空間のイギリス史	平成15年10月18日	大阪大学待兼山会館	10名強
大阪イギリス史研究会	イギリス帝国史	平成16年1月24日	大阪大学待兼山会館	10名強
大阪イギリス史研究会	戦争の記憶	平成16年3月20日	大阪大学待兼山会館	10名強
第71回待兼山ことばの会	”結果名詞をめぐって: 基本動詞の LCSと-ing名詞/転換名詞の分布”	平成15年9月27日	大阪大学大学院文学研究科 第1会議室	60名

平成16年度 文学研究科

行事区分(講演会・シンポジウム・フォーラム・セミナー)	テーマ名	開催期間	開催場所	参加者数
音楽会	日本の絵 ~ヨーゼフ・ラスカ没後40年記念演奏会~	平成16年11月21日	青山音楽記念館(バロックザール)	250名
懐徳堂古典講座	「西郷隆盛を読む」第1回	平成16年5月11日	大阪大学中之島センター	45名
懐徳堂古典講座	「西郷隆盛を読む」第2回	平成16年6月8日	大阪大学中之島センター	45名
懐徳堂古典講座	「西郷隆盛を読む」第3回	平成16年7月13日	大阪大学中之島センター	45名
懐徳堂古典講座	「西郷隆盛を読む」第4回	平成16年8月10日	大阪大学中之島センター	45名
懐徳堂古典講座	「西郷隆盛を読む」第5回	平成16年9月14日	大阪大学中之島センター	45名
懐徳堂古典講座	「西郷隆盛を読む」第6回	平成16年10月12日	大阪大学中之島センター	45名
懐徳堂古典講座	「西郷隆盛を読む」第7回	平成16年11月9日	大阪大学中之島センター	45名
懐徳堂古典講座	「西郷隆盛を読む」第8回	平成16年12月14日	大阪大学中之島センター	45名

行事区分(講演会・シンポジウム・フォーラム・セミナー)	テーマ名	開催期間	開催場所	参加者数
懐徳堂古典講座	「西郷隆盛を読む」第9回	平成17年1月18日	大阪大学中之島センター	45名
懐徳堂古典講座	「西郷隆盛を読む」第10回	平成17年2月15日	大阪大学中之島センター	33名
学会	日本英文学会第76回全国大会	平成16年5月22日-23日	大阪大学豊中校舎(共通教育本館・文法経講義棟・法経講義棟)	2000名
研究会	「POAS(Poems on Affairs of State)研究会」第1回	平成16年4月17日	大阪大学大学院文学研究科 西洋文学・語学研究室	5名
研究会	「POAS(Poems on Affairs of State)研究会」第2回	平成16年5月29日	大阪大学大学院文学研究科 西洋文学・語学研究室	5名
研究会	「POAS(Poems on Affairs of State)研究会」第3回	平成16年7月31日	大阪大学大学院文学研究科 西洋文学・語学研究室	5名
研究会	「POAS(Poems on Affairs of State)研究会」第4回	平成16年9月18日	大阪大学大学院文学研究科 西洋文学・語学研究室	5名
研究会	「POAS(Poems on Affairs of State)研究会」第5回	平成16年11月20日	大阪大学大学院文学研究科 西洋文学・語学研究室	5名
研究会	「POAS(Poems on Affairs of State)研究会」第6回	平成16年12月4日	大阪大学大学院文学研究科 西洋文学・語学研究室	5名
研究会	「POAS(Poems on Affairs of State)研究会」第7回	平成17年2月12日	大阪大学大学院文学研究科 西洋文学・語学研究室	5名
研究会	「POAS(Poems on Affairs of State)研究会」第8回	平成17年3月8日	大阪大学大学院文学研究科 西洋文学・語学研究室	5名
研究会	Organ transplantation, sacrifice, and other related ethical issues	平成17年1月22日	大阪大学待兼山会館	30名
研究会	The 9th Japanese-German Geographical Conference	平成16年8月30日-9月1日	Ruhr University	20名
研究会	遺伝カウンセリング研究会 ～日本・オーストリア共同研究のための研究	平成17年1月23日	大阪大学中之島センター	21名
研究会	イメージとしての(日本)研究部会第1回	平成16年4月27日	大阪大学大学院文学研究科 美学棟1階日本学B教室	10名
研究会	近現代演劇研究会5月例会「地域の演劇学(1)」 「アジア演劇の視座(2)」	平成16年5月29日	大阪大学大学院文学研究科 美学棟B13教室	20名
研究会	近現代演劇研究会7月例会	平成16年7月24日	大阪大学大学院文学研究科 美学棟B13教室	19名
研究会	近現代演劇研究会10月例会	平成16年10月30日	大阪大学大学院文学研究科 美学棟B13教室	24名
研究会	近現代演劇研究会12月例会「地域の演劇学(2)」	平成16年12月18日	大阪大学大学院文学研究科 美学棟B13教室	22名
研究会	近現代演劇研究会上海集会	平成17年2月23日-26日	上海戯劇学院	17名
研究会	子どものためのノ子どもとする哲学研究会	平成16年6月12日	大阪大学中之島センター	30名
研究会	戦国楚簡研究会(第21回)	平成16年6月4日	大阪大学大学院文学研究科 会議室	7名
研究会	第1回MCE研究会	平成16年4月12日	大阪大学大学院文学研究科 美学棟B13教室	25名
研究会	第2回MCE研究会	平成16年4月26日	大阪大学大学院文学研究科 美学棟B13教室	20名
研究会	第3回MCE研究会	平成16年5月10日	大阪大学大学院文学研究科 美学棟B13教室	20名
研究会	第4回MCE研究会	平成16年5月17日	大阪大学大学院文学研究科 美学棟B13教室	20名
研究会	第5回MCE研究会	平成16年6月3日	大阪大学大学院文学研究科 美学棟B13教室	15名
研究会	第6回MCE研究会	平成16年6月14日	大阪大学大学院文学研究科 美学棟B13教室	35名
研究会	第7回MCE研究会	平成16年6月28日	大阪大学大学院文学研究科 美学棟B13教室	20名
研究会	第8回MCE研究会	平成16年7月12日	大阪大学待兼山会館二階会議室	30名
研究会	第9回MCE研究会	平成16年7月13日	大阪大学待兼山会館二階会議室	25名
研究会	第10回MCE研究会	平成16年7月22日	大阪大学大学院文学研究科 美学棟B13教室	20名
研究会	第11回MCE研究会	平成16年10月25日	大阪大学大学院文学研究科 美学棟B13教室	20名
研究会	第12回MCE研究会	平成16年11月1日	大阪大学大学院文学研究科 美学棟B13教室	15名

行事区分(講演会・シンポジウム・フォーラム・セミナー)	テーマ名	開催期間	開催場所	参加者数
研究会	第13回MCE研究会	平成16年11月17日	大阪大学大学院文学研究科美学棟B13教室	50名
研究会	第14回MCE研究会	平成16年11月18日	大阪大学大学院文学研究科美学棟B13教室	150名
研究会	第15回MCE研究会	平成16年11月29日	大阪大学大学院文学研究科美学棟B13教室	20名
研究会	第16回MCE研究会	平成17年1月24日	大阪大学待兼山会館二階会議室	15名
研究会	第17回MCE研究会	平成17年2月21日	大阪大学待兼山会館二階会議室	20名
研究会	第18回MCE研究会	平成17年3月7日	大阪大学共通教育管理講義棟6階会議室	15名
研究会	第19回MCE研究会	平成17年3月14日	大阪大学待兼山会館二階会議室	15名
研究会	第18回古代学協会四国支部大会	平成16年12月4日	徳島大学	100名
研究会	第15回東南アジア彫刻史研究会	平成16年5月19日	大阪大学総合学術博物館会議室	10名
研究会	第16回東南アジア彫刻史研究会	平成16年6月26日	大阪大学大学院文学研究科美学棟B13教室	18名
研究会	第17回東南アジア彫刻史研究会	平成16年11月6日	大阪大学総合学術博物館会議室	13名
研究会	第18回東南アジア彫刻史研究会	平成16年12月4日	大阪大学大学院文学研究科美学棟B13教室	15名
研究会	阪神中哲談話会 例会(第365回)	平成16年11月6日	茨木市民会館(ユアアイホール)	15名
研究会	ブルーストとノルマンディー地方	平成16年4月3日	京都大学	20名
研究会	『文芸学研究』第8号合評会	平成16年5月1日	大阪大学大学院文学研究科美学棟B13教室	15名
研究会	文芸学研究会第19回研究発表会	平成16年7月24日	神戸女学院大学タッドレー	21名
研究会	文芸学研究会第20回研究発表会	平成16年9月18日	神戸大学文学部	25名
研究会	文芸学研究会第21回研究発表会	平成16年12月23日	大阪大学大学院文学研究科美学棟B13教室	20名
研究会	文芸学研究会第22回研究発表会	平成17年3月5日	大阪大学大学院文学研究科美学棟B13教室	18名
研究会議	小野随心院所蔵の密教文献・画像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探究	平成16年10月30日	大阪大学大学院文学研究科第1会議室	20名
研究会議	小野随心院所蔵の密教文献・画像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探究	平成17年1月17日	大阪大学大学院文学研究科第1会議室	22名
研修会	第2回高等学校歴史教員研修会	平成16年8月9日-11日	大阪大学附属図書館本館A棟6階	118名
講演	大阪市立高等学校教育研究会社会科部会冬季研修会・講演会「懐徳堂と適塾―天保山の出会い―」	平成17年1月21日	大阪大学中之島センター	60名
講演	チャイニーズ・マネジメント&マーケティング・スクール講演「兵法―孫子」	平成16年7月16日	香港貿易発展局大阪事務所	30名
講演	チャイニーズ・マネジメント&マーケティング・スクール講演「孫子兵法の継承と展開」	平成16年11月2日	香港貿易発展局大阪事務所	30名
講演	第1回文科省・知的資産のための技術基盤シンポジウム講演「大阪大学懐徳堂文庫のデジタルアーカイブ化」	平成17年3月23日	大阪大学サイバーメディアセンター	80名
講演	中京日本香港貿易協会講演「孫子の兵法―勝者と敗者―」	平成17年2月10日	名古屋国際ホテル	100名
講演会	Bodily Experience between Selfhood and Otherness	平成16年4月27日	大阪大学待兼山会館	45名
講演会	Phaenomenologie zwischen Pathos und Response	平成16年4月27日	大阪大学大学院文学研究科第1会議室	15名
講演会	ヴァルデンフェルス教授講演会	平成16年4月27日	大阪大学待兼山会館二階会議室	30名
講演会	江戸時代における新大和川の支配	平成16年12月12日	堺市博物館	約200名
講演会	オスカー・ワイルド『サロメ』の魅力―言葉と映像の創る世界―	平成16年7月7日	愛知淑徳大学	100名
講演会	音声教育の基本	平成17年2月27日	廿日市市国際交流協会	100名
講演会	近世の狭山池と摂津・河内の治水	平成17年3月27日	狭山池博物館	約100名

行事区分(講演会・シンポジウム・フォーラム・セミナー)	テーマ名	開催期間	開催場所	参加者数
講演会	古代を偲ぶ会	平成17年2月19日	アピオ大阪	60名
講演会	世紀末文学と身体	平成16年11月30日	京都女子大学	250名
講演会	「地方文献と区域研究: 以近世江浙商人の研究為例」(復旦大学馮筱才副教授)	平成17年1月26日	大阪大学大学院文学研究科第1会議室	20名
講演会	中級段階の日本語音声教育をめぐって	平成16年8月19日-20日	宮城県国際交流協会	50名
講演会	中国における仏像の始まりと広がり	平成17年2月19日	大阪YMCA会館	約400名
講演会	兵庫県川西市勝福寺古墳発掘調査講演会	平成17年3月5日	川西市文化会館	90名
講演会	平成16年度加古川市文化財講座	平成16年11月7日	加古川市立青少年女性センター	90名
講演とシンポジウム	幕末の福井藩一苦悩する春嶽と福井藩一	平成17年3月21日	福井市立フェニックスプラザホール	300名
講座	平成16年度 懐徳堂春季講座[第107回]	平成16年5月25日-28日	大阪大学中之島センター	183名
講座	平成16年度 懐徳堂秋季講座[第108回]	平成16年10月26日-28日	大阪大学中之島センター	146名
国際会議	第4回アーツ・アンド・クラフツ運動史国際会議	平成16年7月26日-28日	トインビー・ホール(ロンドン)	150名
国際シンポジウム	Proust et Leconte de Lisle: un autre poète dans le <i>Contre Sainte-Beuve</i>	平成16年7月6日	東京日仏会館	50名
国際シンポジウム	Workshop on Northeast Asia in Maritime Perspective: A Dialogue with Southeast Asia	平成16年10月29日-30日	メルパルク沖縄(那覇)	60名
シンポジウム	Functional Approaches to Japanese Grammar: Towards the Understanding of Human Language	平成16年8月20日-22日	アルバータ大学(カナダ)	20名
シンポジウム	Imaging Japan: A Symposium	平成17年3月4日	モナシュ大学(オーストラリア)	100名
シンポジウム	コミュニティ・アート・シンポジウム	平成17年3月21日	大阪大学中之島センター	28名
シンポジウム	新時代の音声教育	平成16年9月25日	東京外国語大学「日本音声学会大会」	150名
シンポジウム	第3回対話シンポジウム	平成16年12月1日-5日	大阪大学中之島センター	4日・5日の大阪のみ80
シンポジウム	台湾における日本文学・日本語学の新たな可能性	平成16年12月12日	長榮大學第一教学視覚中心(台湾)	50名
シンポジウム	「トポスとしての島」2004年度日本比較文学会関西大会	平成16年11月7日	徳島大学	80名
シンポジウム	日本オスカー・ワイルド協会第29回大会「ワイルド文学と身体」	平成16年11月27日	慶応義塾大学日吉キャンパス	100名
シンポジウム	水の都市文化	平成17年3月19日	大阪市立大学	約50名
シンポジウム	大和川水系ミュージアムネットワーク記念シンポジウム「大和川付け替え300年、その歴史と意義を考える」	平成16年11月14日	大阪歴史博物館	約250名
シンポジウム	横井小楠と福井藩	平成16年9月4日	福井県立公文書館	150名
シンポジウム	財団法人ラスキン文庫創立20周年記念シンポジウム	平成16年10月30日	日本女子大学百年館低層棟506教室	140名
セミナー	イメージとしての(日本)ワークショップ第4回	平成16年7月30日	大阪大学待兼山会館二階会議室	70名
セミナー	広域文化表現論講座第四回特別研究会	平成16年10月6日	大阪大学豊中校舎文法経講義棟文13教室	20名
セミナー	広域文化表現論講座第五回特別研究会	平成16年11月24日	大阪大学待兼山会館会議室	20名
セミナー	広域文化表現論講座第六回特別研究会	平成16年12月17日	大阪大学大学院文学研究科A28教室	10名
セミナー	18世紀英文学書評の会(第七回)	平成16年7月25日	大阪大学大学院文学研究科西洋文学・語学研究室	9名
セミナー	18世紀英文学書評の会(第八回)	平成16年12月19日	大阪大学大学院文学研究科西洋文学・語学研究室	9名
セミナー	18世紀英文学書評の会(第九回)	平成17年3月20日	大阪大学大学院文学研究科西洋文学・語学研究室	9名
セミナー	第2回グローバルヒストリー・セミナー	平成16年4月16日	大阪大学大学院経済学研究	25名
セミナー	第2回グローバルヒストリー・セミナー(2)	平成16年4月17日	大阪大学大学院文学研究科	20名
セミナー	第3回グローバルヒストリー・セミナー	平成16年5月7日	大阪大学大学院経済学研究	25名

行事区分(講演会・シンポジウム・フォーラム・セミナー)	テーマ名	開催期間	開催場所	参加者数
セミナー	第3回グローバルヒストリー・セミナー(2)	平成16年5月8日	大阪大学中之島センター	20名
セミナー	第4回グローバルヒストリー・セミナー	平成16年6月8日	大阪大学大学院経済学研究	30名
セミナー	第4回グローバルヒストリー・セミナー(2)	平成16年6月9日	大阪大学大学院文学研究科	25名
セミナー	第5回グローバルヒストリー・セミナー(1)～(2)	平成16年7月23日	大阪大学大学院経済学研究科	40名
セミナー	第6回グローバルヒストリー・セミナー	平成16年11月1日	大阪大学大学院文学研究科	20名
セミナー	第7回グローバルヒストリー・セミナー	平成16年12月15日	大阪大学大学院文学研究科	20名
セミナー	第8回グローバルヒストリー・セミナー(1)	平成17年2月7日	大阪大学大学院文学研究科第1会議室	20名
セミナー	第8回グローバルヒストリー・セミナー(2)	平成17年2月9日	大阪大学大学院経済学研究科法経大学院総合研究棟607号室	25名
セミナー	第8回グローバルヒストリー・セミナー(3)	平成17年2月10日	東京大学大学院人文・社会学系研究科	30名
第37回阪大英文学会	英文学・英語学	平成16年11月6日	大阪大学豊中校舎文法経講義棟第41番教室	100名
第72回待兼山ことばの会	「語彙化に見る言語間の差異と傾向」	平成16年8月7日	大阪大学大学院文学研究科第1会議室	50名
中世寺院法研究会	日本中世の寺院法の特質	平成16年5月8日-9日	大阪ガーデンパレス	10名
中世寺院法研究会	日本中世の寺院法の特質	平成16年7月17日-18日	大阪ガーデンパレス	10名
中世寺院法研究会	日本中世の寺院法の特質	平成16年9月25日-26日	大阪ガーデンパレス	10名
中世寺院法研究会	日本中世の寺院法の特質	平成17年1月8日-9日	大阪ガーデンパレス	10名
中世寺院法研究会	日本中世の寺院法の特質	平成17年3月26日-27日	大阪ガーデンパレス	10名
特別講演会	Lady Aoi's Trail; Performing through the Ages Dr. Kinneret Noy (Hebrew University)	平成16年7月24日	大阪大学大学院文学研究科美学棟B13教室	25名
発掘調査現地説明会	勝福寺古墳発掘調査現地説明会	平成16年4月3日	川西市火打2丁目、勝福寺古墳	200名
発掘調査現地説明会	篠・大谷3号窯発掘調査現地説明会	平成16年8月28日	亀岡市篠町、大谷3号窯跡	80名
フォーラム	ジャン・ジオノと環境文学—『世界の歌』を中心に—	平成17年3月18日	大阪大学大学院文学研究科第1会議室	50名
フォーラム	千里ライフサイエンスフォーラム「カブキの時代のミヤコ」	平成17年3月18日	千里ライフサイエンスセンター	約50名
フォーラム	第21回中央アジア学フォーラム	平成16年4月3日	大阪大学大学院文学研究科第1会議室	42名
フォーラム	第22回中央アジア学フォーラム	平成16年8月7日	神戸市外国語大学・教官等二階会議室	43名
フォーラム	第23回中央アジア学フォーラム	平成16年12月18日	大阪大学大学院文学研究科第1会議室	28名
フォーラム	日本近世文学研究フォーラム	平成16年10月21日	大阪大学共通教育棟人文系演習室	11名
フォーラム	阪大フォーラム2004「日本、もうひとつの顔」	平成16年11月5日-7日	マルクブロック大学(パレ・ユニヴェルシテール)119ホール	350名
フォーラム・シンポジウム	国際フォーラム「芸術・コミュニケーション・デザイン」	平成17年3月14日-15日	大阪大学中之島センター	約200名
例会	「海域アジア史研究会」4月例会	平成16年4月24日	大阪大学豊中校舎文法経講義棟	19名
例会	「海域アジア史研究会」5月例会	平成16年5月22日	大阪大学豊中校舎文法経講義棟	9名
例会	「海域アジア史研究会」6月例会	平成16年6月26日	大阪歴史博物館	8名
例会	「海域アジア史研究会」10月例会	平成16年10月9日	大阪歴史博物館	16名
例会	「海域アジア史研究会」10月特別例会	平成16年10月26日	大阪大学吹田校舎銀杏会館3階大会議室	15名
例会	「海域アジア史研究会」11月例会	平成16年11月13日	大阪大学豊中校舎文法経講義棟	10名
例会	「海域アジア史研究会」11月特別例会	平成16年11月27日	大阪大学大学院文学研究科第1会議室	12名
例会	「海域アジア史研究会」1月例会	平成17年1月22日	大阪大学大学院文学研究科第1会議室	13名
例会	「海域アジア史研究会」2月例会	平成17年2月25日	大阪大学待兼山会館	24名
例会	「海域アジア史研究会」3月例会	平成17年3月26日	大阪大学大学院文学研究科2階史学科共同研究室	10名

行事区分(講演会・シンポジウム・フォーラム・セミナー)	テーマ名	開催期間	開催場所	参加者数
ワークショップ	Extra Workshop on Northeast Asia in Maritime Perspective: A Dialogue with Southeast Asia	平成17年1月22日	大阪大学文学部	20名
ワークショップ	Social Capital and Development Trends in Japan's and Sweden's Countryside	平成16年8月23日-24日	Mid-Sweden University	20名
ワークショップ	「イメージとしての〈日本〉」若手研究者交流ワークショップ	平成16年9月25日-26日	大阪大学中之島センター第3講義室	80名
ワークショップ	シネマ哲学カフェ	平成16年12月19日	大阪大学中之島センター	10名
ワークショップ	第1回地域研究ワークショップ「世界史とアジア研究」	平成16年11月30日	大阪大学大学院文学研究科第1会議室	15名
ワークショップ	哲学カフェ	平成16年4月9日	大阪大学中之島センター	10名
ワークショップ	哲学カフェ	平成16年5月15日	大阪大学中之島センター	11名
ワークショップ	哲学カフェ	平成16年6月28日	神戸親和女子大学	13名
ワークショップ	哲学カフェ	平成16年7月18日	大阪大学中之島センター	約10名
ワークショップ	哲学カフェ	平成16年8月22日	大阪大学中之島センター	8名
ワークショップ	哲学カフェ	平成16年9月19日	大阪大学中之島センター	8名
ワークショップ	哲学カフェ	平成16年10月16日	大阪大学中之島センター	7名
ワークショップ	哲学カフェ	平成16年10月25日	神戸親和女子大学	9名
ワークショップ	哲学カフェ	平成16年11月14日	大阪大学中之島センター	9名

3-1-2 国際共同研究実施状況

平成14年度 文学研究科

実施機関名	国名	研究テーマ	実施件数
フランス極東学院	フランス	正当化、正統性	1
山東大学ほか	中国	中国沿海地帯と日本の文物交流	1
南カリフォルニア大学	アメリカ合衆国	A Workshop on Functional Linguistics, Historical Linguistics, and Generative Grammar in Japanese	2
台北藝術大学	台湾	台湾における日本演劇の展開	1
Institute of Medicine, Tribhuvan University	Nepal	The Study of Cultural and Biological Adaptations in Nepal	1
チュービンゲン大学 日本文化研究所	ドイツ	日本語とドイツ語の対照言語学的研究	1
総件数			7

平成15年度 文学研究科

実施機関名	国名	研究テーマ	実施件数
フランス極東学院	フランス	正当化、正統性	1
ロンドン大学歴史学研究所	イギリス	第四回日英歴史家会議 State and Empire in British History	1
ロンドン大学LSE	イギリス	Global Economic History Network	1
カリフォルニア大学アーバイン校	アメリカ合衆国	Global Economic History Network	1
ライデン大学	オランダ	Global Economic History Network	1
山東大学ほか	中国	中国沿海地帯と日本の文物交流	1
ミシガン州立大学	アメリカ合衆国	Workshop in Japanese Discourse and Pragmatics	1
カレル大学日本学研究科	チェコ共和国	日本と中欧の比較文化的研究	1
パリ高等師範学校、ソルボンヌ大学その他	フランス、日本その他	ブルースト全草稿帳の出版	1
台北藝術大学	台湾	台湾における日本演劇の展開	1
Institute of Medicine, Tribhuvan University	Nepal	The Study of Cultural and Biological Adaptations in Nepal	1
チュービンゲン大学 日本文化研究所	ドイツ	ドイツの日常語の中の日本語をめぐる言語接触論的研究	1
ヨーロッパ統合研究所(ドイツ・ボン大学)	ドイツ	諸宗教の対話	1
総件数			13

平成16年度 文学研究科

実施機関名	国名	研究テーマ	実施件数
パッサウ大学およびピッツバーグ大学	ドイツ連邦共和国・アメリカ合衆国	フィヒテ研究のための国際的連携構築	1
フランス極東学院	フランス	日本社会におけるウチとソトの力学	1
国立シンガポール大学アジア研究所	シンガポール	Workshop: Northeast Asia in Maritime Perspective, A Dialogue with Southeast Asia	1
長栄大学	台湾	「台湾における日本文学・日本語学の新たな可能性—国際化の中の日本文学・日本語学—」	1
パリ高等師範学校、ソルボンヌ大学その他	フランスその他	ブルースト全草稿帳の転写および出版	1
上海戯劇学院	中国	日本演劇における中国	1
ワルシャワ大学ほか	ポーランド	中・東欧のモダニズム	1
トリバン大学医学部	ネパール	The Study of Cultural and Biological Adaptations to Malaria in Nepal	1
チュービンゲン大学	ドイツ	Japanese Migration, Human Interface, Language and Gender	1
総件数			9

3-1-3 産学連携組織一覧

平成14年度 文学研究科・文学部

組織名	設置目的	設置年度	活動内容
データ無し			

平成15年度 文学研究科・文学部

組織名	設置目的	設置年度	活動内容
データ無し			

平成16年度 文学研究科・文学部

組織名	設置目的	設置年度	活動内容
大阪大学文学研究科産学官連携問題委員会	産学官連携を推進し、社会との連携を図るため。	平成16年度	委員会は、次の事項について審議する。①受託研究の受入れに関する事。②民間等との共同研究に関する事。③奨学寄附金その他の寄附の受入れに関する事。④その他産学官連携に関する事。

3-1-4 企業との連携状況(包括提携、合同企画などの共同研究以外の連携)

平成14年度 文学研究科

連携企業名	連携内容	連携件数
岩波書店	「応用倫理学講義」シリーズの企画	1
集英社	訳注日本史料『寺院法』編纂に向けて中世寺院法研究会(平雅行代表)への援助	1
実教出版株式会社	高校日本史教科書『日本史B』の企画および執筆	1
帝国書院(株)	世界史資料集等の作成	1
第一学習社	高校世界史教科書『新世界史A/B』の作成	1
ミネルヴァ書房	講座『イギリス帝国と20世紀』の企画・編集	1
ザ・フェニックスホール	レクチャー・コンサート・シリーズ「ピアノはいつピアノになったか？」(3年、全8回)の企画・構成	1
総件数		7

平成15年度 文学研究科

連携企業名	連携内容	連携件数
岩波書店	「応用倫理学講義」シリーズの企画	1
集英社	訳注日本史料『寺院法』編纂に向けて中世寺院法研究会(平雅行代表)への援助	1
実教出版株式会社	高校教科書『日本史B』の編纂	1
産経新聞社	「浪華の書家五十人展」併催「緒方洪庵と適塾生の書」展の企画に協力	1
実教出版株式会社	高校日本史教科書『日本史B』の企画および執筆	1
NHK	日中共同制作・大型企画10回シリーズ「新シルクロード」のためのアドバイス	1
帝国書院	世界史資料集等の作成	1
第一学習社	高校世界史教科書『新世界史A/B』の作成	1
ミネルヴァ書房	講座『イギリス帝国と20世紀』の企画・編集	1
ザ・フェニックスホール	レクチャー・コンサート・シリーズ「ピアノはいつピアノになったか？」(3年、全8回)の企画・構成	1件(前年から引き続き)
総件数		10

平成16年度 文学研究科

連携企業名	連携内容	連携件数
集英社	訳注日本史料『寺院法』編纂に向けて中世寺院法研究会(平雅行代表)への援助	1
法蔵館	「大系真宗史料」の企画および編纂	1
三省堂出版	高校日本史教科書『詳説日本史B』編集執筆	1
三省堂出版	高校日本史教科書『明解日本史A』編集執筆	1
帝国書院(株)	高校世界史資料集、世界史B教科書の作成	2
社会評論社	20世紀の戯曲Ⅲ	1
ザ・フェニックスホール	レクチャー・コンサート・シリーズ「ピアノはいつピアノになったか？」(3年、全8回)の企画・構成	1
総件数		8

3-1-5 公開講座等実施状況

平成14年度 文学研究科

公開講座テーマ名	開催期間 (開始年月日)	開催期間 (終了年月日)	講義回数	開講時間帯 (開始時間)	開講時間帯 (終了時間)	受講者人数(男女)
仏像の名品を読む	2002年4月	2003年2月	10	18時	19時30分	平均34名(男女)
紫上の生涯とその運命	2002年4月	2003年2月	10	18時	19時30分	平均37名(男女)
十八史略を読む	2002年4月	2003年2月	10	18時	19時30分	平均41名(男女)
南宋・金・元の詩詞を読む	2002年4月	2003年2月	10	18時	19時30分	平均36名(男女)
論語を読む	2002年4月	2003年2月	10	18時	19時30分	平均25名(男女)
江戸思想を読む	2002年4月	2003年2月	10	18時	19時30分	平均39名(男女)
大阪の音楽いまむかし	2002年5月16日	2002年5月21日	4	14時	15時30分	のべ164名(男女)
秋期講座	2002年11月8日	2002年11月9日	2	13時	17時	のべ76名(男女)

平成15年度 文学研究科

公開講座テーマ名	開催期間 (開始年月日)	開催期間 (終了年月日)	講義回数	開講時間帯 (開始時間)	開講時間帯 (終了時間)	受講者人数(男女)
樋口一葉を読む	2003年4月	2004年2月	10	18時	19時30分	平均34名(男女)
十八史略を読む	2003年4月	2004年2月	10	18時	19時30分	平均42名(男女)
詩経・楚辞を読む	2003年4月	2004年2月	10	18時	19時30分	平均35名(男女)
仏教の原典を読む	2003年4月	2004年2月	10	18時	19時30分	平均42名(男女)
伊藤仁斎を読む	2003年4月	2004年2月	10	18時	19時30分	平均37名(男女)
中欧三都市物語	2003年5月28日	2003年5月30日	3	18時30分	20時	のべ374名(男女)
欧羅巴—近代日本からの眼差し	2003年11月5日	2003年11月7日	3	18時30分	20時	のべ203名(男女)
懐徳堂アーカイブ講座	2003年11月28日	2003年11月28日	1	13時	17時	60名(男女)

平成16年度 文学研究科・文学部

公開講座テーマ名	開催期間 (開始年月日)	開催期間 (終了年月日)	講義回数	開講時間帯 (開始時間)	開講時間帯 (終了時間)	受講者人数(男女)
懐徳堂春季講座「生のかたち死のかたち」	2004年5月25日	2004年5月28日	4	18時30分	21時30分	のべ183名(男女)
懐徳堂秋期講座「日本語のおもいとすがた」	2004年10月26日	2004年10月28日	3	18時30分	20時	のべ146名(男女)
懐徳堂古典講座「樋口一葉を読む」	2004年5月	2005年2月	10	18時	19時30分	平均18名(男女)
懐徳堂古典講座「西郷隆盛を読む」	2004年5月	2005年2月	10	18時	19時30分	平均19名(男女)
懐徳堂古典講座「ラフカディオ・ハーンを読む」	2004年5月	2005年2月	10	18時	19時30分	平均21名(男女)
懐徳堂古典講座「仏教の原典を読む」	2004年5月	2005年2月	10	18時	19時30分	平均24名(男女)
懐徳堂古典講座「ミケランジェロを読む」	2004年5月	2005年2月	10	18時	19時30分	平均37名(男女)
懐徳堂古典講座「山片蟠桃を読む」	2004年5月	2005年2月	10	18時	19時30分	平均33名(男女)
懐徳堂古典講座「論語を読む」	2004年5月	2005年2月	10	18時	19時30分	平均86名(男女)
公開フェスタ「日本文学の中の漢字の文学」	2004年11月24日	2004年11月24日	1	18時30分	20時	153名(男女)
懐徳堂アーカイブ講座(第2)	2004年9月23日	2004年9月23日	3	13時30分	15時30分	40名(男女)
第3回懐徳堂特別講演会「師と弟子」	2004年11月9日	2004年11月9日	1	15時	16時30分	100名(男女)

3-1-6 企業等外部に対する技術研修実施状況

平成14年度 文学研究科

実施の有無	研修テーマ	受講者人数
有	川西市勝福寺古墳発掘調査現地指導	20
有	峰山町赤坂今井墳丘墓発掘調査現地指導	20
有	大垣市昼飯大塚古墳環境整備事業現地指導	15
有	埋蔵文化財職員一般研修(奈良文化財研究所にて)	20

平成15年度 文学研究科

実施の有無	研修テーマ	受講者人数
有	川西市勝福寺古墳発掘調査現地指導	20
有	峰山町赤坂今井墳丘墓発掘調査現地指導	20
有	埋蔵文化財職員一般研修(奈良文化財研究所にて)	18

平成16年度 文学研究科・文学部(音楽学・演劇学・考古学)

実施の有無	研修テーマ	受講者人数
有	音楽関係のメディアにおける企画と実務及び劇場における制作実務	6
有	埋蔵文化財発掘技術者専門研修(奈良文化財研究所にて)	10

3-1-7 企業を対象とした懇談会・交流会の開催状況

平成14年度 文学研究科

実施の有無	開催数	参加企業数	参加者数
無	0	0	0

平成15年度 文学研究科

実施の有無	開催数	参加企業数	参加者数
有	1	1	10

平成16年度 文学研究科・文学部

実施の有無	開催数	参加企業数	参加者数
有(第2回懐徳堂法人講座)	1	1	100

3-1-8 国、自治体からの委託調査の受入状況

平成14年度 文学研究科

依頼先名称	調査名	受入件数
荒尾市(熊本県)	市史編纂事業	1
茨木市長	茨木市史編さん委員会委員	1
大阪狭山市教育委員会	『大阪狭山市史』の編纂に関する指導、および執筆・編集	1
京都国立博物館長	彫刻に関する調査研究(客員研究員)	1
京都国立博物館	社寺什宝調査	3
京都市長	京都市内美術工芸品(彫刻)の詳細調査	1
京都市文化財保護課	社寺調査	7
三田市総務部総務課市史編纂担当	近代史料編纂のための史料調査	1
島根県教育庁埋蔵文化財調査センター	史跡出雲国府跡の発掘調査指導	1
太宰府市	太宰府市史調査研究	1
豊中市	『新修豊中市史』編纂および編纂に係る歴史資料の調査・収集・研究等	1
豊中市長	豊中市史編さん委員会美術部門委員会委員	1
豊中市	豊中市史社寺調査	3
東広島市教育委員会	史跡安芸国分寺跡保存整備事業に係る史跡安芸国分寺跡の調査指導	1
枚方市	枚方市史の編纂および枚方市の歴史に関する資料の収集・整備	1
夜久野町教育委員会	『夜久野町史』編纂の近世部分に係る資料の収集・調査・研究等	1
柳川市(福岡県)	柳川市史の編さんに関する調査・助言等	1
山口県立美術館	収集審査会	2
総件数		29

平成15年度 文学研究科

依頼先名称	調査名	受入件数
荒尾市(熊本県)	市史編纂事業	1
茨木市長	茨木市域美術工芸基本調査委託	1
茨木市長	茨木市史編さん委員会委員	1
大阪狭山市教育委員会	『大阪狭山市史』の編纂に関する指導、および執筆・編集	1
京都国立博物館長	彫刻に関する調査研究(客員研究員)	1
京都国立博物館	社寺什宝調査	2
京都府天田郡夜久野町教育委員会	『夜久野町史』執筆のための史料調査	1
京都市	痴呆介護に関する研究	1
京都市長	京都市内美術工芸品(彫刻)の詳細調査	1
京都市文化財保護課	社寺調査	3
太宰府市	太宰府市史調査研究	1
豊中市	『新修豊中市史』編纂および編纂に係る歴史資料の調査・収集・研究等	1
豊中市(大阪府)	市史編纂事業	1
豊中市長	豊中市史編さん委員会美術部門委員会委員	1
豊中市	豊中市史社寺調査	5
兵庫県三田市総務部総務課市史編纂担当	『三田市史』近代史料編纂のための史料調査	1
枚方市	枚方市史の編纂および枚方市の歴史に関する資料の収集・整備	1
美浜町長	『わかさ美浜町誌』3『拝む・描く』執筆者	1
都城市教育委員会	都城市横市地区遺跡発掘調査出土品に関する資料調査	1
メトロポリタン美術館	作品調査	4
夜久野町教育委員会	『夜久野町史』編纂の近世部分に係る資料の収集・調査・研究等	1
柳川市(福岡県)	柳川市史の編さんに関する調査・助言等	1
岐阜県立美術館	作品調査	1
山口県立美術館	収集審査会	2
総件数		35

平成16年度 文学研究科

依頼先名称	調査名	受入 件数
文化庁	全国の博物館・美術館等における収蔵作品デジタル・アーカイブ化に関する調査・研究事業「懐徳堂文庫」貴重資料のデジタル・アーカイブ化に関する調査研究	1
兵庫県福崎町旧大庄屋三木家	三木家所蔵資料の調査・目録作成	1
荒尾市(熊本県)	市史編纂事業	1
宇土市(熊本県)	市史編纂事業	1
大阪狭山市教育委員会	『大阪狭山市史』の編纂に関する指導、および執筆・編集	1
豊中市	『新修豊中市史』編纂および編纂に係る歴史資料の調査・収集・研究等	1
枚方市	枚方市史の編纂および枚方市の歴史に関する資料の収集・整備	1
夜久野町教育委員会	『夜久野町史』編纂の近世部分に係る資料の収集・調査・研究等	1
三田市総務部総務課市史編纂担当	『三田市史』近代資料篇の執筆および編纂に係る歴史資料の調査・収集・	1
川西市教育委員会	勝福寺古墳の発掘調査指導	1
京丹後市教育委員会	京丹後市史跡整備検討委員会委員	1
精華町教育委員会	鞍岡山3号墳の発掘調査指導	1
大垣市教育委員会	屋飯大塚古墳調査整備委員会	1
文化庁	埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会委員	1
都城市教育委員会	横市地区遺跡発掘調査出土品に関する指導、資料調査	1
亀岡市教育委員会	篠窯業生産遺跡調査ならびに保存活用に関する協議	1
愛知県教育サービスセンター	朝日遺跡から出土した石製品の整理・分析に関する指導	2
鳥取県教育委員会	妻木晩田遺跡出土遺物の整理作業の指導	1
柳川市(福岡県)	柳川市史専門研究員	1
文化庁	平成16年度芸術祭審査員長(演劇部門)	1
大阪市21世紀協会	平成16年度大阪文化祭審査員(伝統芸能部門)	1
山口県立美術館	収集審査会委員	1
兵庫県氷上市	文化財保護審議会委員	1
豊中市	豊中市史編纂委員会美術部門委員会	1
神戸市	神戸市博物館協議会委員	1
京都国立博物館	近世絵画に関する調査研究(客員研究員)	1
京都国立博物館	社寺什宝調査	1
京都市	京都市内美術工芸品(近世絵画)の詳細調査	1
太宰府市	太宰府市史調査研究	1
京都国立博物館長	彫刻に関する調査研究(客員研究員)	1
美浜町長	「わかさ美浜町誌」3『拜む・描く』執筆委員	1
豊中市長	豊中市史編纂委員会美術部門委員会委員	1
茨木市長	茨木市史編纂委員会委員	1
総件数		34

3-1-9 小中高への教員派遣状況

平成14年度 文学研究科

派遣先	派遣人数
大阪府立福井高校	2
大阪市立扇町総合高等学校	1
神奈川県立横浜翠嵐高校	1
兵庫県立北摂三田高校	1
総数	5

平成15年度 文学研究科

派遣先	派遣人数
大阪府立福井高校	2
大阪府立三国ヶ丘高校	1
総数	3

平成16年度 文学研究科

派遣先	派遣人数
帝塚山小学校	1
大阪府立池田高等学校	1
洛星高等学校	12
福井県立武生高等学校	1
総数	15

3-1-10 学内施設等開放状況

平成14年度 文学研究科

開放施設名	開放時期	公開時間	利用状況	利用者の構成
文法経本館	常時	H14.4.1～H15.3.31	懐徳堂記念会の事務室として使用	事務員2名
文法経講義棟	不定期	H14.6.9	国家公務員採用試験	受験者1000名
文法経講義棟	不定期	H14.7.7	国家公務員採用試験	受験者1000名
文法経講義棟	不定期	H14.7.14	国家公務員採用試験	受験者1000名

※アンケートを実施している場合は、集計結果を提出願います。(電子データ、冊子等)

平成15年度 文学研究科

開放施設名	開放時期	公開時間	利用状況	利用者の構成
文法経本館	常時	H15.4.1～H16.3.31	懐徳堂記念会の事務室として使用	事務員2名
文法経講義棟	不定期	H15.5.5	国家公務員採用試験	受験者746名
文法経講義棟	不定期	H15.5.18	郵政総合職採用試験	受験者1100名
文法経講義棟	不定期	H15.6.1	国家公務員採用試験	受験者709名
文法経講義棟	不定期	H15.10.5	電気工事士試験	受験者1000名
文法経講義棟	不定期	H15.11.22	東洋音楽学会	学会員40名
文法経講義棟	不定期	H15.12.7	電気工事士試験	受験者1000名
文法経講義棟	不定期	H15.12.13	国語語彙史研究会	研究会員80名
文法経講義棟	不定期	H16.2.15	郵貯・簡保FA検定試験	受験者1000名

※アンケートを実施している場合は、集計結果を提出願います。(電子データ、冊子等)

平成16年度 文学研究科・文学部

開放施設名	開放時期	公開時間	利用状況	利用者の構成
文法経本館	常時	H16.4.1～H17.3.31	懐徳堂記念会の事務室として使用	事務員2名
文法経講義棟	不定期	H16.6.20	情報リテラシー認定試験	受験者635名
文法経講義棟	不定期	H16.8.22	第3種電気主任技術者試験	受験者1000名
文法経講義棟	不定期	H16.11.20	言語文化教育学会研究大会	学会員100名

3-1-11 学生の学会発表件数

平成14年度
文学部

学部名	学科名	発表件数(学生が発表者となったもの)	
		国内	国外
文学部	人文学科	0	0

文学研究科

研究科名	課程	専攻名	発表件数(学生が発表者となったもの)	
			国内	国外
文学研究科	前期	文化形態論	22	0
	後期		61	2
	前期	文化表現論	17	1
	後期		69	7
総計			169	10

平成15年度
文学部

学部名	学科名	発表件数(学生が発表者となったもの)	
		国内	国外
文学部	人文学科	7	0

文学研究科

研究科名	課程	専攻名	発表件数(学生が発表者となったもの)	
			国内	国外
文学研究科	前期	文化形態論	19	1
	後期		56	2
	前期	文化表現論	11	2
	後期		86	9
総計			172	14

平成16年度
文学部

学部名	学科名	発表件数(学生が発表者となったもの)	
		国内	国外
文学部	人文学科	1	0

文学研究科

研究科名	課程	専攻名	発表件数(学生が発表者となったもの)	
			国内	国外
文学研究科	前期	文化形態論	9	0
		文化表現論	15	0
	後期	文化形態論	77	3
		文化表現論	95	17
総計			196	20

3-1-12 学生が著者となった学術雑誌掲載論文数

平成14年度

文学部

学部・研究科名	学科・専攻名	筆頭・共著の別	論文数
文学部	人文学科		0

文学研究科

学部・研究科名	前期	学科・専攻名	筆頭・共著の別	論文数
文学研究科	前期	文化形態論	筆頭	1
			筆頭	51
			共著	1
	後期	文化形態論	単著	30
			筆頭	1
			単著	10
	前期	文化表現論	筆頭	15
			共著	4
			単著	71
	後期	文化表現論		

平成15年度

文学部

学部・研究科名	学科・専攻名	筆頭・共著の別	論文数
文学部	人文学科	単著	2
		筆頭	1

文学研究科

学部・研究科名	前期	学科・専攻名	筆頭・共著の別	論文数
文学研究科	前期	文化形態論	筆頭	4
			共著	1
			単著	1
	後期	文化形態論	筆頭	43
			共著	3
			単著	29
	前期	文化表現論	筆頭	1
			共著	3
			単著	8
	後期	文化表現論	筆頭	28
			共著	19
			単著	74

平成16年度

文学部

学部名	学科名	筆頭・共著の別	論文数
文学部	人文学科		0

文学研究科

研究科名	課程	専攻名	筆頭・共著の別	論文数
文学研究科	前期	文化形態論	筆頭	5
			共著	2
			単著	4
		文化表現論	筆頭	3
			共著	0
			単著	0
	後期	文化形態論	筆頭	47
			共著	1
			単著	12
		文化表現論	筆頭	41
			共著	9
			単著	73
		共編著	1	

3-1-13 学生の海外派遣の状況(非常勤職員として雇用されているものも含む)

平成14年度 文学研究科・文学部

学部・研究科名	課程	学科・専攻名	経費別派遣件数		
			科学研究費補助金	委任経理金	その他
文学部		人文学科	0	0	0
文学研究科	前期	文化形態論専攻博士前期課程	0	0	2
文学研究科	後期	文化形態論専攻博士後期課程	0	0	5
文学研究科	前期	文化表現論専攻博士前期課程	0	0	0
文学研究科	後期	文化表現論専攻博士後期課程	5	0	2

平成15年度 文学研究科・文学部

学部・研究科名	課程	学科・専攻名	経費別派遣件数		
			科学研究費補助金	委任経理金	その他
文学部		人文学科	0	0	0
文学研究科	前期	文化形態論専攻博士前期課程	0	0	0
文学研究科	後期	文化形態論専攻博士後期課程	6	0	2
文学研究科	前期	文化表現論専攻博士前期課程	0	0	0
文学研究科	後期	文化表現論専攻博士後期課程	5	0	4

平成16年度 文学研究科・文学部

学部・研究科名	課程	学科・専攻名	経費別派遣件数		
			科学研究費補助金	委任経理金	その他
文学部		人文学科	0	0	0
文学研究科	前期	文化形態論	0	0	0
		文化表現論	4	0	0
	後期	文化形態論	0	0	0
		文化表現論	3	0	0

3-1-14 学生の研究助成金獲得状況(学生が代表者となっているもの)

平成14年度

文学部

学部・研究科名	学科名	助成団体名	助成金額
文学部	人文学科	なし	

文学研究科

学部・研究科名	課程	学科・専攻名	助成団体名	助成金額
文学研究科	前期	文化形態論	なし	
			川崎医療福祉大学医療福祉総合研究センター	¥1,847,000
	後期	文化形態論	Gobierno de Navarra Departamento de Educacion y CulturaによるXXIX Semana de Estudios Medievalesの奨学金	約200ユーロ
			日本学術振興会	¥4,400,000
	前期	文化表現論	ロータリー財団マルチイヤー国際親善奨学金	12,000ユーロ
	後期	文化表現論	鹿島美術財団助成金	¥800,000
			ヘンリー・ルース財団助成金	3,000ドル
			メトロポリタン東洋美術研究センター東洋美術研究振興基金研究助成	¥500,000
日本学術振興会			¥600,000	

平成15年度

文学部

学部・研究科名	学科名	助成団体名	助成金額
文学部	人文学科	なし	

文学研究科

学部・研究科名	課程	学科・専攻名	助成団体名	助成金額
文学研究科	前期	文化形態論	豪日交流基金	7,900A \$ (610,591円)
			(財)世界人権問題研究センター	¥200,000
	後期	文化形態論	Isobel Thornley Fellowship	6600ポンド
			Institute of Historical Research, University of London	¥1,000,000
			富士ゼロックス小林節太郎基金(小林フェローシップ)	¥3,000,000
	前期	文化表現論	ロータリー財団マルチイヤー国際親善奨学金	12,000ユーロ
	後期	文化表現論	フランス政府	9,000ユーロ
			財団法人花王芸術・科学財団	¥200,000
			イェール大学東アジア研究学科助成金	6,500ドル
			ロータリー財団マルチイヤー国際親善奨学金	9,760ユーロ
メトロポリタン東洋美術研究センター東洋美術研究振興基金研究助成			¥400,000	
日本学術振興会	¥500,000			

平成16年度

文学部

学部名	学科名	助成団体名	助成金額
文学部	人文学科	なし	

文学研究科

研究科名	課程	専攻名	助成団体名	助成金額
文学研究科	前期	文化形態論	なし	
		文化表現論	なし	
	後期	文化形態論	日本学術振興会	¥4,100,000(4人)
			松下国際財団松下アジアスカラシップ	¥1,680,000
			文部科学省科学研究費補助金特別研究員奨励費	¥900,000
			高梨学術奨励基金	¥400,000
		文化表現論	日本学術振興会	¥1,500,000(2人)
	ロータリー財団マルチイヤー国際親善奨学金	\$25,000		
吉田育英会	¥2,700,000			

3-1-15 博士論文公開審査(公聴会)の実施状況

平成14年度 文学研究科

専攻名	審査の実施の有無	開催回数	審査件数
文化形態論	有	14	14
文化表現論	有	21	21
総計		35	35

平成15年度 文学研究科

専攻名	審査の実施の有無	開催回数	審査件数
文化形態論	有	18	18
文化表現論	有	26	26
総計		44	44

平成16年度 文学研究科

専攻名	審査の実施の有無	開催回数	審査件数	備考
文化形態論	有	9	9	課程博士8、論文博士1
文化表現論	有	19	19	課程博士18、論文博士1
総計		28	28	課程博士26、論文博士2

3-1-16 学生の出張状況(国内)(非常勤職員として雇用されているものも含む)

平成14年度 文学研究科・文学部

学部・研究科名	課程	学科・専攻名	経費別出張件数		
			科研	委任経理金	その他
文学部		人文学科	0	0	0
文学研究科	前期	文化形態論	1	0	0
文学研究科		文化表現論	0	0	2
文学研究科	後期	文化形態論	6	0	6
文学研究科		文化表現論	6	0	0

平成15年度 文学研究科・文学部

学部・研究科名	課程	学科・専攻名	経費別出張件数		
			科研	委任経理金	その他
文学部		人文学科	1	0	0
文学研究科	前期	文化形態論	4	0	4
文学研究科		文化表現論	0	0	0
文学研究科	後期	文化形態論	5	0	7
文学研究科		文化表現論	5	0	1

平成16年度 文学研究科・文学部

学部・研究科名	課程	学科・専攻名	経費別出張件数		
			科研	委任経理金	その他
文学部		人文学科	0	0	0
文学研究科	前期	文化形態論	4	0	1
		文化表現論	1	0	0
	後期	文化形態論	7	0	0
		文化表現論	5	0	0

3-1-17 学生の受賞状況

平成14年度 文学研究科・文学部

学科・専攻名	賞の名称	課程別	受賞人数
人文学科	なし	学部	0
文化形態論	なし	前期	0
文化形態論	なし	後期	0
文化表現論	なし	前期	0
文化表現論	第九回鹿島美術財団賞	後期	1
文化表現論	社会言語科学会 第3回徳川宗賢賞	後期	1

平成15年度 文学研究科・文学部

学科・専攻名	賞の名称	課程別	受賞人数
人文学科	なし	学部	0
文化形態論	The 2002-2003 Australia-Japan Foundation Sir Neil Currie Memorial Australian Studies Award(豪日交流基金サー・ニール・カリー記念オーストラリア研究助成プログラム)	前期	1
文化形態論	第2回アジア太平洋研究賞佳作	後期	1
文化表現論	なし	前期	
文化表現論	舞踏学会研究奨励賞	後期	1

平成16年度 文学研究科・文学部

学科・専攻名	賞の名称	課程別	受賞人数
人文学科	なし	学部	0
文化形態論	なし	前期	0
文化形態論	なし	後期	0
文化表現論	なし	前期	0
文化表現論	なし	後期	0

3-2 教育・研究の実施体制とその方法

文学研究科・文学部の教育・研究組織としての単位はそれぞれ「専門分野」と「専修」である。現在、28の専門分野と20の専修があり、伝統的な哲学、史学、文学のみならず、日本学、芸術学という新しい学問分野を含む。それぞれの名称と構成する教員は、評価用資料『大阪大学大学院文学研究科紹介』の組織表(p.6-7)、同『大阪大学文学部』(p.5)に示す通りである。

評価用資料『大阪大学大学院文学研究科紹介』(p.6-7)

評価用資料『大阪大学文学部』(p.5)

文学研究科・文学部での教育と研究の方針は明確に定めており、いわゆるアドミッションポリシーとして公開している。それぞれの内容と掲載場所については、評価用添付資料(3-2-1)と同(3-2-2)に示している。また、入学希望者に対して大阪大学が主催する「大阪大学説明会」と文学部が独自に行う「文学部見学会」の開催状況は、評価用添付資料(3-2-3)の通りである。

3-2-1 「アドミッションポリシー」

3-2-2 「受入方針公表状況」

3-2-3 「部局における入試等の説明会開催状況」

各専門分野の研究・教育に関しては、それぞれの専門分野に閉塞するのを避けるために、共同研究や横断的な教育プログラムが構成されている。現在、本研究科内では3件の共同研究が進行中であり、詳細については評価用添付資料(3-2-4)を、また、21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」については同(3-2-5)を参照のこと。その他、他大学との教育交流や人文学の社会的な連携を進めるために学生の社会におけるインターンシップの推進にも取り組んでいる。これらに関しては、評価用添付資料(3-2-6)、同(3-2-7)を参照のこと。

3-2-4 「文学研究科共同研究」

3-2-5 「21世紀COEプログラム『インターフェイスの人文学』について」

3-2-6 「国内における部局間教育交流協定一覧」

3-2-7 「インターンシップ実施状況」

文学研究科・文学部における教育の編成状況は、評価用資料『シラバス』のほか、評価用添付資料(3-2-8)、同(3-2-9)を参照のこと。

評価用資料『シラバス』

3-2-8 「研究科の開講科目数及び授業の種類」

3-2-9 「学部の専門科目開講数及び授業の種類」

また、研究・教育についても改善に努めている。入学試験の制度や内容面の見直しは、教育支援室の入試部門と教授会における入試反省会で行っている。また、教員の教育意識とその能力の向上を図るためにファカルティ・デベロップメントにも取り組んでいる。これらの評価用添付資料は以下の通りである。

3-2-10 「入試改善状況」

3-2-11 「ファカルティ・デベロップメントの取り組み」

これらの教育・研究活動について、自己評価していくことが要請されている。この動きを反映して、平成16年度より評価・広報室を開室して、『年報』の刊行や授業評価アンケートの実施、また外部評価などを行っている。これらの活動については、以下の評価用添付資料を参照のこと。

- 3-2-12 「教員による担当授業評価状況」
- 3-2-13 「教育活動評価組織・改善組織の設置状況」
- 3-2-14 「教育に対する自己評価の実施状況」
- 3-2-15 「研究に対する自己評価実施状況」
- 3-2-16 「研究に対する外部評価実施状況」
- 3-2-17 「研究の質の改善のための検討状況」
- 3-2-18 「社会貢献を見直す体制の整備状況」

3-2-1 アドミッションポリシー

平成14年度～平成16年度

文学部

アドミッションポリシー
<p>文学部の学問とは、人間の営為を考える学問です。つまり、人間が過去において何をしてきたかを探り、現在何をしているかを明らかにし、さらにそれにもとづいて、将来何をすべきかを考える学問です。</p> <p>文学部は時代の求める人材を養成し、社会に送り出します。それは、人間と社会のあり方に深い関心を持ち、われわれの未来を論理と感性で切り開いていく人材です。</p> <p>文学部の対象とする分野は広い領域にまたがり、また多様な専門分野に分かれています。しかし、積極的な知的姿勢を重視するという原則はどの専門分野にも共通しています。つまり文学部は、単なる知識の習得に満足するのではなく、考えるプロセスとその論理的道筋を大切にしているのです。</p> <p>文学部は、こうした研究と教育の方針にもとづいて、次のような人を求めています。</p> <ul style="list-style-type: none">・一つの答えに満足せず、絶えず別の答えはないかと模索する人・独自の感性を育み、人間のあり方を自分の言葉で表現したいと思っている人・社会の変遷を、巨視的な観点から理解しようとする人・習得した知識を、智慧にまで高める思考力をもとうとする人・日本及び外国の文化と社会を、多面的・総合的に把握しようとする人

文学研究科

アドミッションポリシー
<p>本文学研究科は、人文学(humanities)すなわち人間と人間が生み出すさまざまな文化事象に関する研究を行っている。近代社会が大きな転換点を迎えている今日、人間と人間が生み出す文化事象に対する根本的考究は必要不可欠であり、社会のなかで人文学が果たす役割は益々重要なものとなっている。そこで、本研究科では次のような人材を求めている。</p> <ul style="list-style-type: none">・専門研究者をめざす学生・社会人で、各専門分野の研究を遂行するのに適した高度な知識・学力を有する者。また、各専門分野の実証研究を踏まえつつより多角的・総合的視点から研究を遂行するのに適した幅広い問題意識を有する者。・高度な専門知識を備えた職業人をめざす学生・社会人で、人文学に対して強い問題意識を持ち、専門的な研究を遂行するのに適した能力を有する者。また、生涯学習の意欲を持ち、多様な文化事象に関して深く研究しようとする熱意を持つ者。

3-2-2 受入方針公表状況

平成14年度～平成16年度

文学部

公表媒体名(要覧、HP)
文学部ホームページ、『大阪大学文学部紹介』、大阪大学入学者選抜要項、大阪大学学生募集要項

文学研究科

公表媒体名(要覧、HP)
文学研究科ホームページ、『大阪大学大学院文学研究科紹介』、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程学生募集要項、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程外国人留学生募集要項、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程学生募集要項(社会人特別選抜試験)、大阪大学大学院文学研究科後期課程学生募集要項、大阪大学大学院文学研究科後期課程外国人留学生募集要項、大阪大学大学院文学研究科後期課程学生募集要項(社会人特別選抜試験)

3-2-3 部局における入試等の説明会開催状況

平成14年度 文学部

学科・専攻名	開催日時	参加者数
人文学科	大阪大学説明会 2002/8/26 13:00-17:00	354
人文学科	文学部見学会 2002/7/24 13:30-17:00	36

平成15年度 文学部

学科・専攻名	開催日時	参加者数
人文学科	大阪大学説明会 2003/8/25 13:00-17:00	476
人文学科	文学部見学会 2003/7/25 10:00-13:30	28

平成16年度 文学部

学科名	開催日時	参加者数
人文学科	大阪大学説明会 2004/8/23 13:00-17:00	649
人文学科	文学部見学会 2004/7/28 13:00-16:30	51

3-2-4 文学研究科共同研究

○平成14年度には、文学研究科予算により、共同研究の募集を行い、下記3件が採択された。

I. 懐徳堂文庫貴重資料の総合調査と電子情報化の推進

■研究組織

研究代表者	湯浅邦弘（大阪大学大学院文学研究科教授、中国哲学）
研究分担者	寺門日出男（都留文科大学教授、日本漢文学）
	竹田健二（島根大学助教授、中国哲学）
	藤居岳人（阿南工業高等専門学校助教授、日本漢文学）
	辛 賢（大阪大学大学院文学研究科専任講師、中国哲学）
	前川正名（大阪大学大学院文学研究科助手代理、中国哲学）
	池田光子（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程学生、懐徳堂研究）
	上野洋子（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程学生、中国哲学）

■期間

平成16年8月～平成17年3月

■予算

700,000円（執行額は704,528円）

■活動

平成13年の大阪大学創立70周年記念事業として公開された懐徳堂デジタルコンテンツは、その後、平成13～15年度の科学研究費補助金の交付を受け、その拡充が進められてきた。平成16年初頭には、その成果が「WEB懐徳堂 <http://kaitokudo.jp/>」として公開された。しかし、資料調査の継続および関係デジタルコンテンツの運営等は、依然として大きな問題となっていた。

そこで、本共同研究により、前年度までの成果を継承・発展させ、具体的には次のような活動を行った。

- ① 懐徳堂文庫貴重資料の内、未整理分について総合調査を進めた。
- ② その成果を「WEB懐徳堂」内のデータベースに反映させた。
- ③ 「WEB懐徳堂」の運営システムを確立し、内容の更新・充実に努めた。
- ④ 総合調査・解題執筆の成果を『懐徳堂文庫の研究2005』として刊行した。

■成果

共同研究の成果刊行物として、『懐徳堂文庫の研究2005』（文学研究科共同研究報告書、カラー口絵4頁、本文全134頁、2005年2月）を刊行した。

Ⅱ. 小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探究

■研究組織

研究代表者 荒木 浩 大阪大学大学院文学研究科・助教授（日本文学）
研究分担者 後藤 昭雄 大阪大学大学院文学研究科・教授（日本漢文学）
平 雅行 大阪大学大学院文学研究科・教授（日本史）
藤岡 穰 大阪大学大学院文学研究科・助教授（日本美術史）
海野 圭介 大阪大学大学院文学研究科・助手（日本文学）
中山 一麿 大阪大学大学院文学研究科・研究生（日本文学）
上島 享 京都府立大学・助教授（日本史）
柴崎 照和 高野山大学・講師（非）（仏教学）

■期間 平成16年8月～平成17年3月

■予算 700,000円（執行額は983,710円）

■活動

本研究の趣旨は、これまで継続してきた小野随心院の聖教調査を基軸に、

1、資料を翻刻や影印の形で公刊し、また文献の持つ意味や寺院のネットワークについて、研究メンバー各自が論文等の形で研究し、論文化すること。

2、その際、研究方法の模索として、研究会各メンバーがそれぞれのジャンルで幅広い文献・資料研究に携わってきた蓄積を起点に、本共同研究の場において、より複雑で有意義な様々な研究交流を図り、また既展開の様々な共同研究と相互進展していくことを目指すこと。

3、文献調査を軸に進める研究会と、別に発表会を行い、従来の学部や大学院教育ではなかなかない他分野の学生達の参加を広く呼びかける。この研究会の場を通じてそれら学生が研究交流し、また相互に学ぶことで、大きな教育成果を期待すること。

というもので、具体的には、以下の活動を行った。

1、研究会等の開催

1-1、随心院に於いて、文献調査・研究会を22日行った。

1-2、研究発表会を2回開催した。

・第一回、平成16年10月30日午後二時、於文学部第一会議室。発表者：中山一麿、海野圭介、荒木 浩

・第二回、平成17年1月17日午後二時、於文学部第一会議室発表者：伊藤聡、柴崎照和、上島享

■研究成果報告書の刊行

平成17年度3月、『大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書 小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探究』（荒木浩編〔荒木浩責任編集、海野圭介・中山一麿編集、中川真弓編集協力〕）A5判二段組み、327ページを刊行した（2部構成、論文及び資料紹介などで構成。本共同研究活動記録を付す）以上。

※ 本研究会活動の詳細は、同上成果報告書参照。

Ⅲ. 国際フォーラム「台湾における日本文学・日本語学の新たな可能性—国際化の中の日本文学・日本語学」

■研究組織

研究代表者 金水 敏（大阪大学大学院文学研究科教授：国語学）
研究分担者 岡島昭浩（大阪大学大学院文学研究科助教授：国語学）
鄭 聖 汝（大阪大学大学院文学研究科講師：言語学）
是澤範三（長榮大学助理教授：応用日語学）
海野圭介（大阪大学大学院文学研究科助手：日本文学）
岡崎友子（大阪大学大学院文学研究科助手：国語学）
真鍋昌賢（大阪大学大学院文学研究科助手：日本学）
加藤 聡（大阪大学大学院文学研究科非常勤講師：中国文学）
仁木夏実（大谷大学助手：日本漢文学）
衣畑智秀（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程：国語学）

■期間 平成 16 年 9 月～平成 17 月 3 月

■予算 650,000 円（執行額は 644,734 円）

■活動

従来、日本文学・国語学といった日本を対象とした伝統的な研究領域は、活動と交流が国内にはほぼ限定される傾向にあり、在外研究の導入や日本における成果の海外への発信といった在外研究者を念頭に置いた活動は希薄であった。

本共同研究は、在外研究者との積極的な交流促進を第一歩として、そこに新たなネットワークの構築をおこない、国内成果の発信と在外研究の視点を取り込む新たな視座の獲得を目的として、国内における個別の研究会及び台湾（長榮大學）でのシンポジウムを開催した。具体的な活動は以下の通りである。

1) 国内研究会

第 1 回 日時：2004 年 8 月 23 日（月）
報告者：是澤 範三氏（長榮大學〔台湾〕助理教授）
講演題目：台湾における国語学（日本語学）研究と教育の現状と展望
第 2 回 日時：2004 年 11 月 22 日（月）
報告者：金想容氏（大阪大学大学院言語文化研究科）
講演題目：ようこそ台湾劇場へ

2) 国際フォーラム

日時：2004 年 12 月 12 日（日）
会場：長榮大學日本研究所
講演：日本研究・アジア研究の新展開

—21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」を中心に—

報告：台湾における日本語学の研究状況	金水 敏（大阪大学大学院文学研究科教授）
台湾における日本文学の研究状況	是澤 範三（長榮大學助理教授）
台湾文学と日本文学の接点	李育娟（慈濟大學助理教授）
	廖秀娟（南台科技大學助理教授）

フォーラム：

Session A 漢字文化圏と〈古典〉

コーディネーター 岡島 昭浩

パネラー 仁木 夏実
海野 圭介
加藤 聰
平松 秀樹（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程：比較文学）

Session B 日本語学のフロンティア

コーディネーター 岡崎 友子
パネラー 金水 敏
鄭聖汝
陳姿菁（長榮大學助理教授：応用日語学）

また、各研究会、シンポジウムの開催にあたっては、参加メンバーの意見・情報の交換と共有の便を考え、事前にメーリングリストを作成し討論の場を設けた。

■成果

- 1) 2004年12月12日（日）に、長榮大学・第一教学ビル3階視聴中心に於いて、長榮大学との共催で国際フォーラムを開催した。その際、開催費用の一部として長榮大學から研究助成金を受け、また、財団法人 交流協会からは後援を受けた。
- 2) 本共同研究の成果と経験を受け、それを発展させる形で、2005年12月にチュラロンコーン大学（タイ）で研究集会の開催を予定している。

3-2-5 21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」について

平成 16 年度の主要な成果は次の通りである。

○報告書

- 『世界システムと海域アジア交通 2004 年度報告書』発行日：2005 年 2 月 28 日、責任編集：桃木至朗、編集：佐藤貴保
- 『言語の接触と混交—共生を生きる日本社会』発行日：2005 年 3 月 1 日、責任編集：津田葵／真田信治
- 『言語の接触と混交—国際シンポジウム〈多言語・多文化社会としての日本の現状と課題〉』発行日：2005 年 3 月 1 日、責任編集：津田葵
- 『言語の接触と混交—台湾残存日本語の談話データ』発行日：2005 年 3 月 1 日、責任編集：津田葵／真田信治
- 『「臨床と対話」研究グループ 2004 年度報告書 第 3 回対話シンポジウム報告書』発行日：2005 年 2 月 28 日、編集：稲葉一人／大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室
- 『日本、もうひとつの顔—大阪大学フォーラム 2004（於ストラスブール）報告書』発行日：2005 年 2 月 28 日、責任編集：金水敏

○イベント

また、多くの国際シンポジウム、フォーラム、講演会、ワークショップ、研究会等のイベントが開催された。以下に、ごく一部を紹介しておく。

- 研究開発室、その他
2004 年度「インターフェイスの人文学」ワークショップ 2004 年 12 月 20 日～21 日、場所：大阪大学中之島センター
「阪大フォーラム Le Japon, d'autres visages 日本、もうひとつの顔」（大阪大学と共催）2004 年 11 月 5 日～7 日、場所：マルク・ブロック大学（ストラスブール）
- トランスナショナリティ研究
「トランスナショナリティ研究セミナー」第 24 回～第 48 回
- モダニズムと中東欧の芸術・文化
「MCE（モダニズムと中東欧の芸術・文化）研究会」第 1 回～第 14 回
- 世界システムと海域アジア交通
「グローバルヒストリー・セミナー」第 2 回～第 8 回
「海域アジア史」例会、2004 年 5 月～2005 年 3 月
「第 2 回全国高等学校歴史教員研修会」2004 年 8 月 9 日～11 日、場所：大阪大学附属図書館
ワークショップ「海から見た東北アジア：東南アジアとの対話」2004 年 10 月 29 日～30 日、場所：メルパルク沖縄
「海域アジア史ワークショップ」2005 年 1 月 22 日、場所：大阪大学大学院文学研究科本館 2 F 第 1 会議室
- イメージとしての〈日本〉
「イメージとしての〈日本〉」研究部会 第 1 回～
「イメージとしての〈日本〉」研究ワークショップ第 4 回「資料としてのポピュラーカルチャー」2004 年 7 月 30 日、場所：大阪大学待兼山会館

「イメージとしての〈日本〉」若手研究者交流ワークショップ、2004年9月25日～26日、場所：大阪大学中之島センター

「イメージとしての〈日本〉」国際シンポジウム Imaging Japan: A Symposium、2005年3月4日～5日、場所：モナシュ大学(オーストラリア)

- 言語の接触と混交

第3回多言語社会研究大会、2005年1月21日～22日、場所：大阪市立大学梅田駅前サテライト

- 臨床と対話

「ヴァルデンフェルス教授講演会」2004年4月27日、場所：大阪大学待兼山会館

「死別の悲しみからの回復を助けるワークショップ」2004年9月19日、場所：大阪市立大学看護短期大学

第3回「対話シンポジウム@東京大学」2004年12月1日～2日、場所：東京大学医学部附属病院

第3回「対話シンポジウム@阪大中之島センター」2004年12月4日、場所：大阪大学中之島センター

COE 科目

COE 科目として、2004年度に、下記のような科目数の授業が提供された。

	博士前期課程	博士後期課程
文学研究科	11	19
人間科学研究科	11	15
言語文化研究科	4	2

○ニューズレター

平成16年度に2冊のニューズレターが発行された。

- 『Interface Humanities』 04号 2004年7月30日発行
特集「モノの人文学」
- 『Interface Humanities』 05号 2005年2月28日発行
特集「不安をかたどる」

3-2-6 国内における部局間教育交流協定一覧

平成14年度
文学部

締結校	協定名	締結年月日	適用年月日	締結終了日	授業料不徴収の有無	単位相互交換制度の有無	単位相互交換実績の有無	単位相互交換実績	受講者数	受講科目数
神戸大学文学部	大阪大学文学部と神戸大学文学部との間における教育交流に関する協定	平成13年1月12日	平成13年4月1日		有	有	有	派遣学生	2	5
								受入学生	1	1

平成14年度
文学研究科

締結校	協定名	締結年月日	適用年月日	締結終了日	授業料不徴収の有無	単位相互交換制度の有無	単位相互交換実績の有無	単位相互交換実績	受講者数	受講科目数
神戸大学大学院文学研究科	大阪大学大学院文学研究科(博士前期課程)と神戸大学大学院文学研究科(修士課程)との間における教育交流に関する協定	平成13年1月12日	平成13年4月1日		有	有	有	派遣学生	3	3
								受入学生	1	1
神戸大学大学院文化科学研究科	大阪大学大学院文学研究科(博士後期課程)と神戸大学大学院文化科学研究科(博士課程)との間における教育交流に関する協定	平成13年1月12日	平成13年4月1日		有	有	有	派遣学生	1	1
								受入学生	0	0
大阪外国語大学大学院言語社会研究科	大阪大学大学院文学研究科と大阪外国語大学大学院言語社会研究科との間における教育交流に関する協定	平成14年3月29日	平成14年4月1日		有	有	有	派遣学生	1	1
								受入学生	7	12

平成15年度
文学部

締結校	協定名	締結年月日	適用年月日	締結終了日	授業料不徴収の有無	単位相互交換制度の有無	単位相互交換実績の有無	単位相互交換実績	受講者数	受講科目数
神戸大学文学部	大阪大学文学部と神戸大学文学部との間における教育交流に関する協定	平成13年1月12日	平成13年4月1日		有	有	有	派遣学生	1	2
								受入学生	3	5

平成15年度
文学研究科

締結校	協定名	締結年月日	適用年月日	締結終了日	授業料不徴収の有無	単位相互交換制度の有無	単位相互交換実績の有無	単位相互交換実績	受講者数	受講科目数
神戸大学大学院 文学研究科	大阪大学大学院文学研究科(博士前期課程)と神戸大学大学院文学研究科(修士課程)との間における教育交流に関する協定	平成13年 1月12日	平成13年 4月1日		有	有	有	派遣学生	1	1
								受入学生	1	1
神戸大学大学院 文化科学研究科	大阪大学大学院文学研究科(博士後期課程)と神戸大学大学院文化科学研究科(博士課程)との間における教育交流に関する協定	平成13年 1月12日	平成13年 4月1日		有	有	有	派遣学生	0	0
								受入学生	2	3
大阪外国語 大学大学院 言語社会研究科	大阪大学大学院文学研究科と大阪外国語大学大学院言語社会研究科との間における教育交流に関する協定	平成14年 3月29日	平成14年 4月1日		有	有	有	派遣学生	2	3
								受入学生	2	2

平成16年度
文学部

締結校	協定名	締結年月日	適用年月日	締結終了日	授業料不徴収の有無	単位相互交換制度の有無	単位相互交換実績の有無	単位相互交換実績	受講者数	受講科目数
神戸大学 文学部	大阪大学文学部と神戸大学文学部との間における教育交流に関する協定	平成13年 1月12日	平成13年 4月1日		有	有	有	派遣学生	0	0
								受入学生	3	4

平成16年度
文学研究科

締結校	協定名	締結年月日	適用年月日	締結終了日	授業料不徴収の有無	単位相互交換制度の有無	単位相互交換実績の有無	単位相互交換実績	受講者数	受講科目数
神戸大学大学院 文学研究科	大阪大学大学院文学研究科(博士前期課程)と神戸大学大学院文学研究科(修士課程)との間における教育交流に関する協定	平成13年 1月12日	平成13年 4月1日		有	有	有	派遣学生	0	0
								受入学生	3	3
神戸大学大学院 文化科学研究科	大阪大学大学院文学研究科(博士後期課程)と神戸大学大学院文化科学研究科(博士課程)との間における教育交流に関する協定	平成13年 1月12日	平成13年 4月1日		有	有	有	派遣学生	0	0
								受入学生	0	0
大阪外国語 大学大学院 言語社会研究科	大阪大学大学院文学研究科と大阪外国語大学大学院言語社会研究科との間における教育交流に関する協定	平成14年 3月29日	平成14年 4月1日		有	有	有	派遣学生	0	0
								受入学生	8	14

3-2-7 インターンシップ実施状況

平成14年度

文学部

学科・専攻名	派遣企業名	参加者数
人文学科	なし	0

文学研究科

学科・専攻名	派遣企業名	参加者数
文化形態論・前期	なし	0
文化表現論・前期	なし	0
文化形態論・後期	なし	0
文化表現論・後期	なし	0

平成15年度

文学部

学科・専攻名	派遣企業名	参加者数
人文学科	毎日新聞社	1

文学研究科

学科・専攻名	派遣企業名	参加者数
文化形態論・前期	なし	0
文化表現論・前期	なし	0
文化形態論・後期	なし	0
文化表現論・後期	なし	0

平成16年度

文学部

学科名	派遣企業名	参加者数
人文学科	ザ・フェニックスホール	2
人文学科	イシハラホール	2
人文学科	朝日新聞大阪本社生活文化部	2
人文学科	読売新聞社大阪本社	2
人文学科	(株)東映京都撮影所	2
人文学科	兵庫県立ピッコロ劇場	2

文学研究科

専攻名	派遣企業名	参加者数
文化形態論・前期	なし	0
文化表現論・前期	なし	0
文化形態論・後期	なし	0
文化表現論・後期	なし	0

3-2-8 研究科の開講科目数及び授業の種類

平成14～平成16年度 文学研究科

専攻名	課程	開講科目数	授業の種類	平成14年度	平成15年度	平成16年度
文化形態論	前期	選択必修科目数	講義	162	185	174
			演習・実験実習	252	251	246
	後期	選択必修科目数	講義	147	170	169
			演習・実験実習	219	236	235
文化表現論	前期	選択必修科目数	講義	162	185	174
			演習・実験実習	252	251	246
	後期	選択必修科目数	講義	147	170	169
			演習・実験実習	219	236	235

3-2-9 学部の専門科目開講科目数及び授業の種類

平成14～平成16年度 文学部

学科名	専門教育科目開講数	授業の種類	平成14年度	平成15年度	平成16年度
人文学科	必修科目数	講義	22	22	22
		演習・実験実習	0	0	0
	選択必修科目数	講義	169	177	183
		演習・実験実習	225	232	231

3-2-9 学部の専門科目開講科目数及び授業の種類(内訳)

平成14年度 文学部

学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
		講義	演習・実験実習
人文学科 哲学・思想文化学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	15	12
	選択科目数	170	216
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 倫理学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	5	11
	選択科目数	180	217
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 中国哲学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	1	5
	選択科目数	184	223
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 インド哲学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	1	12
	選択科目数	184	216
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 日本史学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	6	9
	選択科目数	179	219
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 東洋史学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	7	12
	選択科目数	178	216
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 西洋史学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	6	18
	選択科目数	179	210
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 考古学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	5	6
	選択科目数	180	222
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 日本学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	6	15
	選択科目数	179	213
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 人文地理学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	6	6
	選択科目数	179	222

平成14年度 文学部

学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
		講義	演習・実験実習
人文学科 日本語学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	17	21
	選択科目数	168	207
人文学科 日本文学・国語学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	6	12
	選択科目数	179	216
人文学科 比較文学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	8	4
	選択科目数	177	224
人文学科 中国文学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	6	7
	選択科目数	179	221
人文学科 英米文学・英語学専修 (英文学)	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	10	4
	選択科目数	175	224
人文学科 英米文学・英語学専修 (アメリカ文学)	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	5	2
	選択科目数	180	226
人文学科 英米文学・英語学専修 (英語学)	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	7	4
	選択科目数	178	224
人文学科 ドイツ文学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	5	18
	選択科目数	180	210
人文学科 フランス文学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	9	9
	選択科目数	176	219
人文学科 美学・文芸学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	11	7
	選択科目数	174	221
人文学科 音楽学・演劇学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	15	12
	選択科目数	170	216
人文学科 美術史学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	12	19
	選択科目数	173	209

平成15年度 文学部

学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
		講義	演習・実験実習
人文学科 哲学・思想文化学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	14	13
	選択科目数	183	222
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 倫理学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	4	11
	選択科目数	193	224
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 中国哲学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	2	5
	選択科目数	195	230
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 インド哲学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	2	11
	選択科目数	195	224
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 日本史学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	6	10
	選択科目数	191	225
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 東洋史学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	5	12
	選択科目数	192	223
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 西洋史学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	5	18
	選択科目数	192	217
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 考古学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	7	6
	選択科目数	190	229
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 日本学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	5	15
	選択科目数	192	220
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 人文地理学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	6	6
	選択科目数	191	229
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 日本語学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	16	20
	選択科目数	181	215
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 日本文学・国語学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	5	13
	選択科目数	192	222
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 比較文学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	7	4
	選択科目数	190	231

平成15年度 文学部

学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
		講義	演習・実験実習
人文学科 中国文学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	7	7
	選択科目数	190	228
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 英米文学・英語学専修 (英文学)	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	9	4
	選択科目数	188	231
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 英米文学・英語学専修 (アメリカ文学)	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	8	4
	選択科目数	189	231
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 英米文学・英語学専修 (英語学)	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	7	6
	選択科目数	190	229
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 ドイツ文学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	5	16
	選択科目数	192	219
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 フランス文学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	14	8
	選択科目数	183	227
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 美学・文芸学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	18	8
	選択科目数	179	227
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 音楽学・演劇学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	13	12
	選択科目数	184	223
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 美術史学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	12	23
	選択科目数	185	212

平成16年度 文学部

学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
		講義	演習・実験実習
人文学科 哲学・思想文化学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	16	14
	選択科目数	178	220
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 倫理学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	8	14
	選択科目数	186	220
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 中国哲学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	2	6
	選択科目数	192	228

平成16年度 文学部

学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
		講義	演習・実験実習
人文学科 インド哲学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	2	10
	選択科目数	192	224
人文学科 日本史学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	6	10
	選択科目数	188	224
人文学科 東洋史学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	5	12
	選択科目数	189	222
人文学科 西洋史学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	4	13
	選択科目数	190	221
人文学科 考古学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	6	6
	選択科目数	188	228
人文学科 日本学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	6	15
	選択科目数	188	219
人文学科 人文地理学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	5	6
	選択科目数	189	228
人文学科 日本語学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	18	20
	選択科目数	176	214
人文学科 日本文学・国語学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	7	13
	選択科目数	187	221
人文学科 比較文学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	9	2
	選択科目数	185	232
人文学科 中国文学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	6	5
	選択科目数	188	229
人文学科 英米文学・英語学専修 (英文学)	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	9	4
	選択科目数	185	230
人文学科 英米文学・英語学専修 (アメリカ文学)	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	7	4
	選択科目数	187	230

平成16年度 文学部

学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
		講義	演習・実験実習
人文学科 英米文学・英語学専修 (英語学)	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	4	7
	選択科目数	190	227
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 ドイツ文学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	5	17
	選択科目数	189	217
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 フランス文学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	14	8
	選択科目数	180	226
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 美学・文芸学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	15	7
	選択科目数	179	227
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 音楽学・演劇学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	18	15
	選択科目数	176	219
学科名	専門教育科目開講数	授業の種類ごとの数	
人文学科 美術史学専修	必修科目数	1	0
	選択必修科目数	11	23
	選択科目数	183	211

3-2-10 入試改善状況

平成14年度

文学部

点検・改善のための組織名	改善内容
文学部、入試委員会	新指導要領による高校教育の実情に応じ、平成16(2004)年度より、文学部の前・後期日程の入学者選抜試験において、合格判定に利用している大学入試センター試験の科目として新たに「公民」を加えることを決定した。それに伴って、大学入試センター試験の諸科目(国語・地歴・数学・理科・外国語・小論文)に対する従来の文学部としての配点を、「公民」とのバランスや選抜試験としての有効性を考慮しながら再検討した。

文学研究科

点検・改善のための組織名	改善内容
文学研究科、入試委員会	前・後期博士課程入学者選抜に関して、これまでの試験実施体制を検討し、整備した。具体的には、研究科長をトップとする入試本部を立ち上げ、併せて試験問題に対する受験生からの質問に即座に回答できるように入試出題者の控え室を設けた。また本研究科は、研究者養成機関であるとともに、高度職業人などの養成も目的としていることから、受験の機会を増やすという意味で、従来の2月試験(春期入試)に加えて、秋期にも入試を施行するかどうか、検討した。

平成15年度

文学部

点検・改善のための組織名	改善内容
文学部、入試委員会	平成14(2002)年度に引き続き、大学入試センター試験の諸科目(国語・地歴・数学・理科・外国語・小論文)に対する従来の文学部としての配点を、「公民」とのバランスや選抜試験としての有効性を考慮しながら再検討した。その結果、前期日程では、国語(50点)・地理歴史(40点)・公民(10点)・数学(50点)・理科(50点)・外国語(50点)、後期日程では、国語(45点)・地理歴史(25点)・公民(15点)・数学(45点)・理科(25点)・外国語(45点)に変更することを決定した。

文学研究科

点検・改善のための組織名	改善内容
文学研究科、入試委員会	平成14(2002)年度に引き続き、前期博士課程入学者選抜に関して、従来の2月試験(春期入試)に加えて、秋期にも入試を施行するかどうか検討した。検討にあたっては、次の諸点に留意した。①秋期入試のあり方を春期入試と同一にするかどうか、②博士前期課程の選抜試験として、春・秋期入試相互の位置づけをどうするか、③社会人入試も、一般入試と同じく年2回、施行する必要があるか。

平成16年度

文学部

点検・改善のための組織名	改善内容
文学部、教育支援室、入試部門	平成15(2003)年度に決定した大学入試センター試験の諸科目(国語・地歴・公民・数学・理科・外国語・小論文)の配点に従い、前期日程では、国語(50点)・地理歴史(40点)・公民(10点)・数学(50点)・理科(50点)・外国語(50点)、後期日程では、国語(45点)・地理歴史(25点)・公民(15点)・数学(45点)・理科(25点)・外国語(45点)に変更した。同じく大学入試センター試験については、平成18年度(2006)年度より、英語のリスニング試験の導入を決定した。また個別学力検査については、後期日程を存続すべきかどうか検討した。

文学研究科

点検・改善のための組織名	改善内容
文学研究科、教育支援室、入試部門	博士前期課程入学者選抜に関しては、従来の2月試験(春期入試)に加えて、秋期(9月)にも入試を施行した。また社会人入試については、秋期(9月)にのみ施行することに改めた。また本年度入試の反省に基づき、博士前期課程入学者選抜(春期入試)に関しては、筆記試験・口頭試験ともに、受験する側にも採点する側にも時間的な余裕が生まれるように、日程および試験時間・内容を検討し、見直した。

3-2-11 ファカルティ・デベロップメントの取り組み

平成14年度 文学研究科

FDに関する取り組み内容(講習会・講演会・パネルディスカッション)	参加者数
文学研究科教育方法研究フォーラム テーマ「文学研究科におけるユニークな授業」 報告者6人;ドイツ文学・美学・演劇学・国語学・哲学・日本語学	60人

平成15年度 文学研究科

FDに関する取り組み内容(講習会・講演会・パネルディスカッション)	参加者数
実施していない	

平成16年度 文学研究科・文学部

FDに関する取り組み内容(講習会・講演会・パネルディスカッション)	参加者数
新潟大学現代社会文化研究科教授小林昌二氏と、大阪大学教育実践センター助教望月太郎氏による講演会を開催した。講演題目はそれぞれ『FDの理念と課題』と『授業評価アンケートとFDの課題』である。	約60名

3-2-12 教員による担当授業評価状況

平成14年度

文学部

アンケート実施の有無	調査項目(教科内容の妥当性、学生の態度、理解度など)
有	講義に関するアンケート。講義準備状況・授業の体系性・教育機器の利用・丁寧な講義。他の授業との重複の排除・授業への学生の参加・質問への対応。学生の興味・関心の増大、シラバスとの整合性、教科書・参考書の活用。

文学研究科

アンケート実施の有無	調査項目(教科内容の妥当性、学生の態度、理解度など)
有	講義に関するアンケート。講義準備状況・授業の体系性・教育機器の利用・丁寧な講義。他の授業との重複の排除・授業への学生の参加・質問への対応。学生の興味・関心の増大、シラバスとの整合性、教科書・参考書の活用。

平成15年度 文学研究科・文学部

アンケート実施の有無	調査項目(教科内容の妥当性、学生の態度、理解度など)
無	

平成16年度 文学研究科・文学部

アンケート実施の有無	調査項目(教科内容の妥当性、学生の態度、理解度など)
無	

3-2-13 教育活動評価組織・改善組織の設置状況

平成14年度

文学部

設置の有無	評価・改善のための組織名	評価・改善の内容
有	教育評価委員会	大学評価・学位授与機構による分野別教育評価(人文学系)のための自己評価書作成の準備。ファカルティ・デベロップメントの開始。学生による授業評価等についてのアンケート実施。

文学研究科

設置の有無	評価・改善のための組織名	評価・改善の内容
有	教育評価委員会	大学評価・学位授与機構による分野別教育評価(人文学系)のための自己評価書作成の準備。ファカルティ・デベロップメントの開始。大学院学生の研究環境全般に関する実態調査アンケート実施。

平成15年度

文学部

設置の有無	評価・改善のための組織名	評価・改善の内容
有	教育評価委員会	大学評価・学位授与機構による分野別教育評価(人文学系)のための自己評価書の作成。

文学研究科

設置の有無	評価・改善のための組織名	評価・改善の内容
有	教育評価委員会	大学評価・学位授与機構による分野別教育評価(人文学系)のための自己評価書の作成。

平成16年度 文学研究科・文学部

設置の有無	評価・改善のための組織名	評価・改善の内容
有	評価・広報室、教育支援室	教員による自己評価書『年報』の刊行。学生による授業評価アンケートの実施とその集計結果の教員へのフィードバック。その結果を踏まえて、教育体制や設備などの改善。ファカルティ・デベロップメントの実施。

3-2-14 教育に対する自己評価の実施状況

平成14年度 文学研究科・文学部

学科・専攻名	自己評価実施の有無	実施内容
人文学科	有	教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価を全専修が行って、「文学研究科年報2002」に掲載した。並行して、大学評価・学位授与機構に提出する自己評価書を準備した。
文化形態論・前期	有	教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価を全専門分野が行って、「文学研究科年報2002」に掲載した。並行して、大学評価・学位授与機構に提出する自己評価書を準備した。
文化形態論・後期	有	教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価を全専門分野が行って、「文学研究科年報2002」に掲載した。並行して、大学評価・学位授与機構に提出する自己評価書を準備した。
文化表現論・前期	有	教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価を全専門分野が行って、「文学研究科年報2002」に掲載した。並行して、大学評価・学位授与機構に提出する自己評価書を準備した。
文化表現論・前期	有	教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価を全専門分野が行って、「文学研究科年報2002」に掲載した。並行して、大学評価・学位授与機構に提出する自己評価書を準備した。

平成15年度 文学研究科・文学部

学科・専攻名	自己評価実施の有無	実施内容
人文学科	有	文学研究科と文学部の教育全体についての自己評価を大学評価・学位授与機構の分野別教育評価のための資料として作成。
文化形態論・前期	有	文学研究科と文学部の教育全体についての自己評価を大学評価・学位授与機構の分野別教育評価のための資料として作成。
文化形態論・後期	有	文学研究科と文学部の教育全体についての自己評価を大学評価・学位授与機構の分野別教育評価のための資料として作成。
文化表現論・前期	有	文学研究科と文学部の教育全体についての自己評価を大学評価・学位授与機構の分野別教育評価のための資料として作成。
文化表現論・後期	有	文学研究科と文学部の教育全体についての自己評価を大学評価・学位授与機構の分野別教育評価のための資料として作成。

平成16年度 文学研究科・文学部

自己評価実施の有無	実施内容
有	平成17年3月に刊行した『大阪大学大学院文学研究科年報2004』で、各専門分野別に平成14年度に実施したピア・レビューの指摘事項を意識しながら、平成14年～15年度の教育活動について自己評価をおこなった。

3-2-15 研究に対する自己評価実施状況

平成14年度 文学研究科

自己評価実施項目
研究業績目録等を作成し、専門分野ごとに自己評価書を執筆し、『文学研究科年報2002』に掲載した。

平成15年度 文学研究科

自己評価実施項目
『大阪大学大学院文学研究科年報2004』発刊に向けて、業績目録等のデータを蓄積した。

平成16年度 文学研究科・文学部

自己評価実施項目
平成17年3月に刊行した『大阪大学大学院文学研究科年報2004』で、各研究分野別に平成14年度に実施したピア・レビューの指摘事項を意識しながら、平成14年～15年度の研究活動について自己評価をおこなった。

3-2-16 研究に対する外部評価実施状況

平成14年度 文学研究科

実施の有無	実施項目
有	14年度に作成した専門分野ごとの研究業績目録を他大学の同じ専門分野の研究者(外国からの招聘者を含む計23名)に送り、評価してもらった。評価は下記の項目で行った。研究の先見性・独創性、実証性、持続性、体系性、波及性、教員組織としてのまとめり、学会活動での位置。その結果を『文学研究科年報2002』に掲載した。

平成15年度 文学研究科

実施の有無	実施項目
無	

平成16年度 文学研究科・文学部

実施の有無	実施項目
無	

3-2-17 研究の質の改善のための検討状況

平成14年度 文学研究科

検討体制の概要	検討項目
部内の企画評価委員会を中心に検討した。	外部評価のために招いた2名の外国人研究者より、アメリカとイギリスの研究の質の向上のための制度について理解をふかめた。

平成15年度 文学研究科

検討体制の概要	検討項目
庶務委員会を中心に検討した。	法人化後の研究推進室の設置とその任務について検討した。

平成16年度 文学研究科・文学部

検討体制の概要	検討項目
研究推進室の各部門において検討した。	学生自習室の時間外使用、研究会・講演会開催への補助、部内機関誌への外国語論文発表補助事業等について検討した。

3-2-18 社会貢献を見直す体制の整備状況

平成14年度 文学部

委員会等設置の有無	委員会名	設置目的	開催回数
有	庶務委員会、企画・評価委員会	理念組織、将来計画・目標、評価等について審議する。	庶務委員会 原則月2回、企画・評価委員会 随時

平成15年度 文学部

委員会等設置の有無	委員会名	設置目的	開催回数
有	庶務委員会、企画・評価委員会	理念組織、将来計画・目標、評価等について審議する。	庶務委員会 原則月2回、企画・評価委員会 随時

平成16年度 文学研究科・文学部

委員会等設置の有無	委員会名	設置目的	開催回数
有	評価・広報室	社会貢献状況を把握し、その推進にあたる。	隔週で、評価・広報室の全体会議と部門チーフ会議を開催し、最新データの収集と調査にあっている。

3-3 教育の達成状況

文学研究科・文学部の教育の達成状況については、1) 単位修得・資格取得状況・進級状況、2) 進学・就職状況、3) 学年の授業評価結果を資料として提示している。

まず、単位修得・資格取得については、講義・演習、卒業・修士論文等の成績分布状況、授業（講義・演習）の開講科目数、受講者数、単位修得者数状況、そして資格取得状況を示す評価用添付資料（3-3-1～3-3-10）を掲載している。

3-3-1 「文学部 成績分布」

3-3-2 「卒業論文成績状況」

3-3-3 「文学研究科 講義・演習の開講科目数」

3-3-4 「文学研究科 講義受講者・単位修得者数」

3-3-5 「文学研究科 演習受講者・単位修得者数」

3-3-6 「文学研究科 講義成績分布」

3-3-7 「文学研究科 演習成績分布」

3-3-8 「博士前期課程修士論文提出状況等（カッコ内は外国人留学生数）」

3-3-9 「修士論文の点数と各科目成績平均点」

3-3-10 「資格等取得状況」

また、文学部の進級状況・進学・就職状況については、評価用資料『大阪大学文学部』（p.64-65）に掲載している。また、大学院の進級状況・進学・就職状況については、評価用添付資料（3-3-11～3-3-12）及び同（3-3-13）を参照のこと。

評価用資料『大阪大学文学部』（p.64-65）

3-3-11 「就職者職業別一覧（博士前期課程）」

3-3-12 「就職者職業別一覧（博士後期課程）」

3-3-13 「研究者・高度専門職業人就職者数」

さらに、文学研究科・文学部では、授業のあり方や教育・研究環境について検討し、それらを改善するために授業アンケートを実施している。アンケートの結果は教員、学生に公表し、必要と判断されるものについては改善に努めている。当該年度に行った学生授業アンケートの実施状況は評価用添付資料（3-3-14）に示す通りである。また、そこには平成16年度に実施した文学研究科と文学部の授業アンケートとその集計結果も添付してある。

3-3-14 「学生授業アンケート実施状況」

添付資料「平成16年度文学部開講科目を対象とする「授業改善のためのアンケート」実施結果報告」

添付資料「平成16年度「大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」実施結果報告」

3-3-1 文学部 成績分布

(講義)

(人)

評語	平成 14 年度	比率	平成 15 年度	比率	平成 16 年度	比率
優	4672	61%	5245	65%	5053	61%
良	2061	27%	1930	24%	2189	26%
可	674	9%	658	8%	679	8%
不可	274	4%	245	3%	353	4%
合計	7681	100%	8078	100%	8274	100%

(演習)

(人)

評語	平成 14 年度	比率	平成 15 年度	比率	平成 16 年度	比率
優	3837	66%	4099	67%	3820	67%
良	1118	19%	1112	18%	1107	19%
可	635	11%	674	11%	583	10%
不可	197	3%	201	3%	188	3%
合計	5787	100%	6086	100%	5698	100%

3-3-2 卒業論文成績状況

(人)

評 価	平成 14 年度	平成 15 年度	平成 16 年度
優	126	116	100
良	50	47	44
可	6	7	7
不可	1	3	5
合 計	183	173	156

3-3-3 文学研究科 講義・演習の開講科目数

	平成 14 年度	平成 15 年度	平成 16 年度
講義数	324	339	363
演習数	471	472	433

3-3-4 文学研究科 講義受講者・単位修得者数

	平成 14 年度	平成 15 年度	平成 16 年度
講義受講者数	1554	1658	1807
講義単位修得者数	745	884	996
全受講者数に占める単位修得者数の比率	47.90%	53.30%	55.10%

3-3-5 文学研究科 演習受講者・単位修得者数

	平成 14 年度	平成 15 年度	平成 16 年度
演習受講者数	1830	1796	1942
演習単位修得者数	1607	1567	1685
全受講者数に占める単位修得者数の比率	87.80%	87.20%	86.80%

3-3-6 文学研究科 講義成績分布

評語	平成 14 年度	比率	平成 15 年度	比率	平成 16 年度	比率
優	608	82%	740	82%	785	76%
良	9	1%	117	13%	171	17%
可	25	3%	27	3%	40	4%
不可	98	13%	16	2%	37	4%
合計	740	100%	900	100%	1033	100%

3-3-7 文学研究科 演習成績分布

評語	平成 14 年度	比率	平成 15 年度	比率	平成 16 年度	比率
優	1525	95%	1485	95%	1513	88%
良	77	5%	74	5%	157	9%
可	5	0%	8	1%	15	1%
不可	5	0%	4	0%	26	2%
合計	1612	100%	1571	100%	1711	100%

3-3-8 博士前期課程修士論文提出状況等(カッコ内は外国人留学生数) (人)

年 度	在学者数	論文題目 提出者数	論文提出者数	単位不足者数	論文不合格等	修了者数
平成 14 年度	134(13)	110(11)	95(10)	1(0)	3	101
平成 15 年度	125(15)	102(14)	83(11)	0	0(0)	83
平成 16 年度	130(16)	108(14)	91(13)	0	6(0)	85

3-3-9 修士論文の点数と各科目成績平均点 (点)

修了年度	入学年度	成績平均点	論 文
平成 14 年度	平成 13 年度	84.2	83.7
平成 15 年度	平成 10 年度	81.3	81
平成 15 年度	平成 11 年度	79.8	72.5
平成 15 年度	平成 12 年度	82.2	76.5
平成 15 年度	平成 13 年度	81.9	81.7
平成 15 年度	平成 14 年度	82.6	81.5
平成 16 年度	平成 12 年度	83.9	81.5
平成 16 年度	平成 13 年度	83.4	82.5
平成 16 年度	平成 14 年度	82.2	81.4
平成 16 年度	平成 15 年度	82.4	81.8

3-3-10 資格等取得状況

平成14年度
文学部

学科・専攻名	資格名	取得者数
人文学科	教員免許状中学校1種(社会)	9
	教員免許状中学校1種(国語)	10
	教員免許状中学校1種(英語)	4
	教員免許状高等学校1種(地歴)	23
	教員免許状高等学校1種(公民)	2
	教員免許状高等学校1種(国語)	12
	教員免許状高等学校1種(英語)	5
総計		65

文学研究科(文化形態論)

学科・専攻名	資格名	取得者数
文化形態論・前期	教員免許状中学校1種(英語)	1
	教員免許状高等学校1種(英語)	1
	教員免許状中学校専修(社会)	3
	教員免許状中学校専修(国語)	1
	教員免許状高等学校専修(地歴)	5
文化形態論・後期	なし	0
総計		11

文学研究科(文化表現論)

学科・専攻名	資格名	取得者数
文化表現論・前期	教員免許状中学校専修(国語)	2
	教員免許状中学校専修(英語)	5
	教員免許状高等学校専修(国語)	1
文化表現論・後期	なし	0
総計		8

平成15年度
文学部

学科・専攻名	資格名	取得者数
人文学科	教員免許状中学校1種(社会)	7
	教員免許状中学校1種(国語)	1
	教員免許状中学校1種(英語)	4
	教員免許状高等学校1種(地歴)	24
	教員免許状高等学校1種(公民)	2
	教員免許状高等学校1種(国語)	7
	教員免許状高等学校1種(英語)	10
総計		55

文学研究科(文化形態論)

学科・専攻名	資格名	取得者数
文化形態論・前期	教員免許状中学校1種(社会)	1
	教員免許状高等学校1種(地歴)	1
	教員免許状中学校専修(社会)	4
	教員免許状高等学校専修(地歴)	8
文化形態論・後期	なし	0
総計		14

文学研究科(文化表現論)

学科・専攻名	資格名	取得者数
文化表現論・前期	教員免許状中学校専修(国語)	4
	教員免許状中学校専修(英語)	1
	教員免許状高等学校専修(国語)	7
	教員免許状高等学校専修(英語)	1
文化表現論・後期	なし	0
総計		13

平成16年度
文学部

学科名	資格名	取得者数
人文学科	教員免許状中学校1種(社会)	8
	教員免許状中学校1種(国語)	7
	教員免許状中学校1種(英語)	9
	教員免許状高等学校1種(地歴)	17
	教員免許状高等学校1種(公民)	4
	教員免許状高等学校1種(国語)	13
	教員免許状高等学校1種(英語)	13
	教員免許状高等学校1種(独語)	1
総計		72

文学研究科

専攻名	資格名	取得者数
文化形態論・前期	教員免許状中学校1種(社会)	3
	教員免許状高等学校1種(地歴)	3
文化表現論・前期	教員免許状中学校1種(国語)	1
	教員免許状中学校1種(英語)	2
	教員免許状高等学校1種(国語)	1
	教員免許状高等学校1種(英語)	1
	教員免許状中学校専修(国語)	5
	教員免許状中学校専修(英語)	4
	教員免許状高等学校専修(地歴)	1
	教員免許状高等学校専修(国語)	5
	教員免許状高等学校専修(英語)	5
	総計	

3-3-11 就職者職業別一覧(博士前期課程)

(人)

区分	【A】 卒業者		【A】の内訳																											
			【B】 進学 後期課程			【C】 自家営業			【D】 就職者			【D】就職者の内訳				【E】 未就職者			【F】 その他											
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	(a) 企業	(b) 官公庁	(c) 教職	(d) その他	男	女	計	男	女	計								
平成14年度	43	48	91	24	27	51	0	2	2	8	7	15	2	4	6	3	0	3	3	3	6	0	0	0	2	1	3	9	11	20
平成15年度	34	49	83	19	22	41	0	0	0	9	9	18	6	4	10	1	0	1	2	5	7	0	0	0	0	0	0	6	18	24
平成16年度	26	59	85	13	19	32	0	0	0	6	15	21	3	6	9	3	4	7	0	4	4	0	1	1	0	0	0	7	25	32

3-3-12 就職者職業別一覧(博士後期課程)

(人)

区分	【A】 卒業者		【A】の内訳																											
			【B】 進学			【C】 自家営業			【D】 就職者			【D】就職者の内訳				【E】 未就職者			【F】 その他											
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	(a) 企業	(b) 官公庁	(c) 教職	(d) その他	男	女	計	男	女	計								
平成14年度	26	20	46	0	0	0	0	0	0	12	5	17	0	0	0	0	1	1	6	2	8	5	2	7	7	6	13	7	9	16
平成15年度	23	28	51	0	0	0	0	0	0	7	12	19	0	0	0	0	1	1	3	5	8	4	6	10	5	7	13	10	9	19
平成16年度	26	28	54	0	0	0	1	0	1	12	14	26	0	0	0	1	0	1	8	11	19	3	3	6	4	2	6	9	13	22

3-3-13 研究者・高度専門職業人就職者数

	平成14年度	平成15年度	平成16年度
就職者(研究者)	18	17	18
就職者(高度職業)	9	18	24

3-3-14 学生授業アンケート実施状況

平成14年度

文学部

学科・専攻名	アンケート実施の有無
人文学科	有

文学研究科

学科・専攻名	アンケート実施の有無	備考
文化形態論・前期	有	学生の研究環境全般に関する実態調査アンケート
文化表現論・前期	有	学生の研究環境全般に関する実態調査アンケート
文化形態論・後期	無	
文化表現論・後期	無	

※有の場合は、結果を提出願います。(電子データ、冊子等)

平成15年度

文学部

学科・専攻名	アンケート実施の有無
人文学科	無

文学研究科

学科・専攻名	アンケート実施の有無
文化形態論・前期	無
文化表現論・前期	無
文化形態論・後期	無
文化表現論・後期	無

※有の場合は、結果を提出願います。(電子データ、冊子等)

平成16年度

文学部

文学部	アンケート実施の有無
文学部	有

文学研究科

課程	アンケート実施の有無
文化形態論・前期	有
文化表現論・前期	有
文化形態論・後期	有
文化表現論・後期	有

※有の場合は、結果を提出願います。(電子データ、冊子等)

平成 16 年度 文学部開講科目を対象とする「授業改善のためのアンケート」
実施結果報告

平成 17 年 5 月 26 日

評価・広報室

平成 16 年度本室の計画に基づき、平成 17 年 1 月から 2 月にかけて、文学部専任教員担当の授業に限定して本アンケートを実施した。実施にあたっては、後に掲げる「実施要領」等を配布し、各担当教員ならびに対象学生の協力を求めたが、「実施要領の 3」に示すように、学部学生の受講生数が 9 名以下となった場合は、回答者が特定されるおそれがあるため、行わないこととした。結果として 78 の授業についてアンケートが行われ、以下に示す数種の集計が得られたが、本報告では、文学部学生全体の集計についてのみ簡単な分析と、必要に応じて考えられうる対策についても述べることとし、他の集計データについては各位の読みに委ねたい。なお、自由意見については、文学部学生のみならず、全回答者について主なものを挙げる。

1. 概要

要請授業数	120 科目（履修者数 3818 人）
実施授業数	78 科目（履修者数 3073 人）
未実施授業数（9 名以下）	42 科目（履修者数 745 人）
アンケート回答者数	1710 人
アンケート自由記述欄記入者数	357 人

アンケートの集計結果は、後に掲げる各表（ただし、4）を除く）に見られるように、以下の区分ごとに示されている（括弧内は有効回答数）。

- 1) 学部別：文学部の学生（1489）、文学部以外の文科系学部の学生（人間科学部、法学部、経済学部、111）、理科系学部の学生（理学部、医学部、歯学部、薬学部、工学部、基礎工学部、13）、科目等履修生・特別聴講学生・研究生（50）
- 2) 学科別：哲学ブロック「哲学・思想文化学、倫理学、中国哲学、インド哲学」に所属する学生（104）、史学ブロック「日本史学、東洋史学、西洋史学、考古学」に所属する学生（391）、文学Aブロック「日本文学・国語学、比較文学、中国文学」に所属する学生（175）、文学Bブロック「英米文学・英語学、ドイツ文学、フランス文学」に所属する学生（325）、芸術ブロック「美学・文芸学、音楽学・演劇学、美術史学」に所属する学生（287）、日本学ブロック「日本学、人文地理学、日本語学」に所属する学生（230）、まだ専修に所属していない学生（6）
- 3) 学年別：2 年生（792）、3 年生（591）、4 年生（215）、科目等履修生・特別聴講学生・研究生（50）
- 4) 科目別：前掲のように 78 の授業（「科目」）について各々集計が得られている。

2. 文学部学生全体についての集計結果について

各集計より、1) のうち、文学部の学生（回答数 1489）について設問ごとに集計結果を分析し、あわせて、必要に応じて今後の対応についても若干の検討をほどこす。1) の他学部学生ほか、および 2) と 3) については、表を掲載するだけにとどめるが、同様にご検討いただければ幸いである。

設問 1「シラバスは授業の目的や概要を知るのに役立つように書かれていますか。」については、「とてもそう思う」「ややそう思う」を合わせて 65.7%にとどまっており、全体としてもっと懇切丁寧な情報提供が求められているように思われる。

設問 2「あなたがこの授業に出席した割合は、どの程度ですか。」については、「ほぼ毎回出席している」と「おおよそ出席している」を合わせて 81.1%と、出席は良好であったといえる。

設問 3「受講する前に授業内容に関連した予備知識あるいは基礎知識がありましたか。」については、「かなりある」と「ややある」が 19.0%にすぎず、授業はまったく新しい内容の情報を受け取る場であるとの傾向がうかがえる。

設問 4「この授業の予習と復習（宿題やレポート作成等のための学習を含む）にあてた平均時間（1 週当たり）は、どのくらいですか。」については、「5 時間以上」が 3.0%、「4 時間位」が 3.4%、「3 時間位」が 9.4%、「2 時間位」が 20.7%であった。これに対して、授業時間よりも少ない「1 時間以下」が 63.5%であったことは、やや気になるところではある。ただし、本アンケートでは講義と演習の区別を設けていなかったため、実態を十分に反映していないおそれがあり、この点については次回以後の検討課題としたい。

設問 5「この授業は、授業の目的に合ったしかたで体系的に構成されて進められていますか。」については、「とてもそう思う」と「ややそう思う」が合わせて 66.1%にとどまり、やや改善を要する状況であろうと判断されうる。

設問 6「教師の声の大きさ・話し方は受講生が授業内容を理解するために十分に聞き取りやすいと思いますか。」については、「とてもそう思う」と「ややそう思う」が合わせて 76.7%であり、全体としては及第点に達しているかと思われるが、個別には問題がないわけではない。

設問 7「板書は授業内容の理解を助けるために十分な配慮をとまっていますか。」については、「とてもそう思う」と「ややそう思う」が合わせて 41.9%にとどまり、「どちらとも言えない」が 35.2%もあり、なお一層の工夫が必要であることがわかる。

設問 8「参考資料や視聴覚教材などが授業内容の理解を助けるために効果的なしかたで用いられていると思いますか。」については、「とてもそう思う」と「ややそう思う」が合わせて 64.0%であり、「どちらとも言えない」が 26.1%であるので、授業方法の上でさらなる工夫が求められていると判断してよいだろう。

設問 9「教師は適切な時間配分を行なって授業を進めていると思いますか。」については、「とてもそう思う」と「ややそう思う」が合わせて 64.9%、「どちらとも言えない」が 25.1%であり、90 分の授業を、学生の関心を引きつけつつ効果的に展開するためにはなお一層の努力が必要ということであろうか。

設問 10「教師は学生の質問を促し、それに丁寧に答えていると思いますか。」については、「とてもそう思う」と「ややそう思う」が合わせて 53.1%にすぎないが、講義者が話すだけという旧来の授業像が教師の間に根強く残っていることを示しているといえる。

設問 11「この授業で教師の意欲が感じられますか。」については、担当者ごとに評価は大きく分かれているが、「とても感じられる」が 47.0%、「やや感じられる」が 34.8%という数字についても、見方は分かれよう。個別には、両者を併せて、100%に達している授業もあった反面、残念ながら 50%に満たないものもわずかながらあったことを記録しておく。

設問 12「授業内容はあなたの学力レベルに見合ったものだと思いますか。」については、「とてもそう思う」と「ややそう思う」が合わせて 50.4%にとどまり、「どちらとも言えない」の 38.6%を勘案してみても、学生の学力レベルが概して授業の水準に追いついていないことが指摘できる。「あまりそう思わない」と「まっ

たくそう思わない」を合わせた数値が 11.0%あることは、10 人に 1 人は授業についていくのが困難であることを示しているといえよう。

設問 13「この授業を受けることにより、あなたの批判的思考能力、専門的技量（スキル）、あるいは創造性などが高められたと思いますか。」については、「とてもそう思う」と「ややそう思う」が合わせて 65.2%であり、設問 12に見る問題があるにしても、授業が、学生の学力水準を超える内容を示しつつ、一定の思考的刺激を与えていることがうかがえる。

設問 14「この授業は、あなたに対して知的な問題提起をするような内容のものですか。」についても、「とてもそう思う」と「ややそう思う」が合わせて 68.2%であり、前問同様の判断が可能であろう。

設問 15「受講する前、この授業があなたの専門的知見を広げ、深めるうえで役立つことを期待しましたか。」は、「とても期待した」と「やや期待した」が合わせて 76.9%であった。したがって、この結果からみるかぎり、設問 13、14 の対応数値と照らし合わせてみると、受講生の期待はあまり満たされていないのではないか、と考えられる。しかし、

設問 16「あなたはこの授業を受講して満足していますか。」は、「とても満足している」と「やや満足している」が合わせて 76.3%と、設問 15 にみる期待度にほぼ一致する数値に達しており、好ましい状況にあるとみてよいだろう。

設問 17「この授業の成績評価の方針・方法は示されていますか。」については、「とてもそう思う」と「ややそう思う」が合わせて 67.8%であり、シラバスに示すことが習慣となりつつあるも、なお一層丁寧な説明が求められているということであろう。

設問 18「教室は受講生の人数に見合った大きさですか。」は、「やや狭い」と「狭すぎる」を合わせると 24.0%に達しており、この点については、自由記述欄にも多くの声が寄せられている。なお、「広すぎる」も 8.7%あった。さらに、

設問 19「教室の設備環境は適切だと思いますか。」についても、「とてもそう思う」と「ややそう思う」が合わせて 50.2%にとどまっており、この 2 問については、今後諸方面において解決すべき課題があると言えよう。

3. 自由記述欄より

これについては、全体の状況に関わって今後の改善にむけて注視すべきものを中心に、ポジティブな評価内容の記述も含めて、主なものを列挙する。なお記述の内容に即して、3つの種類に区分し、示すこととした。

1) ハード環境について

- ・教室が狭い。(同一趣旨回答多数)
- ・教室が寒すぎる。(同一趣旨回答多数)
- ・エアコンの音がうるさい。
- ・椅子と机がセットになっているのはたいへん不便。
- ・マイクのハウリングが多い。
- ・ホワイトボードマーカーはもっと良いものを使うべき。

2) 指導技術・方法に関して

- ・ハンドアウト・プリント・レジュメがほしい。

- ・プリントや板書の記述がもう少し詳しいものであってほしい。
- ・板書の字が読みにくい。
- ・教科書があまり使いやすくない。
- ・機械の扱いに習熟する余裕がないなら、助手をつけるなどの工夫が必要ではないかと思う。
- ・出席を取ってほしい。
- ・受講生の顔を見てほしい。
- ・声が聞こえにくいところがあり、困った。
- ・まったくムードで楽しかったですが、20分ほど遅れてスタートし、5分延長するのだけは...
- ・毎回、プロトコルを制作していただき、前回の講義内容が思い起こせてよかった。
- ・毎回、前回の授業の最後に記入した質問について補足説明が行われたのはよかった。
- ・初回の講義の際に本講義の趣旨を明らかにしてもらったこと、また各回にまとめをもらったことはよかった。
- ・図で説明してもらえたのがわかりやすかった。
- ・内容的には難しいが、丁寧にわかりやすく教えてもらった。
- ・ゲストスピーカーの話を聴けたのはよかった。
- ・毎回の小テストは、大変ですが、知識のアップにつながるのによいと思う。
- ・質問の機会が十分に与えられた。

3) その他

- ・先生たちにシラバスを早く書かせすぎでは。
- ・シラバスに掲載された内容をすべて聴くことができなかつたのは残念。
- ・専修外の方への配慮も欲しい感じがする。
- ・他学部の学生が単位のために文学部の授業を受けていることについて、問題を感じる。
- ・他学部の受講生としては、風当たりがきついを感じる。

結びにかえて

平成16年度に始まった国立大学法人としての大阪大学文学部の授業について、受講生の側からの検証の機会を得たが、結果としてさまざまな面で改善を要することが明らかになった。今後、評価・広報室における議論を中心として、教授会構成員各員の意見を伺いつつ、より望ましい授業の展開にむけて努力を続ける必要があると思う。また、アンケートの実施方法についても、さらなる改良にむけて検討することも必要となるろう。

以上、簡単ながら、このたびのアンケート調査についての報告とする。

平成 16 年度 文学部開講科目を対象とする「授業改善のためのアンケート」

実 施 要 領

1. 本アンケートは、文学部開講科目のうち、専任教員（外国人教師を含む）が担当し、かつ学部学生の履修者数が 10 名以上の授業を対象に実施します。
2. 本アンケートは、学部学生（学部レベルの科目等履修生・特別聴講学生・研究生を含む）を対象に実施するものです。したがって、対象授業が同時に文学研究科の開講科目であり、受講生に大学院学生（大学院レベルの科目等履修生・特別聴講学生・研究生を含む）が含まれる場合でも、大学院学生に対しては、本アンケートを実施する必要はありません。この点、ご注意ください。
3. アンケート実施時に学部学生の受講生数が 9 名以下となった場合は、本アンケートを実施する必要はありません。封筒に貼付してあるタックシールの「回答者数」の欄に「9 名以下」と記入して返却してください（返却方法は 5. 参照）。
4. 封筒には、質問票とマークシート回答票（枚数はいずれも学部履修者数）、および本実施要領（教員用が 1 部）が入っています。封筒に貼付されているタックシールには、「授業コード、授業科目名、曜日・時限、教員名、履修者数、回答者数（これのみ空欄）」が記載されていますので、ご確認ください。
5. アンケートは、1 月 31 日までの授業時間内に実施してください（所要時間は 15 分程度）。
その場で回答済みのマークシート回答票のみを回収して封筒に戻し、文学部日本学棟 1 階の評価・広報室（月曜～金曜、午前 10 時～午後 4 時 30 分）にご提出ください。時間外の場合は、文学部玄関の評価・広報室のメールボックスにご投函ください。（返却者は、担当教員・助手・受講生のいずれでも可）
質問票は回収する必要はありません。余ったマークシート回答票は回答済みの分と区別して、評価・広報室にご返却、またはメールボックスにご投函ください。

実施にあたり受講生に指示していただくこと

受講生が回答する前に、以下の諸点を注意事項として口頭あるいは板書によりご指示ください。本紙をコピーして受講生に配布していただいても結構です。

- (1) **学部欄**のマークに当たり、学生が所属する学部等によって、以下の数字をマークさせてください。
0：文学部の学生
1：文学部以外の文科系学部の学生（人間科学部、法学部、経済学部）
2：理科系学部の学生（理学部、医学部、歯学部、薬学部、工学部、基礎工学部）
3：科目等履修生・特別聴講学生・研究生
- (2) **学科欄**をマークする必要があるのは、文学部学生のみです。学生が所属する専修によって、以下の数字をマークさせてください。
0：「哲学・思想文化学、倫理学、中国哲学、インド哲学」に所属する学生
1：「日本史学、東洋史学、西洋史学、考古学」に所属する学生
2：「日本文学・国語学、比較文学、中国文学」に所属する学生
3：「英米文学・英語学、ドイツ文学、フランス文学」に所属する学生
4：「美学・文芸学、音楽学・演劇学、美術史学」に所属する学生
5：「日本学、人文地理学、日本語学」に所属する学生
6：まだ専修に所属していない学生
- (3) **学年欄**の数字は、文学部か他学部かを問わず、2 年生は「2」を、3 年生は「3」を、4 年生は「4」をマークするようにご指示ください。なお、科目等履修生・特別聴講学生・研究生の場合は、すべて「7」をマークするようにご指示ください。
- (4) 「**曜日・時限、授業科目名、教員名**」の欄には、封筒のタックシールに記載されているものを板書し、そのとおり記載するように受講生にご指示ください。
- (5) 「**授業コード欄**」（マーク欄末尾）には、封筒のタックシールに記載されている授業コードを板書し、その数字に該当する箇所を順次上から下へ向かってマークするようご指示ください。授業コードは、特に間違いのないように板書し、また学生にも正確に記入するようご注意ください。
- (6) **自由記入欄**：記入するようにご指示ください。裏面に続く場合は、回答票の下半分を利用し、裏面の上半分は必ず白紙にしておくようにご指示ください。

[2005 年 1 月 13 日 文学部 評価・広報室]

[各集計結果] (科目別集計結果は除く)

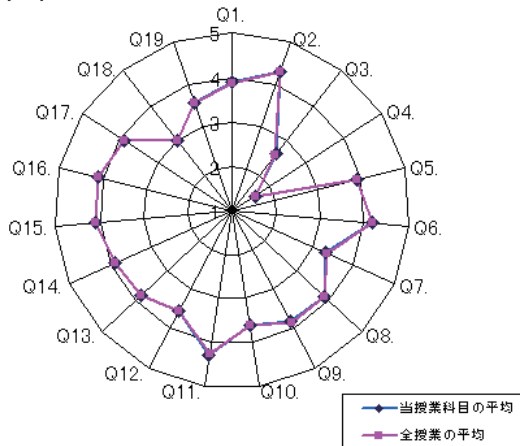
2004 年度後期 授業アンケート集計結果(学部別)

0	文学部の学生
---	--------

有効回答数:	1489
--------	------

項	設問文	評価分布(一部の設問の評価分布は設問文を参照)					無回答	平均点
		5	4	3	2	1		
		とても そう思う	やや そう思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	まったくそ う思わない		
1	シラバスは授業の目的や概要を知るのに役立つように書かれていますか。	27.9%	37.8%	29.3%	4.2%	0.8%	2	3.88
2	あなたがこの授業に出席した割合は、どの程度ですか。(5-ほぼ毎回出席している、4-おおよそ出席している、3-どちらとも言えない、2-あまり出席していない、1-ほとんど出席していない)	55.0%	26.1%	13.8%	4.2%	0.9%	2	4.30
3	受講する前に授業内容に関連した予備知識あるいは基礎知識がありましたか。(5-かなりある、4-ややある、3-どちらとも言えない、2-あまりない、1-まったくない)	2.6%	16.4%	37.7%	28.4%	14.9%	8	2.63
4	この授業の予習と復習(宿題やレポート作成等のための学習を含む)にあてた平均時間(1週当たり)は、どのくらいですか。(5-5時間以上、4-4時間位、3-3時間位、2-2時間位、1-1時間以下)	3.0%	3.4%	9.4%	20.7%	63.5%	3	1.62
5	この授業は、授業の目的に合ったかたで体系的に構成されて進められていますか。	29.9%	36.2%	27.0%	5.6%	1.3%	5	3.88
6	教師の声の大きさ、話し方は受講生が授業内容を理解するために十分に聞き取りやすいと思いますか。	46.7%	30.0%	15.2%	6.4%	1.7%	0	4.14
7	板書は授業内容の理解を助けるために十分な配慮をとまなっていると思いますか。	18.4%	23.5%	35.2%	16.2%	6.7%	11	3.31
8	参考資料や視聴覚教材などが授業内容の理解を助けるために効果的なかたで用いられていると思いますか。	32.7%	31.3%	26.1%	6.7%	3.2%	5	3.84
9	教師は適切な時間配分を行なって授業を進めていると思いますか。	27.6%	37.3%	25.1%	8.8%	1.3%	8	3.81
10	教師は学生の質問を促し、それに丁寧に答えていると思いますか。	26.9%	26.2%	31.1%	12.4%	3.5%	3	3.60
11	この授業で教師の意欲が感じられますか。(5-とても感じられる、4-やや感じられる、3-どちらとも言えない、2-あまり感じられない、1-まったく感じられない)	47.0%	34.8%	15.3%	2.5%	0.3%	1	4.26
12	授業内容はあなたの学力レベルに見合ったものだと思いますか。	16.7%	33.7%	38.6%	8.4%	2.6%	3	3.54
13	この授業を受けることにより、あなたの批判的思考能力、専門的技量(スキル)、あるいは創造性などが高められたと思いますか。	22.7%	42.5%	27.7%	5.7%	1.3%	3	3.80
14	この授業は、あなたに対して知的な問題提起をするような内容のものですか。	29.0%	39.2%	25.3%	5.3%	1.1%	3	3.90
15	受講する前、この授業があなたの専門的知見を広げ、深めるうえで役立つことを期待しましたか。(5-とても期待した、4-やや期待した、3-どちらとも言えない、2-あまり期待しなかった、1-まったく期待しなかった)	36.8%	40.1%	18.3%	4.0%	0.8%	2	4.08
16	あなたはこの授業を受講して満足していますか。(5-とても満足している、4-やや満足している、3-どちらとも言えない、2-あまり満足していない、1-まったく満足していない)	38.3%	38.0%	19.6%	3.7%	0.4%	1	4.10
17	この授業の成績評価の方針・方法は示されていますか。	32.2%	35.6%	23.4%	6.7%	2.2%	4	3.89
18	教室は受講生の人数に見合った大きさですか。(5-広すぎる、4-やや広い、3-どちらとも言えない、2-やや狭い、1-狭すぎる)	8.7%	13.3%	54.1%	15.6%	8.4%	10	2.98
19	教室の設備環境は適当だと思いますか。	22.8%	27.4%	35.3%	11.6%	2.9%	20	3.56

レーダーチャート



○平均点について
 5⇒5点 4⇒4点 3⇒3点
 2⇒2点 1⇒1点
 として計算したものです。

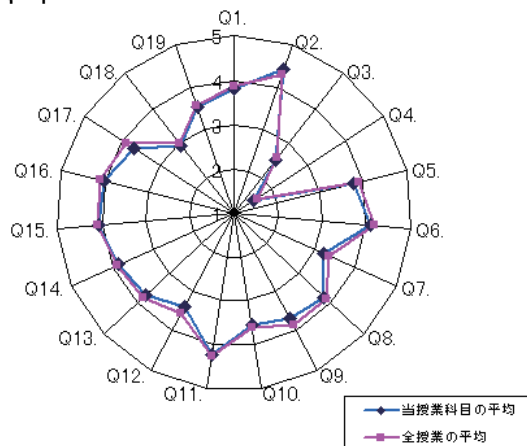
2004 年度後期 授業アンケート集計結果(学年別)

2	2 年生
---	------

有効回答数: 792

項	設問文	評価分布(一部の設問の評価分布は設問文を参照)					無回答	平均点
		5	4	3	2	1		
		とても そう思う	やや そう思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	まったくそ う思わない		
1	シラバスは授業の目的や概要を知るのに役立つように書かれていますか。	22.5%	41.6%	31.1%	4.4%	0.4%	1	3.81
2	あなたがこの授業に出席した割合は、どの程度ですか。(5-ほぼ毎回出席している、4-おおよそ出席している、3-どちらとも言えない、2-あまり出席していない、1-ほとんど出席していない)	60.5%	24.6%	10.9%	3.3%	0.8%	2	4.41
3	受講する前に授業内容に関連した予備知識あるいは基礎知識がありましたか。(5-かなりある、4-ややある、3-どちらとも言えない、2-あまりない、1-まったくない)	1.1%	12.7%	38.1%	33.0%	15.0%	5	2.52
4	この授業の予習と復習(宿題やレポート作成等のための学習を含む)にあてた平均時間(1週当たり)は、どのくらいですか。(5-5時間以上、4-4時間位、3-3時間位、2-2時間位、1-1時間以下)	2.3%	2.0%	8.7%	20.3%	66.7%	2	1.53
5	この授業は、授業の目的に合ったしかたで体系的に構成されて進められていますか。	23.0%	38.4%	31.9%	5.6%	1.1%	2	3.77
6	教師の声の大きさ・話し方は受講生が授業内容を理解するために十分に聞き取りやすいと思いますか。	43.1%	32.7%	14.9%	7.2%	2.1%	0	4.07
7	板書は授業内容の理解を助けるために十分な配慮をとまなっていると思いますか。	14.8%	23.9%	35.2%	19.8%	6.2%	6	3.21
8	参考資料や視聴覚教材などが授業内容の理解を助けるために効果的なかたで用いられていると思いますか。	28.4%	34.1%	27.6%	6.6%	3.3%	1	3.78
9	教師は適切な時間配分を行なって授業を進めていると思いますか。	21.7%	39.3%	27.9%	10.0%	1.1%	3	3.70
10	教師は学生の質問を促し、それに丁寧に答えていると思いますか。	22.3%	26.7%	35.5%	12.4%	3.0%	3	3.53
11	この授業で教師の意欲が感じられますか。(5-とても感じられる、4-やや感じられる、3-どちらとも言えない、2-あまり感じられない、1-まったく感じられない)	42.7%	37.4%	17.2%	2.3%	0.4%	1	4.20
12	授業内容はあなたの学力レベルに見合ったものだと思いますか。	10.8%	31.5%	44.2%	10.8%	2.8%	2	3.37
13	この授業を受けることにより、あなたの批判的思考能力、専門的技量(スキル)、あるいは創造性などが高められたと思いますか。	18.1%	42.9%	32.2%	5.8%	1.0%	2	3.71
14	この授業は、あなたに対して知的な問題提起をするような内容のものですか。	24.8%	40.5%	27.8%	5.8%	1.1%	1	3.82
15	受講する前、この授業があなたの専門的知見を広げ、深めるうえで役立つことを期待しましたか。(5-とても期待した、4-やや期待した、3-どちらとも言えない、2-あまり期待しなかった、1-まったく期待しなかった)	33.1%	43.6%	18.5%	4.6%	0.3%	1	4.05
16	あなたはこの授業を受講して満足していますか。(5-とても満足している、4-やや満足している、3-どちらとも言えない、2-あまり満足していない、1-まったく満足していない)	32.1%	40.4%	23.6%	3.3%	0.6%	0	4.00
17	この授業の成績評価の方針・方法は示されていますか。	22.5%	37.8%	27.9%	8.7%	3.0%	1	3.68
18	教室は受講生の人数に見合った大きさですか。(5-広すぎる、4-やや広い、3-どちらとも言えない、2-やや狭い、1-狭すぎる)	5.8%	13.9%	55.1%	16.1%	9.0%	3	2.92
19	教室の設備環境は適当だと思いますか。	19.8%	29.4%	37.6%	10.1%	2.9%	11	3.53

レーダーチャート



○平均点について
 5⇒5点 4⇒4点 3⇒3点
 2⇒2点 1⇒1点
 として計算したものです。

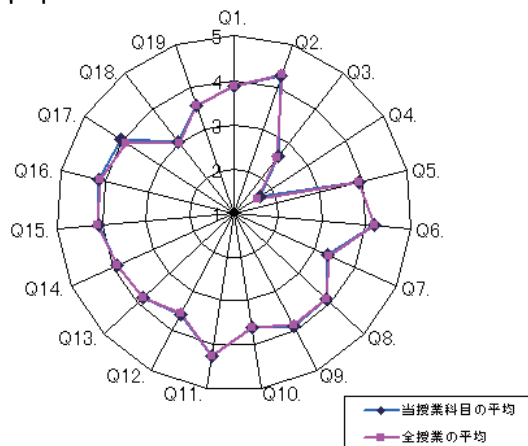
2004 年度後期 授業アンケート集計結果(学年別)

3	3 年生
---	------

有効回答数: 591

項	設問文	評価分布(一部の設問の評価分布は設問文を参照)					無回答	平均点
		5	4	3	2	1		
		とても そう思う	やや そう思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	まったくそ う思わない		
1	シラバスは授業の目的や概要を知るのに役立つように書かれていますか。	30.3%	32.8%	31.0%	4.4%	1.5%	0	3.86
2	あなたがこの授業に出席した割合は、どの程度ですか。(5-ほぼ毎回出席している、4-おおよそ出席している、3-どちらとも言えない、2-あまり出席していない、1-ほとんど出席していない)	52.3%	29.6%	12.2%	4.7%	1.2%	0	4.27
3	受講する前に授業内容に関連した予備知識あるいは基礎知識がありましたか。(5-かなりある、4-ややある、3-どちらとも言えない、2-あまりない、1-まったくない)	3.7%	18.3%	33.8%	26.0%	18.2%	2	2.63
4	この授業の予習と復習(宿題やレポート作成等のための学習を含む)にあてた平均時間(1週当たり)は、どのくらいですか。(5-5時間以上、4-4時間位、3-3時間位、2-2時間位、1-1時間以下)	4.2%	4.6%	9.5%	19.5%	62.3%	0	1.69
5	この授業は、授業の目的に合ったしかたで体系的に構成されて進められていますか。	33.0%	32.8%	25.5%	6.5%	2.2%	3	3.88
6	教師の声の大きさ・話し方は受講生が授業内容を理解するために十分に聞き取りやすいと思いますか。	48.1%	28.1%	16.1%	6.1%	1.7%	0	4.15
7	板書は授業内容の理解を助けるために十分な配慮をとまなっていると思いますか。	19.8%	22.8%	34.2%	15.0%	8.2%	4	3.31
8	参考資料や視聴覚教材などが授業内容の理解を助けるために効果的なかたで用いられていると思いますか。	36.5%	26.4%	25.9%	7.5%	3.7%	4	3.84
9	教師は適切な時間配分を行なって授業を進めていると思いますか。	31.2%	33.9%	24.9%	8.7%	1.4%	4	3.85
10	教師は学生の質問を促し、それに丁寧に答えていると思いますか。	28.8%	24.9%	28.6%	13.5%	4.2%	0	3.60
11	この授業で教師の意欲が感じられますか。(5-とても感じられる、4-やや感じられる、3-どちらとも言えない、2-あまり感じられない、1-まったく感じられない)	47.9%	32.1%	16.2%	3.2%	0.5%	0	4.24
12	授業内容はあなたの学力レベルに見合ったものだと思いますか。	19.2%	32.0%	37.6%	8.1%	3.1%	1	3.56
13	この授業を受けることにより、あなたの批判的思考能力、専門的技量(スキル)、あるいは創造性などが高められたと思いますか。	25.0%	40.5%	26.2%	6.1%	2.2%	3	3.80
14	この授業は、あなたに対して知的な問題提起をするような内容のものですか。	29.5%	39.0%	24.1%	5.3%	2.0%	2	3.89
15	受講する前、この授業があなたの専門的知見を広げ、深めるうえで役立つことを期待しましたか。(5-とても期待した、4-やや期待した、3-どちらとも言えない、2-あまり期待しなかった、1-まったく期待しなかった)	37.5%	36.3%	20.7%	4.4%	1.2%	1	4.04
16	あなたはこの授業を受講して満足していますか。(5-とても満足している、4-やや満足している、3-どちらとも言えない、2-あまり満足していない、1-まったく満足していない)	39.7%	37.1%	18.1%	4.2%	0.8%	1	4.11
17	この授業の成績評価の方針・方法は示されていますか。	40.2%	31.9%	20.7%	5.9%	1.2%	2	4.04
18	教室は受講生の人数に見合った大きさですか。(5-広すぎる、4-やや広い、3-どちらとも言えない、2-やや狭い、1-狭すぎる)	12.3%	14.0%	49.1%	14.3%	10.4%	4	3.03
19	教室の設備環境は妥当だと思いますか。	27.2%	23.5%	33.2%	12.0%	4.1%	7	3.58

レーダーチャート



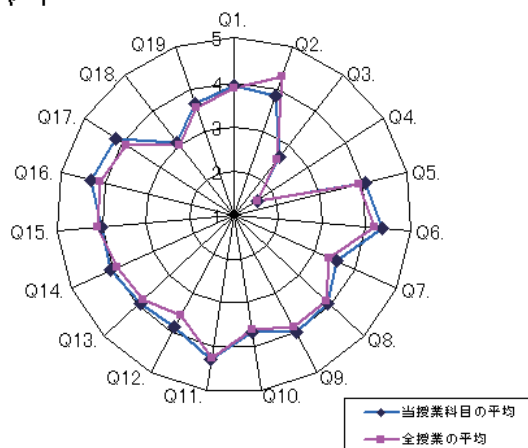
2004 年度後期 授業アンケート集計結果(学年別)

4	4 年生
---	------

有効回答数: 215

項	設問文	評価分布(一部の設問の評価分布は設問文を参照)					無回答	平均点
		5	4	3	2	1		
		とても そう思う	やや そう思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	まったくそ う思わない		
1	シラバスは授業の目的や概要を知るのに役立つように書かれていますか。	31.8%	36.0%	25.2%	5.1%	1.9%	1	3.91
2	あなたがこの授業に出席した割合は、どの程度ですか。(5-ほぼ毎回出席している、4-おおよそ出席している、3-どちらとも言えない、2-あまり出席していない、1-ほとんど出席していない)	31.6%	29.8%	31.2%	5.6%	1.9%	0	3.84
3	受講する前に授業内容に関連した予備知識あるいは基礎知識がありましたか。(5-かなりある、4-ややある、3-どちらとも言えない、2-あまりない、1-まったくない)	3.7%	19.2%	36.4%	21.5%	19.2%	1	2.67
4	この授業の予習と復習(宿題やレポート作成等のための学習を含む)にあてた平均時間(1週当たり)は、どのくらいですか。(5-5時間以上、4-4時間位、3-3時間位、2-2時間位、1-1時間以下)	2.8%	4.2%	7.4%	20.9%	64.7%	0	1.60
5	この授業は、授業の目的に合ったかたで体系的に構成されて進められていますか。	39.7%	33.6%	20.1%	5.1%	1.4%	1	4.05
6	教師の声の大きさ・話し方は受講生が授業内容を理解するために十分に聞き取りやすいと思いますか。	54.9%	28.4%	11.6%	4.2%	0.9%	0	4.32
7	板書は授業内容の理解を助けるために十分な配慮をとまなっていると思いますか。	22.9%	29.0%	33.2%	9.8%	5.1%	1	3.55
8	参考資料や視聴覚教材などが授業内容の理解を助けるために効果的なかたで用いられていると思いますか。	35.3%	33.0%	21.9%	5.1%	4.7%	0	3.89
9	教師は適切な時間配分を行なって授業を進めていると思いますか。	35.0%	39.3%	17.3%	6.5%	1.9%	1	3.99
10	教師は学生の質問を促し、それに丁寧に答えていると思いますか。	34.0%	22.8%	24.7%	11.6%	7.0%	0	3.65
11	この授業で教師の意欲が感じられますか。(5-とても感じられる、4-やや感じられる、3-どちらとも言えない、2-あまり感じられない、1-まったく感じられない)	48.8%	35.8%	10.7%	4.2%	0.5%	0	4.28
12	授業内容はあなたの学力レベルに見合ったものだと思いますか。	28.4%	40.0%	21.4%	7.9%	2.3%	0	3.84
13	この授業を受けることにより、あなたの批判的思考能力、専門的技量(スキル)、あるいは創造性などが高められたと思いますか。	31.2%	39.1%	20.5%	7.4%	1.9%	0	3.90
14	この授業は、あなたに対して知的な問題提起をするような内容のものですか。	40.0%	33.0%	19.1%	6.5%	1.4%	0	4.04
15	受講する前、この授業があなたの専門的知見を広げ、深めるうえで役立つことを期待しましたか。(5-とても期待した、4-やや期待した、3-どちらとも言えない、2-あまり期待しなかった、1-まったく期待しなかった)	38.6%	33.0%	18.6%	7.0%	2.8%	0	3.98
16	あなたはこの授業を受講して満足していますか。(5-とても満足している、4-やや満足している、3-どちらとも言えない、2-あまり満足していない、1-まったく満足していない)	51.2%	31.2%	13.5%	3.7%	0.5%	0	4.29
17	この授業の成績評価の方針・方法は示されていますか。	45.5%	32.9%	15.5%	3.8%	2.3%	2	4.15
18	教室は受講生の人数に見合った大きさですか。(5-広すぎる、4-やや広い、3-どちらとも言えない、2-やや狭い、1-狭すぎる)	10.0%	13.3%	56.9%	13.7%	6.2%	4	3.07
19	教室の設備環境は適当だと思いますか。	26.5%	28.9%	29.4%	13.3%	1.9%	4	3.65

レーダーチャート



平成16年度 「大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」実施結果報告

平成17年5月26日

評価・広報室

文学研究科評価・広報室では平成16年度の計画に基づき、文学研究科博士課程の院生を対象に「大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」を行った。アンケートはウェブ上で端末から各自で回答入力してもらう方法で平成17年2月7日から3月15日にかけて実施されたが、その回収率は1割を下回った。休学ないし海外留学中の院生の存在を考慮しても、かなり低い回収率と言わざるを得ない。以下、院生全体の1割弱に関する集計であるという事実をふまえながら、結果を分析し報告する。概観の後、項目ごとに分析した後でこれをまとめ、最後に今回のアンケートが課題として残した点を整理する。（集計の「割合（%）」の数字は四捨五入ではなく小数点以下が切り捨てになっている。）

1 概観

実施時の在籍院生の実数は次のとおり（研究生・特別研究学生等を除く）。

前期課程	1年次	99人
	2年次	130人
	<u>小計</u>	<u>229人</u>
後期課程	1年次	65人
	2年次	72人
	3年次	173人
	<u>小計</u>	<u>310人</u>
	<u>計</u>	<u>539人</u>

このうちアンケートが返ってきたのは前期課程30人（約13パーセント）、後期課程22人（約7パーセント）、計52人であった。回収率は前期課程が約13パーセント、後期課程が約7パーセント、全体としては約9.6パーセントである。なお、設問によっては前期課程と後期課程で別の問いにしてある（設問17～21）。

2 分析

設問1 あなたは博士前期課程・後期課程のどちらに属していますか

回答者 前期30人、後期22人。それぞれ13パーセント、7パーセントが回答している。

設問2 あなたはその課程に入って何年目になりますか(休学期間を含む)

在籍年数が長くなるほど極端に回答者数が少なくなる（在籍4年以上という答えは全回答のうちわずか4パーセント）。前期課程、後期課程とも高年次ほど在籍者が多いことを考えると、長く在籍している院生ほど声が反映していないと見られる。

設問3 あなたが属する専門分野は次のどれですか

回収率は専門分野でやや偏りがある。全体への周知方法に工夫が必要であろう。

設問4 あなたが文学研究科に通う頻度はどの程度ですか

回答者のほぼ90パーセントが週2日以上、25パーセントはほぼ毎日文学研究科に通っている。しかしアンケートの返ってこなかった院生にはむしろ通学頻度の低い者も多いと思われる。全体としては判断しがたい。

設問5 あなたの主な研究場所はどこですか（複数回答可）

複数回答可。回答者のほぼ7割が専門分野の研究室か自宅・アパートを主な研究場所としている。大学図書館を研究場所にすると答えた者も3割強ある。

設問6 設問5で、「その他」を選択した方は、その具体的内容を下にお書きください

大阪府立中央図書館、担当教員の研究室、サイバーメディアセンターと答えた者がそれぞれ1名ずつあった。

設問7 専門分野の研究室のデスクについて

常時共用デスクが使用できていると答えた者が 67パーセント、常時使用できていないわけではないと答えた者が 21パーセント。ほとんど使用できていない、そもそも利用可能なデスクがないと答えた者があわせて8パーセント。自分専用のデスクがあると答えているものが1名。関連する記述式回答がかなりあった。

「研究室が狭い」

「共同研究室が狭く席が十分になく周りがうるさい」

「常時自由に使える机と場所が欲しい」

「休み中に空き教室を開放してほしい」

「学生用研究室の鍵が自由に借りられるようにしてほしい」

「ロッカーが欲しい」

「私立大学のように個人の机や自由に使えるスペースがあるとうれしい」

「集中できるように個人の机が欲しい」

「休業期間中の5時以降や土日に研究したいとき大変不便」

「女性でも安全に研究できるよう、理系のように夜間の出入りをカード・キーにして自由に出入りできるようにしてほしい」

個人の学習スペースの確保にかなりの不便と不満を感じていると思われる。

設問8 専門分野の研究室のパソコンについて

使えるパソコンが全くないわけではない。共用パソコンを常時使用できていると答えた者がほぼ5割。常時というわけにはいかない、あるいはほとんど使えないと答えた者が4割半。他は自分所有のパソコンを持ち込んでいる。回答者のほぼ半数は共用パソコンの使用環境に不便を感じていると思われる。記述式回答から関連するものをあげる。

「院生一人一人にパソコンとデスクが支給されるとありがたい」

「常時自由に使えるパソコンがあればよかった」

「パソコンとインターネットに常時自由にアクセスする環境にない」

「プリントアウトが自由にできない」

設問9 あなたの研究に必要な基本的文献・資料の本学における整備状況について

ほとんど整備されていないと答えた者はほんのわずか。7割強は満足している。他方、何らかの不備を感じている者も2割強ある。関連する記述式回答をあげる。

「もう少し資料の充実を図ってほしい」（文学・語学系）

設問10 本学における文献や資料の利用について

回答者の7割近くは資料利用に関する目立った不満はない。他方、2割が何らかの不便を感じており、1割は大変不便だと答えている。多くは大学図書館の不便さへの不満である。本研究科に対しては図書の分散への不満が見られる。関連する記述式回答をあげる。

「図書館での文献コピーが非常にしにくい」

「図書が紛失している場合も多く、図書の管理を徹底してもらいたい」

「図書館の蔵書を増やしてほしい」

「図書館での外部資料請求の対応が遅い」

「卒業後も大学図書館が利用できるようにしてほしい」

「他研究室にある本が利用しにくい」

「研究室と図書館との連携をはかってほしい」

「文学部図書館を設け、各研究室や研究推進室に分散する文献を一極集中させてほしい」

設問11 指導教員の指導について

指導を「なかなか受けられない」と答えた者、「ほとんど受けられない」と答えた者がそれぞれ1名あるが、これを除けば、指導はほぼ受けられているようである。ただ、アンケートの返ってこなかった院生については不明なので、全体の指導状況については何とも言えない。

設問12 指導教員の指導内容に満足していますか

「満足している」が46パーセント、「大いに満足している」が44パーセント、あわせると回答者の9割が

満足している。ただ、これも上と同じ理由から全体としての判断は難しい。関連すると思われる記述式回答をあげる。教員の積極的な関与、および研究室間の連携を求める声である。

「教官自身が現在何を研究しているのか学生にも明らかにして、そこに学生も参加できるようにしてほしい」
「それぞれの研究室が日頃どのような活動を行い、どのように運営されているのかを互いに意見交換する機会が欲しい」

設問13 専門分野の専任教員が開講する講義・演習等の数や種類は十分ですか

回答者の7割強は十分と感じているが、「どちらともいえない」が1割半、不十分と感じている回答者が1割ある。大きな不満はないにしても、いくらか改善の余地はあろう。関連する記述式回答は多い。

「現在専門の先生が一人しかいないので早く増員してほしい」（文学・語学系）
「院生の数に対して教員の数が少なすぎ、満足のいく授業を提供できていない」（文学・語学系）
「可能ならば実用英語の授業を開講してほしい」（文学・語学系）
「院生だけを対象にした授業をもっと開講してほしい」（文学・語学系）
「基礎的な内容の講義が少ない。研究生が院試を受けるとき自分の専門以外をどのように勉強すべきかわかりにくい」（日本学・日本語学・人文地理学系）
「共通教育が十分活用されていない」（日本学・日本語学・人文地理学系）
「文学研究科内、あるいは人間科学研究科で関連研究・講義が行われているが、紹介や連携を考慮したカリキュラムを組んでほしい」（哲学・思想系）

設問14 専門分野の非常勤講師等の招聘数は十分ですか

回答が分かれる。回答者のうち45パーセントが不十分と感じている一方、38パーセントは十分と感じている。「どちらともいえない」が15パーセント。全般的な傾向が読み取りにくいのが、専門分野によって事情が違うのかもしれない。関連する記述式回答をあげておく。

「今年度から非常勤講師の人数が削減され、少なからず影響を受けた」（日本学・日本語学・人文地理学系）
「非常勤講師・講師の配置がない」（日本学・日本語学・人文地理学系）

設問15 あなたは研究上の悩みを誰に相談していますか（複数回答可）

複数回答可の設問である。相談相手として8割近くが「指導教員」、7割が「研究室の仲間」、ほぼ3割が「助手」、ほぼ1割半が「指導教員以外の教員」をあげている。

設問16 設問15で、「その他」を選択した方は、その具体的内容を下にお書きください

「他研究室の友人」、「他大学の院生」、「母校の恩師」

このほか、相談相手がない、相談が難しい、という声があった。関連する回答をあげる。

「相談相手無し」、「関係者に本音を言うのは難しい」

回答選択肢に「相談相手があまりない」というネガティブな項目設定がなかったということ、およびアンケート回収率の低さを考えると、全体としての判断は難しい。

設問17 今年度の研究の進行は順調でしたか

6割が「順調」あるいは「ふつう」、4割が「不調」あるいは「やや不調」と答えている。この設問に関しては、アンケートが返ってこなかった院生の状況が気になりなところである。

設問18 あなたの研究は、年度初めに提出した研究計画書どおり進みましたか

4割強（22人）が「進んだ」、5割強（27人）が「進まなかった」という答え。あとは「計画を変更した」が3人。前問との関連を考慮すると、計画書どおりに進まないからといって必ずしも研究の進行が不調であると感じているわけではないようである。しかしこの設問に関しても、アンケートが返ってこなかった院生の状況が気になりなところである。

設問19 （設問19～23は博士前期課程（MC）の方への質問です）あなたの前期課程修了後の進路について

設問19.1 設問19で、「その他」を選択した方は、その具体的内容を下にお書きください

設問20 （設問19で「就職」と答えた人に）その進路を決めた要因について（複数回答可）

設問21 設問20で、「その他」を選択した方は、その具体的内容を下にお書きください

設問22 （設問19で「博士後期課程（DC）進学」と答えた人に）その進路を決めた要因について（複数回答可）

設問23 設問22で、「その他」を選択した方は、その具体的内容を下にお書きください

この6問は前期課程の院生が対象に進路について問うたものである。まとめて考察する。

なぜか後期課程の院生2名が答えてしまっているため、前期課程の院生30人とあわせて32人の回答となっている。回顧も含めたものとして分析する。全回答のうち「就職」は11人、「後期課程に進学」は同じく11人、「未定」は8人、「その他」は2人であった。

「就職」と答えた理由（複数回答可）は、「最初から就職すると決めていたから」が7人、経済的困難をあげる者が7人、「研究を続けることに自信あるいは興味・意欲を持てなくなったから」が5人、「進学しても、就職できる見通しがあるようには思えないから」が4人。11人中少なくとも4人は積極的に就職を望んでいるわけではないと見られる。

「後期課程に進学」と答えた理由は、「最初から進学すると決めていたから」が7人、「研究が面白くなった、あるいは自信が持てるようになったから」が3人。消極的な理由は出ておらず、おおむね本人の積極的な理由から進学に決めていると見られる。なお、これ以外に「他大学へ進学」、「高等学校教諭」がそれぞれ1名あった。

設問24 （本問は博士後期課程（DC）の方への質問です）博士号の取得について

設問24.1 設問24で、「その他」を選択した方は、その具体的内容を下にお書きください

博士後期課程の院生を対象とした設問である。なぜか前期課程の院生5人が答えてしまっているため、後期

課程院生22人とあわせて27人の回答となっている。進学を決めている者の心構えを含んだものとして分析する。

5割強が「留年しても博士後期課程在学中に取得するつもり」、4割が「在学中には無理だが、単位取得退学後3年以内に取得したい」と考えている。それも無理で、3年をこえて「いずれ」取得したいと答えた者が1名。アンケート回答者に限っては取得に積極的である。だが状況の厳しさは「博士後期課程在学中の3年以内に取得するつもり」と答えた院生が皆無であることにあらわれている。

設問25 (本問は博士後期課程(DC)の方への質問です) 進路について

これも博士課程後期の院生を対象とした設問。進路については、「研究職・教育職に就きたいが、その機会に恵まれるか不安」という答えが9割で圧倒的に多い。

設問25.1 設問25で、「その他」を選択した方は、その具体的内容を下にお書きください

「就きたい仕事がない」、「可能性を狭めたくないので広い視野をもって考えている」という回答があった。アンケート回答者に限っても不安は大きい。関連すると思われるものをあげておく。

「助手の居ない研究室について、研究室の雑務をこなす大学院生に、TAやRAのお金を回して、大学側から幾ばくかの給与と正式な肩書きを与えて欲しい。肩書きがないと、初めての相手に対して名乗りにくい」

設問26 教育・研究環境ならびに指導体制について、意見・要望があれば、下の欄に自由に記述してください

上に関連する設問の分析で紹介したとおりである。

3 まとめ

改善のために、以上のアンケート結果から読み取れる諸問題をまとめて列挙する。

[設備に関して]

院生のための勉強スペースの確保に強い改善要望がある。使える部屋の数ないし広さ、一人用のデスク、ロッカー、共用コンピュータ、入室のキー、利用可能時間帯など。

資料の利用については、大学附属図書館への要望を別にとすると、他研究室との連携に改善要望がある。

[教育体制に関して]

他研究室との連携を望む声がある。

専門分野によっては授業のメニューに不足感がある。

[相談指導に関して]

アンケート回答者はほぼ相談者を得ているが、9割強ある残りの対象者については不明。

[研究と進路に関して]

前期課程・後期課程ともに回答者の約半数が、研究の進捗がはかばかしくないと答えている。アンケート回収率が低いことを考え合わせると、この答えは実際には半数を超えるであろう。士気に関わる問題である。

前期課程院生については約半数は就職、半数は進学を希望。進学希望者は積極的な理由で自主的に決めているように思われる。だが就職希望のほうは積極的な理由と消極的な理由半々というところか。

後期課程院生については、博士号の取得を課程在学中の3年以内に提出できると思っている者はほとんどいない。大部分が時間をかけてでも取得しようとする意志を強く持っている。他方、同時に、ほとんどが研究職・教育職に就きたいと望みながらその機会が与えられないのではないかと不安を抱いている。3年をこえて在籍する後期課程院生のサポートが課題であろう。

4 今回のアンケートについて

今回の回収率の低さの原因には、ウェブ上アンケートへのアクセスの不便さ（アカウント取得）、アンケート依頼の時期および周知方法などテクニカルな問題が考えられる。それに加えて、回答者が特定されるのではないかという不安に対して配慮が万全でなかったのかもしれない。実施方法も含めて何らかの改善が求められる。関連する記述式回答をあげておく。

「不利益にはならないとされてはいるものの、このアンケートに回答することで、いかなる不利益を蒙るか分からないので、解答しづらい部分が多々ある。本当のことを正直に書ける状態ではないと思われる」

「なぜわざわざ不便でほとんど利用することのないサイバーメディアセンターまで出向いて、アカウントを取得しなければならないのか。アカウントの取得は想像以上に困難である」

また今回のアンケートのフィードバックはほとんどが教育支援室の業務に関わると思われる。今後、アンケート調査の実施業務について、評価・広報室と教育支援室との関係調整・整理が必要であろう。

資料：大学院生の教育・研究環境等に関するアンケートの数値集計

設問 1 あなたは博士前期課程・後期課程のどちらに属していますか	回答者数(人)	割合(%)
博士前期課程	30	57
博士後期課程	22	42

設問 2 あなたはその課程に入って何年目になりますか(休学期間を含む)	回答者数(人)	割合(%)
1年	25	48
2年	19	36
3年	5	9
4年	1	1
5年以上	2	3

設問 3 あなたが属する専門分野は次のどれですか	回答者数(人)	割合(%)
哲学・思想系	7	13
歴史学・考古学系	15	28
文学・語学系	18	34
日本学・日本語学・人文地理学系	8	15
芸術学系	4	7

設問 4 あなたが文学研究科に通う頻度はどの程度ですか	回答者数(人)	割合(%)
ほとんど毎日	13	25
週のうち4~5日	18	34
週のうち2~3日	16	30
週のうち1日程度	5	9
ほとんど行かない	0	0

設問 5 あなたの主な研究場所はどこですか(複数回答可)	回答者数(人)	割合(%)
専門分野の研究室	39	39
研究推進室(もと合同研究室)	5	5
阪大附属図書館	17	17
自宅・アパート	35	35
その他	3	3

設問 7 専門分野の研究室のデスクについて	回答者数(人)	割合(%)
自分専用のデスクがある	1	1
共用のデスクがあり常時使用できる	35	67
共用のデスクがあるが常時使用できるわけではない	11	21
共用のデスクがあるがほとんど使用できない	3	5
使えるデスクはない	2	3

設問 8 専門分野の研究室のパソコンについて	回答者数(人)	割合(%)
共用のパソコン（研究室備品）があり常時使用できる	25	49
共用のパソコン（研究室備品）があるが常時使えるわけではない	21	41
共用のパソコン（研究室備品）があるがほとんど使用できない	2	3
自分所有のパソコンを持ち込んで使用している	3	5
使えるパソコンはない	0	0

設問 9 あなたの研究に必要な基本的文献・資料の本学における整備状況について	回答者数(人)	割合(%)
十分に整備されている	14	26
なんとか整備されている	24	46
あまり整備されていない	8	15
ほとんど整備されていない	2	3
不備であるが、研究の特殊性から見てやむを得ないと思う	4	7

設問 10 本学における文献や資料の利用について	回答者数(人)	割合(%)
たいへん利用しやすい	7	13
利用しやすい	14	26
とくに不便は感じない	15	28
やや利用しにくい	11	21
たいへん利用しにくい	5	9

設問 11 指導教員の指導について	回答者数(人)	割合(%)
必要なときにはいつでも指導を受けられる	23	44
アポイントメントが必要だが、必要な指導は受けられる	24	46
面会は難しいが、メールなどを通じて指導は受けられる	3	5
なかなか指導は受けられない	1	1
ほとんど指導は受けられない	1	1

設問 12 指導教員の指導内容に満足していますか	回答者数(人)	割合(%)
大いに満足している	22	42
満足している	23	44
どちらともいえない	6	11
あまり満足していない	1	1
全く満足していない	0	0

設問 13 専門分野の専任教員が開講する講義・演習等の数や種類は十分ですか	回答者数(人)	割合(%)
十分である	18	34
ほぼ十分である	20	38
どちらともいえない	8	15
やや不十分である	4	7
全く不十分である	2	3

設問 14 専門分野の非常勤講師等の招聘数は十分ですか	回答者数(人)	割合(%)
現状で十分である	9	17
ほぼ十分である	11	21
どちらともいえない	8	15
少し増やしてほしい	15	28
大幅に増やしてほしい	9	17

設問 15 あなたは研究上の悩みを誰に相談していますか（複数回答可）	回答者数(人)	割合(%)
指導教員	40	36
指導教員以外の教員	9	8
助手	15	13
研究室の仲間	37	33
その他	8	7

設問 17 今年度の研究の進行は順調でしたか	回答者数(人)	割合(%)
大変順調だった	1	1
順調だった	10	19
ふつう	20	38
やや不調だった	15	28
不調だった	6	11

設問 18 あなたの研究は、年度初めに提出した研究計画書どおり進みましたか	回答者数(人)	割合(%)
研究計画書以上に進んだ	1	1
研究計画書どおり進んだ	3	5
だいたい研究計画書どおり進んだ	18	34
あまり研究計画書どおり進まなかった	24	46
まったく研究計画書どおり進まなかった	3	5
研究計画書の計画を変更した	3	5

設問 19 あなたの前期課程修了後の進路について	回答者数(人)	割合(%)
就職	11	34
博士後期課程(DC)進学	11	34
未定	8	25
その他	2	6

設問 20 (設問 19 で「就職」と答えた人に) その進路を決めた要因について (複数回答可)	回答者数(人)	割合(%)
最初から前期課程修了後は就職すると決めていたから	7	26
研究を続けることに自信あるいは興味・意欲を持てなくなったから	5	19
家庭の事情で、あるいは経済的に大学で研究を続けることが困難だから	7	26
研究上の見通しが立たないから	3	11
進学しても、就職できる見通しがあるようには思えないから	4	15
その他	0	0

設問 22 (設問 19 で「博士後期課程 (DC) 進学」と答えた人に) その進路を決めた要因について (複数回答可)	回答者数(人)	割合(%)
最初から前期課程修了後は後期課程 (DC) に進学すると決めていたから	7	70
研究を続ける中で、研究が面白くなった、あるいは自信がもてるようになったから	3	30
前期課程を修了しても、期待の就職口を見つけることができなかったから	0	0
指導教員から勧められたから	0	0
研究室のメンバーから勧められたから	0	0
その他	0	0

設問 24 博士号の取得について	回答者数(人)	割合(%)
博士後期課程在学中の3年以内に取得するつもりである	0	0
1～2年留年しても博士後期課程在学中に取得するつもりである	14	51
博士後期課程在学中には無理だが、単位修得退学後3年以内に取得したいと考えている	11	40
単位修得退学後3年以内は無理だが、いずれ博士号は取得したいと考えている	1	3
博士号の取得については考えていない	1	3
その他	0	0

設問 25 進路について	回答者数(人)	割合(%)
研究職・教育職に就職できると思う	0	0
研究職・教育職に就きたいが、その機会に恵まれるか不安である	27	90
研究職・教育職以外に就きたい仕事がある	0	0
その他	3	10

注) 設問 6・16・21・23 は記述問題のため集計表なし

設問 19・20・22 は博士前期課程(MC)の方への質問、設問 24・25 は博士後期課程(DC)の方への質問

3-4 学生への支援体制

1. 教育支援状況

文学部では、1年次生を対象に、総合的ガイダンス（4月）と専修決定のための専修説明会（9月）を開催している。1年次生に行うガイダンスの内容と配布資料は評価用添付資料（3-4-1）の通りである。

3-4-1 「学部・研究科の入学ガイダンス実施状況」

1～2年次生の共通教育の履修状況については、クラス担任（1クラス60名）が成績と勉学状況の掌握に努めており、クラス別懇談会（年3回程度）の機会を利用して適宜アドバイスを進めている。また、1年次生に対しては、「文学部共通概説」を開講し、各専修の教育や研究のあり方をわかりやすく解説し、専修決定のための便宜を図っている。

2年次生は、各専修に所属した後、それぞれの専修において教育の指導を受けている。授業内容については、評価用資料『シラバス』を参照のこと。

評価用資料『シラバス』

また、平成16年度からは、教育支援をより具体的にかつ円滑に展開できるように教育支援室を立ち上げた。同室では、学生の勉学上あるいは履修上の質問や不明な点、また不安などの相談に応じる「学習相談室」を設けて、学生の勉学のバックアップを行っている。学習相談室の業務内容は、評価用添付資料（3-4-2）を参照のこと。

3-4-2 「学生相談・メンタルヘルスクエ等実施体制」

2. 生活・健康・経済支援状況

大阪大学に設置されている保健センターや学生相談室と連携しつつ生活面での支援をしているが、文学部では平成16年度より全教員がオフィスアワーを実施した。1週間に90分以上の時間を各研究室において開室し、学生の多様な相談に応じている。評価用添付資料（3-4-3）を参照のこと。

3-4-3 「オフィスアワーの組織としての取組み状況」

また、性差別問題委員会を設置し、セクシャルハラスメント防止にも努めている。身体障害者のための設備も拡充を重ねている。これらは評価用添付資料（3-4-4）、（3-4-5）を参照のこと。

3-4-4 「セクシャルハラスメント防止対策」

3-4-5 「身体障害学生のための対策実施状況」

3-4-1 学部・研究科の入学ガイダンス実施状況

平成14年度

文学部

実施内容	入学ガイダンスの際に学生に配付している資料名
学部長談話	シラバス・学生便覧
文学部カリキュラム及び全学共通教育ガイダンス	文学部共通概説担当教官日程表
文学会の案内	文学会入会案内
性差別問題委員会からお知らせ	セクシャルハラスメント冊子
文学部同窓会の案内	文学部同窓会案内
新入生のアンケート	文学部紹介
	共通教育だより
	第Ⅲセメスター開講基礎セミナー1年生受講可能科目一覧表

平成14年度

文学研究科

学科・専攻名	実施内容	入学ガイダンスの際に学生に配付している資料名
文化形態論・前期	研究科長挨拶	文学研究科紹介
	カリキュラムガイダンス	シラバス・学生便覧
	文学会の案内	文学会案内
	文学部同窓会の案内	同窓会案内
	性差別問題委員会からお知らせ	セクシャルハラスメント冊子
文化形態論・後期	研究科長挨拶	文学研究科紹介
	カリキュラムガイダンス	シラバス・学生便覧
	文学会の案内	文学会案内
	文学部同窓会の案内	同窓会案内
	性差別問題委員会からお知らせ	セクシャルハラスメント冊子
文化表現論・前期	研究科長挨拶	文学研究科紹介
	カリキュラムガイダンス	シラバス・学生便覧
	文学会の案内	文学会案内
	文学部同窓会の案内	同窓会案内
	性差別問題委員会からお知らせ	セクシャルハラスメント冊子
文化表現論・後期	研究科長挨拶	文学研究科紹介
	カリキュラムガイダンス	シラバス・学生便覧
	文学会の案内	文学会案内
	文学部同窓会の案内	同窓会案内
	性差別問題委員会からお知らせ	セクシャルハラスメント冊子

平成15年度

文学部

実施内容	入学ガイダンスの際に学生に配付している資料名
学部長談話	シラバス・学生便覧
文学部カリキュラム及び全学共通教育ガイダンス	文学部共通概説担当教官日程表
文学会の案内	文学会入会案内
性差別問題委員会からお知らせ	セクシャルハラスメント冊子
文学部同窓会の案内	文学部同窓会案内
新入生のアンケート	文学部紹介
	共通教育だより
	第Ⅲセメスター開講基礎セミナー1年生受講可能科目一覧表

平成15年度
文学研究科

学科・専攻名	実施内容	入学ガイダンスの際に学生に配付している資料名
文化形態論・前期	研究科長挨拶	文学研究科紹介
	カリキュラムガイダンス	シラバス・学生便覧
	文学会の案内	文学会案内
	文学部同窓会の案内	同窓会案内
	性差別問題委員会からお知らせ	セクシャルハラスメント冊子
文化形態論・後期	研究科長挨拶	文学研究科紹介
	カリキュラムガイダンス	シラバス・学生便覧
	文学会の案内	文学会案内
	文学部同窓会の案内	同窓会案内
	性差別問題委員会からお知らせ	セクシャルハラスメント冊子
文化表現論・前期	研究科長挨拶	文学研究科紹介
	カリキュラムガイダンス	シラバス・学生便覧
	文学会の案内	文学会案内
	文学部同窓会の案内	同窓会案内
	性差別問題委員会からお知らせ	セクシャルハラスメント冊子
文化表現論・後期	研究科長挨拶	文学研究科紹介
	カリキュラムガイダンス	シラバス・学生便覧
	文学会の案内	文学会案内
	文学部同窓会の案内	同窓会案内
	性差別問題委員会からお知らせ	セクシャルハラスメント冊子

平成16年度
文学部

実施内容	入学ガイダンスの際に学生に配付している資料名
学部長挨拶	シラバス・学生便覧
文学部カリキュラム及び全学共通教育ガイダンス	文学部共通概説担当教官日程表
文学会の案内	文学会入会案内
性差別問題委員会からお知らせ	セクシャルハラスメント冊子
文学部同窓会の案内	文学部同窓会案内
新入生のアンケート	文学部紹介
	第Ⅲセメスター開講基礎セミナー1年生受講可能科目一覧表

平成16年度
文学研究科

学科・専攻名	実施内容	入学ガイダンスの際に学生に配付している資料名
文化形態論・前期	研究科長挨拶	文学研究科紹介
	カリキュラムガイダンス	シラバス・学生便覧
	文学会の案内	文学会案内
	文学部同窓会の案内	同窓会案内
	性差別問題委員会からお知らせ	セクシャルハラスメント冊子
文化形態論・後期	研究科長挨拶	文学研究科紹介
	カリキュラムガイダンス	シラバス・学生便覧
	文学会の案内	文学会案内
	文学部同窓会の案内	同窓会案内
	性差別問題委員会からお知らせ	セクシャルハラスメント冊子
文化表現論・前期	研究科長挨拶	文学研究科紹介
	カリキュラムガイダンス	シラバス・学生便覧
	文学会の案内	文学会案内
	文学部同窓会の案内	同窓会案内
	性差別問題委員会からお知らせ	セクシャルハラスメント冊子
文化表現論・後期	研究科長挨拶	文学研究科紹介
	カリキュラムガイダンス	シラバス・学生便覧
	文学会の案内	文学会案内
	文学部同窓会の案内	同窓会案内
	性差別問題委員会からお知らせ	セクシャルハラスメント冊子

3-4-2 学生相談・メンタルヘルスケア等実施体制

平成14年度 文学研究科・文学部

相談室等設置の有無	施設の名称	業務内容	開室日	時間帯	相談員の配置状況(教員、事務職員、学生、その他の人数)	相談件数
無					0	0

平成15年度 文学研究科・文学部

相談室等設置の有無	施設の名称	業務内容	開室日	時間帯	相談員の配置状況(教員、事務職員、学生、その他の人数)	相談件数
無					0	0

平成16年度 文学研究科・文学部

相談室等設置の有無	施設の名称	業務内容	開室日	時間帯	相談員の配置状況(教員、事務職員、学生、その他の人数)	相談件数
有	学習相談室	専修決定、履修方法、進路相談など学習上の悩みに対して、メールおよび教育支援室への来室に応じて相談にのる。	教育支援室の開室に対応し、月曜～金曜	午前10時～午後5時	4人の教員、1人の事務職員が窓口となるが、内容に応じて教授会メンバーや事務担当、各種支援室が対応する。	6

3-4-3 オフィスアワーの組織としての取組み状況

平成14年度 文学研究科・文学部

実施の有無	実施内容(方針、設置時間など)
一部実施	各教員の自主的判断にまかせる。

平成15年度 文学研究科・文学部

実施の有無	実施内容(方針、設置時間など)
一部実施	中期計画での全面的実施の予定を踏まえて、専修単位や各教員によって試行的に実施する。1専修が全面的に導入し、15専修では部分的な導入が行われた。

平成16年度 文学研究科・文学部

実施の有無	実施内容(方針、設置時間など)
全教員が実施	全教員が1週間に最低1時間のオフィスアワーを設置した。実際、大部分の教員は1週間に90分以上の時間をオフィスアワーにあてた。教育支援室のホームページが開設された後には、オフィスアワーの担当者・時間・場所を公開し、周知を図っている。

3-4-4 セクシュアルハラスメント防止対策

平成14年度 文学研究科

講習会等開催回数	リーフレット等作成状況	その他
学生向け講演会1、教職員向け研修会1	リーフレットと缶バッジを新入生に配布	相談員制度あり。新入生ガイダンスで制度の説明。合同研究室に閲覧・貸出用の資料を常備。委員会のホームページあり。

平成15年度 文学研究科

講習会等開催回数	リーフレット等作成状況	その他
学生向け防止対策説明会1、教職員向け研修2	新入生へのリーフレットと缶バッジの配布	相談員制度あり。新入生ガイダンスで制度の説明。合同研究室に閲覧・貸出用の資料を常備。委員会のホームページあり。

平成16年度 文学研究科・文学部

講習会等開催回数	リーフレット等作成状況	その他
学生向け講演会1、教職員向け懇談会1	新入生にリーフレットと缶バッジを配布し、次年度に向けリーフレットの改訂作業を行なった。	相談員制度あり。新入生ガイダンスで制度の説明。教育支援室に閲覧・貸し出し用資料。委員会のホームページあり。

3-4-5 身体障害学生のための対策実施状況

平成14年度 文学研究科

措置した内容(施設整備状況、介護支援者雇用状況、身体障害者学生支援室利用状況等)

平成14年度は実施なし。平成13年度以前の施設整備状況として、文法経本館にエレベーター1機、自動ドア1箇所、便所1箇所、段差解消機1機、スロープ6箇所、駐車場3箇所を整備。美学棟にエレベーター1機、スロープ2箇所を整備。

平成15年度 文学研究科

措置した内容(施設整備状況、介護支援者雇用状況、身体障害者学生支援室利用状況等)

平成15年度は実施なし。平成13年度以前の施設整備状況として、文法経本館にエレベーター1機、自動ドア1箇所、便所1箇所、段差解消機1機、スロープ6箇所、駐車場3箇所を整備。美学棟にエレベーター1機、スロープ2箇所を整備。

平成16年度 文学研究科・文学部

措置した内容(施設整備状況、介護支援者雇用状況、身体障害者学生支援状況、身体障害者学生支援室利用状況等)

平成16年度は実施なし	
平成13年度以前	文法経本館にエレベーター1機、自動ドア1箇所、便所1箇所、段差解消機1機、スロープ6箇所、駐車場3箇所、美学棟にエレベーター1機、スロープ2箇所の整備。

あとがき

現代は評価の時代であると言われるように、文学研究科・文学部では1994年以来、1996年、1998年と3度にわたって自己評価を行い、その結果を『自己評価書』として公刊してきました。また、外部評価につきましては、1997年度から2001年度までの研究と教育について専門分野別に評価を依頼し、その結果を『年報 2002』に公表しました。今回の外部評価は、これに続く2002年度から2004年度までの研究と教育について文学研究科・文学部全体の組織評価を行ったものです。評価資料として、文学研究科・文学部の基礎データ（学生数、外部資金の導入、21世紀COEについて）、『年報 2004』（2002年度～2003年度の研究と教育）、教員・院生研究活動データ（2004年度）、添付資料（主に全学基礎データを含む）などさまざまなタイプのものがあり、これに基づき組織評価をすることはさぞかしご苦労があったことと推察いたします。このような事情にもかかわらず、評価委員を快く引き受けていただき、適切でかつ行き届いた評価・コメントをしてくださいました藤井譲治京都大学大学院文学研究科長、中村元保梅花女子大学・梅花女子大学短期大学部学長、毛利三彌成城大学文芸学部教授に衷心より感謝申し上げます。

文学研究科・文学部では、上記以外、2003年度に大学評価・学位授与機構より分野別教育評価を受けました。大学の評価のあり方についてはさまざまな意見がありますが、いかなる評価であれ、それを真摯に受け止めて大学の研究と教育を改善し、さらに充実・発展させることは私たち大学人の責務であります。本書に掲載させていただきました今回の評価結果は文学研究科・文学部の研究と教育の更なる発展のための引き金として位置づけ、今後もより一層の精進と努力をしていきたいと考えております。

評価・広報室

室長：永田 靖

副室長：大庭幸男

研究評価部門：福永伸哉（チーフ）、小林 茂、舟場保之、森安孝夫

教育評価部門：根岸一美（チーフ）、猪飼隆明、出原隆俊、上野 修

広報部門：服部典之（チーフ）、青木直子、飯倉洋一

ネットワーク部門：金水 敏（チーフ）、服部典之

大阪大学大学院文学研究科
外部評価報告書
2005

2006年3月発行

編集 大阪大学大学院文学研究科／評価・広報室

発行 大阪大学大学院文学研究科

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5

TEL;FAX 06-6850-5107(評価・広報室)

URL <http://www.let.osaka-u.ac.jp>

印刷 株式会社ケーエスアイ

Pompeius.

14. *Cesar, ayant plus de moyens que nul autre, complotte avec Pompeius & Crassus, pour s'emparer de tout le gouvernement. & font beaucoup de malicez pour s'y avancer. Tandis que les deux s'employent ainsi, la femme de Pompee meurt, en apres Crassus est tué, dont s'ensuisent merueilleux troubles, pour à quoy remedier, apres diuerses consultations Pompeius est esleu seul Consul.*

15. *Comment Caton se porta en ces affaires ce que fit Pompeius en son consulat, le commencement des menées de Cesar, la puissance duquel il méprisoit, voyant aimé & chery de toute l'Italie, forni de gens, & de ceu faux rapports d'Appius; Et se moquant de ceux qui craignoient la*

16. *Cesar fait ses pratiques, corrompant les principaux du Senat, fait si bien, par l'entremise de Curio, que la plupart des Senateurs sont si aisés que Pompeius pose les armes aussi bien que luy: ce qui met la ville en danger, laquelle il entretient de belles promesses, tandis que les Senateurs se divisent, & néanmoins se prepare pour venir visiblement à Rome, & une merueilleuse resolution fut passer le Rubicon à toute son armée, esbranla toute la ville, & mit en effroy les partisans de Pompeius, fut donnée charge de pourvoir à tout.*

17. *Description du miserable estat d'une republique prestée à tomber en une guerre civile. Pompeius quitte Rome avec les deux Consuls & la plupart des Senateurs. Cesar y arrive, & se porte doucement enuers tout ce qu'il y a de gens, & enuers le Tribun Metellus qui l'empeschoit de prendre de l'argent public: puis il poursuit Pompeius, s'estant emparé de toute l'Italie, en l'espace de deux mois: d'autre part Pompeius amasse une puissance tant par mer que par terre, exerce ses soldats, fait accueil aux gens d'armes qui se retiroient vers luy, & pouvoit par bon conseil à ses affaires.*

18. *Quel ordre Cesar donna aux affaires de la guerre, l'offre que Pompeius leurs escarmouches, en l'une desquelles les Pompeiens obtinrent un fort grand avantage, ce qui les enorgueillit & les ameina à beaucoup de hazardes deliberations, tandis que les grands calomnieient Pompeius & les autres briguent les grands estats de Rome, sans penser à la vaillance de Cesar & de son armée.*

19. *Preparatifs & presages avant la journee de Pharsale: l'ordre qu'ils firent à ranger leurs troupes, & ce qui vint à l'esprit de quelques gens de bien qui se trouuerent sur les lieux hors de l'esperance.*

20. *Description de la bataille de Pharsale, en laquelle Cesar mit en déroute l'armée de Pompeius, lequel s'enfuit, & quel chemin il suivit jusques ce qu'il eust trouvé sa femme à Mytilene laquelle extremement affligée de cette calamité fut adoucie par luy qui cependant murmure contre la providence.*

21. *Après avoir ouy nouvelles des restes de son armée de terre, & de ce qui luy restoit sur mer, il tasche de se remettre sus, mais ayant approuvé le hazard d'une seconde bataille il conclut (après diuerses consultations)*